



Acronis True Image Home 2010

ユーザーズ ガイド

Copyright © Acronis, Inc., 2000-2010. All rights reserved.

“Acronis”、“Acronis Compute with Confidence”、および Acronis ロゴは Acronis, Inc. の登録商標です。

Linux は Linus Torvalds 氏の登録商標です。

Windows および MS-DOS は Microsoft Corporation の登録商標です。

ユーザーズ ガイドに掲載されている商標や著作権は、すべてそれぞれ各社に所有権があります。

著作権者の明示的許可なく本書ユーザーズ ガイドを修正したものを販売することは禁じられています。

著作権者の事前の許可がない限り、商用目的で書籍の体裁をとる作品または派生的作品を販売させることは禁じられています。

本書は現状のまま使用されることを前提としており、商品性の黙示の保証および特定目的適合性または非違反性の保証など、すべての明示的もしくは黙示的条件、表示および保証を一切行いません。ただし、この免責条項が法的に無効とされる場合はこの限りではありません。

画面は開発中のものであり、実際のものとは異なる場合があります。

目次

1	はじめに	9
1.1	Acronis True Image Home とは	9
1.2	Acronis True Image Home の基本概念	10
1.3	Acronis True Image Home 2010 の新機能	12
1.4	システム要件とサポートされるメディア	13
1.4.1	最小システム要件	13
1.4.2	サポートされるオペレーティング システム	14
1.4.3	サポートされるファイル システム	14
1.4.4	サポートされるストレージ メディア	14
1.5	カスタマー テクニカル サポート	15
2	Acronis True Image Home のインストールと起動	16
2.1	Acronis True Image Home のインストール	16
2.2	Acronis True Image Home の取り出し	17
2.3	Acronis True Image Home の実行	17
2.4	Acronis True Image Home のアップグレード	18
2.5	Acronis True Image Home の削除	18
3	一般情報および アクロニス独自のテクノロジー	19
3.1	ファイル アーカイブとディスク/パーティション イメージの違い	19
3.2	完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ	19
3.3	バックアップ ファイルの名前付け規則	20
3.4	Acronis セキュア ゾーン	22
3.5	Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ	23
3.5.1	動作	23
3.5.2	使用方法	23
3.6	ディスクとパーティション情報の表示	24
3.7	Try&Decide とは	24
3.8	Acronis DriveCleanser、ファイル シュレッダー、システム クリーンアップ	25
3.9	zip 形式のサポート	25
3.10	Acronis ノンストップ バックアップ	26
3.11	システム イメージ TIB ファイルからの起動	26
3.12	Acronis Universal Restore	26
3.12.1	Acronis Universal Restore の用途	26
3.12.2	Acronis Universal Restore の一般的な原理	27
4	障害復旧のための準備	29
4.1	障害や災害に対する最善の準備方法	29
4.1.1	バックアップをリカバリに使用できるかをテストするときの推奨事項	29
4.1.2	その他の推奨事項	30
4.2	ブータブル レスキュー メディアのテスト	31

4.3	カスタム レスキュー CD の作成	33
5	Acronis True Image Home について	34
5.1	プログラムのワークスペース	34
5.2	Acronis ワンクリック バックアップ	35
5.3	メイン画面	37
5.4	オプション画面	39
6	バックアップ アーカイブの作成	41
6.1	最初のバックアップの準備	41
6.2	バックアップするデータの決定	41
6.3	代表的なバックアップ シナリオ	42
6.3.1	システム パーティションのバックアップ	43
6.3.2	システム ディスク全体のバックアップ	44
6.3.3	データ パーティションまたはディスクのバックアップ	46
6.3.4	ファイル/フォルダのバックアップ	47
6.3.5	ネットワーク共有へのバックアップ	48
7	Acronis ノンストップ バックアップ	50
7.1	Acronis ノンストップ バックアップとは	50
7.2	Acronis ノンストップ バックアップの有効化と設定	51
7.3	Acronis ノンストップ バックアップの使用	52
7.4	Acronis ノンストップ バックアップで保護されているパーティションのリカバリ	53
7.5	Acronis ノンストップ バックアップで保護されているファイルのリカバリ	54
7.6	Acronis ノンストップ バックアップ ストレージの管理	56
8	その他のバックアップ機能	57
8.1	バックアップの予備コピーの作成	57
8.2	アーカイブの場所の分散	59
8.3	バックアップ ウィザード - 詳細情報	62
8.3.1	バックアップするデータの選択	62
8.3.2	アーカイブの場所の選択	64
8.3.3	スケジュール設定	66
8.3.4	バックアップの種類	66
8.3.5	除外する内容の選択	69
8.3.6	バックアップ オプションの選択	70
8.3.7	自動統合の設定	70
8.3.8	コメントの指定	71
8.3.9	バックアップ処理	72
8.4	バックアップの微調整	72
8.4.1	バックアップ オプション	72
8.4.2	ローカル ストレージの設定	76
8.4.3	バックアップ用カスタム データ カテゴリの作成	79
9	Acronis True Image Home によるデータ リカバリ	81
9.1	システム パーティションのリカバリ	81
9.2	容量の異なるハードディスクへのディスク バックアップのリカバリ	82

9.2.1	隠しパーティションを含まないディスクのリカバリ	83
9.2.2	隠しパーティションを含むディスクのリカバリ	85
9.3	データ パーティションまたはディスクのリカバリ	87
9.4	ファイルとフォルダのリカバリ	88
9.4.1	ファイル アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ	88
9.4.2	イメージ アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ	89
10	追加のリカバリ情報	91
10.1	リカバリ ウィザード - 詳細情報	91
10.1.1	リカバリ ウィザードの開始	91
10.1.2	アーカイブの選択	91
10.1.3	リカバリの方法の選択	92
10.1.4	リカバリするディスク/パーティションの選択	93
10.1.5	リカバリ先ディスク/パーティションの選択	95
10.1.6	リカバリするパーティションの種類の変更	96
10.1.7	リカバリするパーティションのサイズおよび場所の変更	96
10.1.8	リカバリされたパーティションへのドライブ文字の割り当て	97
10.1.9	リカバリ オプションの設定	97
10.1.10	リカバリの実行	97
10.2	デフォルトのリカバリ オプションの設定	97
10.2.1	ファイル リカバリ オプション	97
10.2.2	ファイル上書きオプション	98
10.2.3	処理の前後に実行するコマンド	99
10.2.4	リカバリの優先度	99
10.3	ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームに関連するリカバリ処理の詳細情報	99
10.4	Acronis Universal Restore の使用	100
11	Try&Decide	102
11.1	Try&Decide の使用	105
11.1.1	Try&Decide のオプションと通知	105
11.2	Try&Decide の使用例	106
12	タスク スケジュールの作成	108
12.1	スケジュールされたタスクの作成	108
12.1.1	1 回のみ実行の設定	109
12.1.2	イベント発生時の実行の設定	110
12.1.3	定期的な実行の設定	111
12.1.4	日単位の実行の設定	111
12.1.5	週単位の実行の設定	112
12.1.6	月単位の実行の設定	112
12.2	アップグレード時のスケジュールされたタスクのインポート	113
12.3	スケジュールされたタスクの管理	114
12.4	バックアップ スケジュール設定のシナリオ例	114
12.4.1	制限違反による自動削除が設定されている完全バックアップ	114
12.4.2	バックアップ ストレージがいっぱいになった場合の自動削除が設定されている完全バックアップ	115
12.4.3	自動削除が設定された Acronis セキュア ゾーンへの完全バックアップ	116
12.4.4	自動ローテーションによる完全バックアップと増分/差分バックアップ	116

13 Acronis セキュア ゾーン	の管理	118			
13.1	Acronis セキュア ゾーン	の作成	118		
13.2	Acronis セキュア ゾーン	のサイズ変更	121		
13.3	Acronis セキュア ゾーン	のパスワードの変更	121		
13.4	Acronis セキュア ゾーン	の削除	122		
14 ブータブル メディア	の作成	123			
14.1	Linux ベース	のレスキュー メディア	の作成	123	
14.2	Acronis True Image Home	での BartPE ディスク	の作成	126	
14.3	WinPE ベース	のレスキュー メディア	の作成	128	
14.3.1	WinPE 1.x	への Acronis プラグイン	の追加	129	
14.3.2	WinPE 2.x または 3.0	への Acronis プラグイン	の追加	129	
15 vhd ファイル	の使用方法	132			
15.1	tib イメージと vhd	仮想ディスク	の相互変換	132	
15.1.1	Windows	バックアップ	への変換	132	
15.1.2	Acronis	バックアップ	への変換	133	
15.2	Windows	バックアップ	により作成された vhd ファイル	を使用したリカバリ	134
15.3	Windows 7 システム	パーティションの TIB イメージ	からコンピュータ	を起動する	135
15.4	Acronis	ブート シーケンス	マネージャ	136	
16 アーカイブ	の参照およびイメージ	のマウント	137		
16.1	イメージ	のマウント	137		
16.2	イメージ	のアンマウント	140		
17 バックアップ	アーカイブとその内容	の検索	141		
17.1	検索	141			
17.2	Windows Search と Google	デスクトップ	の統合	142	
17.2.1	Google	デスクトップと Acronis True Image Home	の組み合わせ	143	
17.2.2	Windows Search と Acronis True Image Home	の組み合わせ	146		
18 その他の操作	151				
18.1	バックアップ	アーカイブ	のベリファイ	151	
18.2	処理結果	の通知	152		
18.2.1	電子メール	通知	153		
18.2.2	WinPopup	による通知	154		
18.3	タスクとログ	の表示	154		
18.4	バックアップ	アーカイブ	の管理	157	
18.5	バックアップ	の統合	158		
18.6	バックアップ	アーカイブ	の削除	161	
18.7	バックアップ	アーカイブ	の移動	161	
19 新しいディスク	へのシステムの転送	163			
19.1	一般情報	163			
19.2	セキュリティ	164			

19.3	転送の実行	164
19.3.1	クローン作成モードの選択	164
19.3.2	ソース ディスクの選択	165
19.3.3	ターゲット ディスクの選択	165
19.3.4	パーティションのあるターゲット ディスク	166
19.3.5	パーティションの転送方法の選択	166
19.3.6	クローン作成時の手動パーティション操作	167
19.3.7	クローン作成の概要	169
20	新しいハードディスクの追加	170
20.1	ハードディスクの選択	170
20.2	新しいパーティションの作成	170
20.3	ディスクの追加の概要	172
21	セキュリティとプライバシーのツール	173
21.1	ファイル シュレッダーの使用	173
21.2	Acronis DriveCleanser	174
21.3	データを消去するユーザー定義消去方法の作成	177
21.4	システムのクリーンアップ	178
21.5	システム クリーンアップ ウィザードの設定	179
21.5.1	データ消去方法の設定	180
21.5.2	[ファイル] の設定	180
21.5.3	[コンピュータ] の設定	181
21.5.4	[ドライブの空き領域] の設定	181
21.5.5	[コマンド] の設定	182
21.5.6	ネットワーク プレースのフィルタの設定	183
21.6	個別のシステム コンポーネントのクリーンアップ	183
22	トラブルシューティング	184
22.1	全般	184
22.2	インストールの問題点	184
22.3	バックアップとベリファイの問題	185
22.4	リカバリの問題	187
22.5	リカバリ後のシステム起動の問題	188
22.6	その他の問題	189
23	ハードディスクと起動順	191
23.1	BIOS での起動順の並び替え	191
23.2	コンピュータへのハードディスク ドライブの設置	192
23.2.1	一般的な IDE ハードディスク ドライブの設置方法	192
23.2.2	マザーボードのソケット、IDE ケーブル、電源ケーブル	192
23.2.3	ハードディスク ドライブとジャンパの構成	193
23.2.4	SATA ハード ドライブの取り付け	194
23.2.5	新しい内部 SATA ドライブを設置するための手順	194
23.3	ハードディスクの消去方法	195
23.3.1	情報の抹消方法の動作原理	196
23.3.2	アクロニス製品で使用できる情報消去方法	196

24 起動パラメータ	198
24.1 説明	198
25 索引	200

1 はじめに

1.1 Acronis True Image Home とは

Acronis True Image Home は、コンピュータに保存されているすべての情報を安全に守るための統合ソフトウェア スイートです。オペレーティング システム、アプリケーション、設定、およびすべてのデータのバックアップや、不要になったあらゆる機密データを完全に消去することができます。このソフトウェアを使用すると、指定したファイルとフォルダ、Windows アプリケーションの設定、Microsoft 電子メール クライアントの設定とメッセージ、さらにはハードディスク ドライブ全体や選択したパーティションをバックアップすることができます。Acronis ノンストップ バックアップはシステムとファイルの変更を 5 分ごとに継続して保存できるため、必要に応じて任意の時点まで容易にロールバックできます。

ディスク ドライブが破損したり、システムがウイルスやマルウェアによって攻撃された場合でも、迅速かつ簡単にバックアップ データをリカバリできるため、数時間または数日を費やしてディスク ドライブのデータおよびアプリケーションを最初から再構築する必要がなくなります。

Acronis True Image Home には、データの損失、重要なファイルまたはフォルダの誤削除、ハードディスク全体のクラッシュなどの障害や災害が発生した場合にコンピュータ システムをリカバリするのに必要なツールがすべて含まれています。障害や災害が発生して情報へのアクセスがブロックされたりシステムの処理が影響を受けている場合でも、簡単にシステムや消失したデータをリカバリできます。

アクロニスが開発し Acronis True Image Home に実装した独自のテクノロジーによって、オペレーティング システム、アプリケーション、構成ファイル、ソフトウェア更新プログラム、個人設定、およびデータを含むディスクを、セクタ単位で正確にバックアップすることができます。

Acronis True Image Home は、ユーザーの個人情報保護にも役立ちます。通常、不要なデータを削除しても、コンピュータ上にその情報は残っています。Acronis True Image Home には、完全にファイルを破棄し、パーティションおよびディスク全体から個人情報を抹消する Acronis DriveCleanser のほか、Windows システムの使用履歴をすべて消去するウィザードが統合されています。

内蔵および外付けハード ドライブ、ネットワーク ドライブ、IDE、SCSI、FireWire (IEEE-1394)、USB (1.0、1.1、および 2.0)、および PC カード (PCMCIA) で接続された各種リムーバブル メディア ドライブに加え、CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、BD-R、BD-RE、MO、Iomega Zip、Iomega Jaz ドライブなどほとんどの PC 記憶デバイスにバックアップを保存できます。

スケジュールされたバックアップ タスクを実行する際、Acronis True Image Home ではユーザーが設定したバックアップ ポリシーに従って、バックアップの種類 (完全、増分、差分) が自動的に選択されます。

新しいハードディスク ドライブを設置する場合には、Acronis True Image Home を使用すると、オペレーティング システム、アプリケーション、ドキュメント、および個人設定を含む情報を、数分間で古いディスクから新しいディスクに移行することができます。新しいハードディスクに移行した後、元のディスク上のすべての機密情報を完全に消去できます。古いハードディスクを処分する場合には、この操作を行うことをお勧めします。

ウィザードと Windows Vista スタイルのインターフェイスにより操作を容易に行えます。簡単なステップをいくつか実行するだけで、あとはすべて Acronis True Image Home によって処理されます。システムに障害や災害が発生した場合は、ソフトウェアによりすぐにコンピュータを稼働できる状態に戻せます。

1.2 Acronis True Image Home の基本概念

ここでは、プログラムの動作のしくみを理解するうえで役立つと思われる、基本的な概念について説明します。

バックアップ

Wikipedia にはこのような記述があります。「**バックアップ**とは、元のデータが失われてもそのコピーから**復元**できるように、データのコピーを作成しておくことを指す。バックアップの主な目的は 2 つある。1 つは、障害または災害発生後に状態を復旧することで(「災害復旧」という)、もう 1 つは、誤って削除されたか破損した少数のファイルを復旧することである」

Acronis True Image Home は、この最初の目的を達成するために、ディスク(またはパーティション)イメージの作成機能を備え、第 2 の目的のために、ファイル レベル バックアップ作成機能を備えています。デフォルトでは、Acronis True Image Home によってイメージに保存されるのは、ハードディスクのうち、データが格納されている部分のみです(サポート対象のファイル システムのものに限る)。ただし、イメージにハードディスクの全セクタを保存することもできます(このオプションを「セクタ単位のバックアップ」と呼びます)。ファイルやフォルダをバックアップするときは、データのみがフォルダ ツリーとともに圧縮されて保存されます。

ディスクのクローン作成

これは、1 つのディスク ドライブの内容全体を別のドライブに移行/コピーする処理です(大容量のディスクを新たに取付けたときなどに使用します)。同じファイル構造を持つ同一のドライブを作成することができます。「ディスクのクローン作成」ツールを実行すると、1 つのハードディスク ドライブのすべての内容が別のハードディスク ドライブにコピーされます。この処理を利用すると、ハードディスク ドライブの内容が、オペレーティング システムやインストール済みプログラムも含めてすべて別のドライブに転送されるので、すべてのソフトウェアを再インストールして再設定する必要はなくなります。クローン作成機能を使用するのが最も適している場面は、コンピュータの既存のドライブを取り外して、代わりに新しいドライブを取り付けるときです。新しいドライブの接続方法は、古いドライブと同一でなければなりません。

Acronis True Image Home では、特定のパーティションのみのクローン作成はできません。クローンを作成できるのは、ドライブ全体のみです。

ハードディスク ドライブの情報をすべて別のドライブに転送するには、他にも、古いハードディスク全体をバックアップしてから、そのバックアップを新しいディスクにリカバリするという方法があります。

バックアップ アーカイブのコンポーネント

アーカイブ - 「アーカイブ チェーン」または「アーカイブ グループ」と呼ばれます。1 つのバックアップ タスクによって管理されるバックアップ ファイルの集合全体を指します。アーカイブは、1 つ以上のスライスで構成されます。

スライス - タスクの 1 回の実行サイクルで作成されるファイルの集合です。作成済みのスライスの数は常に、タスクが実行された回数と同じです。スライスはそれぞれ特定の時点を表しており、その時点にシステムやデータをリカバリすることができます。

ボリューム - スライスに関連付けられた TIB ファイルです。通常は、スライス 1 つにつきボリュームは 1 つだけですが、1 つのスライスが複数のボリュームで構成されることもあります。アーカイブを分割することがタスクのオプションで設定されている場合は、作成されたスライスが複数のファイルに分割されます。また、FAT32 でフォーマットされたハードディスクに大きなサイズのバックアップを保存しようとする、スライスが自動的に複数のファイル(1 つあたり 4 GB、ただし最後のファイルを除く)に分割されます。これらのファイルはそれぞれ、スライスのボリュームです。

スナップショット

Acronis True Image Home によるディスク イメージの作成時には、「スナップショット」テクノロジーが使用されます。そのため、システム パーティションのバックアップでさえも Windows の実行中に作成でき、ファイルは開いたままになるので読み取りや書き込みが可能で、コンピュータを再起動する必要もありません。パーティションのバックアップ処理が開始されると、そのパーティションに対するすべての処理が一時的に凍結されて、パーティションの「スナップショット」が作成されます。スナップショットの作成は通常、数秒で終わります。その後は、オペレーティング システムの動作が再開し、並行してイメージ作成処理が実行されますが、ユーザーからはオペレーティング システムが通常どおり動作しているように見えます。

Acronis ドライバは、パーティションの特定時点のビューを保持するために継続的に動作します。そのパーティションへの書き込み指示を検出すると、ドライバは、書き込まれるセクタが既にバックアップされているかどうかを調べます。まだバックアップされていない場合は、上書きされるセクタのデータを専用のバッファに保存してから、書き込みを許可します。そのセクタのバックアップはバッファから作成されるので、スナップショットが取得された時点のすべてのパーティション セクタが、何の変更も加えられずにバックアップされ、パーティションの正確な「イメージ」が作成されます。

バックアップ ファイルの形式

Acronis True Image Home では、バックアップ データは独自の TIB 形式で圧縮して保存されます。そのため、保存に必要な領域の大きさが抑えられるだけでなく、以前のバージョンの Acronis True Image Home との下位互換性も維持されます。TIB ファイルの作成時に、データ ブロックのチェックサム値が計算されて、バックアップ対象のデータに追加されます。このチェックサムの値を使用すると、バックアップ データの整合性を検証できます。ただし、独自の形式でデータがバックアップされるので、そのデータをリカバリするには Acronis True Image Home が必要です (Windows の動作中に実行することも、リカバリ環境で実行することもできます)。

バックアップ アーカイブのベリファイ

将来システムのリカバリが必要になったときに必ずリカバリできるという保証は、どうすれば得られるでしょうか。「バックアップのベリファイ」機能を使用すれば、そのような保証も可能です。前述のように、バックアップされるデータにはチェックサム値が追加されます。バックアップ ベリファイの実行時に、Acronis True Image Home はバックアップ ファイルを開いてチェックサム値を再計算し、保存されているチェックサム値と比較します。比較した値がすべて一致していれば、そのバックアップ ファイルは破損していないので、バックアップからのデータ リカバリはかなり高い確率で成功します。レスキュー メディアからコンピュータを起動した後で、システム パーティションのバックアップをベリファイすることを強くお勧めします。Windows 7 Enterprise および Windows 7 Ultimate の環境では、リカバリされたシステム パーティションからのコンピュータ起動が可能かどうかの確認を Acronis True Image Home 独自の機能を使用して行うことができます。Acronis True Image

Home では、システム パーティション イメージを TIB ファイルに格納して、このファイルからコンピュータを起動することが可能ですが、TIB ファイルは初めに VHD ファイルに変換され、このファイルが実際の起動に使用されます。したがって、変換後の VHD ファイルからのコンピュータ起動が可能ならば、このバックアップをディスクにリカバリした後でコンピュータを起動することが可能です。

災害復旧

障害や災害が発生したときのリカバリには一般に、レスキュー メディアが必要です。発生した障害によっては、システム データの破損(ウイルスやマルウェアなどが原因)やハードディスクの障害が原因で、オペレーティング システムが起動しなくなることがあるからです。オペレーティング システムが起動できないときは、別の手段でコンピュータを起動してから、Acronis True Image Home を使用してシステム パーティションをリカバリする必要があります。したがって、障害に対する備えを万全にするには、レスキュー メディアが必須です。パッケージ版の製品には、ブータブル レスキュー CD が同梱されています。それ以外の方法で購入された場合は、メディア ビルダというツールを使用すればレスキュー メディアを作成できます。

コンピュータの起動時にリカバリ環境を起動できるようにするには、BIOS のブート シーケンスにレスキュー メディアを追加しておく必要があります。「BIOS での起動順の並び替え『191 ページ参照』」を参照してください。

スケジュール設定

作成したバックアップを実際に役立てるには、可能な限り「最新」のバックアップを作成しておく必要があります。つまり、バックアップ タスクは定期的に、たとえば 1 日に 1 回実行してください。Acronis True Image Home でバックアップ タスクを作成するのは簡単ですが、人間にとって、同じことを毎日忘れずに実行するのはとても面倒です。しかし、そのような作業はスケジューラに任せることができます。バックアップのスケジュールを設定したら、後は自動的に実行されます。少なくとも、バックアップ ディスクに十分な空き領域がある限り、そしてリカバリが必要になる事態が発生しない限りは、バックアップのことを忘れてしまってもかまいません。

これまでに説明した概念に関連する用語は、Acronis True Image Home のドキュメントの中で頻繁に使用されるので、ここで説明した概念を理解しておく、Acronis True Image Home の機能を使用するうえで役に立つでしょう。

1.3 Acronis True Image Home 2010 の新機能

- **Acronis ノンストップ バックアップ** - Acronis True Image Home での Near-CDP (Continuous Data Protection: 継続的データ保護) が可能になりました。ドキュメントを過去の特定の時点の状態に戻すことができます。これは、誤って重要なドキュメントを削除してしまったり、加えた変更が間違っていることが判明して、ドキュメントを以前の状態、たとえば 2 週間前の状態に戻す必要がある場合に、役立つ可能性があります。ファイルをリカバリする必要がある場合、検索機能を備えた Windows エクスプローラのようなブラウザにより、リカバリする必要があるファイルをきわめて簡単に見つけることができます。Acronis ノンストップ バックアップは、バージョン管理ツールよりもはるかに優れています。必要に応じて、システムのリカバリも可能です。
- **スケジューラの機能強化** - スケジューラの機能が強化され、柔軟性も向上しました。既存のスケジュール設定オプションが拡張されています。新しいスケジューラでは、スケジュールされたタスクが最初に実行される日付を指定できます。月単位で実行するタスクをスケジュール設定する場合は、月のカレンダーを使ってタスクの実行日を 1 日(たとえば、各月の 1 日)または複数(たとえば、各月の 10 日、20 日、および最終日)指定できます。ある期間、スケジュー

ルされたタスクを実行する必要がなくなり、しかし将来的に再びそのスケジュールを利用する予定である場合は、しばらくの間タスクを無効にし、必要になったら再度有効にすることができます。そのため、タスクを最初から作成し直す必要はありません。スケジュールされたタスクのクローンを作成し、それに細かい変更をいくつか加えることができます。これは、類似した複数のタスクを作成する場合に便利です。選択したバックアップの方法および自動統合ルールと組み合わせることで、スケジューラを使用してさまざまなバックアップ戦略を実装できます。

- **ベリファイ対象の選択** – 以前のバージョンの Acronis True Image Home では、バックアップアーカイブ全体のベリファイしかできませんでした。そのため、不便に感じられる状況もありました。たとえば、20 GB の完全バックアップアーカイブがあり、それぞれのサイズが数ギガバイトの差分バックアップの長いチェーンが 100 GB に達しているとします。この場合、Acronis True Image Home は、120 GB のアーカイブ全体を検証するため、非常に長い時間がかかることがあります。今後は、選択された 1 つの差分バックアップと完全バックアップだけが検証されます。
- **ダイナミック/GPT ディスクのサポート** (別製品 Acronis Plus Pack の機能) – ダイナミック/GPT ディスクの操作により、Acronis True Image Home でサポートされるハードディスク構成の範囲が拡張されます。ダイナミック ディスクでは、ボリューム管理がより柔軟になり、複数のハードディスクを備えたコンピュータを使用する際に便利です。GUID パーティション テーブル (GPT) は、新しいハードディスク パーティション スキームで、今までの MBR パーティション スキームよりも優れています。これは、拡張可能ファームウェア インターフェイス (EFI) イニシアティブの一環として導入されました。
- **VHD 形式のサポート** – VHD (Virtual Hard Disk) 形式のファイルは、1 つのハードディスクドライブを表し、その内容と構造がすべて格納されます。さらに、Windows Vista (Home Edition 以外) および Windows 7 オペレーティング システムに含まれる Windows バックアップ ユーティリティでは、ユーザーが [Windows Complete PC バックアップ] オプションを選択した場合、システムのハードディスクのイメージをバックアップする際に、この形式が使用されます。Acronis True Image Home では、VHD ファイルから TIB ファイルへの、およびその逆の変換や、VHD ファイルからのオペレーティング システムのリカバリが可能であり、さらには VHD イメージから Windows 7 を起動することも可能です。
- **Windows 7 が含まれる TIB イメージからのシステム起動** – Windows 7 Enterprise または Windows 7 Ultimate を使用している場合は、システム パーティションのバックアップが含まれている TIB イメージからシステムを起動することができます。そのため、バックアップしたシステムから起動できるかどうかを、実際にリカバリすることなくテストできます。オペレーティング システムが tib ファイルから起動すれば、その tib ファイルからリカバリした後も間違いなく起動します。tib ファイルを起動元として指定すると、Acronis True Image Home では、この tib ファイルを変換することによって一時的な vhd ファイルが作成されます。したがって、ハードディスクにはこのファイルを格納するための空き領域が必要です。その後、新しい項目が Windows のブート ローダの一覧に追加されます。ブート ローダの一覧から tib ファイルを選択すると、コンピュータは、この一時 vhd ファイルから起動します。

1.4 システム要件とサポートされるメディア

1.4.1 最小システム要件

Acronis True Image Home のハードウェア要件は、Acronis True Image Home の実行に使用するコンピュータにインストールされているオペレーティング システムの最小要件に一致します。さらに、Acronis True Image Home を実行するには次のハードウェアが必要です。

- ブータブル メディア作成用の CD-RW/DVD-RW ドライブ
- マウスまたはその他のポインティング デバイス(推奨)

Acronis ノンストップ バックアップを実行するには、1 GB 以上の RAM が必要です。

Acronis True Image Home ブータブル メディアを作成するには、次のハードウェアが必要です。

- 256 MB の RAM
- 1 GHz 以上の Pentium プロセッサ

画面解像度は 1152 x 864 以上を推奨します。

1.4.2 サポートされるオペレーティング システム

Acronis True Image Home は、次のオペレーティング システム上でテスト済みです。

- Windows XP(32 ビット SP3/64 ビット SP2)
- Windows XP Professional(32 ビット SP3/64 ビット SP2)
- Windows Vista SP2(全エディション)
- Windows 7(全エディション)

Acronis True Image Home では、Intel または AMD ベースの PC オペレーティング システム (Linux[®] を含む)を実行するコンピュータ上のディスク/パーティションをバックアップしてリカバリするためのブータブル CD-R/DVD-R を作成することもできます。ただし、Intel ベースの Apple Macintosh は、現時点ではネイティブ モードではサポートされません。

1.4.3 サポートされるファイル システム

- FAT16/32
- NTFS
- Ext2/Ext3 *
- ReiserFS *
- Linux SWAP *

ファイル システムがサポート対象外または破損している場合も、Acronis True Image Home ではデータをセクタ単位でコピーできます。

* Ext2/Ext3、ReiserFS、および Linux SWAP のファイル システムの場合は、ディスクまたはパーティションのバックアップ/リカバリ処理のみがサポートされます。Acronis True Image Home では、これらのファイル システムに対してはファイル レベルの処理(ファイルのバックアップ、リカバリ、検索だけでなく、イメージをマウントして、そのイメージからのファイルのリカバリ)は実行できません。また、これらのファイル システムが採用されているディスクまたはパーティションへのバックアップを行うことはできません。

1.4.4 サポートされるストレージ メディア

- ハードディスク ドライブ*
- ネットワーク上のストレージ デバイス
- FTP サーバー**

- CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R(2層ディスクの DVD+R を含む)、DVD+RW、DVD-RAM、BD-R、BD-RE***
- USB 1.0 / 2.0、FireWire(IEEE-1394)および PC カード ストレージ デバイス
- ZIP®、Jaz® およびその他のリムーバブル メディア

* Acronis True Image Home では、ダイナミック ボリュームのタイプのうち「ミラー」および「RAID-5」はサポートされません。ダイナミック ディスクおよび GPT ディスクの操作に関しては、他にも次のような制限があります。

- ダイナミックおよび GPT ディスクに対して操作を実行するには、別製品である Acronis Plus Pack が必要です。
- Acronis セキュア ゾーンの作成はサポートされていません。
- ダイナミック ボリュームをダイナミック ボリュームとしてリカバリするときに、手動でサイズを変更することはできません。
- GPT ディスクをリカバリするときは、サイズが変更される可能性のない「ボリューム単位」のリカバリのみが可能です。
- Try&Decide を使用してダイナミック/GPT ディスクを保護することはできません。
- 「ディスクのクローン作成」操作は、ダイナミック/GPT ディスクではサポートされていません。

** FTP サーバー側がパッシブ モードのファイル転送を許可している必要があります。直接 FTP サーバーからデータをリカバリするには、アーカイブにあるファイルのサイズが 2 GB 以下である必要があります。バックアップ元のコンピュータ上で、TCP および UDP プロトコル用にポート番号 20 と 21 を開くようにファイアウォールを設定し、Windows サービスの **Routing and Remote Access** を無効にすることをお勧めします。

*** 作成された書き換え可能ディスクを Linux で読み込むには、カーネル パッチが必要です。

1.5 カスタマー テクニカル サポート

Acronis True Image Home を購入して登録されたお客様は、テクニカル サポートを 90 日間無料で利用することができます。アクロニス製品のインストールまたは使用に関する問題があり、このガイドを使用しても解決できない場合は、アクロニス テクニカル サポートまでお問い合わせください。

アクロニス テクニカル サポートへのお問い合わせの詳細については、<http://www.acronis.co.jp/support/> を参照してください。

2 Acronis True Image Home のインストールと起動

2.1 Acronis True Image Home のインストール

Acronis True Image Home をインストールする手順は、次のとおりです。

- Acronis True Image Home セットアップ ファイルを実行します。
- インストールの前に、Acronis True Image Home の新しいビルドが アクロニスのウェブサイトにあるかどうかを調べることができます。新しいバージョンがある場合は、そのバージョンがインストールに使用されます。
- インストール メニューで、インストールするプログラムとして Acronis True Image Home を選択します。
- インストール ウィザードの画面に表示される指示に従います。



インストール方法は、**[標準]**、**[カスタム]**、**[完全]** から選択できます。**[カスタム]** を選択した場合は、**ブータブル メディア ビルダ**をインストールしないことを選択できます。

ブータブル メディア ビルダとは、ブータブル レスキュー ディスクを作成するためのツールです(詳細については、「ブータブル メディアの作成 [123 ページ参照]」を参照してください)。ブータブル CD が含まれたパッケージ版の製品をご購入の場合は、このツールは必要ありません。**ブータブル メディア ビルダ**をインストールすると、ブータブル メディアやその ISO イメージの作成をいつでも、メイン プログラム ウィンドウから、または**ブータブル メディア ビルダ**を単独で実行して行うことができます。

Acronis True Image Home をインストールすると、新しいデバイスがデバイス マネージャのリストに追加されます([コントロール パネル] → [システム] → [ハードウェア] → [デバイス マネージャ] → [Acronis Devices] → [Acronis True Image Backup Archive Explorer])。このデバイスを無効にしたりアンインストールしたりしないでください。イメージ アーカイブを仮想ディスクとして接続する

ときに、このデバイスが必要になります(「アーカイブの参照およびイメージのマウント」『137 ページ参照』を参照してください)。

2.2 Acronis True Image Home の取り出し

Acronis True Image Home のインストール時に、セットアップ(.msi)ファイルをローカル ドライブまたはネットワーク ドライブに保存できます。これは既存のコンポーネントのインストール内容を変更または修復する場合に便利です。

セットアップ ファイルを保存する手順は、次のとおりです。

- Acronis True Image Home のセットアップ ファイルを実行します。
- インストール メニューで、プログラム名を右クリックし、**[取り出し]** を選択します。
- セットアップ ファイルを保存する場所を選択し、**[保存]** をクリックします。

.msi ファイルを使用して既存の Acronis True Image Home 実行環境をリカバリまたは更新するには、コマンドラインから次のように行います。

1. **[スタート]** → **[ファイル名を指定して実行]** を選択します。
2. 「cmd」と入力します。
3. コマンド プロンプト ウィンドウが開きますので、次のコマンドを入力します。

```
msiexec /i path_to_msi_file\msi_file_name.msi REINSTALL=ALL  
REINSTALLMODE=vomus
```

インストール ウィザードのウィンドウが開いたら、**[標準]**、**[カスタム]**、**[完全]** のうち、どのインストールのプログラム コンポーネントを修復または変更するかを選択します。

2.3 Acronis True Image Home の実行

Windows で Acronis True Image Home を実行するには、**[スタート]** → **[すべてのプログラム]** → **[Acronis]** → **[Acronis True Image Home]** → **[Acronis True Image Home]** を選択するか、デスクトップにあるショートカットをダブルクリックします。

何らかの理由でオペレーティング システムが読み込まれなくなった場合は、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを起動してください。ただし、使用する前に有効化しておく必要があります。この手順の詳細については、「Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ」『23 ページ参照』を参照してください。このプログラムを実行するには、コンピュータの電源を入れ、F11 キーを押すように指示するメッセージが表示されている間に F11 キーを押します。Acronis True Image Home がスタンドアロン モードで起動し、損傷しているパーティションをリカバリできるようになります。

ディスクのデータが完全に損傷しており、オペレーティング システムを起動できない場合(または Acronis スタートアップ リカバリ マネージャが有効化されていない場合)は、Acronis True Image Home のスタンドアロン版をブータブル メディアから読み込みます。このブータブル メディアはパッケージ版に付属していますが、ブータブル メディア ビルダを使用して作成することもできます。この起動ディスクを使用すると、作成済みのイメージからディスクをリカバリできます。

2.4 Acronis True Image Home のアップグレード

Acronis True Image Home が既にインストールされている場合は、新しいバージョンによって古いバージョンが自動的に更新されます。新しいバージョンのインストール前に古いバージョンをアンインストールする必要はありません。

新しいバージョンで作成されたバックアップ アーカイブは、古いバージョンのプログラムでは処理できないことがあります。そのため、Acronis True Image Home を古いバージョンに戻した場合は、その古いバージョンでアーカイブを再作成する必要があります。同じ理由により、Acronis True Image Home のアップグレード後は、新たにブータブル メディアを作成することを強くお勧めします。

2.5 Acronis True Image Home の削除

[スタート] → [設定] → [コントロール パネル] → [プログラムの追加と削除] → [Acronis True Image Home] → [削除] を選択します。画面の指示に従って操作します。削除を完了するために、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

Windows Vista を使用している場合は、[スタート] → [コントロール パネル] → [プログラムと機能] → [Acronis True Image Home] → [削除] を選択します。画面の指示に従って操作します。削除を完了するために、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

コンピュータに Acronis セキュア ゾーンをインストールしている場合は、プログラムを削除する前にセキュア ゾーンを削除してください。Acronis True Image Home を削除してもセキュア ゾーンは削除されません。

3 一般情報および アクロニス独自のテクノロジー

3.1 ファイル アーカイブとディスク/パーティション イメージの違い

バックアップ アーカイブは、単一のファイルまたはファイルのグループから成ります(「バックアップ」とも呼ばれます)。その内容は、選択されたファイル/フォルダのデータのコピー、または選択されたディスク/パーティションに保存されているすべての情報のコピーです。

ファイルおよびフォルダをバックアップする場合、フォルダ ツリーとデータのみが圧縮され、保存されます。

ディスクおよびパーティションのバックアップは、異なる方法で行われます。Acronis True Image Home では、オペレーティング システム、レジストリ、ドライバ、ソフトウェア アプリケーション、データ ファイル、およびユーザーから隠されているシステム領域を含むディスクのスナップショットがセクタ単位で保存されます。この処理を「ディスク イメージの作成」といい、作成されたバックアップ アーカイブを「ディスク/パーティション イメージ」といいます。

デフォルトでは Acronis True Image Home は、ハードディスクのデータ(サポートされているファイル システムのもの)を含む部分のみを保存します。また、スワップ ファイル情報(Windows XP/Vista における pagefile.sys)や hiberfil.sys(コンピュータが休止状態になる際に RAM の内容を保持するファイル)は、バックアップされません。その結果、イメージ ファイルのサイズが小さくなり、イメージ ファイルの作成とリカバリに要する時間が短縮されます。ただし、**[全セクタのイメージを作成する]** オプションを選択すれば、ハードディスクのすべてのセクタをイメージに出力することもできます。

パーティション イメージにはすべてのファイルおよびフォルダが含まれます。これには、すべての属性(隠しファイル、システム ファイルなど)、ブート レコード、およびファイル アロケーション テーブル(FAT)のほか、ルート ディレクトリのファイルやマスタ ブート レコード(MBR)のあるハードディスクのトラック 0 も含まれます。

ディスク イメージには、マスタ ブート レコード(MBR)のあるトラック 0 とディスクのすべてのパーティションのイメージが保存されます。

Acronis True Image Home アーカイブ ファイルの拡張子は、デフォルトですべて「.tib」になります。ファイルの拡張子は変更しないでください。

ファイルやフォルダのリカバリは、ファイル アーカイブからだけでなく、ディスク/パーティション イメージからも可能です。これを行うには、イメージを仮想ディスクとしてマウント(「アーカイブの参照およびイメージのマウント」『137 ページ参照』を参照)するか、またはイメージのリカバリを開始して**[指定したファイルおよびフォルダをリカバリする]** を選択します。

3.2 完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ

Acronis True Image Home では、完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップの 3 種類のバックアップを作成することができます。

完全バックアップ — バックアップが作成された時点のすべてのデータが含まれます。完全バックアップは、後で作成する増分バックアップや差分バックアップのベースとして使用するか、単体のア

アーカイブとして使用できます。完全バックアップを使用すると、増分バックアップや差分バックアップよりも短時間でリカバリを行うことができます。

増分バックアップ — 直前のバックアップ(完全、増分、または差分)の作成以降に変更されたデータのみが含まれます。このため、サイズは小さく作成に時間もかかりません。増分バックアップには変更部分しか含まれていないため、リカバリには、以前に作成したすべての増分バックアップと、ベースとなった最初の完全バックアップが必要になります。

差分バックアップ — バックアップが行われるたびに「一連の」ファイルが順番に作成される増分バックアップとは異なり、差分バックアップでは、最新の完全バックアップに対して加えられたすべての変更を含む独立したファイルが作成されます。一般に、差分バックアップは増分バックアップよりも高速にリカバリされます。これは、差分バックアップでは、以前に作成した多くの一連のバックアップを処理する必要がないからです。

スタンドアロンの完全バックアップは、システムを最初の状態に戻すことが多い場合や、複数のバックアップ ファイルを管理することが望ましくない場合に最適なソリューションです。また、システム障害や災害が発生した際に、最新のデータの状態のみがリカバリされればよい場合などは、差分バックアップをご検討ください。全データ量と比較してデータ変更が少ない傾向にある場合は、特に有効です。

同じことが、増分バックアップについても言えます。頻繁なバックアップと特定の時点に戻す機能が必要な場合に非常に役立ちます。最初に完全バックアップを作成し、その後は毎日増分バックアップを作成する場合は、完全バックアップを毎日作成する場合と同じ結果を得ることができます。増分イメージのサイズは、完全イメージまたは差分イメージと比べてかなり小さくなります。

増分バックアップと差分バックアップの違い

主な相違点は、増分バックアップの場合、前回のバックアップ実行後に変更または追加されたファイルのみがアーカイブに加えられることです。差分バックアップは、最初の完全バックアップ以降に変更または追加されたすべてのファイルがアーカイブに追加されたものです。このため、差分バックアップは増分バックアップに比べて処理に要する時間が長くなります。増分バックアップからリカバリする場合、最初のバックアップ全体がコピーされ、過去のバックアップが順番にコピーされて更新されたすべてのファイルが復元されます。それに対して、差分バックアップでは、最初のバックアップと最新のバックアップのみをコピーするだけで済むため、より速くりカバリすることができます。

ディスクを最適化した後に、増分バックアップ、または差分バックアップを作成すると、通常に比べかなり大きなサイズになります。これは、ディスクの最適化プログラムによってディスク上のファイルの位置が変更され、バックアップにこれらの変更が反映されるためです。このため、ディスク最適化後に、完全バックアップを再度作成することをお勧めします。

3.3 バックアップ ファイルの名前付け規則

Acronis True Image Home では、ユーザーが分割オプションを設定したとき、またはサイズが 4 GB を超える大きいバックアップを FAT32 ディスクに保存するときは、完全アーカイブまたは増分アーカイブが複数のボリュームに分割されることがあります。「Acronis True Image Home の基本概念」『 10 ページ参照』の「バックアップ アーカイブのコンポーネント」をご参照ください。

ユーザーがバックアップに名前を割り当てることもできますが、多くの場合は自動的な名前付けを使用することをお勧めします。以下の情報は、Windows エクスプローラでバックアップ アーカイブ ストレージの内容を確認したり、たとえば完全と増分を識別しようとする場合に役立ちます。

1)新しくインストールしたプログラムを初めて起動したときにワンクリック バックアップの使用を有効にした場合、生成されるバックアップ ファイルの名前は「SystemBackup_mm_dd_yyyy.tib」のようになります。mm_dd_yyyy はバックアップが作成された日付で、月(1 または 2 桁)、日(1 または 2 桁)、年(4 桁)の形式です。

FAT32 ディスクに保存すると、このようなバックアップは SystemBackup_mm_dd_yyyy1.tib、SystemBackup_mm_dd_yyyy2.tib、SystemBackup_mm_dd_yyyy3.tib といった名前のボリュームに分割されることがあります。

この場合、それ以降の自動的にスケジュールされたバックアップ(デフォルトでは 7 日ごとに 1 回)では、次のバックアップが終了した後でのみ前回のバックアップが置き換えられます(現在のバックアップが失敗した場合に古いバックアップを維持するため)。バックアップのファイル名は、SystemBackup_mm_dd_yyyy.tib と SystemBackup_mm_dd_yyyy(1).tib が交互に使用されます。

2)新しいターゲットで新しい完全バックアップ タスクを作成すると、バックアップの名前は「MyBackup_mm_dd_yyyy.tib」になります。

バックアップが分割される場合(FAT32 ディスクでの 4 GB のファイル サイズ制限などのために自動的に、またはバックアップ タスクの設定によって)、構成バックアップ ファイル(ボリューム)の名前は

MyBackup_mm_dd_yyyy1.tib...MyBackup_mm_dd_yyyyN.tib のようになります。N はボリュームの番号です。

この完全バックアップに対する以降の増分または差分バックアップの名前は、MyBackup_mm_dd_yyyy2.tib、MyBackup_mm_dd_yyyy3.tib など(完全バックアップが分割されない場合)、または MyBackup_mm_dd_yyyyN+1.tib、MyBackup_mm_dd_yyyyN+2.tib などとなります。たとえば、N=8 の場合は、増分バックアップまたは差分バックアップの名前は MyBackup_mm_dd_yyyy9.tib、MyBackup_mm_dd_yyyy10.tib などとなります。

3)たとえばパーティション C と D をバックアップすると、バックアップの名前は「System_C_D_mm_dd_yyyy.tib」になります。

4)ファイルレベルのバックアップを実行すると、バックアップの種類に応じて名前が設定されます。

- データのバックアップの場合: MyBackup_mm_dd_yyyy.tib
- システム状態のバックアップの場合: System State_mm_dd_yyyy.tib
- 電子メール バックアップの場合: Email_mm_dd_yyyy.tib
- アプリケーションの設定バックアップの場合: Application Settings_mm_dd_yyyy.tib

5)Windows エクスプローラでフォルダを右クリックし、ショートカット メニューで [バックアップ] を選択した場合、バックアップの名前はフォルダ名に日付が付加されたものになります(例: My Documents_mm_dd_yyyy.tib)。

Windows エクスプローラでファイルを右クリックし、ショートカット メニューで [バックアップ] を選択した場合、バックアップの名前はファイル名に日付が付加されたものになります(例: filename_mm_dd_yyyy.tib)。

Windows エクスプローラで同じフォルダ内の複数のファイルを選択し、ショートカット メニューで [バックアップ] を選択した場合、バックアップの名前はフォルダ名に日付が付加されたものになります(例: My Documents_mm_dd_yyyy.tib)。

Windows エクスプローラで複数のフォルダを選択し、ショートカット メニューで [バックアップ] を選択した場合、バックアップの名前は、親フォルダ名またはディスク文字(ルート ディレクトリのフォルダを選択した場合)に日付が付加されたものになります(例: My Documents_mm_dd_yyyy.tib または C_mm_dd_yyyy.tib)。

6) [データ リカバリとバックアップの管理] 画面でバックアップの名前を変更すると、プログラムのメタデータ データベース内でのみバックアップの名前が変更されます。ディスク上のバックアップ ファイルの名前は変更されません。

3.4 Acronis セキュア ゾーン

Acronis セキュア ゾーンは、管理対象コンピュータのディスク領域にバックアップ アーカイブを保存するための、セキュリティで保護されたパーティションです。Acronis セキュア ゾーンを利用すると、バックアップが保存されているのと同じディスクにリカバリすることができます。Acronis True Image Home のウィザードのウィンドウに、アーカイブを保存できる場所の一覧が表示されるときに、このゾーンも表示されます。

このゾーンにアクセスできるのは、アクロニスのディスク管理ツールなどの特定の Windows アプリケーションだけです。

Acronis セキュア ゾーンを作成すると、[マイ コンピュータ] の下の [その他] セクションにアイコンが追加されます。この Acronis セキュア ゾーン アイコンをダブルクリックすると、このゾーンに保存されているすべてのバックアップ アーカイブが一覧表示されます。このアイコンを右クリックしてショートカット メニューの [開く] を選択するという方法でも、ゾーンを開くことができます。アーカイブをダブルクリックすると、そのアーカイブに属するすべてのバックアップ(完全、増分、差分)が表示されます。特定のバックアップを右クリックすると、ショートカット メニューが開きます。このメニューから選択できる操作には、バックアップのマウント(イメージ アーカイブの場合)、リカバリ、ベリファイ、更新、削除、およびバックアップの詳細の表示があります。Acronis セキュア ゾーンがパスワードで保護されている場合は、バックアップの詳細の表示を除いて、操作を実行するにはパスワードの入力が必要になります。バックアップをダブルクリックすると、デフォルトの操作(イメージ バックアップの場合はマウント、データ バックアップの場合はリカバリ)が開始されます。

Acronis セキュア ゾーン アイコンを右クリックしたときに表示されるショートカット メニューには、その他に [ショートカットの作成](デスクトップへの配置)と [参照](ゾーンの内容の参照)という項目もあります。[参照] を選択すると、Windows エクスプローラが開いてディレクトリ ツリーで Acronis セキュア ゾーンが自動的に選択され、ゾーンの内容を参照できるようになります。

Acronis セキュア ゾーンをバックアップ ファイルの保存場所として使用するには、空き領域があることが条件です。十分な領域がない場合は、空き領域を作成するために古いバックアップが削除されます。

Acronis True Image Home では、次の方法で Acronis セキュア ゾーンがクリーンアップされます。

- バックアップの作成中に、バックアップ作成のための十分な空き領域がない場合は、Acronis セキュア ゾーンがいっぱいであることを警告するダイアログ ボックスが表示されます。[キャンセル] をクリックすると、バックアップ処理をキャンセルできます。この場合は、たとえば Acronis セキュア ゾーンのサイズを拡大してからバックアップ処理を再度実行します。ゾーン内の領域を自動的に解放するには、[OK] をクリックします。作成しようとしているバックアップと同じ種類の完全バックアップのうち最も古いものが、後続のすべての増分/差分バックアップと共に削除され、その後でバックアップ処理が再開されます。

- 最も古いバックアップを削除しても空き領域が不十分な場合は、同じ警告メッセージが再度表示されます。この場合、次に古いバックアップ(存在する場合)を削除することができます。この操作は、以前のバックアップがすべて削除されるまで繰り返すことができます。
- 以前のバックアップをすべて削除してもバックアップを完了するのに十分な領域が解放されない場合、エラー メッセージが表示され、バックアップはキャンセルされます。

ゾーン内のバックアップの種類は、ディスク イメージのバックアップとファイル レベルのバックアップの 2 種類のみです。データ、システムの状態、電子メール、およびアプリケーションの設定のバックアップは、ファイル レベルのバックアップと見なされます。たとえば、ゾーン内に電子メールのバックアップ(「電子メール」)があり、空き領域が不足しているためにフォルダのバックアップ(「データ」)を作成できない場合は、フォルダ バックアップ用の領域を解放するために電子メールのバックアップが削除されます。

データのバックアップを、スケジュールに従って自動的に実行することができます(「タスク スケジュールの作成」『108 ページ参照』を参照してください)。スケジュールされたバックアップの実行時の空き領域不足を防ぐために、**[Acronis セキュア ゾーンに十分な空き領域がない場合、最も古いアーカイブを削除する]** を選択することをお勧めします。このオプションは、**[バックアップ オプション]** の **[エラー処理]** および **スケジュール バックアップ タスク オプション** の中にあります。ただし、増分バックアップのチェーンが長くなっている場合は、ゾーン内の空き領域を定期的に確認することをお勧めします。

Acronis セキュア ゾーンの作成、サイズ変更、または削除をこのウィザードで実行する方法については、「Acronis セキュア ゾーンの管理」『118 ページ参照』を参照してください。

3.5 Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ

3.5.1 動作

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用すると、オペレーティング システムを読み込まずに Acronis True Image Home を起動することができます。この機能を利用すれば、何らかの原因でオペレーティング システムが起動しなくなったときでも、Acronis True Image Home を使用して、破損したパーティションをリカバリすることができます。Acronis リムーバブル メディアからのコンピュータを起動する場合とは異なり、Acronis True Image Home を起動するときに独立したメディアやネットワーク接続は必要ありません。

3.5.2 使用方法

コンピュータ起動時に Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用できるようにするための手順は、次のとおりです。

1. Acronis True Image Home をインストールします。
2. Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化します。**[Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化する]** をクリックし、ウィザードの指示に従ってください。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化すると、MBR(マスタ ブート レコード)がスタートアップ リカバリ マネージャのブート コードで上書きされます。サード パーティ製のブート マネージャがインストールされている場合は、リカバリ マネージャをアクティブ化した後に、そのブート マネージャを再度アクティブ化する必要があります。Linux のローダ(LiLo、GRUB など)を使用している場合は、Acronis スタートアップ

プリカバリ マネージャをアクティブ化する前に、ローダを MBR ではなく、Linux の root(または boot)パーティションのブート レコードにインストールすることをお勧めします。

障害や災害が発生した場合は、コンピュータの電源を入れて、「Press F11 for Acronis Startup Recovery Manager」というメッセージが表示されたら F11 キーを押します。スタンドアロン版の Acronis True Image Home が起動します。このスタンドアロン版と完全版との違いはごくわずかです。

ご注意ください。スタンドアロンの Acronis True Image Home で使用されるドライブ文字は、Windows のドライブ文字とは異なることがあります。たとえば、スタンドアロン版の Acronis True Image Home で D: と表現されるドライブが、Windows の E: ドライブに対応していることもあります。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャがアクティブ化済みであっても、Try&Decide モードの開始後はスタートアップ リカバリ マネージャは使用できません。

3.6 ディスクとパーティション情報の表示

各ウィザードのスキームすべてにおけるデータの表示方法を変更できます。

ヘッダーには、**[項目]**、**[アイコンの整理]**、および **[ディスク プロパティ]** の最大 3 つのアイコンを表示できます。**[ディスク プロパティ]** はオブジェクトを右クリックして開くコンテキスト メニューにも表示されます。

メッセージを特定の項目で並べ替えるには、ヘッダーをクリックするか(再度クリックするとメッセージを逆順で表示)、**[アイコンの整理]** ボタンをクリックして項目を選択します。

表示する項目を選択するには、ヘッダー行を右クリックするか、**[項目]** ボタンを左クリックします。それから、表示する項目にフラグを設定します。**[項目]** ボタンを左クリックする際、**[上に移動]** および **[下に移動]** ボタンを使って項目の表示順を変更できます。

[ディスク プロパティ] ボタンをクリックすると、選択したパーティションまたはディスクのプロパティウィンドウが表示されます。

このウィンドウは 2 つのペインで構成されています。左側のペインにはプロパティのツリーが、右側のペインには選択したプロパティの詳細な説明が表示されます。ディスク情報にはディスクの物理的なパラメータ(接続の種類、デバイスの種類、サイズなど)が表示されます。パーティション情報にはパーティションの物理的なパラメータ(セクタ、位置など)と論理的なパラメータ(ファイル システム、空き領域、割り当てられているドライブ文字など)の両方が表示されます。

項目の境界をマウスでドラッグすると、項目の幅を変更できます。

3.7 Try&Decide とは

Acronis True Image Home Try&Decide 機能を使用すると、コンピュータを危険にさらすことなく、ソフトウェアのインストールや、電子メールの添付ファイルを開くなどの潜在的な危険性のある操作を行うことができます。これは、コンピュータの他の部分から隔離された、本質的に管理下にある安全な一時的作業スペースを作成することによって実現されます。これらの操作中にシステムがクラッシュしたりコンピュータが応答しなくなった場合は、Try&Decide モードで行った変更を破棄してシステムを以前の状態に戻します。操作を正常に完了した場合は、実際のシステムに変更を適用

することを選択できます（詳細については「Try&Decide 『 102 ページ参照 』」を参照してください）。

3.8 Acronis DriveCleanser、ファイル シュレッダー、システム クリーンアップ

Acronis True Image Home には、ハードディスク ドライブ全体または個々のパーティションのデータの確実な消去に加えて、個別ファイルの消去や、システムでのユーザーの操作履歴の消去のためのユーティリティが含まれています。古いハードディスク ドライブを新しい大容量のディスクに交換するときに、古いディスク上に個人的な機密情報が大量に残ってしまうことがあります。このような情報は、たとえディスクが再フォーマットされたとしても、リカバリできてしまうことがあります。

Acronis DriveCleanser は、ハードディスク ドライブやパーティション上の機密情報を消去するツールです。このツールに採用されている技術は、ほとんどの国や州の基準を満たすか上回っています。データ消去の方法は、機密情報の重要性に応じてさまざまなものから選択することができます。

ファイル シュレッダーは、機能は同じですが、個々のファイルやフォルダに対して実行することができます。

最後のシステム クリーンアップ ウィザードは、ユーザーの操作履歴をすべて確実に消去するためのツールです。コンピュータを使用している間、ユーザーが行った操作の履歴が大量のデータとしてさまざまなシステム ファイルに記録されますが、ユーザー自身は、そのような履歴の存在に気が付きません。この履歴には、ユーザー名とパスワードやその他の個人情報も含まれていることがあり、もし犯罪者の手に渡れば、アイデンティティを盗まれるおそれがあります。このユーティリティを実行すれば、このような情報がハードディスク ドライブから完全に消去されます。

3.9 zip 形式のサポート

tib 形式の代わりに zip 形式を使用すると、Acronis True Image Home を使用しなくても、任意の場所にあるバックアップからファイルを取り出すことができます。たとえば、USB スティックにファイルをバックアップし、家にあるノートパソコンで Acronis True Image Home をインストールせずに、USB スティックにあるアーカイブからファイルを取り出すことができます。これは、最も広範に利用されているオペレーティング システムである Microsoft Windows と Mac OS X に zip ファイル形式のサポートが組み込まれているためです。

Windows に組み込まれている zip ファイルのサポートは、サイズが 4 GB を超える zip アーカイブ、4 GB を超えるファイルが含まれる zip アーカイブ、またはマルチボリュームの zip アーカイブの処理は対象としないことにご注意ください。

zip 形式はファイルやフォルダのバックアップだけでなく、バックアップの予備コピーの作成にも利用できます。Acronis True Image Home では、パスワード保護機能と暗号化機能を除き、tib 形式で利用可能なほとんどの機能を zip 形式でも利用できます。バックアップのスケジュール設定、zip 形式のバックアップ アーカイブの検証、zip アーカイブからのファイルやフォルダのリカバリ、増分バックアップや差分バックアップの作成などを行うことができます。

Acronis True Image Home でリカバリと検証を行うことができるのは、本ソフトウェアで作成した zip アーカイブのみです。ファイル アーカイブ作成プログラムで作成された zip アーカイブの場合、Acronis True Image Home を使用してリカバリと検証を行うことはできません。

3.10 Acronis ノンストップ バックアップ

Acronis ノンストップ バックアップを利用すると、ディスクとファイルを簡単に保護することができます。障害や災害が発生しても、ディスク全体や個々のファイル、あるいはファイルの特定のバージョンをリカバリすることができます。デフォルトでは、ノンストップ バックアップで保護されるのはシステム パーティションですが、他のパーティションやディスクも保護対象として選択できます。

Acronis ノンストップ バックアップを起動すると、保護対象として選択されているパーティションの初回イメージ バックアップが実行されます。このタスクの完了後は、システムとファイル(開いているファイルも含む)に対する変更が 5 分間隔で保存されるので、リカバリ時には特定の時点の状態を正確に復元できるようになります。

保護対象のパーティションの 5 分間隔のバックアップは、過去 24 時間分が保持されます。それよりも古いバックアップは日単位で統合され、過去 30 日分が保持されます。また、週単位のバックアップは、ノンストップ バックアップ ストレージの空きがある限り保持されます。

3.11 システム イメージ TIB ファイルからの起動

Windows 7 の Enterprise エディションまたは Ultimate エディションを使用している場合は、将来システム パーティションをリカバリしたときにコンピュータを起動できるかどうかを事前にテストできるようになりました。Acronis True Image Home では、システム パーティション イメージを TIB ファイルに格納して、このファイルからコンピュータを起動することができます。バックアップからの起動テストで起動することができれば、実際のシステム リカバリ後ほぼ確実にそのバックアップから起動することができます。TIB ファイルからコンピュータを起動するときは、Acronis True Image Home によってこの TIB ファイルが変換されて一時的な VHD ファイルが作成されます。そのため、このファイルを保存できる大きさの空き領域がハードディスク上に必要です。その後、新しい項目が Windows のブート ローダの一覧に追加されます。ブート ローダの一覧から tib ファイルを選択すると、コンピュータは、この一時 vhd ファイルから起動します。TIB ファイルから起動できるかどうかのテストが完了した後は、そのファイルをブート ローダ リストから削除するとともに一時的な VHD ファイルを削除しますが、残しておいてもかまいません。

3.12 Acronis Universal Restore

3.12.1 Acronis Universal Restore の用途

Universal Restore は、別製品である Acronis Plus Pack の一部です。Plus Pack には固有のライセンスがあり、独自のセットアップ ファイルからインストールします。新しくインストールした Universal Restore アドオンを起動用のリカバリ環境で機能させるには、ブータブル メディアを再度作成する必要があります。

システム ディスク イメージを、それが作成されたハードウェアまたは同一構成のハードウェアに、簡単に復元できます。ただし、ハードウェア障害などの状況で、マザーボードを交換したり、バージョンの異なるプロセッサを使用すると、リカバリされたシステムを起動できないことがあります。より高スペックなコンピュータにシステムを移行しようとした場合も、同じように起動できないという問題が発生します。新しいハードウェアが、イメージに含まれている最も重要なドライバと互換性がないからです。

Microsoft System Preparation Tool(sysprep)を使用しても、この問題は解決しません。Sysprepで置き換えることができるドライバは、プラグ アンド プレイのデバイス(サウンド カード、ネットワーク アダプタ、ビデオ カードなど)用のドライバに限られているためです。システムの HAL (Hardware Abstraction Layer)と大容量記憶装置デバイス ドライバに関しては、ソース コンピュータとターゲット コンピュータで同じである必要があります(Microsoft サポート技術情報の文書番号 302577 と 216915 をご参照ください)。

Acronis Universal Restore テクノロジは、重要な HAL および大容量記憶装置のドライバを置き換えることによって、ハードウェアに依存しないシステムの復元の効率的なソリューションを提供します。

Acronis Universal Restore は次の操作に使用できます。

1. さまざまなハードウェアで障害や災害が発生したシステムの迅速なリカバリ
2. ハードウェアに依存しないオペレーティング システムのクローン作成

Acronis Universal Restore の使用上の制限

1. イメージのパーティション構造またはターゲット ディスクのパーティションがソース ディスクのパーティションと一致しないと、Acronis Universal Restore によって復元されたシステムは起動しない可能性があります。その結果、イメージから復元されたローダは誤ったパーティションをポイントすることになり、システムが起動しない、または正しく動作しなくなります。

これは、次の場合に発生することがあります。

- ソース ディスク全体ではなく、選択したパーティションのみをバックアップした場合
- ソース ディスク全体ではなく、選択したパーティションのみを復元した場合 システムが先頭以外のパーティション上にある場合など、条件によってはローダに混乱が生じて、復元されたシステムを起動することができなくなります。

この問題を回避するには、システム ディスク全体をバックアップし、システム全体を復元することをお勧めします。

2. Acronis リカバリ マネージャ(F11 キー)を使用してコンピュータを起動した場合、またはバックアップ イメージが Acronis セキュア ゾーンにある場合、Acronis Universal Restore オプションは機能しません。これは、Acronis リカバリ マネージャと Acronis セキュア ゾーンが主に同じコンピュータ上でのデータ リカバリを目的としているためです。

3.12.2 Acronis Universal Restore の一般的な原理

1. HAL および大容量記憶装置のドライバの自動選択

Acronis Universal Restore は、(復元されたイメージの)Windows デフォルト ドライバ ストレージ フォルダで HAL および大容量記憶装置のドライバを検索し、復元先ハードウェアに最も適したドライバをインストールします。カスタム ドライバ リポジトリ(ネットワーク ドライブまたは CD の 1 つまたは複数のフォルダ)を指定して、ドライバの検索にも使用できます。さらに、Acronis Universal Restore はリムーバブル メディア上のドライバを検索することもできます。

Windows のデフォルトのドライバ ストレージ フォルダは、レジストリ キー

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\Current version\DevicePath で指定されています。通常、このストレージ フォルダは WINDOWS/inf です。

2. プラグ アンド プレイ デバイス用のドライバのインストール

Acronis Universal Restore では、組み込みのプラグ アンド プレイの検出および設定処理を利用して、ビデオ、オーディオ、USB など、システム起動時に重要ではないデバイスのハードウェアの違いに対処します。Windows はログオン段階からこの処理を引き継ぎ、新しいハードウェアの一部が検出されないときは、後から手動でドライバをインストールできます。

4 障害復旧のための準備

4.1 障害や災害に対する最善の準備方法

「失敗する可能性のあるものは、いずれ失敗する」(それも最悪のタイミングに、最悪の形で)というマーフィーの法則を思い出してください。また、彼は天性の楽道家だったという人も中にはいます。したがって、コンピュータはクラッシュする可能性があり、いずれはクラッシュすることになる(それも最悪のタイミングで発生することがあります)ということに注意してください。マーフィーの法則は別の解釈も可能です。つまり、悪い方向に進む可能性があるすべてのことを検討し、それを回避するために対処することはとても重要です。可能性のある障害に対処する最善の方法は、次のように必要な対策を取ることです。

- 1) 障害に対して適切に準備するには、システム ディスク(または、最小限度、Windows および使用しているアプリケーションを含むパーティション)の完全バックアップを作成する必要があります。このタスクを簡単に行えるように、アクロニスにはワンクリック バックアップ機能があり、新規にインストールしたプログラムを初めて起動するときにシステム パーティションと MBR のバックアップを行うことができます。バックアップに使用する外部ハード ドライブをまだ接続していなかったり、システム パーティション以外にもバックアップするなどの理由でワンクリック バックアップを使用しない場合は、これらのバックアップを早期に作成してください。
- 2) 可能な限り、プライマリ ハードディスク(C: ドライブ)以外のハード ドライブ(できれば外付けハード ドライブ)にシステム ドライブのイメージを保存する必要があります。これにより、プライマリハードディスク ドライブに障害や災害が発生した場合でも、システムをより確実にリカバリできます。また、個人のデータはオペレーティング システムやアプリケーションとは別に D: ドライブなどのディスクに格納します。このような対策を行うことにより、システム ディスクとデータ ディスク(またはパーティション)のイメージ作成時間を短縮できるだけでなく、リカバリが必要な情報の量も低減させることができます。これにより、システム ディスクのバックアップ ファイルが小さくなり、リカバリが容易になります。同様に、バックアップ ファイルのサイズが小さいため、破損の可能性が少なくなり、システムのリカバリに要する時間が短縮されます。
- 3) 2) で説明している処置に従って、データ(ドキュメント、ビデオ、写真など)をシステム ディスク以外の場所に保存する場合は、そのデータもバックアップする必要があります。データを含んでいるフォルダをバックアップするか、データ ディスク イメージを作成できます。イメージの作成はファイルのコピーに比べて非常に高速であるため、大量のデータをバックアップする場合は、バックアップ処理時間が大幅に短縮される可能性があります。また、何らかの理由でイメージ ファイルが破損した場合でも、イメージをマウントし、マウントしたイメージから Windows エクスプローラを使用してファイルやフォルダをコピーすることで、ほとんどのファイルやフォルダを保存できることがあります。
- 4) ほとんどの場合、障害からのシステムのリカバリはレスキュー メディアからの起動後に行われるため、次のセクション「ブータブル レスキュー メディアのテスト」『31 ページ参照』で説明されているようにレスキュー メディアをテストする必要があります。

4.1.1 バックアップをリカバリに使用できるかをテストするときの推奨事項

- 1) Windows でアクティブ パーティションのリカバリを開始する場合でも、リカバリ プロセスの開始後にプログラムは Linux 環境で再起動されます。これは、Windows 自体のパーティションのリカバリを実行中に Windows を実行しておくことができないためです。したがって、すべてのケースにお

いてリカバリ環境下でアクティブ パーティションをリカバリします。予備のハード ドライブがある場合は、Linux を使用するレスキュー メディアから起動してこのハード ドライブにリカバリできるかどうかをテストすることを強く推奨します。スベア ドライブがない場合は、少なくともリカバリ環境でイメージの検証を実行してください。Windows での検証中に読み取ることができるバックアップは、**Linux 環境で常に読み取れるとは限りません。**

Acronis True Image Home のレスキュー メディアを使用すると、Windows でのドライブの識別方法とは異なるディスク ドライブ文字が作成されることがあります。たとえば、スタンドアロン版の Acronis True Image Home で識別される D: ドライブが、Windows では E: ドライブに対応している場合があります。安全のために、ハード ドライブのすべてのパーティションに一意の名前を割り当てておくことをお勧めします。これにより、バックアップを含むディスクを見つけることが容易になります。

2) また、リカバリ ウィザードの [概要] 画面までのすべてのステップを完了することも役に立ちます。ただし、[実行] ボタンはクリックしないでください。これにより、リカバリ プロセスのシミュレーションを行い、Acronis True Image Home でバックアップを含むドライブとターゲット ドライブの両方が認識されることを確認できます。リカバリ ウィザードのすべてのステップを完了したら、[概要] 画面の [キャンセル] をクリックします。この手順は、設定と選択肢に納得するまで繰り返すことができます。

3) Windows 7 の Enterprise および Ultimate エディションのユーザーは、リカバリされたシステム パーティションから起動できるかどうかをテストできるようになりました。Acronis True Image Home では、システム パーティション イメージを含む tib ファイルから起動できます (これは実際の起動で使用される VHD に変換されます)。バックアップからの起動テストで起動することができれば、実際のリカバリ後ほぼ確実にそのバックアップから起動することができます。

4.1.2 その他の推奨事項

1) 多くの IT 担当者はシステム バックアップのコピーを少なくとも 2 つ (できれば 3 つ) 持つように推奨しています。安全のために、バックアップの 1 つのコピーをその他のコピーとは別の場所 (バックアップ コンピュータを自宅で使用している場合は、たとえば会社や友人の自宅など他の建物が望ましい) に保存することもお勧めします。複数のバックアップが有効なもう 1 つの点として、次のことが挙げられます。リカバリを開始すると、Acronis True Image Home により、ターゲット パーティション (またはディスク) が削除されます。1 つのバックアップのみを保有している場合、リカバリするコンピュータでシステム パーティションを削除する瞬間は大きな危険性があります。つまり、リカバリしたイメージしかなく、そのイメージが破損していた場合は大きな問題になります。

2) バックアップの保存に使用するハード ドライブは FAT32 ではなく NTFS ファイル システムにフォーマットすることをお勧めします。これは、FAT32 ディスク上のファイル サイズが 4 GB に制限されているからです。このため、バックアップのサイズが約 100 GB の場合、Acronis True Image Home によりファイルが 25 個のファイルに分割されます。ハードディスクにこのような完全バックアップが複数ある場合、ファイルの数はさらに完全バックアップの数を掛けた数になります。これは、Windows エクスプローラを使用してバックアップを別の場所に移動する場合などに不便です。

3) 自宅に 1 台のコンピュータしかない場合は、インターネットが使用できなくなる可能性があるので、障害からのリカバリに役立つ可能性がある情報を印刷しておくことをお勧めします。印刷した情報はレスキュー CD/DVD や別のレスキュー メディアと一緒に安全な場所に保管してください。

4.2 ブータブル レスキュー メディアのテスト

必要に応じてコンピュータを正常にリカバリできるように、レスキュー メディアからコンピュータを起動できることをテストしておく必要があります。また、大容量記憶デバイスおよびネットワーク アダプタの運用に必要なドライバがすべてリカバリ メディアに含まれるようにしてください。

1) ブータブル CD を含むパッケージ版の製品を購入された場合は、この CD からコンピュータを起動できることを確認してください。アクロニスではブータブル CD に最新ハードウェアのドライバを含めるようにしていますが、多様なハードウェア構成が存在するため、レスキュー メディアからの起動を完全に保証することはできません。

2) ダウンロード版のプログラムを購入された場合は、ユーザーズ ガイドまたはプログラムのヘルプで示される手順に従ってブータブル レスキュー CD(または USB スティックなどの他のレスキューメディア)を作成し、このレスキュー メディアがコンピュータで起動できることを確認する必要があります。

レスキュー メディアからの起動を有効にし、レスキュー メディアのデバイス(CD-ROM/DVD-ROM ドライブまたは USB スティック)が最初のブート デバイスになるようにコンピュータを構成してください。「BIOS での起動順の並び替え」[191 ページ参照]を参照してください。

レスキュー CD がある場合は、「Press any key to boot from CD」というプロンプトが表示されたらすぐにキーを押して CD からの起動を開始します。5 秒以内にキーを押さなかった場合は、コンピュータを再起動する必要があります。他のレスキュー メディアを使用する場合の手順も同様です。

3) コンピュータがリカバリ環境で起動した後は、バックアップの保存に使用する外部ハード ドライブを含む、システム内のハード ドライブすべてが検知されることを確認します。そのため、レスキューメディアから起動する前に外部ドライブを接続しておく必要があります。接続していない場合は、リカバリ環境がドライブを検知しない場合があります。

4) バックアップをネットワークに保存している場合は、リカバリ環境でネットワークにアクセスできることを確認する必要があります。レスキュー メディアから起動した場合、Acronis True Image Home がネットワークを検知しない場合があります。ネットワーク上にコンピュータが表示されないが、[マイ コンピュータ] に [近くのコンピュータ] アイコンが表示されている場合は、ネットワーク上の DHCP サーバーが稼働していることを確認してください。DHCP サーバーを使用していない場合は、[ツールとユーティリティ] > [オプション] > [ネットワーク アダプタ] で表示されるウィンドウで、ネットワーク設定を手動で指定します。

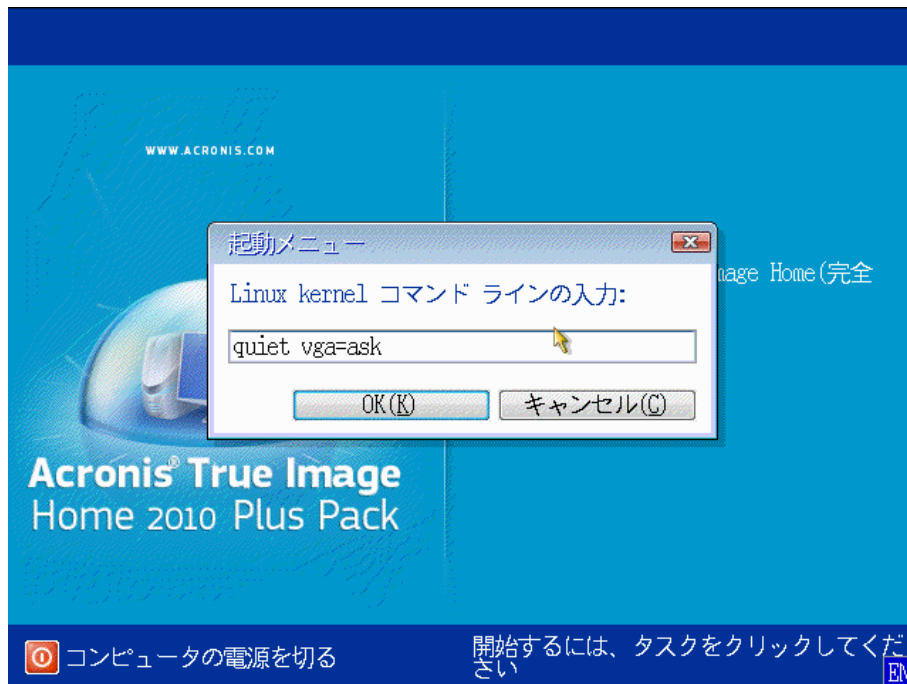
[マイ コンピュータ] で [近くのコンピュータ] アイコンが表示されない場合は、ネットワーク カードまたは Acronis True Image に同梱のカード ドライバに問題がある可能性があります。

レスキュー メディアからの起動時におけるビデオ モードの選択

レスキュー メディアからの起動時には、ビデオ カードおよびモニタの仕様に応じて最適なビデオモードが自動で選択されます。ただし、使用しているハードウェアに適していないビデオ モードが選択される場合もあります。このような場合は、次の手順で適したビデオ モードを選択できます。

1. レスキュー メディアからの起動を開始します。ブート メニューが表示されたら、Acronis True Image Home (完全版)の項目にマウス ポインタを置いて F11 キーを押します。

2. コマンド ラインが表示されたら、「vga=ask」と入力して **[OK]** をクリックします。



3. ブート メニューで Acronis True Image Home(完全版)を選択してレスキュー メディアからの起動を続けます。使用できるビデオ モードを表示するには、該当するメッセージが表示されたら Enter キーを押します。
4. 使用しているモニタに最適なビデオ モードを選択し、その番号をコマンド ラインに入力します。たとえば、338 と入力すると 1600x1200x16 のビデオ モードが選択されます(下図参照)。

```

Press <ENTER> to see video modes available, <SPACE> to continue, or wait 30 sec
Mode: Resolution: Type: Mode: Resolution: Type: Mode: Resolution: Type:
0 F00 80x25 UGA 1 F01 80x50 UGA 2 F02 80x43 UGA
3 F03 80x28 UGA 4 F05 80x30 UGA 5 F06 80x34 UGA
6 F07 80x60 UGA 7 320 320x200x8 VESA 8 321 320x400x8 VESA
9 322 640x400x8 VESA a 323 640x400x8 VESA b 324 800x600x8 VESA
c 325 1024x768x8 VESA d 326 1152x864x8 VESA e 327 1280x960x8 VESA
f 328 1280x1024x8 VESA g 329 1400x1050x8 VESA h 32A 1600x1200x8 VESA
i 32B 1792x1344x8 VESA j 32C 1856x1392x8 VESA k 32D 1920x1440x8 VESA
l 32E 320x200x16 VESA m 32F 320x400x16 VESA n 330 640x400x16 VESA
o 331 640x400x16 VESA p 332 800x600x16 VESA q 333 1024x768x16 VESA
r 334 1152x864x16 VESA s 335 1280x960x16 VESA t 336 1280x1024x16 VESA
u 337 1400x1050x16 VESA v 338 1600x1200x16 VESA w 339 1792x1344x16 VESA
x 33A 1856x1392x16 VESA y 33B 1920x1440x16 VESA z 33C 320x200x32 VESA
33D 320x400x32 VESA 33E 640x400x32 VESA 33F 640x400x32 VESA
340 800x600x32 VESA 341 1024x768x32 VESA 342 1152x864x32 VESA
343 1280x960x32 VESA 344 1280x1024x32 VESA 345 1400x1050x32 VESA
346 1600x1200x32 VESA 347 1792x1344x32 VESA 348 1856x1392x32 VESA
349 1920x1440x32 VESA 300 640x400x8 VESA 301 640x400x8 VESA
303 800x600x8 VESA 305 1024x768x8 VESA 307 1280x1024x8 VESA
30E 320x200x16 VESA 311 640x400x16 VESA 314 800x600x16 VESA
317 1024x768x16 VESA 31A 1280x1024x16 VESA
Enter a video mode or "scan" to scan for additional modes: _

```

- 3 桁の数字の前に 1 桁の数字や文字があるビデオ モードの場合、これらの数字や文字(この例では「v」)を入力して選択することもできます。
5. Acronis True Image Home(完全版)が起動するまで待ってから、モニタ上の [ようこそ] 画面の表示状態が適していることを確認します。

他のビデオ モードをテストするには、Acronis True Image Home を閉じてから上記の手順を繰り返してください。

ハードウェアに最適なビデオ モードを見つけたら、そのビデオ モードを自動的に選択する新しいブータブル レスキュー メディアを作成できます。

これを行うには、Acronis メディア ビルダを起動して必要なメディア コンポーネントを選択し、[ブータブル メディアの起動パラメータ]のステップにおいてコマンド ラインに接頭辞「0x」を付加してモードの番号を入力(この例では「0x338」)してから、通常通りにメディアを作成します。

4.3 カスタム レスキュー CD の作成

リカバリ環境で一部のハードディスク ドライブやネットワーク アダプタが検出されない場合、通常はドライバに問題があります。アクロニスのレスキュー CD には、市販されているすべてのハードウェアのドライバが収録されているわけではありません。このため、使用しているハードウェア ドライブのいくつかが標準的なレスキュー CD に含まれていない場合は、カスタム レスキュー メディアを作成する必要があります。

アクロニス製品で使用される Linux ベースのリカバリ環境では、新しいドライバを追加できません。このため、必要なすべてのドライバを含むカスタム レスキュー CD を作成するには、アクロニスのカスタマー サービス部門に依頼する必要があります。

依頼する前に、システムに関する情報を収集します。[ヘルプ] メニューで **[システム レポートの生成]** を選択します。Acronis True Image Home によって必要な情報が自動的に収集され、収集された内容のリストがレポートに表示されます。レポートの作成プロセスでは、必要な情報の収集に使用される一部のコンポーネントがプログラムによってインストールされることがあります。レポートの作成が完了したら、**[名前を付けて保存]** をクリックし、希望するフォルダを選択するか、またはデフォルトの **[マイドキュメント]** フォルダに保存します。レポートは ZIP ファイルにアーカイブされます。このファイルをアクロニスのカスタマー サービス部門に送信します。カスタマー サービス部門は、コンピュータのハードウェアと互換性があるカスタム レスキュー メディアの ISO イメージを作成し、ISO ファイルをお客様に送信します。Nero など、ISO ファイルを処理できるプログラムを使用して、このファイルを CD や DVD に書き込みます。また、このレポートは問題の解決をアクロニスのカスタマー サービス部門に問い合わせるときにも役立つことがあります。

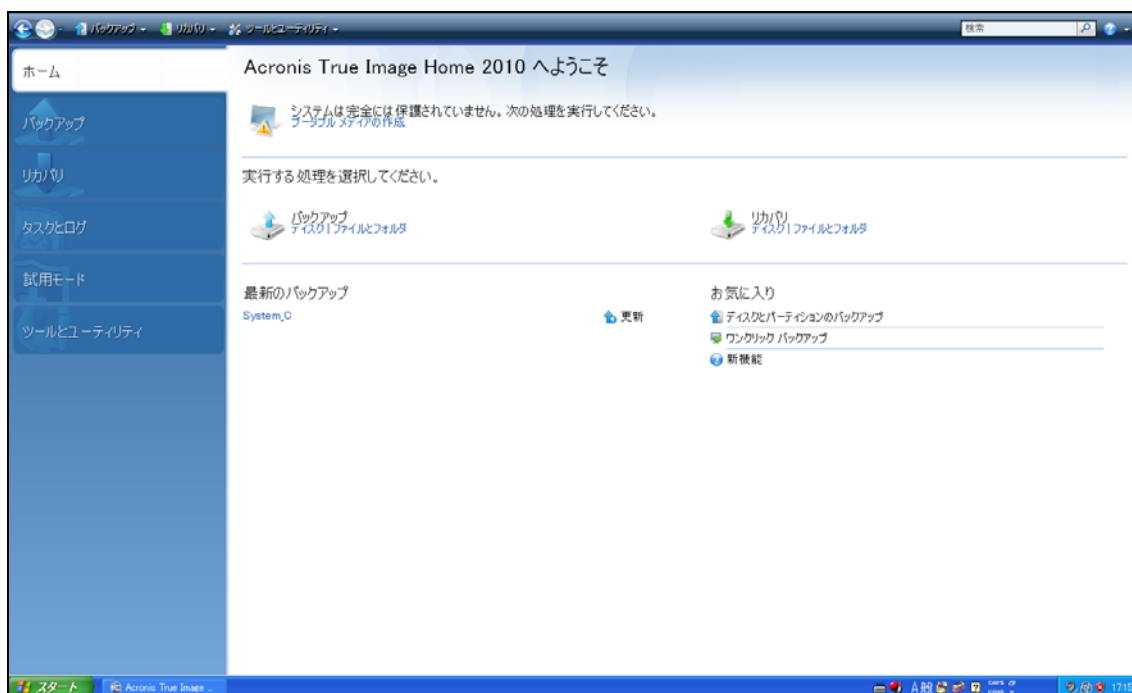
カスタム レスキュー CD を作成したら、ハードディスク ドライブやネットワーク アダプタがリカバリ環境で検出されるかどうかをテストします。

5 Acronis True Image Home について

5.1 プログラムのワークスペース

Acronis True Image Home を起動すると [ようこそ] 画面が表示されます。この画面では、バックアップとリカバリの機能に簡単にアクセスできるようになり、システムの保護に関する問題が示されます。

システムがバックアップされており、復元用のブータブル レスキュー メディアが作成されている場合に、システムは完全に保護されていると見なされます。これらのいずれかが行われていない場合は Acronis True Image Home に [システムのバックアップ]、[ブータブル レスキュー メディアの作成] のリンクが表示され、保護に関する問題を解決することができます。問題を解決すると、該当するリンクは表示されなくなります。



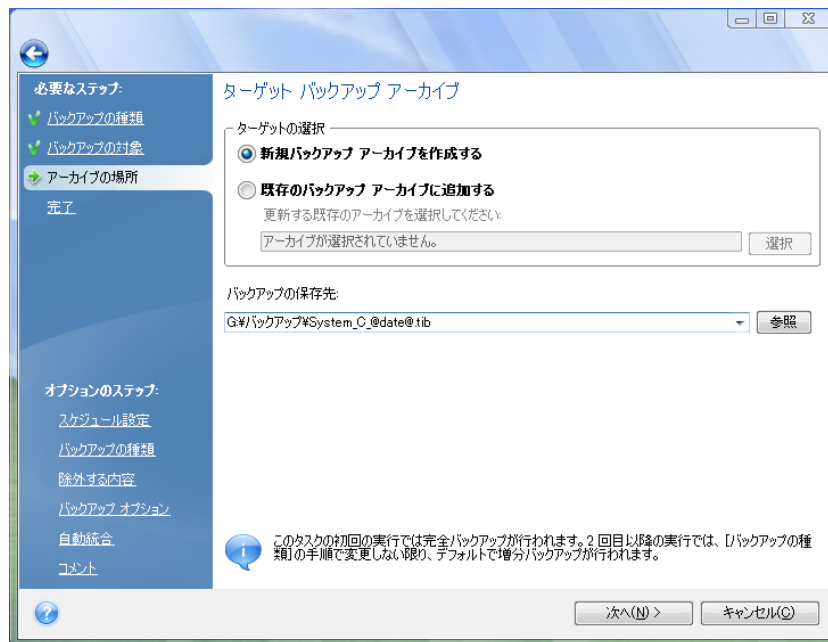
右側ペインの項目をクリックすると対応する画面が表示されます。この画面では、バックアップまたはリカバリのタスクをすぐに開始することも、詳細を選択することもできます。

右側ペインの【お気に入り】領域は最も頻繁に使用した機能の一覧を示し、これらの機能を再度使用できるようショートカットを提供します。【最新のバックアップ】領域は最近実行したバックアップの一覧を示し、クリックするだけでバックアップ アーカイブを更新できます。

画面の左側にあるサイドバーを使用すると、Acronis True Image Home の機能に容易にアクセスできます。サイドバー上の項目を選択すると、対応する機能にアクセスできる画面が表示されます。

Acronis True Image Home では、ウィザードを使用してさまざまな処理を案内に従って実行できるようになっています。メイン プログラム ウィンドウと同様、ウィザードにも、処理を実行するのに必

要なすべての手順(必須およびオプション)を示すサイドバーがあります。たとえば、次のバックアップ ウィザードのスクリーンショットを確認してください。



完了した手順には緑のチェックマークが付きます。緑の矢印は現在の手順を示します。必要なステップをすべて完了した後の【完了】のステップでは、[概要] 画面が表示されます。オプションのステップを省略する場合は、実行される処理の概要でデフォルトの設定が適切であることを確認してから、【実行】をクリックしてタスクを開始してください。省略しない場合は【オプション】をクリックし、現在のタスクのデフォルト設定を変更できるオプションのステップに進みます。

タスク トレイのアイコン

ほとんどの処理の実行中には、特別なインジケータ アイコンが Windows のタスク トレイ(ステータス バーの右側にある時計が配置されている箇所)に表示されます。アイコンの上にマウスを置くと、処理の進行状況または状態を示すツールのヒントが表示されます。アイコンを右クリックすると、ショートカット メニューが開き、処理の状態を変更したり必要に応じて処理をキャンセルすることができます。このアイコンは、メイン プログラム ウィンドウを開いていなくても表示されます。スケジュールされたタスクがバックグラウンドで実行されているときにも表示されます。

5.2 Acronis ワンクリック バックアップ

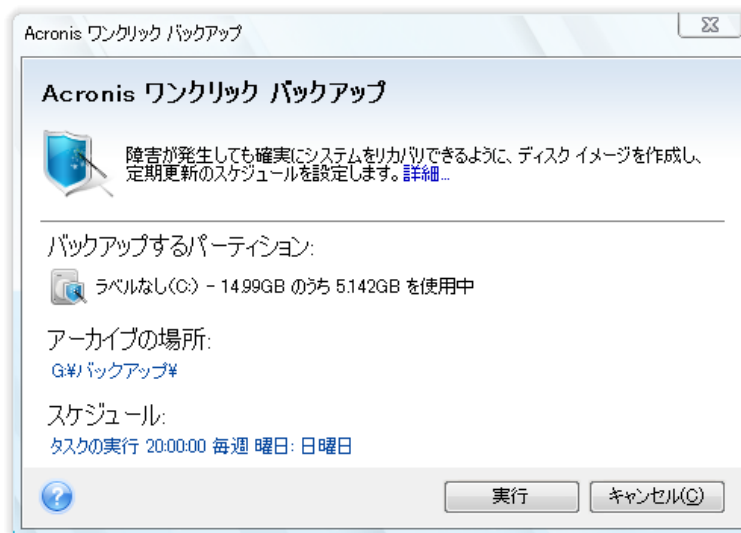
Acronis ワンクリック バックアップ ツールを利用すると、Acronis True Image Home のインストール直後からコンピュータを保護することが可能になります。インストール時に、Acronis ワンクリック バックアップのショートカットがデスクトップ上に作成されます。

このショートカットをダブルクリックするとワンクリック バックアップ ツールが開始し、システム パーティションとマスタ ブート レコード(MBR)がバックアップされます。バックアップが保存される場所は、最適であると考えられる場所が自動的に選択されます。バックアップに適した場所がない場合は、エラー メッセージが表示されます。

時間が経過した後で、システム パーティションのバックアップを更新するには、このショートカットを再びダブルクリックします。

ユーザーがワンクリック バックアップのショートカットをダブルクリックしなかった場合は、Acronis True Image Home のインストール後の最初の起動時にワンクリック バックアップを実行するかどうかをたずねる画面が表示されます。この画面で、以降の完全バックアップのスケジュールを設定することもできます(下の画面ショットを参照)。

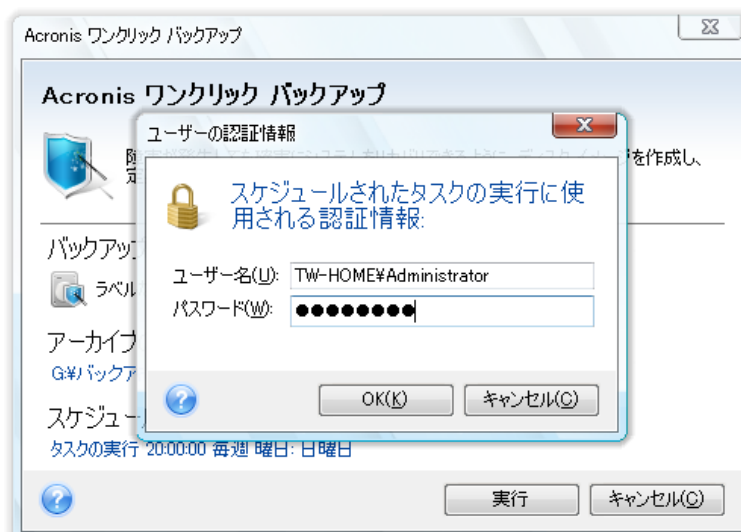
Acronis ワンクリック バックアップ ツールで実行されるのは、システム パーティションの完全バックアップのみです。増分または差分バックアップのスケジュールを設定することはできません。また、Windows Vista の BitLocker ドライブ暗号化によって保護されたドライブのバックアップはサポートされていません。



すでに説明したとおり、バックアップに最適な場所が Acronis True Image Home によって提示されます。

別の保存場所を指定する場合は、**[アーカイブの場所]** の行の下にある、デフォルトのパスのリンクをクリックして、保存場所を選択します。

[実行] をクリックすると、バックアップ タスクが開始されます。ただし、バックアップが開始される前に、スケジュールされている以降のバックアップの実行に使用するユーザーのログイン情報の入力が必要です。



[キャンセル] をクリックすると、ワンクリック バックアップがキャンセルされます。後でこの機能を使用する場合は、サイドバーの [ツールとユーティリティ] を選択して、右ペインの [ワンクリック バックアップ] を選択します。

アーカイブの保存場所が USB フラッシュ ドライブの場合は、そのデバイスが接続されたときに自動的にバックアップが開始されますが、この動作が行われるのは、その前にスケジュールされた日時のバックアップの実行に失敗した場合だけです。USB フラッシュ ドライブは、それ以前のすべてのバックアップに使用されたものと同じでなければなりません。別のフラッシュ ドライブを接続しても、バックアップ処理は開始されません。

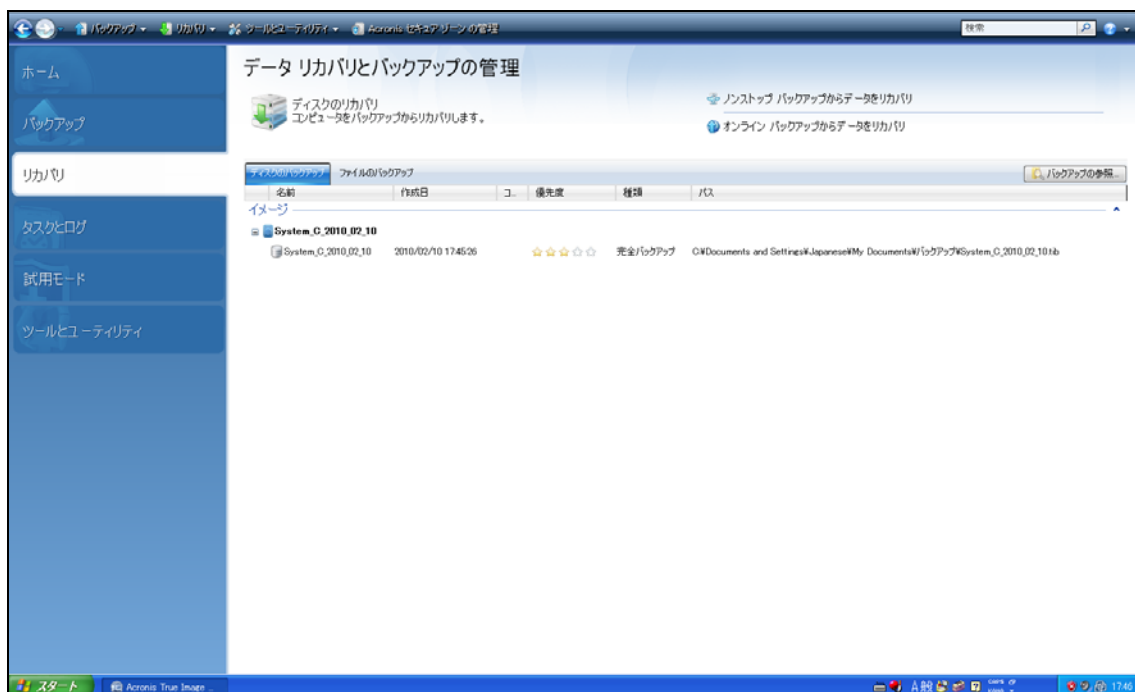
システムでは常に最新のバックアップ アーカイブが保持されます。現在のバックアップのタスクが終了すると、古いバックアップが削除され、解放された領域は次のワンクリック バックアップに使用されます。

コンピュータに十分な空き領域がない場合は、システムをバックアップできないことを通知するメッセージが表示されるので、バックアップの保存先をユーザーが指定する必要があります。

5.3 メイン画面

Acronis True Image Home の操作で使用する他のいくつかの画面について説明します。

もう 1 つの重要な画面に進むには、サイドバーで [リカバリする] をクリックします。



この [データ リカバリとバックアップの管理] 画面にはバックアップ アーカイブの詳細が表示され、アーカイブの処理を迅速に行うことができます。アーカイブを右クリックして必要な処理を選択すると、バックアップ アーカイブのリカバリ、検証、移動、削除、統合、更新、および参照や、イメージ バックアップのマウントと変換を行うことができます。これにより、該当するウィザードが起動するか、適切な動作が行われます。

さらに、この画面では、適切なリンクをクリックしてノンストップ バックアップおよびオンライン バックアップ ストレージからデータをリカバリすることもできます。

また、バックアップのコメントの編集、バックアップに関する詳細情報の確認、およびバックアップへの優先度の割り当てを行うこともできます。たとえば、重要なバックアップは優先度を高くします。バックアップの優先度は、**[優先度]** の項目にある「星」の数によって示されます（星の数が多いほど優先度が高いことを示します）。デフォルトの優先度の場合は星の数が 3 つですが、項目の星をクリックして優先度を変更することができます。優先度を設定しておくこと、たとえば後でアーカイブに保存されているバックアップを統合する必要が生じた場合などに役立ちます。優先度を設定しておくことで、統合後に残すバックアップを容易に選択することができます。手動でのバックアップ統合の詳細については、「バックアップの統合『158 ページ参照』」を参照してください。また、優先度を設定しておくこと、バックアップ アーカイブにある多くのファイルを調べて、重要なデータを削除しないように注意しながら、削除可能な古いバックアップを探す必要がなくなるため、大幅に時間を節約できます。

さらに、この画面にはバックアップ アーカイブとその内容の検索結果が表示されます。検索を実行するには、Acronis True Image Home ウィンドウの右上にある **[検索]** フィールドに検索文字列を入力し、虫眼鏡のアイコンをクリックします。詳細については、「検索『141 ページ参照』」を参照してください。

もう 1 つ有用な画面は、プログラムの処理のログおよびスケジュールされたタスクを表示する画面です。カレンダーを利用して、ログ（過去の日付）あるいはタスク（将来の日付）に迅速にアクセスできます。アクセスするには、目的の日付をクリックしてください。詳細については、「タスクとログの表示『154 ページ参照』」を参照してください。

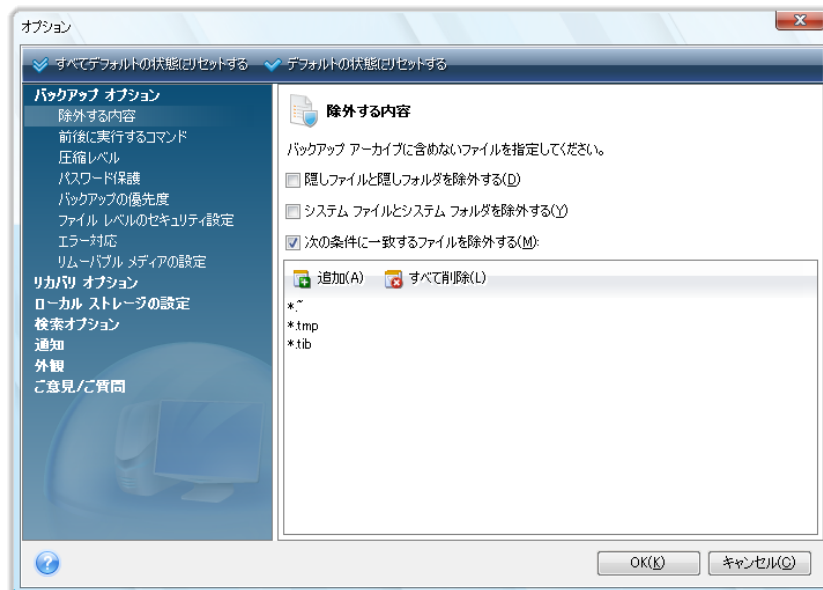


他の画面については、ここでは説明しません。画面の多くは直感的に操作できるようになっており、一部の画面については、このガイドの該当する章に説明があるからです。さらに、対応するボタンをクリックすると、コンテキスト ヘルプをいつでも表示できます。

また、メイン プログラム メニューを使用してほとんどの機能を選択できます。このメニューはツールバーでいつでも使用できます。

5.4 オプション画面

Acronis True Image Home には、外観およびプログラムのさまざまな機能に関するオプションがあります。デフォルトのオプションを表示または編集するには、メイン プログラム メニューで [ツールとユーティリティ] > [オプション] を選択します。



[バックアップ オプション] の項目では、すべてのバックアップ タスクにおいてデフォルトで使用する設定を指定できます。この設定はバックアップ要件に応じて変更できます。バックアップ オプションおよび設定の詳細については、「バックアップの微調整『 72 ページ参照 』」をご参照ください。また、特定のバックアップ タスクを構成する際にもバックアップ オプションを変更できます。この場合は、オプションの変更はそのタスクにのみ適用されます。

同様に、**[リカバリ オプション]** の項目では、すべてのリカバリ タスクにおいてデフォルトで使用する設定を指定できます。リカバリのオプションおよび設定の詳細については、「デフォルトのリカバリオプションの設定『 97 ページ参照 』」を参照してください。バックアップ オプションと同様に、特定のリカバリ タスクについてリカバリ オプションを変更できます。

たとえば **[ローカル ストレージの設定]** 項目では、バックアップの処理に関する他の設定を指定できます。これらの設定はバックアップ処理速度に対し、ある程度顕著な影響を及ぼす場合があります。詳細については、「バックアップの微調整『 72 ページ参照 』」を参照してください。

[通知] オプションでは、バックアップ/リカバリ処理完了時における電子メールまたは Messenger (WinPopup) サービスによる通知の送信を有効化できます。デフォルトでは、すべての通知は無効になっています。詳細については「処理結果の通知『 152 ページ参照 』」を参照してください。

[外観] オプションでは、画面やダイアログなどで使用するフォントを選択してプログラムのユーザーインターフェイスの外観を変更できます。メニュー項目で使用するフォントも変更できます。実際のフォントの見た目を確認するには、[...] ボタンをクリックしてフォントを選択します。サンプルのテキストが表示されます。フォントの使用する場合は **[OK]** をクリックします。使用しない場合は他のフォントを確認するか、または **[キャンセル]** をクリックします。また、**[外観]** オプションではコンピュータ上で作成されたタスクすべてにフィルタを適用できます。デフォルトではユーザー自身のタスクのみが表示されますが、オプションで他のユーザーが作成したタスクを表示または管理することも

できます。これを行うには、**【フィルタ】** を選択して **【現在のユーザーが作成したタスクのみを表示する】** チェックボックスをオフにします。

Acronis True Image Home インストール中に Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラムへの参加を選択した場合、または **【プログラムに参加する】** ラジオ ボタンを選択した場合は、**【ご意見/ご質問】** オプションでこのプログラムをやめることができます。カスタマ エクスペリエンス プログラムの詳細については **【詳細】** のリンクをクリックしてください。

デフォルトのオプションを変更しても希望する設定にならない場合、または Acronis True Image Home のインストール時に設定されたデフォルトのオプション値を復元する場合は、ツールバーで **【すべてデフォルトに戻す】** をクリックします。一部のオプションのみをデフォルト値に設定する場合は、ツールバーで **【この値をデフォルトに戻す】** をクリックします。

6 バックアップ アーカイブの作成

6.1 最初のバックアップの準備

まず最初に、バックアップの保存場所を決定します。Acronis True Image Home では、さまざまなストレージ デバイスを使用できます。詳細については「サポートされるストレージ メディア」を参照してください。現在はハードディスクが安価になっているため、ほとんどの場合、外付けハード ドライブを購入してバックアップを保存する方法が最適です。データの安全性が向上するだけでなく、データを別の場所で保管することもできます(オフィスのコンピュータのバックアップを自宅に保管、またはその逆)。また、多くのモデルはホットプラグ対応のため、必要なときに取り付けと取り外しができます。コンピュータの設定ポートと必要なデータ転送速度に応じて、USB2.0、FireWire、eSATA など、さまざまなインターフェイスを選択できます。多くの場合は、USB 2.0 の外付けハードディスクドライブが最善の選択と言えるでしょう。ただし、USB 2.0 より遅い USB 1.1 デバイスと併用した場合に、ドライブの速度が遅くなるという盲点がありますので注意してください。Gigabit Ethernet ホーム ネットワークおよび専用のファイル サーバーまたは NAS (Buffalo TeraStation 1.0 TB NAS Gigabit Ethernet ホームサーバーなど)をお持ちの場合は、内蔵ドライブへの場合と同様に、ファイル サーバーや NAS にバックアップを保存することができます。DVD-R や DVD+R などの空の光学ディスクは大変安価であるため最も低価格なデータ バックアップ方法となりますが、DVD に直接バックアップを行う場合には特に、最も速度の遅いバックアップ方法ともなります。また、複数の DVD でバックアップを行った場合は、データ リカバリの際に何度もディスクを入れ替える必要があります。

ディスクが 4 枚以上になる場合はディスクの入れ替えが頻繁になるため、DVD 以外の方法でバックアップすることを強くお勧めします。

NAS などの外付けハード ドライブを使用する場合は、選択したバックアップ ストレージを Acronis True Image Home が検知するかどうか確認する必要があります。

外付けハード ドライブの一部は FAT32 に事前フォーマットされて販売されています。この場合、FAT32 のシステムでは 4 GB までのファイル サイズ制限があるため、このバックアップ用外付けハード ドライブを FAT32 から NTFS に変換することをお勧めします。このファイル サイズ制限により、サイズの大きいバックアップ ファイルは自動的に 4 GB ごとに分割されるため、データ リカバリ時に問題が発生する可能性が高くなります。

デスクトップ PC で USB ハード ドライブを使用する場合は、短いケーブルを使用して背面のコネクタにドライブを接続すると、バックアップ/リカバリ時のデータ転送エラーの可能性が低くなり、最も信頼性の高い運用が可能になります。

6.2 バックアップするデータの決定

オペレーティング システムとアプリケーションのサイズは以前に比べて大きくなっているため(たとえば、Windows Vista x64 ではハードディスクの空き領域が 15GB 必要)、オペレーティング システムとアプリケーションを元の CD や DVD から新しいハードディスクに再インストールするには、数時間が必要になります。さらに、インターネットからアプリケーションをダウンロードして購入する方法が一般的になってきています。ソフトウェアの販売業者から電子メールで送信されるアクティベーション キーやプロダクト キーなどの登録情報を紛失した場合、そのアプリケーションを使用す

る権利を復元する際に、問題が生じる可能性があります。このため、システム ディスク全体のバックアップを作成すること(ディスク イメージの作成)は、障害や災害が発生した場合に費やされる貴重な時間を節約するだけでなく、その他の起こりうる問題に対する予防策となります。

システム ディスク全体のバックアップには、より多くのディスク領域が必要となりますが、システムのクラッシュやハードウェアの障害や災害が発生した場合に、短時間でシステムをリカバリすることができます。さらに、イメージの作成処理はファイルのコピーに比べて非常に高速であるため、大量のデータをバックアップする場合は、バックアップ処理時間を大幅に短縮することができます(詳細については「ファイル アーカイブとディスク/パーティション イメージの違い」『19 ページ参照』を参照してください)。

ハードディスク全体のコピー作成には長時間を要すると考えられがちですが、Acronis True Image Home で用いられている独自の技術により、非常に迅速にイメージを作成することが可能です。また、増分バックアップや差分バックアップが可能のため、初回のバックアップ後は、現在のハードディスクの状態を反映するためにイメージを更新するには、新しいファイルまたは変更されたファイルのみをコピーするだけで済み、それほど長い時間はかかりません。オペレーティング システムまたはデータをリカバリする必要がある場合、イメージを使用することで大幅に時間を節約できるため、バックアップ戦略に組み込むことをお勧めします。

プライマリ ディスクの他に、通常使用するその他のパーティションのイメージも作成しておく必要があります。ドライブに複数のパーティションがある場合、ハードディスク ドライブに障害や災害が発生した場合はほとんど、そのドライブに含まれるすべてのパーティションにも障害や災害が発生するため、それらのパーティションをすべてイメージに含めておくことをお勧めします。

定期的にハードディスクのイメージを作成することを強くお勧めしますが、それも信頼性の高いバックアップ戦略の一部でしかありません。

お使いのコンピュータには、数年間にわたって蓄積した銀行取引記録、家族の写真、ビデオなどがあるのではないのでしょうか。ハードウェアやソフトウェアは交換できても、個人のデータは交換できません。これらのデータは他に存在しないからです。例外はありますが、ほとんどのユーザーにとっては、イメージとファイル レベルのバックアップ作成の両方を含むバックアップ戦略を採用するのが最適です。

最初の完全バックアップが作成された後は、ファイル レベルのバックアップの実行にかかる時間は比較的短いので、データのバックアップを 1 日に 1 回(または何回も)行うことも簡単です。これは、常に、作成時から 1 日以上経過しない間に最新のバックアップが行われることを意味します。また、ファイル レベルのバックアップは、誤ってファイルを削除(または変更)してしまった場合やファイルの破損に対する保護対策となるため、優れたバックアップ戦略には不可欠です。しかし、主に次の 2 つの理由から、ファイル レベルのバックアップのみでは不十分です。

1) 起動ドライブが完全に故障した場合、それを交換するまでは、何も作業ができなくなってしまう。2) オペレーティング システムとアプリケーションを元の CD や DVD から再インストールするには時間と手間がかかりますが、ハードディスクのイメージを作成しておけば、この問題を避けることができます。

6.3 代表的なバックアップ シナリオ

以下では、「典型的な」バックアップ シナリオをいくつか示して、よく使用されるバックアップ タスクについて説明します。バックアップ戦略に応じて、これらのバックアップが役に立つことがあります。

6.3.1 システム パーティションのバックアップ

システム パーティションをバックアップすることが推奨されるのは、C: ディスクのパーティションが 1 つだけのときですが、この場合は、パーティションのバックアップはシステム ディスクのバックアップと同じこととなります。システム パーティションをバックアップすることに意味がある別の例としては、システム パーティションにすべてのアプリケーションおよび重要なデータが格納されている場合や、システム ディスク全体をバックアップするのに十分な空き領域がない場合が挙げられます。システム パーティションのバックアップが最も役に立つのは、オペレーティング システムがウイルスやマルウェアによって損傷したときに、または Windows Update のインストール後などに、オペレーティング システムをリカバリしたい場合です。新しいハードディスク ドライブにリカバリすることも可能ですが、このことは、新しいハードディスクに複数のパーティションを作成しようとするとはできない可能性があります。新しいハードディスク ドライブにリカバリするときは、システム ディスク全体をバックアップすることをお勧めします。特に、リカバリや診断が目的でコンピュータの製造元が作成した隠しパーティションがディスクに存在する場合があります。さらに、システム ディスク バックアップのほうが、新しいディスクにリカバリするときは便利です。システム パーティションをバックアップすることが適切である別の例としては、多数のアプリケーションやゲームをテストしているときが挙げられます。ほとんどのアプリケーションは、アンインストールしても何らかの痕跡が残ります。Acronis True Image Home も例外ではありません。基本システム パーティションのバックアップを作成し、オペレーティング システムと主要アプリケーション (MS Office や Outlook など) だけを入れておくといでしょう。このようにすれば、新しいプログラムを使用した後で、そのプログラムが気に入らない場合や、何らかの不具合が発生した場合も、基本システムの状態にいつでもリカバリすることができます。

システム パーティションをバックアップする最も簡単な方法は、ワンクリック バックアップを使用することです。このツールは、Acronis True Image Home をインストール後初めて起動したときに実行することも、後で実行することもできます。このツールは、システム パーティションと MBR のみをバックアップするように作られています。バックアップ ウィザードを使用してもかまいませんが、ここではワンクリック バックアップ ツールを初回起動時以外に実行する手順を説明します。

1. 外付けドライブにシステム パーティションのバックアップを保存する場合は、Acronis True Image Home を起動する前に、ドライブを接続して電源を入れてください。

メイン プログラム メニューの **[ツールとユーティリティ]** → **[ワンクリック バックアップ]** を選択します。Acronis True Image Home によって選択されたバックアップ保存先が表示されます (Acronis セキュア ゾーンがない場合は、接続されている外付けハードディスクが保存先となります)。別のバックアップ保存先を指定するには、**[アーカイブの場所]** の行の下のリンクをクリックして、保存場所を選択します。

1. デフォルトでは、以降のシステム パーティションの完全バックアップを 7 日ごとに作成するようにスケジュールが設定されますが、バックアップの間隔を変更することや、スケジュール設定をキャンセルすることもできます。
2. 設定が完了したら、**[保護]** をクリックするとバックアップ タスクが開始されます。

作成されたバックアップをベリファイすることをお勧めします。ベリファイ タスクは手動で実行することも、スケジュールに従って実行することもできます。

Acronis ワンクリック バックアップ ツールで実行されるのは、システム パーティションの完全バックアップのみです。増分または差分バックアップのスケジュールを設定することはできません。

ワンクリック バックアップ ツールによるバックアップ保存先選択のアルゴリズムは、次のとおりです。

- 1) 初めに、ワンクリック バックアップ ツールの動作に必要な領域の大きさが計算されます。
- 2) Acronis True Image Home の以前のバージョンからアップグレードしたために、既に Acronis セキュア ゾーンが存在する場合は、そのサイズが検査され、サイズがバックアップの実行に十分であれば Acronis セキュア ゾーンが使用されます。システム パーティションをバックアップする際に、Acronis セキュア ゾーンのサイズが十分でない場合、プログラムにより次に有効なオプションが選択されます。
- 3) 外付けのハード ドライブに十分な空き領域がある場合は、システム パーティションのバックアップはそのドライブに保存されます。外付けのドライブは、コンピュータの保護を強化するうえで有利であるからです。
- 4) 前述の 2 つの場所がどちらも使用できないけれども、内蔵ハード ドライブが 2 つ以上ある場合は、システムに使用されていないハード ドライブのパーティションのうち、空き領域が最大であるものがバックアップに使用されます。
- 5) コンピュータのハード ドライブが 1 つだけで、複数のパーティションがある場合は(隠しパーティションは含まない)、システムに使用されていないパーティションのうち、空き領域が最大であるものが使用されます。
- 6) 最後に、コンピュータのハード ドライブが 1 つだけで、パーティションも 1 つだけ(隠しパーティションは含まない)であり、その空き領域の大きさが十分ならば、Acronis セキュア ゾーンを作成してバックアップに使用することを提案するメッセージが表示されます。ユーザーが同意すると、ゾーンが作成されてバックアップの保存に使用されます。

Acronis ワンクリック バックアップを初めて実行するときにショートカットをダブルクリックして起動した場合は、Acronis セキュア ゾーンの作成を提案するメッセージは表示されません。

6.3.2 システム ディスク全体のバックアップ

バックアップ ストレージデバイスに十分な空き領域がある場合は、システム ディスク全体をバックアップすることをお勧めします。このようなバックアップを作成しておくことで、システムとアプリケーションの両方をリカバリできるので、これらを同じハードディスク ドライブ上にリカバリする必要が生じたときや、ハードディスク ドライブが故障したために別のドライブ上にリカバリするときに利用できます。システム ディスクに複数のパーティションがある場合も、ディスク全体のバックアップから個々のパーティションをリカバリすることができます。

システム ディスクのバックアップは、障害発生時のリカバリにおいて最も重要であるため、システム ディスクと、バックアップ ストレージとして使用するハードディスクの両方のエラー チェックを実行することをお勧めします。エラーの有無を調べるには、Microsoft Windows 付属の Chkdsk ユーティリティを使用します。このユーティリティを利用するとエラーを修復でき、不良セクタを見つけることもできます。

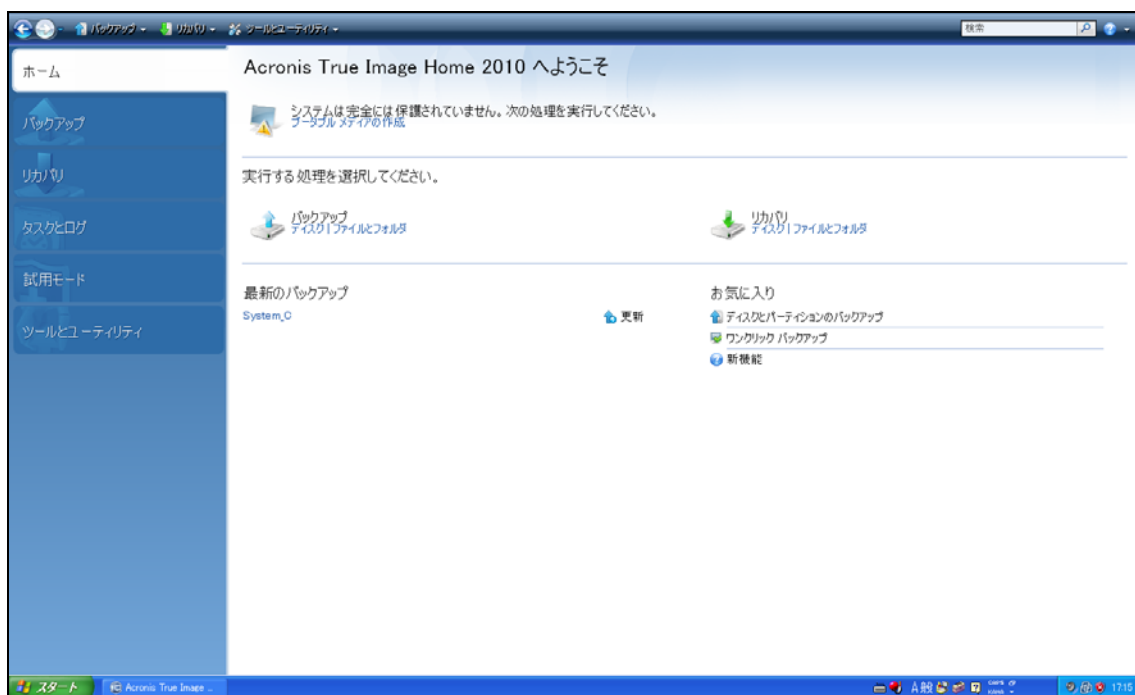
システム ディスクのバックアップは、Windows 動作中に実行することも、リカバリ環境で実行することもできます。Windows 動作中にシステム ディスクのバックアップを作成する場合は、開始前に MS Outlook や DBMS プログラムなどのアプリケーションを終了することをお勧めします。

Acronis True Image Home では、システム パーティションをロックして、その間に「スナップショット」を作成するという方法が採用されていますが(「Acronis True Image Home の基本概念」『10 ページ参照』を参照)、Windows が動作していないときにシステム ディスクのバックアップを実行することもできます。

ブータブル レスキュー メディアからコンピュータを起動する場合の手順を次に示します。ここでは、起動後のリカバリ環境のハードディスク ドライブとその他のストレージ デバイスがすべて、Acronis True Image Home から認識可能であるものとします。「ブータブル レスキュー メディアのテスト」『 31 ページ参照』を参照してください。

バックアップの保存場所として外付けドライブを使用する場合は、そのドライブが接続されて電源がオンになっていることを確認してください。これは、Acronis True Image Home レスキュー メディアから起動する前に行います。

1. BIOS でブート順序を設定して、ブータブル メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え」『 191 ページ参照』を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して、[Acronis True Image Home (完全版)] を選択します。
3. [ようこそ] 画面の [バックアップ] の下にある [ディスク] リンクをクリックします。



4. システム ディスクをバックアップ元として選択します。該当するディスクのチェックボックスをオンにしてください(このディスクのすべてのパーティションが、隠しパーティションも含めて選択されます)。
5. このバックアップを保存するターゲット アーカイブを選択します。新しいバックアップを既存のアーカイブに追加することも、新しいアーカイブを作成することもできます。バックアップ ロケーションを選択し、作成するバックアップの名前を指定します。わかりやすいように、たとえば Disk1_full.tib のような名前を付けることをお勧めします。
6. バックアップ中に実行される処理の概要をよく読み、バックアップ タスクの設定に問題がなければ [実行] をクリックします。設定を変更する場合は、[概要] 画面の [オプション] をクリックします。
7. バックアップ方法を選択します。バックアップの種類の詳細な説明については、「完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ」『 19 ページ参照』を参照してください。リカバリ環境でバックアップを実行するときは、完全バックアップを作成するのが一般的ですが、必要に応じて別の方法を選択することもできます。

8. バックアップのオプションを設定します。リカバリ環境でバックアップを実行するときは、バックアップ タスクごとに手動でオプションを設定する必要があります。データ保護のためにバックアップを暗号化するかどうか、および圧縮レベルを選択できます(レベルを選択すると、バックアップ サイズの見積りが表示されます)。バックアップの作成直後にベリファイすることを選択できますが([その他の設定] で指定)、ベリファイは後で実行することもできます。いつ実行するかにかかわらず、システム ディスク バックアップのベリファイはリカバリ環境で実行することをお勧めします。将来システム パーティションまたはディスクをリカバリするときは、リカバリ環境を使用するからです。
9. 必要に応じて、バックアップのコメントを入力します。また、後でコメントを追加することもできます。
10. **[実行]** をクリックすると、バックアップが開始します。

システム ディスクのバックアップからのリカバリを行う前にベリファイを実行することは、きわめて重要です。Acronis True Image Home による実際のリカバリが開始する前に、ディスク上の元のパーティションが削除されるためですが、バックアップ ファイルに問題があることがリカバリ中に判明したとしても、なすすべはありません。さらに、予備のハードディスクがある場合は、システム ディスクをそのディスクにリカバリできるかどうかを試してみるとよいでしょう。

6.3.3 データ パーティションまたはディスクのバックアップ

個人データ(MS Office ドキュメント、会計文書、写真、音楽、ビデオなど)は、オペレーティング システムと同様に保護が必要です。このようなデータは、オペレーティング システムやアプリケーションとは別に専用のパーティションまたはディスクに保存することが適切です。これにより、データ パーティションやディスク イメージのバックアップばかりでなくリカバリも迅速に行うことができます。データ ディスク バックアップを Windows で実行することをお勧めします。ほとんどの場合、ストレージ デバイスの Windows ドライバはリカバリ環境で使用される各 Linux ドライバよりも動作が適切で高速であるためです。また、データ ディスクおよびパーティションのリカバリは Windows で通常行われます。データ ディスク バックアップ タスクを Windows で作成しましょう。

バックアップの保存先として使用する外付けドライブを接続して、ドライブの電源がオンになっていることを確認します。これは、Acronis True Image Home を起動する前に完了しておく必要があります。

1. [ようこそ] 画面の **[バックアップ]** の下にある **[ディスク]** リンクをクリックします。
2. **[バックアップの対象]** 画面でデータ パーティションまたはディスクのチェックボックスをオンにします。
3. 構成しているバックアップ タスクのターゲット アーカイブを選択します。新しいバックアップを既存のアーカイブに追加するか、新しいアーカイブを作成できます。バックアップ ローケーションを選択し、作成するバックアップの名前を指定します。Data_disk.tib など、わかりやすい名前を使用することをお勧めします。同じ場所(外付けドライブなど)に別のバックアップ アーカイブを保存するときは、新しいバックアップ アーカイブを作成する際に新しいフォルダを作成できます。これを実行するには、ツールバーの **[新しいフォルダの作成]** をクリックし、フォルダにわかりやすい名前を付けます。
4. バックアップ中に実行される操作の概要をよく読み、バックアップ タスクの設定を変更しない場合は **[実行]** をクリックし、そうでない場合は [概要] 画面の **[オプション]** をクリックして設定を変更します。
5. オプションの最初のステップでは、バックアップ タスクのスケジュールを設定します。バックアップ方法および自動統合ルールと一緒にスケジュールを設定することで、必要なバックアップ戦略

を実装できます。詳細については、「バックアップ スケジュール設定シナリオの例」『114 ページ参照』を参照してください。

6. バックアップ方法を選択します。方法の詳細については、「完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ」『19 ページ参照』を参照してください。繰り返しになりますが、バックアップの方法は必要なバックアップ戦略に応じて異なります。
7. 次のステップでは、特定のファイルやフォルダをバックアップから除外できます。たとえば、DVD の動画をデータ ディスクに移動した場合を考えてみましょう。動画は大量のストレージを使用しますし、その DVD を実際に保有しているため、バックアップは無意味であると考えられます。
8. 作成するバックアップ タスクのオプションを設定します。たとえば、データ ディスクに機密情報が含まれていて、この情報を暗号化する場合があります。また、作成後すぐにバックアップ権限を検証することもできますが（[その他の設定] で実行）、後で実行することもできます。
9. 選択した自動バックアップ アーカイブ管理戦略で必要な場合は、自動統合規則を設定できます。詳細については、「自動統合の設定」『70 ページ参照』を参照してください。
10. 必要に応じて、バックアップにコメントを追加します。また、後でコメントを追加することもできます。
11. バックアップ タスクの設定を確認したら、**[実行]** をクリックします。

検証をバックアップ タスクの設定に含めなかった場合は、後で手動またはスケジュール設定した検証タスクを実行してバックアップを検証することを強く推奨します。バックアップを検証する習慣をつけてください。

6.3.4 ファイル/フォルダのバックアップ

データ ディスクまたはパーティションのイメージ バックアップには、すべてのファイルとフォルダが含まれていますが、パーティション全体のバックアップは、場合によっては非効率です。たとえば、ある緊急プロジェクトのメンバーである人が、関連するファイルだけに変更を加えたとします。プロジェクトのファイルが存在するデータ パーティション全体をバックアップするには時間がかかり、必要なディスク領域も大きくなるので、プロジェクトのファイルだけをバックアップするほうが効率的です。このような場合に、Acronis True Image Home では「データ」というバックアップの種類を選択できるようになっています。

バックアップの保存先として使用する外付けドライブを接続して、ドライブの電源がオンになっていることを確認します。これは、Acronis True Image Home を起動する前に完了しておく必要があります。

1. Acronis True Image Home を起動し、[ようこそ] 画面の **[バックアップ]** の下にある **[ファイルとフォルダ]** リンクをクリックします。
2. **[バックアップの対象]** 画面で、プロジェクトのファイルのフォルダ（たとえば Myproject）のチェックボックスをオンにします。 **[バックアップするファイル]** ペインの右側には、選択されたすべてのファイルおよびサブフォルダの内容が表示されます。バックアップ不要のファイルがある場合は、ここでそのファイルの選択を解除します。
3. このバックアップ タスクのターゲット アーカイブを選択します。ここでは、新しいアーカイブを作成します。バックアップ アーカイブの場所を選択し、作成されるバックアップの名前を指定します。わかりやすいように、たとえば Project.tib のような名前を付けることをお勧めします。同じ場所（外付けドライブなど）に別のバックアップ アーカイブを保存するときは、新しいバックアップ アーカイブを作成する際に新しいフォルダを作成できます。作成するには、ツールバーの **[新しいフォルダの作成]** をクリックし、わかりやすいフォルダ名を指定します。

4. プロジェクトの終了までにはまだ何日かあるので、プロジェクト ファイルのバックアップは少なくとも 1 日に 1 回、スケジュールを設定して行うのが妥当です。[概要] ステップの [オプション] をクリックすると、スケジュールを作成できます。
5. [日単位] スケジュール設定オプションを選択します。安全のために、作業の成果をバックアップする頻度を上げるには、[次の間隔でタスクを実行する: x 時間(午前 0 時まで)] ボックスをオンにして、間隔を時間単位で指定します。ファイルはバックアップ実行中も開いたままにしておくことができますが、データベースの操作を行っているときは閉じることをお勧めします。
6. バックアップ方法を選択します。プロジェクト ファイルのバージョンを複数保存したい場合は、[増分] を選択します。この方法を選択すると、最初は完全バックアップが作成され、それ以降プロジェクトの終了までは、完全バックアップを補う増分バックアップが作成されます。プロジェクトが終了した後は、このタスクを削除することも、将来再び実行できるように無効にしておくこともできます。
7. 次のステップでは、作成されるバックアップ一時ファイルから特定のファイル(たとえば Microsoft Word で作成されたファイル)を除外するための条件を指定することができます。
8. プロジェクト ファイルに機密情報が含まれている場合は、パスワードと暗号化を使用してバックアップを保護することをバックアップ オプションの画面で指定できます。さらに、バックアップ作成直後にベリファイするかどうかを設定できます。バックアップを頻繁に行う場合は、この機能を利用すれば、ベリファイし忘れる心配はなくなります。
9. 次のステップでは、バックアップ アーカイブの自動統合を設定します。たとえば、バックアップを作成してからの日数がここで指定した日数(デフォルトは 30 日)を超えたときに統合することができます。
10. 必要に応じて、バックアップのコメントを入力します。また、後でコメントを追加することもできます。
11. バックアップ タスクの設定に問題がないことを確認したら、[実行] をクリックします。

6.3.5 ネットワーク共有へのバックアップ

Acronis True Image Home では、データをネットワーク共有にバックアップすることができます。この機能は、たとえば家庭内ネットワークに複数の PC があり、そのデータをファイル サーバーにバックアップしたいときに利用できます。各ユーザーのバックアップ方針に応じて、ファイルとフォルダだけをバックアップすることも、ディスク全体をバックアップすることもできます。もう 1 つの考慮すべき事項は、使用しているネットワークのデータ転送速度です。たとえば、ギガビット イーサネットネットワークならば、帯域幅は十分に大きいので、バックアップ対象のデータをすべて転送することができます。しかし、Wi-Fi 接続を使用する場合は、バックアップ対象のデータが数百ギガバイトに及ぶようなときに、かなりの時間がかかることがあります。

ファイルとフォルダ、またはデータ パーティションのバックアップとリカバリは、Windows の動作中に実行できます。システム ディスクまたはパーティションをバックアップする場合は、バックアップに使用するネットワーク共有が Acronis True Image Home のスタンドアロン版から認識可能であることを確認してください。システムのリカバリは、リカバリ環境で実行されるからです。コンピュータをレスキュー メディアから起動した後で、バックアップ ウィザードまたはリカバリ ウィザードの画面でそのネットワーク共有を選択できることを確認してください。

ネットワーク経由でファイルのバックアップとリカバリができることを確認するために、最初に少数のファイルのバックアップとリカバリを実行してみることをお勧めします。また、ネットワーク共有が存在するドライブはマッピングしないことをお勧めします。UNC パスを指定するほうが、ほとんどの場合はネットワーク接続の確立が容易です。

たとえば、システム パーティションをバックアップするとします。

1. Acronis True Image Home を起動し、[ようこそ] 画面の **[バックアップ]** の下にある **[ディスク]** リンクをクリックします。
2. **[ソースの選択]** 画面に表示されているシステム パーティションのチェックボックスをオンにします。
3. ネットワーク上のコンピュータに接続してネットワーク共有にアクセスするには、ほとんどの場合、ネットワーク認証情報(ユーザー名とパスワード)の入力が必要です。認証情報を入力するには、**[NT 認証を使用する]** チェックボックスをオンにして、ユーザー名とパスワードを該当のフィールドに入力します。**[認証と接続をテストする]** ボタンをクリックすると、選択したネットワーク共有にこのコンピュータから接続できるかどうかをテストできます。テストの結果、エラーメッセージが表示された場合は、ネットワーク共有に対する認証情報を正しく入力したかどうかを確認し、正しくない場合は入力しなおします。**[NT 認証を使用する]** チェックボックスがオフの場合は、Windows へのログオンに使用された認証情報がネットワーク共有へのログオンに使用されません。情報の入力が完了したら、**[OK]** をクリックして次に進みます。構成しているバックアップ タスクのターゲット アーカイブを選択します。新しいバックアップを既存のアーカイブに追加するか、新しいアーカイブを作成できます。わかりやすいように、たとえば Disk_C.tib のような名前を付けることをお勧めします。
4. バックアップ中に実行される処理の概要をよく読み、バックアップ タスクの設定に問題がなければ **[実行]** をクリックします。設定を変更する場合は、[概要] 画面の **[オプション]** をクリックします。
5. オプションの最初のステップでは、バックアップ タスクのスケジュールを設定します。バックアップ方法および自動統合ルールと一緒にスケジュールを設定することで、必要なバックアップ戦略を実装できます。詳細については、「バックアップ スケジュール設定のシナリオ例『 114 ページ参照』」を参照してください。
6. バックアップ方法を選択します。バックアップの種類の詳細な説明については、「完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ」『 19 ページ参照』を参照してください。繰り返しになりますが、バックアップの方法は必要なバックアップ戦略に応じて異なります。
7. 次の手順で、特定のファイルやフォルダをバックアップから除外することができます(たとえば、一時的なファイルやフォルダを除外する)。
8. 作成するバックアップ タスクのオプションを設定します。バックアップの作成直後にベリファイすることを選択できますが、ベリファイは後で実行することもできます。
9. 選択した自動バックアップ アーカイブ管理戦略が必要な場合は、自動統合規則を設定できます。詳細については、「自動統合の設定」『 70 ページ参照』を参照してください。
10. 必要に応じて、バックアップのコメントを入力します。また、後でコメントを追加することもできます。
11. バックアップ タスクの設定に問題がないことを確認したら、**[実行]** をクリックします。

7 Acronis ノンストップ バックアップ

7.1 Acronis ノンストップ バックアップとは

Acronis ノンストップ バックアップとは Acronis True Image Home の新しい機能であり、ディスクとファイルの保護を提供し、ディスク全体、個別ファイル、および各バージョンを障害時にリカバリできるようにします。Acronis ノンストップ バックアップはシステムのパーティションをデフォルトで保護しますが、他のパーティションやディスクを選択して保護することもできます。Acronis True Image Home によって、バックアップ データを保存するのに最適な場所と思われるディスク(またはパーティション)が提示されます。ストレージの選択アルゴリズムはワンクリック バックアップ機能が使用するものと似ていますが、Acronis セキュア ゾーン は Acronis ノンストップ バックアップのストレージとしては使用できません。

Acronis ノンストップ バックアップを起動すると、保護対象として選択されているパーティションの初回イメージ バックアップが実行されます。このタスクの終了後、Acronis ノンストップ バックアップはシステムおよびファイル(開いているものを含む)の変更を 5 分ごとに保存します。そのため、システムは保存された時点とまったく同じ状態にリカバリ可能になります。

保護対象のパーティションの 5 分間隔のバックアップは、過去 24 時間分が保持されます。それよりも古いバックアップは日単位で統合され、過去 30 日分が保持されます。また、週単位のバックアップは、ノンストップ バックアップ ストレージの空きがある限り保持されます。

統合は、毎日深夜 0 時から午前 01:00 の間に実行されます。初回の統合は、ノンストップ バックアップの稼働開始後 24 時間以上経過してから実行されます。たとえば、9 月 12 日の午前 10:00 にノンストップ バックアップを起動したとします。この場合、初回の統合は 9 月 14 日の午前 00:00 から 01:00 の間に実行されます。その後、プログラムは毎日同じ時間にデータを統合します。午前 00:00 から 01:00 の間にコンピュータの電源が入っていない場合は、コンピュータを起動したときに統合が開始されます。ノンストップ バックアップを一時的に無効にした場合は、次に有効したときに統合を開始します。

このバックアップ頻度ではストレージはすぐにいっぱいになると思うかも知れません。しかし、Acronis True Image Home は「デルタ」と呼ばれるもののみをバックアップするため、その心配はありません。これは、変更されたファイル全体をバックアップするのではなく、新しいバージョンと古いバージョンの違いのみをバックアップすることを意味します。たとえば、Microsoft Outlook または Windows Mail を使用している場合、pst ファイルのサイズが非常に大きい場合があります。また、電子メールを受信または送信するたびにファイルの内容が変わります。変更があるたびに pst ファイル全体をバックアップするとストレージを必要以上に消費するため、Acronis は最初にバックアップしたファイルと共に、変更された部分のみをバックアップします。

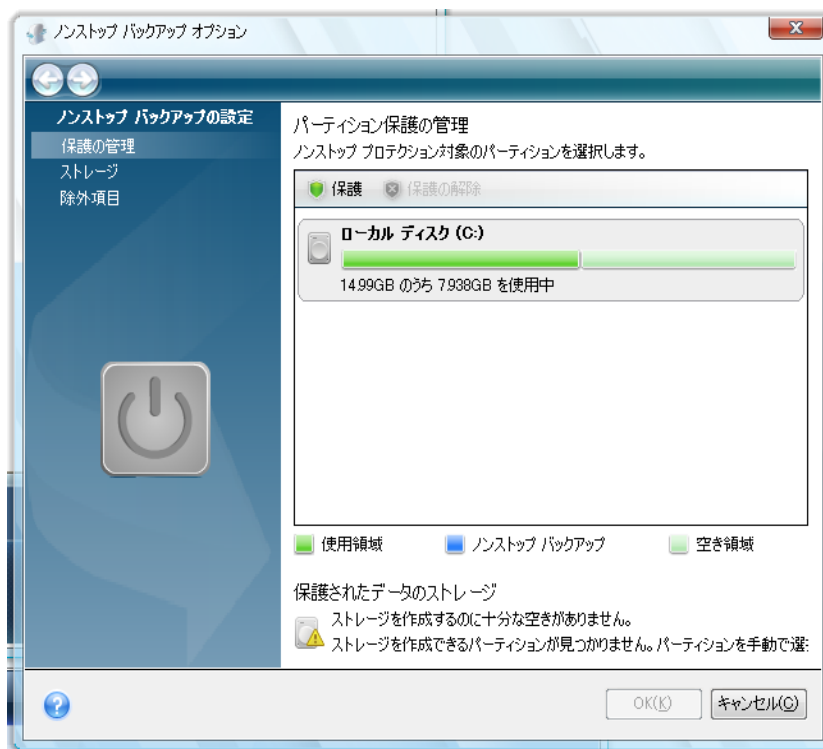
プログラムは 5 分ごとにパーティションとファイルの変更を確認し、変更が見つかった場合のみ、その時間の新しい「スライス」を作成します。このため、スライスとスライスの間の間隔は 5 分を超える場合があります。また、たとえば、1 時間ずっと「保存」の操作を行わずに Word で作業している場合は、Word ドキュメントの変更は 5 分ごとにはバックアップされません。プログラムはディスク上のファイルの変更のみを確認し、メモリ内は確認しないためです。

7.2 Acronis ノンストップ バックアップの有効化と設定

ノンストップ バックアップの設定を行い、ノンストップ バックアップを有効にするには、サイドバーで [バックアップ] → [ノンストップ バックアップ] を選択し、[Acronis ノンストップ バックアップ] 画面の [ノンストップ バックアップ] アイコンをクリックします。デフォルトでは、Acronis True Image Home でノンストップ バックアップにシステム パーティションが選択され、ノンストップ バックアップデータの保持に最適なストレージが指定されます。[ノンストップ バックアップ オプション] ウィンドウで [OK] をクリックしてデフォルトの設定を受け入れるか、必要に応じて設定を変更します。

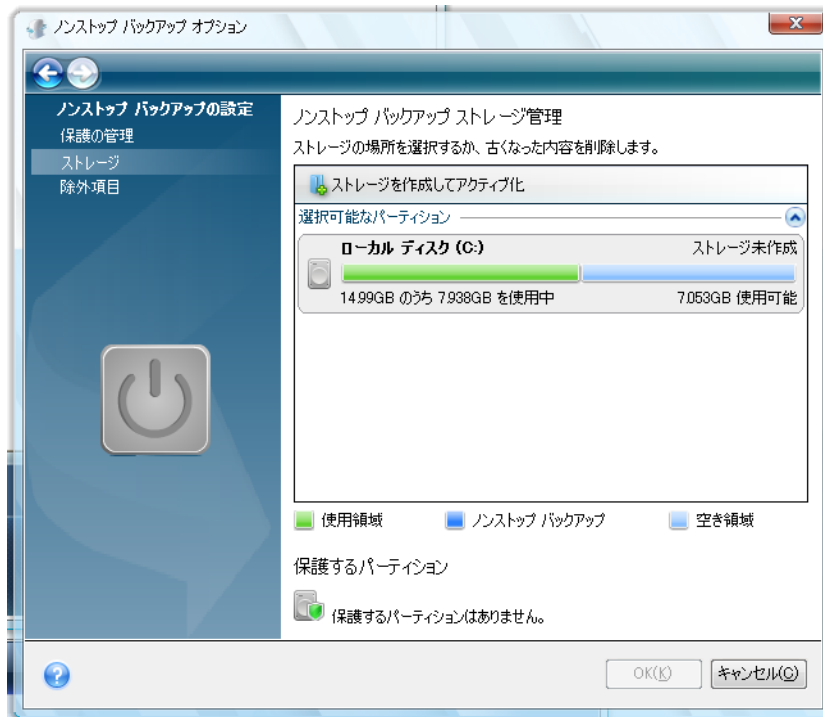
Acronis ノンストップ バックアップの設定の変更

Acronis [ノンストップ バックアップ オプション] ウィンドウでは、Acronis ノンストップ バックアップの設定を変更できます。



- **保護の管理** - ノンストップ バックアップで保護するコンピュータのパーティションを選択します。パーティションを追加するには、右側のペインでパーティションを選択し、ツールバーの [保護] をクリックします。保護されているパーティションからパーティションを削除するには、パーティションを選択してツールバーから [保護の解除] をクリックします。
- **除外項目** - Acronis ノンストップ バックアップによる保護から除外するファイルやフォルダを選択します。デフォルトでは、システム パーティションの pagefile.sys ファイルおよび hiberfil.sys ファイルに加え Windows で一時ファイルに使用されるデフォルト フォルダが除外されます。その他のファイルやフォルダについては、パスを指定するか(ツールバーの [パスの追加] をクリックしてパスを入力します)、一般的な Windows ワイルドカード文字を使用して除外のためのマスクを作成して除外できます([マスクの追加] をクリックしてマスクを指定します。たとえば、.bmp 拡張子を持つすべてのファイルを除外するには、「*.bmp」と入力します)。また、除外するファイルやフォルダを Windows エクスプローラで選択し、選択したファイルやフォルダを右クリックして表示されるショートカット メニューで [ストレージ] → [ノンストップ バックアップから除外] を選択して除外することもできます。

デフォルトのノンストップ バックアップ ストレージを変更するには、現在のストレージ ラインの右側にある【変更】リンクをクリックし、利用可能なストレージの中から新しいストレージを選択し、[ノンストップ バックアップ ストレージの選択] ウィンドウのツールバーにある【ストレージを作成してアクティブ化】をクリックします。



設定を完了し、[OK] をクリックすると、Acronis ノンストップ バックアップは新しい設定で保護を開始します。

Acronis ノンストップ バックアップは、Windows を再起動しても有効のまま維持され、コンピュータをオフにした後も維持されます。

7.3 Acronis ノンストップ バックアップの使用

Acronis ノンストップ バックアップは簡単に使用できます。ノンストップ バックアップを開始すると、ユーザーが保護対象として選択したパーティションの初期イメージが自動的に作成され、それ以降は、ノンストップ バックアップ ストレージに空き領域がなくなるまで、継続的にこれらのパーティションでの変更がバックアップされます。

すべての空き領域が使用されると、Acronis ノンストップ バックアップは最も古いデータを自動的に削除するのではなく、単に動作を停止し、Windows タスクバーの通知領域にバルーン メッセージを表示することに注意してください。この場合は、古いデータを手動で削除して領域を増やすか、またはノンストップ バックアップ ストレージ用の別の場所を選択する必要があります。

ストレージ用の新しい場所を選択すると、Acronis ノンストップ バックアップは、保護対象に選択されたパーティションの新しい初期イメージをそこに作成した後、前のストレージのときと同じように動作します。

以前のストレージにまだ空きがある間に新しいストレージを選択すると、以前のストレージを後で再び使用することができます。これは、以前のストレージが外付けハードディスク ドライブの場合に便利です。たとえば、友人の家にしばらく保管するためにストレージをしばらく切断できます。以前

のストレージを再び使用するときは、ドライブを接続し、ノンストップ バックアップのストレージ選択ウィンドウで選択して、アクティブなストレージにします。

以前のストレージをアクティブにすると、Acronis ノンストップ バックアップは、バックアップの統合に使用するアルゴリズムに従って以前のバックアップを統合した後、選択されているパーティションでの変更のバックアップを再開します。

データのリカバリが必要になったときの処理は、パーティションまたはファイル/フォルダのどちらをリカバリするかによって異なります。

パーティションのリカバリには、リカバリ ウィザードを使用します。データ パーティションをリカバリする必要がある場合は、Windows 上で行う方が簡単です。システム パーティションのリカバリは、レスキュー メディアから起動した後で行う方が簡単です。詳細については、「Acronis ノンストップ バックアップで保護されているパーティションのリカバリ」『 53 ページ参照』をご参照ください。リカバリ ウィザードを使用してファイルやフォルダをリカバリすることもできますが、多くの場合、ファイルのリカバリには Acronis Time Explorer を使用の方が便利です。詳細については、「Acronis ノンストップ バックアップで保護されているファイルのリカバリ」『 54 ページ参照』をご参照ください。

7.4 Acronis ノンストップ バックアップで保護されているパーティションのリカバリ

リカバリ ウィザードを使用して、Acronis ノンストップ バックアップ ストレージからパーティションをリカバリできます。最初に、Windows 上でデータ パーティションをリカバリする方法を示します。

1. Acronis True Image Home を起動します。
2. サイドバーで **[リカバリ]** を選択し、右側のペインで **[ディスクのバックアップ]** タブをクリックします。[ノンストップ バックアップ ストレージ] 領域で、ファイルをリカバリするバックアップ アーカイブを選択します。バックアップを右クリックしてショートカット メニューで **[リカバリする]** を選択し、リカバリ ウィザードを開始します。
3. [リカバリの方法] 画面で **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
4. 次の手順で、リカバリするパーティションが目的の状態であった時点を選択します。過去 24 時間以内に変更されたファイルの場合は時刻を選択でき、それよりも古いバックアップの場合は日付を選択できます。30 日よりも前に行われたバックアップについては、プログラムは週単位のバックアップを保持しており、バックアップ データが保持されている日付が強調表示されます。リカバリ ポイントを選択し、**[次へ]** をクリックします。
5. リカバリ ウィザードの次の手順は、「クラシック」バックアップからデータ パーティションまたはディスクをリカバリするときと似ています。詳細については、「データ パーティションまたはディスクのリカバリ」『 87 ページ参照』をご参照ください。

状況によっては、システム パーティションのリカバリは、Windows 上と (Windows が起動しないときは) レスキュー メディアから起動した後の両方で実行できます。Windows 上でのリカバリはデータ パーティションのリカバリと似ていますが、再起動が必要です。通常は、システム パーティションをリカバリするにはレスキュー メディアを使用の方が安全です。

レスキュー メディアを使用したリカバリ手順は、システム パーティションをリカバリする時点を選択できるリカバリ ポイントのステップを除き、従来のバックアップからシステム パーティションをリカバリするときの手順とほぼ同じです。詳細については、「システム パーティションのリカバリ」『 81 ページ参照』をご参照ください。

ノンストップ バックアップ ストレージとして外付けの USB ハード ドライブを使用していて、レスキュー メディアから起動した後、[ディスクのバックアップ] タブの [ノンストップ バックアップ ストレージ] 領域に外付けハード ドライブのバックアップが表示されない場合は、[バックアップの更新] ボタンをクリックして検索してください。

Acronis True Image Home のセーフ版では、ノンストップ バックアップ ストレージからのリカバリはサポートされていません。

7.5 Acronis ノンストップ バックアップで保護されているファイルのリカバリ

Acronis ノンストップ バックアップ ストレージからファイルのリカバリする場合は、リカバリ ウィザードと Acronis Time Explorer の両方を使用できます。

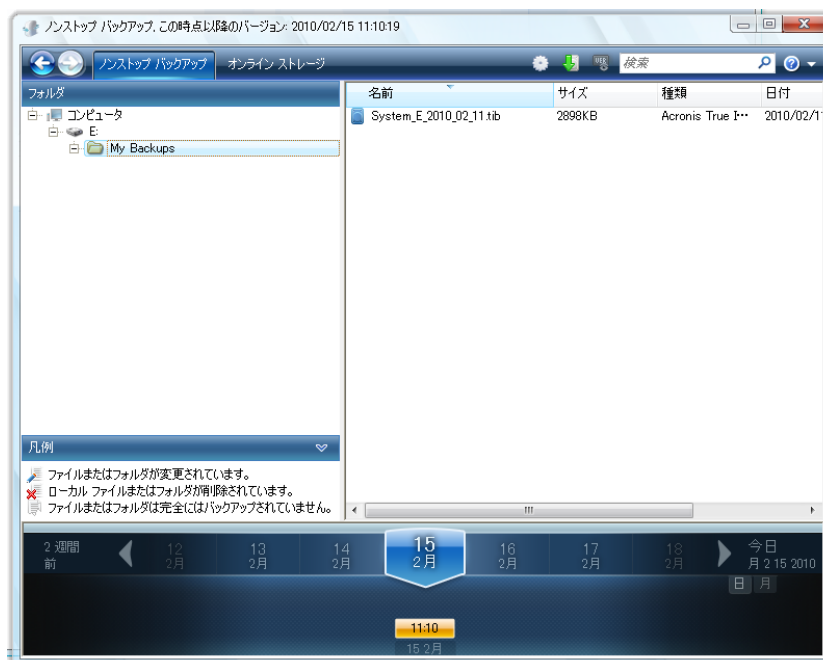
リカバリ ウィザードを使用したファイルのリカバリ

1. サイドバーで [リカバリ] を選択し、右側のペインで [ディスクのバックアップ] タブをクリックします。
2. [ノンストップ バックアップ ストレージ] 領域で、ファイルのリカバリするバックアップ アーカイブを選択します。バックアップを右クリックしてショートカット メニューで [リカバリする] を選択し、リカバリ ウィザードを開始します。
3. [リカバリの方法] 画面で [指定したファイルおよびフォルダをリカバリする] を選択します。
4. 次の手順で、リカバリするファイルとフォルダが目的の状態であった時点を選択します。過去 24 時間以内に変更されたファイルの場合は時刻を選択でき、それよりも古いバックアップの場合は日付を選択できます。30 日よりも前に行われたバックアップについては、プログラムは週単位のバックアップを保持しており、バックアップ データが保持されている日付が強調表示されます。リカバリ ポイントを選択し、[次へ] をクリックします。
5. リカバリ ウィザードの次の手順は、「クラシック」バックアップからファイルおよびフォルダをリカバリするときと似ています。詳細については、「イメージ アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ『 89 ページ参照』」をご参照ください。

Acronis Time Explorer を使用したファイルのリカバリ

Time Explorer を使用すると、少数のファイルだけのリカバリをいっそう柔軟に行うことができます。Time Explorer では、ストレージに保持されているファイルのバージョン番号を表示し、特定のバージョンを選択して関連付けられているアプリケーションでそのバージョンを開き、必要なデータが含まれていることを確認してから、そのバージョンだけをリカバリできます。

1. サイドバーで **[リカバリする]** を選択し、右側のペインで **[ノンストップ バックアップからデータをリカバリする]** をクリックして Acronis Time Explorer を開きます。



2. パーティションを選択してから、左側のペインのディレクトリ ツリーで、リカバリするファイルが含まれるフォルダを選択します。右側のペインに、そのフォルダ内のファイルが一覧表示されます。リカバリするファイルを選択します。複数のファイルを選択するときは、Windows エクスプローラの場合と同じように **Ctrl** キーと **Shift** キーを使用できます。選択が終了したら、選択したファイルを右クリックし、ショートカット メニューから **[リカバリ]** を選択します。
3. Acronis True Image Home の **[フォルダの参照]** ダイアログが開きます。デフォルトで、ファイルがバックアップされた元の場所が選択されています。必要に応じて、別のフォルダを選択したり、**[新しいフォルダの作成]** ボタンをクリックしてファイルのリカバリ先のフォルダを新しく作成することができます。フォルダを選択した後、**[OK]** をクリックしてリカバリを続行します。

ファイルを元のフォルダにリカバリする場合、同じ名前のファイルが検出されると、ファイルの処理を選択するためのダイアログ ウィンドウが表示されます。ディスク上のファイルの **[リカバリと置き換え]**、**[リカバリしない]** (ディスク上のファイルを残す)、**[リカバリするがファイルを両方とも残す]** (リカバリされたファイルの名前は変更されます) のいずれかを選択できます。同じ名前のファイルが存在するすべてのファイルに対して同じ処理を行う場合は、**[すべてのファイルに適用]** チェックボックスをオンにします。

リカバリの時点でオペレーティング システムによって使用またはロックされているディスク上のファイルに対して、**[リカバリと置き換え]** を行うことはできません。

ファイルの特定のバージョンをリカバリする必要がある場合は、Time Explorer または Windows エクスプローラでファイルを選択し、右クリックして、ショートカット メニューから **[バージョンの表示]** を選択します。**[ファイル バージョン]** ウィンドウが開きます。バックアップ時刻に基づいて必要なバージョンを選択し、ツールバーの **[リカバリ]** をクリックします。正しいバージョンを選択するには、関連するアプリケーションでバージョンを開き、ファイルの内容を表示します。右側のペインでファイルを選択すると、ノンストップ バックアップ ストレージに保持されているすべてのバージョンのバックアップ日時が Time Explorer の下部に表示されます。バックアップ日時に基づいてバージョンを選択し、右側のペインでファイルを右クリックして、ショートカット メニューから **[開く]** を選択します。

Acronis True Image Home によってファイルのそのバージョンが一時フォルダにリカバリされ、関連付けられているアプリケーションを使用してファイルが開かれます。

7.6 Acronis ノンストップ バックアップ ストレージの管理

必然的に、Acronis ノンストップ バックアップ ストレージの空きは徐々に減少します。空きがなくなるまでの時間は、どのノンストップ バックアップ ストレージが選択されているかによって、および Acronis ノンストップ バックアップによって保護されるパーティションの数や構成によって異なります。

選択されている Acronis ノンストップ バックアップ ストレージの空きがなくなっても、別のストレージを選択すれば、それまでにバックアップされたデータが失われることはありません。

Acronis ノンストップ バックアップ ストレージを管理するには、必要のなくなったデータをクリーンアップするという方法もあります。ストレージをクリーンアップするには、サイドバーの **[バックアップ]** → **[ノンストップ バックアップ]** を選択してから、右側ペインにあるアクティブなノンストップ バックアップ ストレージへのリンクをクリックします。[ノンストップ バックアップ オプション] ウィンドウが開きます。アクティブなノンストップ バックアップをクリーンアップするには、**[クリーンアップ]** リンクをクリックします。

期間を指定するためのウィンドウが表示されます。ここで指定された期間内に作成されたバックアップが削除されます。期間を選択して **[OK]** をクリックします。

8 その他のバックアップ機能

8.1 バックアップの予備コピーの作成

バックアップするファイルやフォルダを選択するときに、バックアップの種類として [データ] を選択した場合は、バックアップの予備コピーを作成してファイル システム、ネットワーク ドライブ、または USB フラッシュ ドライブに保存することができます。

複製によってアーカイブの安全が強化されるだけでなく、この機能を使用すると、たとえばドキュメント一式を USB スティックにコピーして自宅で編集することも可能です。つまり、通常のバックアップを実行して、同じファイルを USB スティックやローカル ハード ドライブにコピーすることができますようになりました。作成する予備コピーの形式は、通常のファイル、ZIP 圧縮ファイル、および TIB ファイル(パスワード保護と暗号化も可能)から選択できます。パスワードで保護された予備コピーを暗号化できるのは、メイン バックアップの暗号化が選択されている場合のみです。同じ長さの暗号化キーが予備コピーの暗号化にも使用されます。

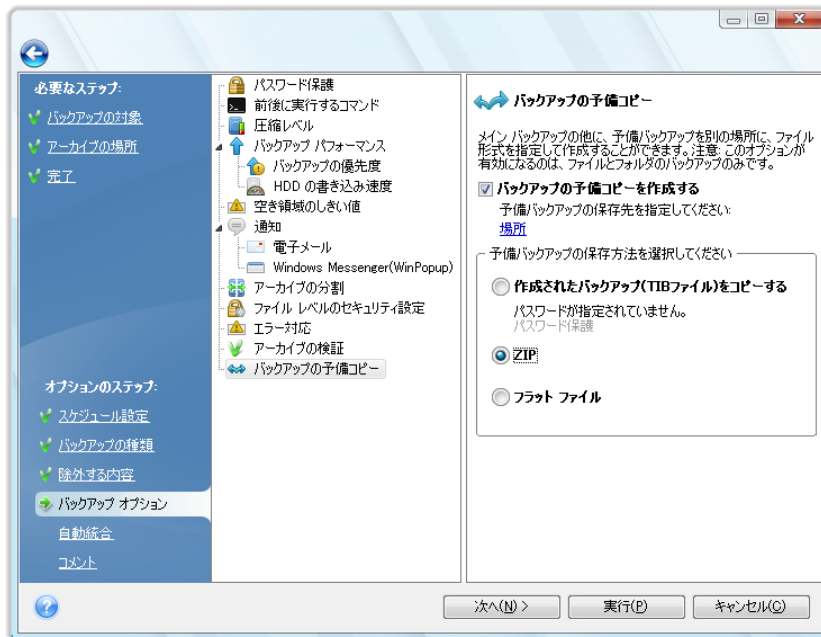
予備コピーには、バックアップとして選択したすべてのファイルが常に含まれます。つまり、予備コピーを作成する場合は常にソース データの完全バックアップが作成されます。予備コピーの形式が TIB であっても、増分または差分バックアップとして予備コピーを作成することはできません。

また、利便性とデータの安全の強化の代償として、タスクの実行に要する時間が長くなることに注意してください。通常のバックアップと予備コピーの作成は同時にではなく、順番に実行されるからです。

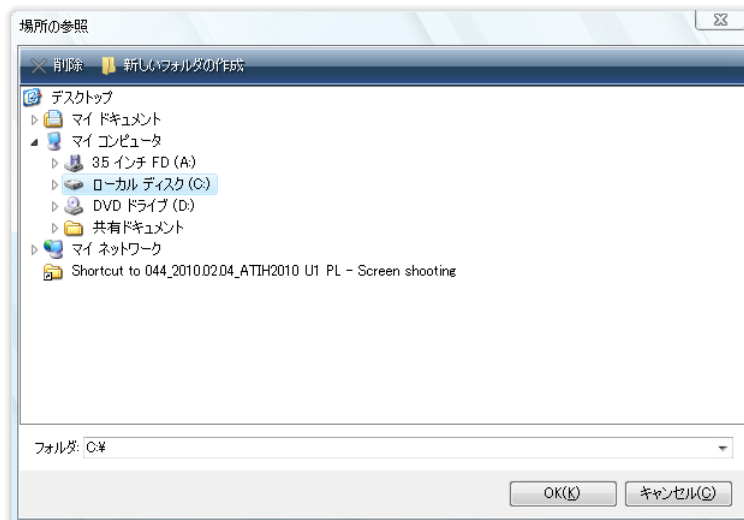
ここで、どのような場合にバックアップの予備コピー作成が必要になるかを考えてみます。

あなたは、ある緊急プロジェクトのメンバーとして多忙な日々を送っており、プロジェクトの期限は明日の朝に迫っています。一日の作業の成果を Acronis セキュア ゾーンにバックアップし、予備コピーを USB スティックに作成して、残りのプロジェクト作業を自宅で完了させることにしました。予備コピーを作成する手順は、次のとおりです。

1. バックアップ ウィザードを開始して、バックアップの種類として [データ] を選択してバックアップタスクを設定します。[バックアップ オプション] のステップで、[バックアップの予備コピー] を選択してから、[バックアップの予備コピーを作成する] チェックボックスをオンにします（デフォルトのバックアップ オプションでこのオプションが選択されていない場合）。



2. プロジェクト ファイルをどのように USB スティック上に複製するかを選択します。領域を節約したい場合は、ZIP ファイルを選択します。[場所] リンクをクリックして USB スティックのドライブ文字を選択し、[新しいフォルダの作成] アイコンをクリックして予備コピーのためのフォルダを作成します。



3. バックアップ タスクの設定を通常どおり最後まで実行します。
4. [実行] をクリックします。USB スティックを持って帰宅します。

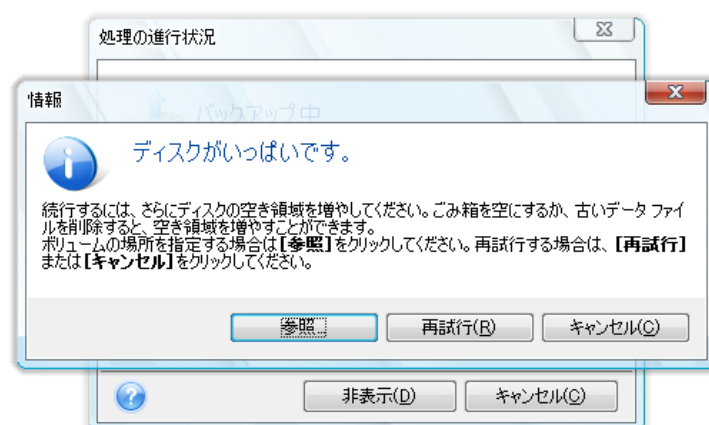
Windows による ZIP ファイルのサポートには、いくつかの制限があります。マルチボリュームの ZIP アーカイブや、サイズが 4 GB を超える ZIP アーカイブ、および 4 GB を超えるファイルが含まれる ZIP アーカイブを操作することはできません。また、予備コピーを ZIP アーカイブまたはフラット ファイルとして作成する場合に、作成場所として CD/DVD を選択することはできません。

8.2 アーカイブの場所の分散

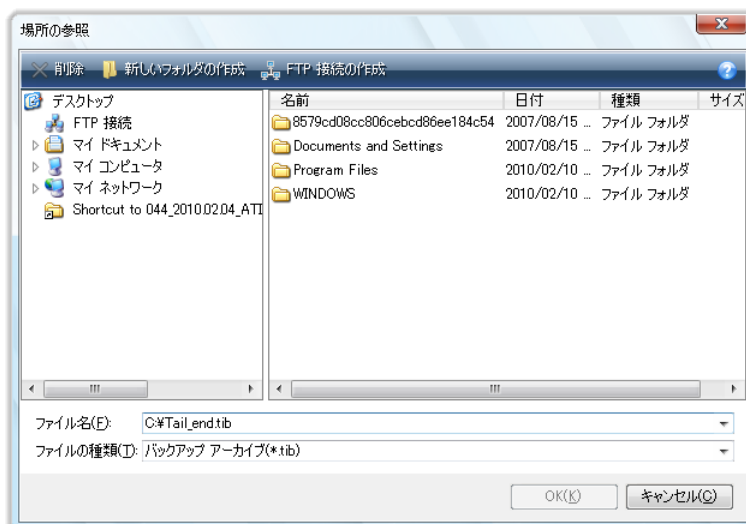
Acronis True Image Home の柔軟性は一段と向上しました。完全、増分、および差分のバックアップをそれぞれ別の場所(ネットワーク共有、CD/DVD、USB スティック、あるいはローカルの内蔵または外付けのハードディスク ドライブなど)に保存することもできます。

同じ「バックアップ チェーン」に属するバックアップの一部だけを Acronis セキュア ゾーンに保存することはできません。Acronis セキュア ゾーンに保存されたバックアップは、バックアップ アーカイブ自動統合時に削除されてしまう可能性があるためです。その結果、バックアップのつながりが壊れてしまいます。また、複数の場所へのアーカイブは、FTP サーバーでは機能しません。

この機能の便利な点として、バックアップを「その場で」分割できることが挙げられます。たとえば、ハードディスクへのバックアップを実行しているときに、バックアップ先のハードディスクの空き領域が不足しているためバックアップを完了できないことが判明したとします。ディスクがいっぱいであることを警告するメッセージが表示されます。

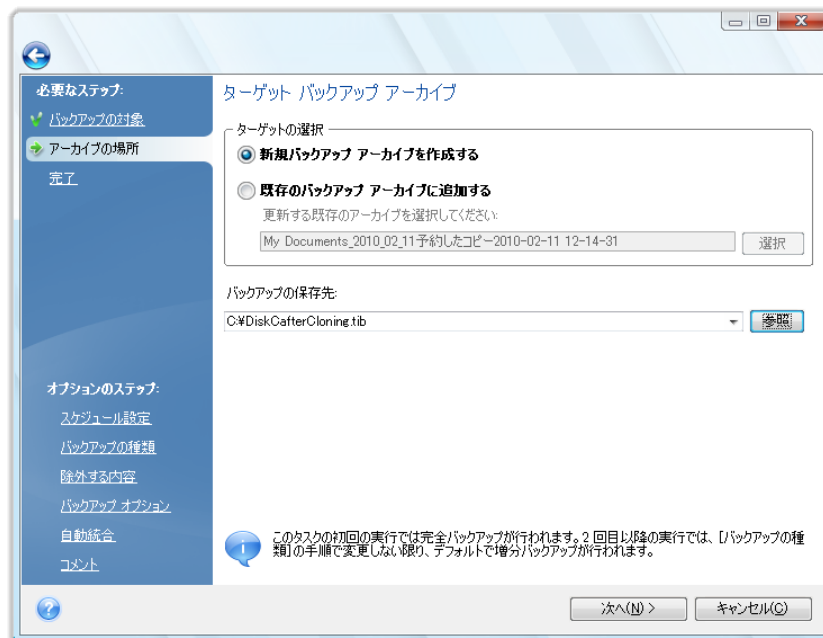


バックアップを完了させるには、そのディスクの領域の一部を解放してから **【再試行】** をクリックするか、別の記憶装置を選択します。後者の場合は、情報ウインドウの **【参照】** をクリックします。[場所の参照] ウィンドウが表示されます。

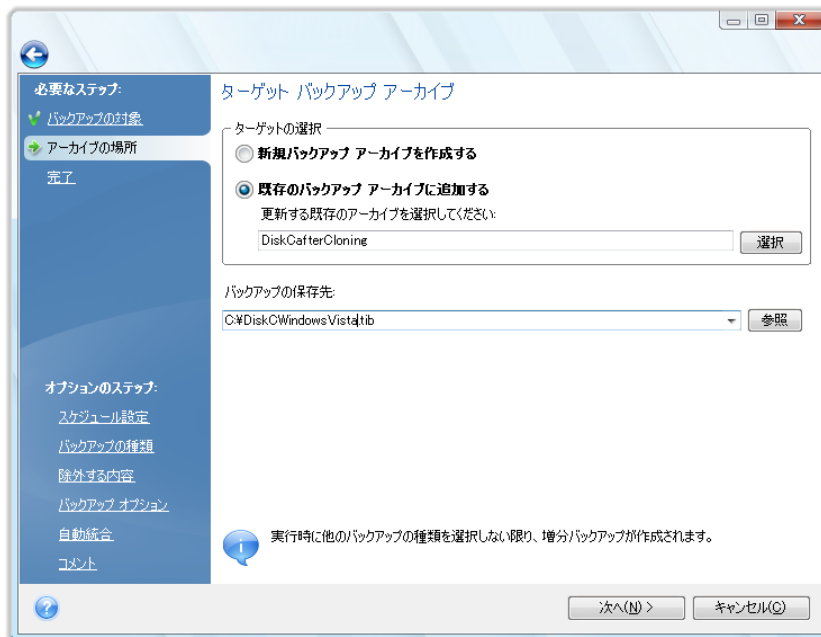


左ペインには、このコンピュータから利用可能なストレージの場所が表示されます。左ペインでディスクを選択すると、そのディスクの空き領域が右ペインに表示されます。バックアップを完了させるのに十分な大きさの空き領域がある場合は、残りのバックアップ対象データを保存するファイルの名前を指定します。名前は手動で入力することも(たとえば「Tail_end.tib」など)、行の右にあるボタンをクリックして自動的に生成することもできます。その後で **[OK]** をクリックすると、Acronis True Image Home によるバックアップが最後まで実行されます。

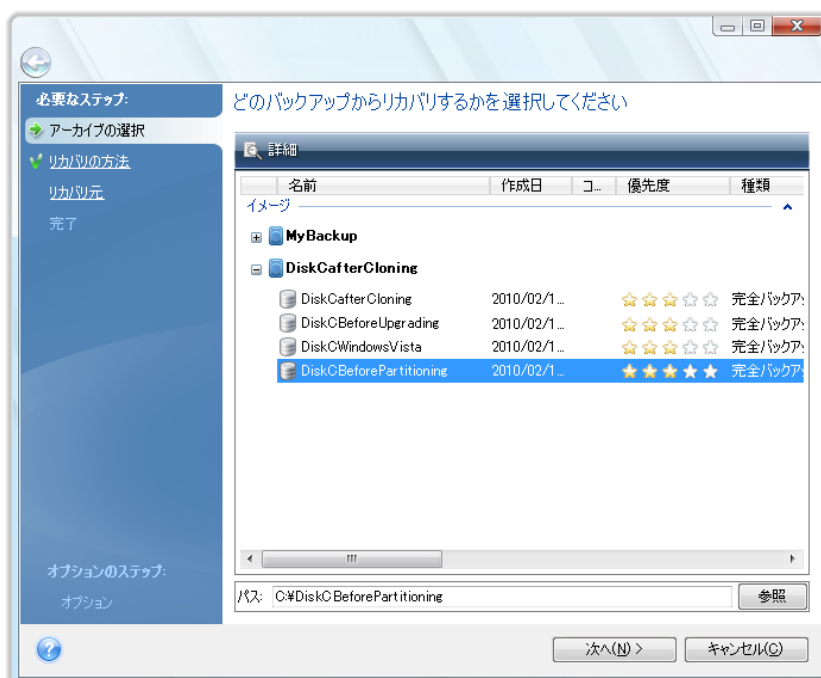
Acronis True Image Home では、バックアップ アーカイブに付ける名前に関する制限はありません。たとえば、購入した新しいハードディスク ドライブに、古いハードディスク ドライブの内容をクローン作成によって転送するとします。新しいシステム ディスクの完全バックアップを実行し、そのバックアップに「DiskCafterCloning」という名前を付けます。



しばらくしてから、Windows Vista へのアップグレードを行うことになりました。安全のために、アップグレードの前に増分バックアップを作成して「DiskCBeforeUpgrading」という名前を付けます。アップグレードが完了した後で、新しいシステムとすべてのアプリケーションが正常に動作していることを確認してから、別の増分バックアップを作成して「DiskCWindowsVista」という名前を付けます。



Windows Vista の使用をしばらく続けた後で、Linux も使用してみることになりました。Linux 用のパーティションを作成する前に、システム ディスクの増分バックアップを実行して「DiskCBeforePartitioning」という名前を付けます。このようにすれば、リカバリが必要になったときも、どの状態にシステム ディスクをリカバリするかに応じて、対応するバックアップ アーカイブをすぐに見つけることができます。



既に説明したとおり、完全、増分、または差分のバックアップをそれぞれ別の場所に保存することが可能です。たとえば、最初の完全バックアップを外付けの USB ハード ドライブに保存してから、後続の増分バックアップ(または差分バックアップ)を CD または DVD に書き込むことができます。また、そのようなバックアップをネットワーク共有に保存することも可能です。同一の「バックアップチェーン」に属するバックアップが複数の場所に分散して保存されている場合は、データ リカバリ時に、過去のバックアップの場所を指定するための画面が表示されることがあります。この画面が表示されるのは、選択されたバックアップ アーカイブの中にリカバリ対象のファイルが含まれていない(または一部しか含まれていない)場合です。

8.3 バックアップ ウィザード – 詳細情報

ここでは、バックアップ ウィザードのすべての手順について詳細に説明します。バックアップ ウィザードの手順は次のとおりです。

1. Acronis True Image Home を起動します。

サイドバーで **[バックアップ]** をクリックし、バックアップする対象に応じて、右側のペインで **[ディスクとパーティションのバックアップ]** または **[ファイル バックアップ]** を選択します。

バックアップ ウィザードでは次のバックアップを実行できます。

ディスクとパーティションのバックアップ(ディスク/パーティションの任意のセットのイメージ バックアップ)

データ(ファイル、フォルダ、またはファイル カテゴリ全体の任意のセットのファイル レベルのバックアップ)

システムの状態(ブート ファイル、レジストリ、保護された Windows ファイル、および COM+ CLASS 登録データベースのファイル レベルのバックアップ) システム状態のバックアップでは、システム ファイル、ドライバなどをリカバリできますが、ユーザーが作業で使用するデータ ファイルやフォルダはリカバリできません。システム状態のバックアップの詳細については、Microsoft TechNet でデータのバックアップと復元に関する記事をご参照ください。

電子メール(Microsoft Outlook、Microsoft Outlook Express、および Windows Mail の設定とメッセージのファイル レベルのバックアップ)

アプリケーションの設定(Windows アプリケーションの設定のファイル レベルのバックアップ)

ファイル レベルのバックアップ処理でサポートされるファイル システムは、FAT と NTFS だけです。

バックアップの種類を選択するとバックアップ ウィザードが起動し、バックアップ作成タスクの手順が示されます。選択したバックアップの種類により、バックアップ ウィザードでの手順の数は異なることがあります。たとえば、システムの状態のバックアップでは、プログラムはあらかじめ定義されているデータをバックアップし、バックアップ タスクの構成に必要な設定の数は最小限です。

[実行] をクリックする前に **[タスクを今すぐ実行する]** チェックボックスをオフにしていない場合、バックアップ タスクの設定が終了するとタスクをすぐに開始できます。

8.3.1 バックアップするデータの選択

[バックアップ ウィザード] 画面が表示されたら、どのデータをバックアップするかを選択します([システムの状態] を選択した場合は、このステップは省略されます)。

ディスクとパーティションのバックアップ - バックアップするディスクまたはパーティションを選択します。ディスクやパーティションを自由に組み合わせて選択できます。バックアップ ウィザードの右ペインに、このコンピュータのハード ドライブが表示されます。ハード ドライブを選択すると、そのドライブのすべてのパーティションが選択されます。ハード ドライブに複数のパーティションが含まれている場合に、バックアップ対象のパーティションを個別に選択することもできます。その場合は、ドライブの行の右側にある下矢印をクリックします。表示されたパーティションの一覧から、パーティションを選択します。デフォルトでは、データを含むハードディスク内のセクタのみがコピーされます。ただし、完全なセクタ単位のバックアップを作成する方が便利な場合もあります。たとえば、誤ってファイルを削除してしまったので、削除を取り消そうとしているけれども、削除を取り消した結果ファイル システムに問題が発生する可能性もあるため、削除取り消しの前にディスク イメージを作成しておく場合です。セクタ単位バックアップを作成するには、**[セクタ単位でバックアップする(保存領域が多く必要)]** チェックボックスをオンにします。このモードでは、ハードディスクの使用済みセクタと未使用セクタの両方がコピーされるので、処理時間が長くなり、イメージ ファイルのサイズも大きくなるのが一般的です。さらに、ハードディスク全体をセクタ単位でバックアップするときに、ハードディスク上の未割り当て領域もバックアップするように設定するには、**[未割り当て領域をバックアップする]** を選択します。このオプションを選択すると、ハード ドライブ上のすべての物理セクタをバックアップすることができます。

データ - バックアップ対象のファイル カテゴリを、**[ドキュメント]**、**[ファイナンス]**、**[イメージ]**、**[ミュージック]**、および **[ビデオ]** から選択します。カテゴリはそれぞれ、コンピュータのハードディスクに存在するファイルの種類に関連付けられ、その種類のファイルすべてに相当します。また、ファイルやフォルダが含まれるカスタム カテゴリを追加することもできます。新しいカテゴリが保存され、上記のカテゴリと共に表示されます。カスタムやデフォルトのファイル カテゴリの内容は変更でき(カテゴリの編集)、カテゴリを削除することも可能です。デフォルトのファイル カテゴリは削除できません。

カスタム カテゴリの詳細については、「バックアップ対象のカスタム データ カテゴリの作成」『79 ページ参照』を参照してください。現在のバックアップの内容をデータ カテゴリとして残しておく必要がない場合は、ファイル/フォルダをツリーから選択します。この設定は現在のバックアップ タスクについてのみ有効です。手動で追加されたフォルダにファイル フィルタリングを適用することができます。この作業は、オプションのステップ **[除外する内容]** で行います。

アプリケーションの設定 - Windows アプリケーションのカスタム設定をバックアップします。これはファイル レベル バックアップであり、バックアップ対象のフォルダがあらかじめ定義されているので、ユーザーによる選択操作は最小限です。サポート対象のアプリケーションのうち、コンピュータ上で検出されたものの一覧が、カテゴリごとに分類されて表示されます。任意のカテゴリとアプリケーションを選択することができます。

バックアップされるのは、アプリケーションの実行ファイルではなく、アプリケーションの設定であることに注意してください。アプリケーションが正しく動作していないように見える場合や停止してしまう場合は、アプリケーションの最新の更新プログラムを使用して再インストールしてから、設定をバックアップからリカバリしてください。

コンピュータ上で検出されたサポート対象アプリケーションをすべてバックアップ対象として選択するには、**[インストールされているアプリケーション]** チェックボックスをオンにします。インスタント メッセージャー アプリケーションについては、設定と履歴の両方がバックアップされます。

サポート対象のアプリケーションの一覧は、逐次拡張される予定です。更新は、新しいプログラムビルドまたはインターネットを介して提供されます。

電子メール - Acronis True Image Home では、Microsoft Outlook 2000、2002、2003、2007、Microsoft Outlook Express、および Windows メール のメッセージ、アカウント、および設定を簡単にバックアップすることができます。電子メール バックアップは、ファイル レベル バックアップの一部であり、バックアップ対象のフォルダがあらかじめ定義されているので、ユーザーによる選択操作は最小限です。ただし、必要であれば、Microsoft Outlook のコンポーネントやフォルダを個別に選択することもできます。サポートされる電子メール クライアントの一覧は、逐次追加していく予定です。更新は、新しいプログラム ビルドまたはインターネットを介して提供されます。

選択できる項目は次のとおりです。

- .PST/.DBX データベース ファイルに格納されているメッセージ
- 電子メール アカウント

Microsoft Office Outlook 2000、2002、2003、2007 の場合

- メール フォルダ
- 予定表
- 連絡先
- 仕事
- メモ
- 署名
- ニュース フォルダ
- ユーザー設定
- アドレス帳

Microsoft Outlook Express の場合

- メール フォルダ
- アドレス帳 (Windows アドレス帳を選択)

Acronis True Image Home では、Microsoft Outlook の IMAP (インターネット メッセージ アクセス プロトコル) メール フォルダのバックアップも可能です。つまり、メール サーバー上に保存されているフォルダをバックアップすることができます。Microsoft Outlook Express および Windows メール の場合は、ローカルの電子メール フォルダのバックアップのみが可能です。

Acronis True Image Home では、バックアップの種類として **【電子メール】** を選択したときにバックアップされる項目の中の Unicode 文字はサポートされないことに注意してください。

8.3.2 アーカイブの場所の選択

バックアップ アーカイブの場所を選択し、アーカイブ名を指定します。

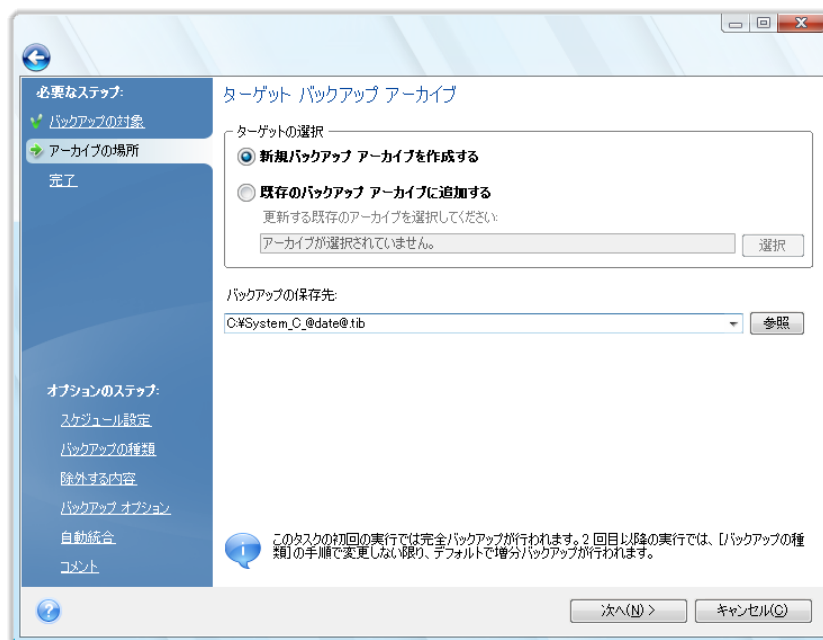
新しいアーカイブを作成する、つまり完全バックアップを実行しようとしている場合は、**【新しいバックアップ アーカイブを作成する】** を選択して、その下の **【バックアップ ロケーション】** フィールドにアーカイブの場所へのパスと新しいアーカイブ ファイル名を入力するか、**【参照】** をクリックしてディレクトリ ツリー上でアーカイブ場所を選択し、**【ファイル名】** の行に新しいファイル名を入力するか、この行の右にあるボタンをクリックしてファイル名を自動的に生成します。

ファイルやフォルダをバックアップするためにバックアップの種類として **【データ】** を選択した場合は、アーカイブの種類として ZIP を選択できます。詳細については、「Zip 形式のサポート」『 25 ページ参照』を参照してください。

CD/DVD および Acronis セキュア ゾーンは、ZIP アーカイブの場所としてはサポートされません。

増分または差分バックアップのファイルを既存のアーカイブに追加する場合は、**【既存のバックアップ アーカイブに追加する】** を選択し、**【選択】** ボタンをクリックして、どの既存アーカイブを更新するかを選択します。そのアーカイブに既に増分または差分バックアップがある場合は、任意のアーカイブ ファイルを選択します。アーカイブ ファイル全体が 1 つのアーカイブと見なされるので、どのファイルを選択してもかまいません。

追加されるバックアップ ファイルの場所を変更する場合は、**【参照】** ボタンをクリックして、新しいバックアップの場所を指定します。変更しない場合は、既存のアーカイブと同じ場所のままにしておきます。



アーカイブを保存する場所が元のフォルダから遠ければ遠いほど、障害発生時のアーカイブの安全性は高まります。たとえば、アーカイブを別のハードディスクに保存すれば、プライマリ ディスクが損傷を受けた場合でもデータは保護されます。データをネットワーク ディスク、FTP サーバー、またはリムーバブル メディアに保存しておけば、ローカル ハードディスクがすべて損傷したような場合でも、データは無事です。Acronis セキュア ゾーンを使用してバックアップを保存することもできます(詳細については、「Acronis セキュア ゾーン™」『 22 ページ参照』を参照してください)。

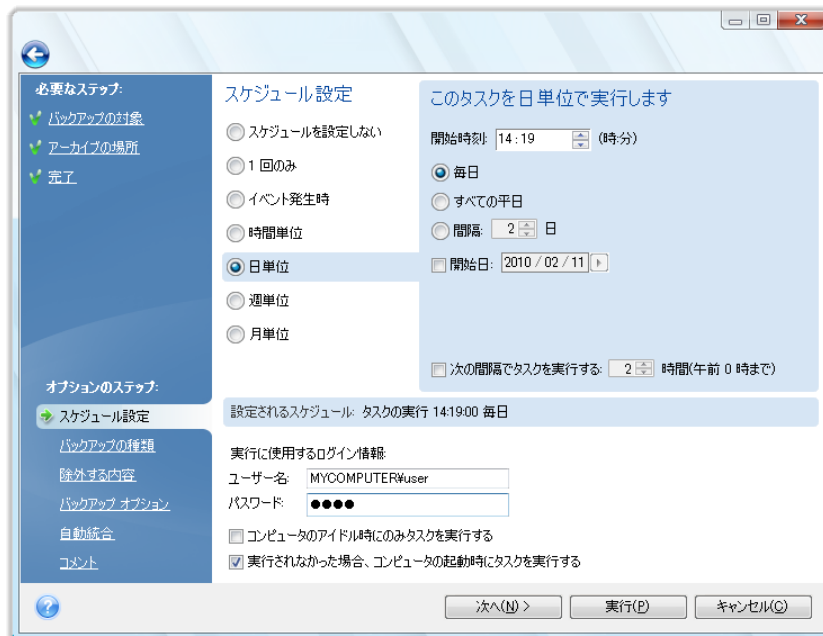
FTP サーバー サポートに関する注意と推奨事項については、「サポートされるストレージ メディア」を参照してください。

アーカイブの場所を選択し、作成されるバックアップ アーカイブの名前を指定すると、バックアップ タスクの作成に必要なステップをすべて終えたこととなります。このことは、**【完了】** ステップが表示されることからわかります。この画面の右ペインに、バックアップ タスクの要約が表示されます。残りのステップはいずれも必須ではなく、多くの場合は省略可能です。たとえば、バックアップをすぐに実行したい場合は、**【スケジュール設定】** ステップを省略します。バックアップからファイルを除外する必要がない場合は、**【除外する内容】** 手順を省略します。デフォルトのバックアップ オプションを使用するときは、**【バックアップ オプション】** 手順を省略します。

次に、バックアップ タスクの設定時に実行できるオプションのステップについて説明します。【オプション】 ボタンをクリックしてください。

8.3.3 スケジュール設定

デフォルトでは【スケジュールを設定しない】オプションが選択されており、ウィザードを完了して【実行】をクリックするとタスクが実行されるようになっています。ただし、スケジュール設定のオプションを選択し、構成済みタスクのスケジュール設定をすることもできます。



詳細については、「タスク スケジュールの作成」『108 ページ参照』を参照してください。

8.3.4 バックアップの種類

作成するバックアップの種類(完全バックアップ、増分バックアップ、または差分バックアップ)を選択します。選択したデータをまだバックアップしたことがない場合、または完全アーカイブが古いため、新しいマスタ バックアップ ファイルを作成する場合は、完全バックアップを選択します。それ以外の場合は、増分または差分バックアップを作成することをお勧めします(「完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ」『19 ページ参照』)を参照してください)。

バックアップを既存のバックアップ アーカイブに追加する場合は、【完全】は選択不可能になります。

バックアップ タスクのためのバックアップ ポリシーを設定することができます。Acronis True Image Home のバックアップ ポリシーには、次の 3 つがあります。

- (1) 完全バックアップのみを作成する
- (2) 増分バックアップの数が指定の数に達したら完全バックアップを作成する
- (3) 差分バックアップの数が指定の数に達したら完全バックアップを作成する

スケジュールに従って最初にバックアップが実行される時は、必ず完全バックアップが作成されます。

(1) を選択した場合 (**[完全]** を選択) は、新しい完全バックアップを作成するときに前の完全バックアップに対してどのような操作を実行するかを選択することもできます。デフォルトでは、前の完全バックアップは上書きされますが、**[新しい完全バックアップで以前のバックアップを上書きする]** チェックボックスをオフにすると、前の完全バックアップを残すことができます。

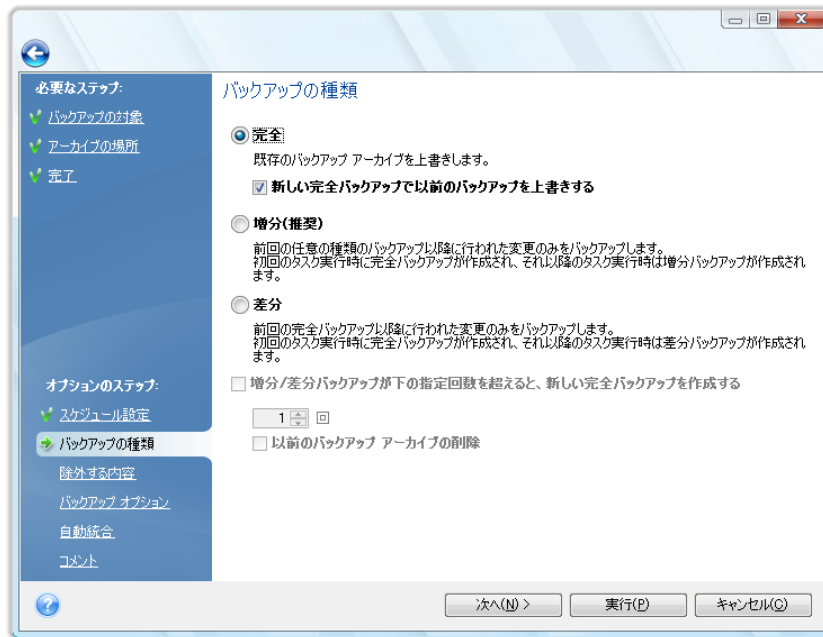
(2) または (3) を選択した場合 (**[新しい完全バックアップを]** チェックボックスをオンにする) は、次回作成されるバックアップは増分(または差分)となり、増分(または差分)バックアップの数が指定された数に達するまで繰り返されます。指定した数の増分(または差分)バックアップが作成されると、その次のバックアップでは新しい完全バックアップが作成され、続いて連続する増分(または差分)バックアップが作成されます。そして、この処理は変更が行われるまで継続されます。

[以前のバックアップ アーカイブの削除] チェックボックスがオンの場合は、指定されたバックアップポリシーに従って新しい完全バックアップが作成されたときに、それまでのバックアップ チェーン全体、つまり前回の完全バックアップと後続の増分(または差分)バックアップがすべて削除されます。この削除は、**[自動統合]** ステップで設定されたアーカイブの全体的な制限とは無関係に行われます。

古いバックアップを保持するために **[以前のバックアップ アーカイブの削除]** チェックボックスをオフにした場合に、新しい完全バックアップが作成された結果、自動統合の制限に違反する状態になると、次の処理が自動的に行われます。

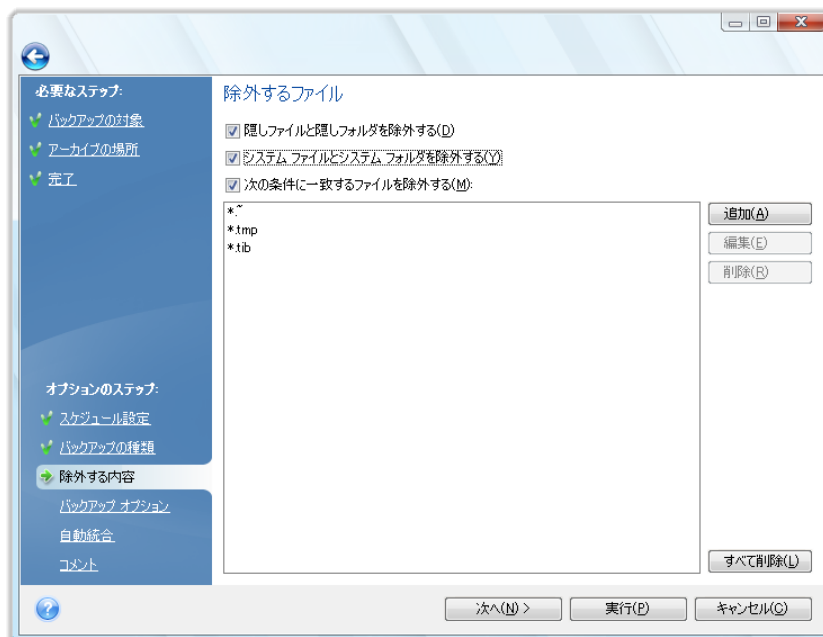
1. 実際のバックアップの数が最大バックアップ数を超えている場合は、この制限違反を解消するために、古い完全バックアップと最も古い増分(差分)バックアップが自動的に統合されます。
2. バックアップ数制限の違反が解消された後で、他の制限違反が残っている場合は、古いバックアップの保存期間の制限違反を解消するために、最も古いバックアップが統合されます(可能な場合のみ。不可能な場合は、古い完全バックアップが削除されます)。
3. 古いバックアップの保存期間の制限違反が解消された後で、アーカイブ サイズ制限違反が残っている場合は、古い完全バックアップと最も古い増分(差分)バックアップが統合されます。さらに統合が必要かつ可能であれば、統合が繰り返されます。
4. これまでのバックアップをすべて統合した後もアーカイブ サイズ制限違反が残っている場合は、この違反を解消するために古いバックアップ アーカイブが削除されます。

5. 新しい完全バックアップ ファイルのサイズがアーカイブ サイズ制限を超える場合は、ログに警告が記録されます。



8.3.5 除外する内容の選択

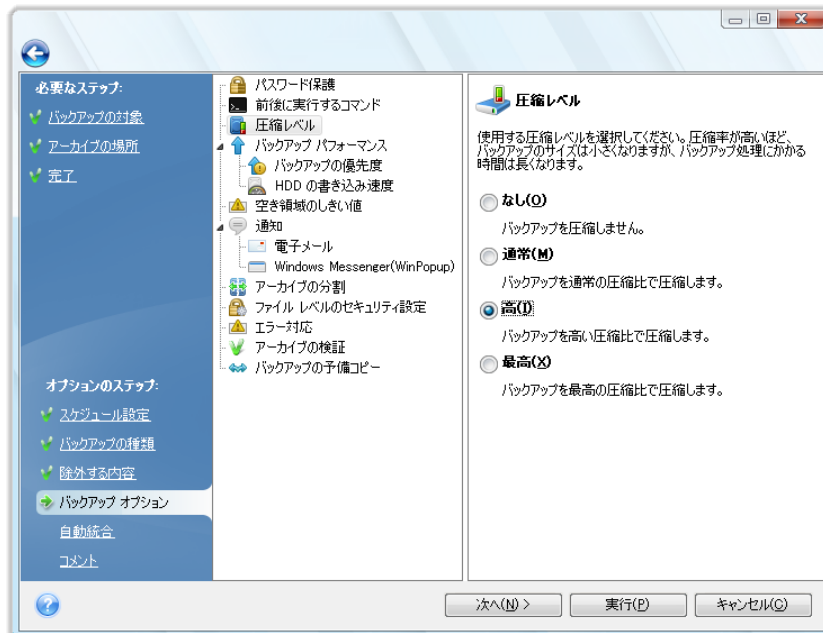
このステップは、バックアップの種類が [ディスクとパーティションのバックアップ] または [データ] の場合のみ表示されます。この手順により、カスタム カテゴリを作成しないで、特定のファイルの種類をバックアップから除外する場合に、バックアップしない不要なファイルを除外することができます。隠しファイルやフォルダ、システム ファイルやフォルダ、ユーザーが指定した条件と一致するファイルを除外できます。[追加] をクリックすると、ユーザー独自の条件を追加できます。条件を追加する際、一般的な Windows のワイルドカード文字を使用して、セミコロンで区切って複数の条件を同じ行に入力することができます。たとえば、.gif および .bmp の拡張子を持つすべてのファイルを除外する場合は、「*.gif;*.bmp」と入力します。また、たとえば、「test」という名前のファイルすべてを拡張子に関わらず除外する場合、除外条件を「test.*」のように指定する必要があります。このように指定しない場合、ファイルは除外されません。また、「C:¥Program Files¥Common Files¥」などのように、除外する特定のフォルダのパスを指定することも可能です。ここで、パスの末尾が「¥」記号になっていることにご注意ください。この記号を含めないと、そのフォルダは除外されません。



これらのフィルタ設定は、現在のタスクに対してのみ有効です。バックアップするフォルダを選択するたびに適用されるデフォルトのフィルタを設定する方法については、「除外する内容『72 ページ参照』」を参照してください。

8.3.6 バックアップ オプションの選択

バックアップのオプション(バックアップ ファイルの分割、圧縮レベル、パスワード保護など)を選択します。ここで設定したオプションが適用されるのは、現在のバックアップ タスクのみです。



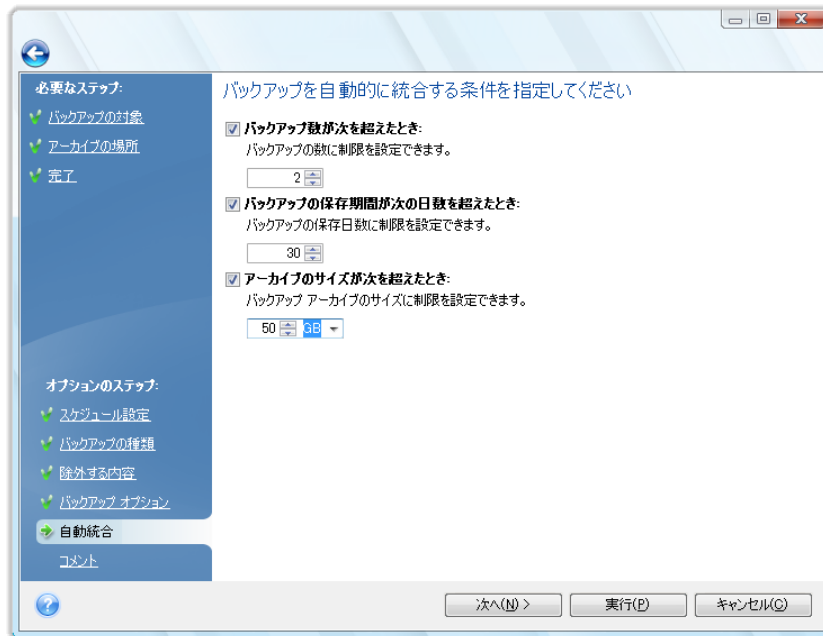
現在の設定を将来のタスクでも使用できるように保存しておきたい場合は、デフォルトのバックアップ オプションおよびローカル ストレージ設定を編集することもできます。詳細については、「バックアップの調整」『 72 ページ参照』を参照してください。

8.3.7 自動統合の設定

バックアップ アーカイブの自動統合は、アーカイブに全体的な制限を設定することにより有効になります。次のような制限項目があります。

- バックアップの最大数
- アーカイブ ファイルの最大保存期間

■ アーカイブの最大サイズ



デフォルトでは、制限は設定されておらず、自動統合も実行されません。自動統合を有効にするには、少なくとも 1 つの制限を選択し、制限値をデフォルト値のままにするか、または必要に応じて変更する必要があります。

制限が設定されると、バックアップ作成後に、あらかじめ設定されているバックアップの最大サイズ (GB) を超えていないかなど、制限違反の有無が確認され、制限値を超えている場合は最も古いバックアップ群が統合されます。たとえば、アーカイブのバックアップ ファイルの保存容量を 50 GB に設定してあり、バックアップのデータ量が 55 GB に達した場合は制限違反となり、システムはユーザーが設定した規則に従って自動的に処理を行います。この処理により一時ファイルが作成されるため、ディスク領域が必要となります。また、制限に違反しなければ、プログラムは違反を検出できないという点に注意が必要です。ファイルを統合できるようにするには、アーカイブの保存容量に加えて、多少のディスク領域が必要となります。余分に必要となる領域の大きさは、アーカイブに含まれる最もサイズが大きいバックアップと同程度となります。ただし、統合でより多くの領域が必要となることもあります。

バックアップの数に制限を設定した場合、実際のバックアップの数は、最大バックアップ数を 1 つ超過することができます。これにより、プログラムが制限違反を検出し、統合を開始することができます。同様に、バックアップの保存期間が 30 日間に設定されている場合、最も古いバックアップの保存期間が 31 日になると統合が開始されます。

8.3.8 コメントの指定

アーカイブについてのコメントを指定するとバックアップの識別に役立ち、間違っただデータをリカバリするのを防ぐことができます。ただし、コメントを必ず付ける必要はありません。バックアップ ファイルのサイズと作成日は自動的に付加されるため、これらの情報を入力する必要はありません。

また、バックアップを実行した後でコメントを指定または変更することができます。これは、自動で実行されるスケジュールされたバックアップにコメントを追加する場合に役立ちます。コメントを編集または追加するには、サイドバーで **[リカバリする]** をクリックして **[データ リカバリとバックアップの**

管理 画面を表示し、該当のバックアップを選択して右クリックし、ショートカットメニューの**[コメントの編集]**を選択します。

8.3.9 バックアップ処理

[スケジュール設定] のステップで **[スケジュールを設定しない]** を選択するか、またはスケジュールされたタスクについて **[タスクを今すぐ実行する]** チェックボックスをオンにして(このチェックボックスをオンにするには、**[完了]** のステップに戻ります)、タスクを手動で開始するよう構成した場合、現在のバックアップ タスクの構成に必要なすべてのオプションのステップを完了してから **[実行]** をクリックすると、タスクの実行が開始されます。これらの設定を行っていない場合は、スケジュールされた時間になるとタスクが実行されます。

別のウィンドウにタスクの進行状況が表示されます。**[キャンセル]** をクリックすると、処理は中止されます。

[非表示] をクリックして進行状況のウィンドウを閉じることもできます。別の操作を開始したり、メイン プログラム ウィンドウを閉じたりしても、バックアップの作成は続行されます。メイン プログラム ウィンドウを閉じた場合、プログラムは引き続きバックグラウンドで実行されますが、バックアップ アーカイブが作成されると自動的に終了されます。さらにいくつかのバックアップ処理を指示すると、これらの指示は待ち行列に入れられ、現在実行中の処理が終わると実行されます。

8.4 バックアップの微調整

特定のタスクに合わせて、バックアップを微調整することができます。このような微調整は、バックアップ タスクを開始する前にバックアップ オプションを設定することで行います。

バックアップ タスクの作成時に、デフォルトのバックアップ オプションを変更して、一時的なバックアップ オプションを設定することができます。今後実行するタスクで変更したオプションを使用する場合は、**[ツールとユーティリティ]** → **[オプション]** → **[バックアップ オプション]** を選択し、デフォルトのバックアップ オプションで適切な変更を行います。また、デフォルトのバックアップ オプションを Acronis True Image Home のインストール中に事前設定した値にいつでも復元することもできます。これを行うには、**[オプション]** ウィンドウの **[すべてデフォルトに戻す]** をクリックします。1 つのバックアップ オプションだけをリセットするには、左側のペインでオプションを選択し、**[この値をデフォルトに戻す]** をクリックします。

[すべてデフォルトに戻す] をクリックすると、バックアップ/リカバリ、通知などのすべてのデフォルト オプションは事前に設定された値にリセットされます。このため、このボタンを使用する場合は注意が必要です。

また、データ ファイルをバックアップするときは、バックアップのカスタム データ カテゴリを作成できます。

8.4.1 バックアップ オプション

除外する内容

デフォルトで、**.~**、**.tmp**、および **.tib** の拡張子を持つファイルはバックアップから除外されます。除外するファイルに他のデフォルトのフィルタを設定することもできます。たとえば、隠しファイル/フォルダやシステム ファイル/フォルダをバックアップ アーカイブに保存しないように選択することもできます。

また、一般的な Windows のワイルドカード文字を使用して、独自のフィルタを適用することも可能です。たとえば、拡張子 .exe を持つすべてのファイルを除外するには、*.exe のマスクを追加します。My???.exe を指定すると、「my」で始まる 5 文字のファイル名が付いた .exe ファイルがすべて除外されます。

このオプションは、**[データ]** のバックアップで選択された実際のフォルダに適用されます。フォルダ全体の名前が設定したマスクと一致する場合、このフォルダおよびフォルダの内容すべてが除外されます。ファイル カテゴリのバックアップは、カテゴリ作成時に事前設定されたファイル フィルタを使用します。**[アプリケーションの設定]**、**[システムの状態]**、または **[電子メール]** のバックアップは、フィルタで除外しないファイルのみの一覧になります。

処理の前後に実行するコマンド

バックアップ処理の前後に自動的に実行するコマンドやバッチ ファイルを指定できます。たとえば、バックアップを開始する前に、一時ファイル(.tmp)の一部をディスクから削除したい場合や、サードパーティのアンチウイルス製品を使用してバックアップ対象のファイルを毎回スキャンするよう構成したい場合があります。**[編集]** をクリックして **[コマンドの編集]** ウィンドウを開くと、コマンド、コマンドの引数、および作業ディレクトリを簡単に入力したり、フォルダを参照してバッチ ファイルを探すことができます。

ユーザーの入力を必要とする対話型のコマンド (pause など) は実行しないでください。これらのコマンドは、サポートされていません。

デフォルトで選択されている **[コマンドの実行が完了するまで処理を行わない]** チェックボックスをオフにすると、バックアップ処理とコマンドの実行を同時に行うことができます。

コマンドが失敗してもバックアップを実行したい場合は、**[ユーザー コマンドが失敗したら処理を中止する]** チェックボックス (デフォルトではオン) をオフにします。

作成したコマンドの実行をテストするには、**[コマンドのテスト]** をクリックします。

圧縮レベル

デフォルトの設定は **[通常]** です。

次のような例を考えてみましょう。いくつかのファイルを USB スティックにバックアップする必要がありますが、ファイル サイズの合計が USB スティックの容量と同程度であるか、または超過しており、USB スティックにすべてのファイルを確実に入れたいと考えています。この場合、バックアップするファイルの圧縮レベルを **[最大]** にします。ただし、データ圧縮率はアーカイブに保存されるファイルの種類によって異なることを考慮に入れる必要があります。たとえば、.jpg、.pdf、.mp3 など、既に圧縮されたデータのファイルが含まれていれば、圧縮レベルが **[最高]** でもバックアップのサイズはそれほど小さくなりません。このようなファイルの場合、バックアップ処理にはかなり長い時間がかかり、バックアップのサイズもあまり縮小されないため、**[最高]** の圧縮レベルを選択しても意味がありません。特定のファイルの種類が不明な場合は、その種類のファイルをいくつかバックアップし、元のサイズとバックアップ アーカイブ ファイルのサイズを比較してください。その他のヒント：一般に、圧縮レベルとして **[通常]** を使用できますが、これはほとんどの場合、バックアップ ファイルのサイズとバックアップ処理の所要時間のバランスが最適になるためです。**[なし]** を選択した場合、データは圧縮されずにコピーされるため、バックアップ処理は最も速くなりますが、バックアップ ファイルのサイズは非常に大きくなります。

アーカイブの保護

デフォルトの設定はパスワードなしです。

たとえば、税金還付計算のような機密情報が記録されたファイルのバックアップが必要であるとします。Acronis True Image Home には、権限のないユーザーがアクセスできないように機密情報を保護するための機能があります。最も簡単な(最も安全性が低い)方法は、バックアップをパスワードで保護することです。パスワードが他人から推測されないようにするには、長さ 8 文字以上で、アルファベット(できれば大文字と小文字を混在させる)と数字の両方が含まれている必要があります。パスワードだけでは安全性に不安がある場合は、バックアップを暗号化します。Acronis True Image Home では、バックアップ ファイルの暗号化に業界標準の AES 暗号化アルゴリズムが使用されます。ほとんどの場合は、暗号キーの長さは 128 ビットで十分です。より長いキーを使用すると、データのセキュリティがさらに向上します。ただし、キーの長さが 192 ビットまたは 256 ビットの場合は、バックアップ処理の速度が大幅に低下しますが、ファイルが極端に大きくなければ、このことは問題にはならないはずで、暗号化設定を指定できるのは、アーカイブがパスワードで保護されている場合のみです。

パスワードで保護されたアーカイブからデータをリカバリするときや、そのアーカイブに増分または差分バックアップを追加するときは、パスワードを入力するためのウィンドウが表示され、パスワードを知っている人のみにアクセスが許可されます。

バックアップの優先度

デフォルトの設定は **[低]** です。

システム中で実行されているプロセスの優先度は、そのプロセスに割り当てられる CPU やシステム リソースの使用量を決定します。バックアップの優先度を下げることによって、他の CPU タスクが使用できるリソースが増えます。バックアップの優先度を上げると、実行中の他のプロセスのリソースがバックアップに回されるので、バックアップ プロセスが速くなります。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

ファイル レベルのセキュリティ設定

[アーカイブにファイルのセキュリティ設定を保持する]

デフォルトの設定は、**[有効]** です。

デフォルトでは、ファイルとフォルダは元の Windows セキュリティ設定(ファイルの **[プロパティ]** → **[セキュリティ]** で設定された各ユーザーまたはユーザー グループに与えられた書き込み、読み取り、実行などの許可)とともにアーカイブに保存されます。セキュリティで保護されたファイルまたはフォルダをコンピュータ上でリカバリしようとしているユーザーに、アクセス許可が与えられていない場合は、そのファイルの読み取りや変更ができなくなる可能性があります。

このような問題をなくすために、アーカイブでのファイルのセキュリティ設定の保持を無効にすることができます。このようにすれば、リカバリされたファイル/フォルダのアクセス許可は常に、リカバリ先のフォルダつまり親フォルダ(ルートにリカバリされる場合は親ディスク)から継承されます。

また、ファイルのセキュリティ設定がアーカイブに保存されている場合でも、リカバリ処理時に無効にすることができます(「ファイルのリカバリ オプション」『97 ページ参照』を参照してください)。結果は同じになります。

[暗号化されたファイルを暗号化解除された状態でアーカイブに格納する]

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

Windows XP および Windows Vista のオペレーティング システムで利用可能な暗号化機能を使用しない場合は、このオプションは無視してください。(ファイル/フォルダの暗号化は、[プロパティ] → [一般] → [詳細設定] → [内容を暗号化してデータをセキュリティで保護する] で設定します)。

バックアップに暗号化されたファイルがあり、リカバリ後にすべてのユーザーがアクセスできるようにする場合は、このオプションをオンにします。オフにすると、ファイル/フォルダを暗号化したユーザーのみがそれらを読むことができます。暗号化されたファイルを別のコンピュータにリカバリする場合にも、暗号化解除が役立つことがあります。

これらのオプションは、ファイルやフォルダのバックアップのみに関係します。また、これらは ZIP バックアップ アーカイブには利用できません。

エラーの処理

不良セクタを無視する

デフォルトの設定は [無効] です。

このオプションを有効にすると、ハードディスク上に不良セクタがある場合でもバックアップを実行できます。ほとんどのディスクには不良セクタはありませんが、ハードディスクを使い続けるうちに、不良セクタの発生する可能性は高くなります。ハード ドライブから異音が聞こえる(たとえば、動作中にかなり大きなクリック音や摩擦音が発生する)場合は、ハードディスクが故障しかかっている可能性があります。ハード ドライブが完全に故障してしまうと、重要なデータが失われるおそれがあるため、できる限り早くドライブをバックアップする必要があります。しかし、故障しかかっているハード ドライブには既に不良セクタがあるかもしれません。[不良セクタを無視する] チェックボックスがオフの場合は、不良セクタで読み取りまたは書き込みエラーが検出されると、バックアップ タスクは中止されます。このチェックボックスをオンにすると、ハードディスク上に不良セクタが存在していてもバックアップは実行できるので、ハード ドライブから可能な限り最大の情報を保存することができます。

処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)

デフォルトの設定は [無効] です。

この設定を有効にすると、バックアップ処理中のエラーは無視されます。この機能は、主に無人バックアップのために用意されたものです。無人バックアップの場合は、ユーザーがバックアップ プロセスを制御することはできません。このモードでは、バックアップ中にエラーが発生しても、通知は一切表示されません。代わりに、すべての処理が記録された詳細なログをタスク終了後に確認することができます。ログを見るには、サイドバーの [タスクとログ] を選択してから [ログ] タブをクリックします。このオプションは、たとえば、バックアップ タスクを夜間に行うように設定する場合に使用します。

Acronis セキュア ゾーンに十分な空き領域がない場合、最も古いアーカイブを削除する

デフォルトの設定は [有効] です。

この設定が無効になっているときに、作成されるバックアップ ファイルを保存するのに十分な空き領域が Acronis セキュア ゾーンにない場合は、空き領域が不足しているためユーザーの対応が必要であることを警告するメッセージが表示されます。ユーザーが対応するまではバックアップは停止状態になるため、無人バックアップは不可能になります。このメッセージは、[処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)] 設定が有効である場合も表示されます。したがって、スケジュールに従って無人で Acronis セキュア ゾーンにバックアップすることを計画してい

る場合は、[Acronis セキュア ゾーンに十分な空き領域がない場合、最も古いアーカイブを削除する] チェックボックスをオンにすることをお勧めします。

リムーバブル メディアの設定

- リムーバブル メディアにバックアップ アーカイブを作成する際に最初のメディアの挿入を求める

デフォルトの設定は、[有効] です。

リムーバブル メディアにバックアップする際に、最初のメディアを挿入するように求めるメッセージを表示するかどうかを選択できます。デフォルトの設定では、メッセージ ボックスの [OK] がクリックされるまでプログラムの実行が停止するので、ユーザーがその場にいなければリムーバブル メディアへのバックアップはできません。したがって、リムーバブル メディアへのバックアップをスケジュールする場合は、応答を要求するメッセージ表示を無効にする必要があります。リムーバブル メディアが利用可能(CD-R/RW が挿入されているなど)であれば、タスクを無人で実行できます。

- Acronis ワンクリック リストアをメディアに配置する

デフォルトの設定は、[無効] です。

リムーバブル メディアにバックアップする場合、このメディアをブータブル メディアにすると、別にレスキュー用ディスクを作成する必要はなくなります。

Acronis ワンクリック リストア をバックアップ メディアに追加しておくだけで、このメディアに保存されているイメージ アーカイブからワンクリックでデータをリカバリすることができます。したがって、このメディアから起動する場合に [リカバリする] をクリックすると、データがすべて元の場所に自動的にリカバリされます。ただし、パーティションのサイズ変更などのオプションやチェックボックスは利用できません。

Acronis ワンクリック リストアは、ハードディスク全体の完全バックアップを作成する場合にのみメディアに追加できます。増分または差分バックアップ、およびパーティションのバックアップの作成時には追加できません。これらのバックアップでは、デフォルトのバックアップ オプションでチェックボックスがオンになっている場合でも、タスクのバックアップ オプションの [一般] タブに [Acronis ワンクリック リストアをメディアに配置する] チェックボックスは表示されません。

リカバリ中により多くの機能が必要な場合は、Acronis True Image Home の完全なスタンドアロン版をレスキュー メディアに書き込みます。これにより、リカバリ ウィザードを使用してリカバリ タスクを構成できるようになります。

[詳細] タブをクリックすると、Acronis True Image Home(完全版)および Acronis システム レポートを選択できます。また、Acronis True Image Home のパッケージ版を購入して適切なアドオンをインストールしたユーザーは、Acronis True Image Home(セーフ版)を使用できます。コンピュータに Acronis Disk Director Suite などの他の アクロニス製品をインストールしている場合は、このタブからこれらのプログラムのコンポーネントのブータブル版も使用できます。

8.4.2 ローカル ストレージの設定

これらの設定もバックアップ処理に影響を及ぼします。たとえば、程度の差はありますが、バックアップの処理速度に顕著な影響を及ぼすことがあります。また、これらの値はローカル ストレージデバイスの物理的特性によって異なります。

HDD 書き込み速度

デフォルトの設定は [最高] です。

内蔵ハードディスク(たとえば、Acronis セキュア ゾーン)にバックアップをバックグラウンドで行った場合、ディスクへの大量のデータ転送の影響で、他のプログラムのパフォーマンスが低下する可能性があります。Acronis True Image Home によるハードディスク使用レベルの上限を設定しておくことができます。データをバックアップする際のハードディスクへの書き込み速度を設定するには、スライダをドラッグするか、書き込み速度を KB/秒単位で入力します。

ネットワークの接続速度

デフォルトの設定は **【最高】** です。

データを頻繁にネットワーク ドライブにバックアップする場合は、Acronis True Image Home が使用するネットワーク帯域幅を制限することもできます。希望するデータ転送速度を設定するには、スライダをドラッグするか、バックアップ データを転送に使用する帯域幅制限を KB/秒の単位で入力します。

空き領域のしきい値

デフォルトの設定は、**【無効】** です。

バックアップ ストレージの空き領域が指定値より少なくなったときに通知を受けることができます。このような通知を有効にするには、**【ディスクの空き領域が不十分なとき】** チェックボックスをオンにし、空き領域のしきい値を下のフィールドに入力します。

このオプションをオンにすると、Acronis True Image Home はバックアップ ストレージの空き領域を監視します。バックアップ タスクを開始した後、選択したバックアップ アーカイブの場所の空き領域が既に指定値より少ないことが Acronis True Image Home で検出された場合、実際のバックアップ処理は開始されず、適切な通知メッセージが直ちに表示されます。このメッセージには、無視してバックアップを続行する、別の場所を参照する、またはタスクをキャンセルする、という 3 つの選択肢が表示されます。バックアップのキャンセルを選択した場合は、ストレージの一部を空けてタスクを再開するか、バックアップ アーカイブ用に別の場所を使用して新しいタスクを作成できます。**【参照】** を選択し、別のストレージを選択して **【OK】** をクリックすると、バックアップ ファイルはそのストレージに作成されます。

バックアップ タスクの実行中に空き領域が指定値より少なくなった場合、同じメッセージが表示され、同様に選択する必要があります。ただし、別の場所の参照を選択した場合は、バックアップ中の残りのデータを保存するファイルの名前を指定する必要があります(またはプログラムで割り当てられたデフォルトの名前を使用できます)。

Acronis True Image Home では、次のストレージデバイスの空き領域を監視できます。

- ローカル ハード ドライブ
- USB カードおよびドライブ
- ネットワーク共有(SMB/NFS)

FTP サーバーと CD/DVD ドライブについては、このオプションを有効にすることはできません。

[エラー処理] 設定で [処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)] チェックボックスがオンになっている場合、メッセージは表示されません。

アーカイブの分割

サイズの大きいバックアップを、複数のファイルに分割することができます。分割したファイルを集めて、元のバックアップに戻すこともできます。バックアップ ファイルの分割は、リムーバブル メディアに書き込むときや FTP サーバーに保存するときに使用します(FTP サーバーから直接データを

リカバリするには、アーカイブを分割した後のファイルが 2 GB 以内でなければなりません)。バックアップの保存先が Acronis セキュア ゾーンの場合は、分割はできません。

たとえば、PC の完全バックアップを外付けハードディスクに保存しているけれども、安全のために、システムのバックアップ コピーを別の場所にも保存することを計画しているとします。しかし、別の外付けハードディスクが手元にあるわけではなく、USB スティックではバックアップのサイズが大きすぎて保存できません。Acronis True Image Home には、予備コピーを空の DVD-R/DVD+R ディスクに保存する機能があります(これらのディスクは、今日では非常に安価です)。サイズの大きいバックアップを複数のファイルに分割することができ、分割したファイルを集めて、元のバックアップに戻すこともできます。PC のハードディスク上に十分な空き領域がある場合は、指定のサイズの複数のファイルから構成されるバックアップ アーカイブをハードディスク上に作成してから、そのアーカイブを後で DVD+R ディスクに書き込むことができます。分割ファイルのサイズを指定するには、**[アーカイブの分割]** で **[固定サイズ]** モードを選択し、ファイル サイズを入力するか、ドロップダウン リストから選択します。

バックアップを保存するのに十分な空き領域がハードディスク上にない場合は、**[自動]** を選択すると、バックアップは直接 DVD-R ディスクに作成されます。Acronis True Image Home によってバックアップ アーカイブが自動的に分割され、1 枚のディスクへの書き込みが終了すると、次のディスクの挿入を指示するメッセージが表示されます。

バックアップを直接 CD-R/RW または DVD+R/RW に作成する場合は、ハードディスクに作成する場合に比べて所要時間が大幅に増える可能性があります。

バックアップの予備コピー

デフォルトの設定は **[無効]** です。

バックアップの種類として **[データ]** を選択して特定のファイルやフォルダをバックアップするたびに自動的にバックアップの予備コピーを特定の場所に作成することができます。予備コピーが作成されるようにするには、**[バックアップの予備コピーを作成する]** チェックボックスをオンにしてから、予備コピーの作成方法を選択します。選択できる作成方法は 3 つあります(バックアップを TIB ファイルとして複製する、予備コピーを zip アーカイブとして作成する、ファイルとフォルダを指定の場所にそのままコピーする)。

バックアップの予備コピーを保存する場所を指定するには、**[場所]** リンクをクリックします。ローカル コンピュータのハードディスク、USB ドライブ、またはネットワーク共有デバイスなどの場所を選択します。予備コピーのためのフォルダを作成するには、**[新しいフォルダの作成]** アイコンをクリックします。tib ファイルまたは ZIP ファイルとして作成された予備コピーには、自動的に次のような名前が付けられます。

`backupfilename_reserved_copy_mm-dd-yyyy hh-mm-ss AM.tib` または

`backupfilename_reserved_copy_mm-dd-yyyy hh-mm-ss PM.zip`

mm-dd-yyyy hh-mm-ss は予備コピーの作成日時で、形式は、月(1 桁または 2 桁)、日(1 桁または 2 桁)、年(4 桁)、時(1 桁または 2 桁)、分(2 桁)、秒(2 桁)となります。AM または PM は、午前または午後 12 時間に対応します。

例: `MyBackup_reserved_copy_8-15-2008 9-37-42 PM.zip`

予備コピーの形式として「そのまま」を選択した場合は、コピーされたファイルがフォルダに保存され、そのフォルダに `backupfilename_reserved_copy_mm-dd-yyyy hh-mm-ss AM`(または `PM`) という名前が付けられます。

バックアップ予備コピーの設定を行った後は、種類として [データ] を選択してバックアップを作成するたびに、予備コピーが自動的に作成されます。選択された場所の空き領域が不足しているため、または USB ドライブなどのストレージ デバイスが接続されていないため予備コピーを作成できなかった場合は、エラー メッセージがイベント ログに記録されます。

[アーカイブのベリファイ]

作成後にバックアップ アーカイブを検証する

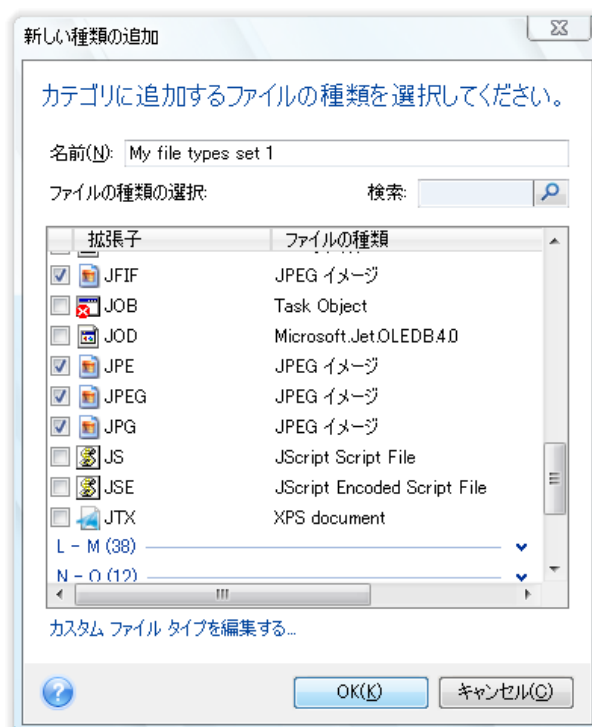
デフォルトの設定は、[無効] です。

この設定を有効にすると、バックアップの直後に、作成または追加したアーカイブの整合性が検証されます。重大なデータのバックアップ、またはディスク/パーティションのバックアップを設定するときには、バックアップを使用して消失したデータを確実にリカバリできるように、このオプションを有効にすることを強くお勧めします。

8.4.3 バックアップ用カスタム データ カテゴリの作成

カスタム データ カテゴリを追加するには、バックアップ ウィザードの [バックアップするファイル] 画面で [新しいカテゴリの追加] をクリックし、フォルダ(データ ソース)を選択して、カテゴリに名前を付けます。選択したフォルダのすべてのファイルをカテゴリに含めることも、フィルタを適用して、バックアップの対象または対象外とする特定のファイルの種類を選択することもできます。

フィルタを設定するには、[次の種類のファイルのみをバックアップする]、または [次に指定する種類を除いたソースにあるすべての種類のファイルをバックアップする] のいずれかを選択します。次に、[追加] をクリックし、表示されたウィンドウで必要なファイルの種類を選択します。



ファイルの種類は次のように選択することができます。

1. 名前で選択します。ファイル名を上部の **【名前】** フィールドに入力します。一般的な Windows のワイルドカード文字を使用できます。たとえば、「My???.exe」を指定すると、ファイル名が 5 文字の「my」で始まるすべての .exe ファイルが選択されます。
2. 種類で選択します。一覧から目的のファイルの種類を選択します。登録済みのファイルの種類を検索するには、その拡張子または説明を **【検索】** フィールドに入力します。
3. 拡張子で選択します。 **【カスタム ファイル タイプを編集する...】** リンクをクリックし、 **【ファイル 拡張子】** フィールドに拡張子を入力します（複数指定する場合は、セミコロンで区切ります）。

現在のバックアップのカスタムの内容を保持しない場合は、ツリーからファイル/フォルダを選択します。この設定は現在のバックアップ タスクについてのみ有効です。

9 Acronis True Image Home によるデータ リカバリ

データ バックアップの最終的な目的は、ハードウェア障害、火災、盗難、または単純に誤って重要なファイルを削除したなどが原因で元のデータが失われたときに、バックアップされたデータをリカバリすることです。

新しいアプリケーション、ドライバ、または Windows 更新プログラムのインストール後の不安定な動作から、システム ハード ドライブの完全な障害、または古いハード ドライブを容量の大きい新しいハード ドライブに交換する場合など、システムのリカバリにはさまざまな理由があります。また、システム パーティションのみ、または隠しパーティションを含め、複数のパーティションから構成されるシステム ディスク全体のリカバリが必要な場合があります。Acronis True Image Home はこれらすべてのケースに対応していますが、リカバリの詳細は異なることがあります。いずれの場合も、レスキュー メディアからの起動時にシステムのリカバリを実行することが適切です。

一方、データ ディスク/パーティションまたはファイルやフォルダのリカバリは通常 Windows で行われます。

9.1 システム パーティションのリカバリ

最初に、システム パーティションを元のハードディスク ドライブの元の場所にリカバリする簡単な場合について説明します。

システム パーティションのリカバリは最も重要な操作の 1 つなので、「正常であることがわかっている」以前の Windows の状態にリカバリする場合であっても、慎重な準備が必要です。リカバリの準備では、次のことを行う必要があります。

a) Acronis ブータブル レスキュー メディアを作成してテストします。メディアのテストの詳細については、「ブータブル レスキュー メディアのテスト [31 ページ参照]」をご参照ください。

b) レスキュー メディアから起動し、リカバリに使用するバックアップをベリファイします。パーティションのリカバリを開始すると、Acronis True Image Home によってリカバリ先のパーティション(この場合はシステム パーティション)が削除され、バックアップ ファイルが壊れているとシステムもアプリケーションも失われてしまうため、このベリファイを行うことは非常に重要です。さらに、ユーザーからの報告では、Windows 上では正常にベリファイされたバックアップ アーカイブが、リカバリ環境でのベリファイでは壊れていると示されたという現象が発生しています。これは、Acronis True Image Home で使用されるデバイス ドライバが Windows 上とリカバリ環境とで異なることが原因である可能性があります。

c) コンピュータで使用するディスクとパーティションに一意的な名前を割り当てます。Windows 上とリカバリ環境ではドライブ文字の設定が異なる場合があるので、この指定を行うことを強くお勧めします。バックアップを作成する前にこれを行っていない場合は、ここで名前を割り当てることができます。名前は、バックアップを含むドライブおよびリカバリ先のシステム パーティションの検索に役立ちます。

d) 必要に応じて、Windows に付属する Microsoft の Chkdsk ユーティリティを使用して、システム ハード ドライブのエラーを検査します。

以上の手順を実行した後、リカバリに進みます。

リカバリに使用するバックアップ アーカイブが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。この作業を済ませてから、Acronis レスキュー メディアから起動します。

1. BIOS でブート順序を設定して、ブータブル メディア デバイス(CD、DVD、または USB スティック)を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え『191 ページ参照』」をご参照ください。
2. レスキュー メディアから起動し、Acronis True Image Home (完全版)を選択します。
3. メイン メニューから **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** の順に選択し、リカバリに使用するシステム パーティション(またはシステム ディスク全体)のイメージ バックアップを選択します。バックアップを右クリックし、ショートカット メニューで **[リカバリ]** を選択します。
Windows 上とリカバリ環境でディスクのドライブ文字が異なる場合は、「Acronis True Image Home はアーカイブ「Name」のボリューム N を検出できません。」というエラー メッセージを表示します。ここで、Name は要求されるイメージ バックアップ アーカイブであり、ボリューム番号(N)はアーカイブ内のバックアップの数に応じて異なります。**[参照]** をクリックしてアーカイブへのパスを表示します。
4. **[リカバリの方法]** の手順で、**[ディスクまたはパーティション全体を復元する]** を選択します。
5. **[リカバリ元]** 画面で、システム パーティション(通常は C)を選択します。システム パーティションの文字が異なる場合は、**[フラグ]** 列を使用してパーティションを選択します。**[プライマリ]** および **[アクティブ]** フラグが設定されている必要があります。システム パーティションを元のハード ドライブにリカバリしているので、**[MBR とトラック 0]** チェックボックスをオンにする必要はありません。
6. **[パーティション C の設定]**(または、異なる場合は実際のシステム パーティションの文字)の手順で、デフォルトの設定を確認し、正しい場合は **[次へ]** をクリックします。正しくない場合は、設定を適切に変更した後、**[次へ]** をクリックします。
7. **[完了]** の手順で、処理の概要を注意深く読みます。パーティションのサイズを変更していない場合は、**[パーティションの削除]** 項目と **[パーティションの復元]** 項目のサイズが一致している必要があります。バックアップをベリファイしない場合は **[実行]** をクリックします。ベリファイする場合は **[オプション]** をクリックし、**[リカバリ前にバックアップ アーカイブを検証する]** チェックボックスをオンにしてから、**[実行]** をクリックします。
8. 処理が終了したら、Acronis True Image Home のスタンドアロン バージョンを終了し、レスキュー メディアを取り出して、リカバリされたシステム パーティションから起動します。必要な状態まで Windows をリカバリしたことを確認してから、元のブート順序を復元します。

9.2 容量の異なるハードディスクへのディスク バックアップのリカバリ

手動によるパーティションのサイズ変更を使用して、複数のパーティションを含むディスクのバックアップを容量の異なるハードディスクにリカバリする作業は、Acronis True Image Home での最も複雑な操作の 1 つです。隠された診断またはリカバリ パーティションを含むハードディスクをバックアップした場合は、特に複雑になります。

Windows や LINUX の一部などを使用したデュアル/マルチ ブートシステムでは、さらに難しい場合があります。多くの場合は、リカバリ試行前に、該当するフォーラムを調べる必要があります。そのため、このセクションではこのような場合については説明しません。

前のセクション「システム パーティションのリカバリ 『 81 ページ参照』」で最初に説明されている準備を行ってください。正常なシステム ディスクを容量の大きい新しいディスクにアップグレードする場合、システム ディスク バックアップの作成前にシステム ディスクのパーティションに一意の名前を割り当てていなければ、一意の名前を割り当ててから、ディスク全体の新規バックアップを作成することをお勧めします。これにより、レスキュー メディアから起動する際に、一致しない可能性のあるドライブ文字ではなく、名前によってパーティションを識別できるようになります。システム ディスクのドライブ障害からリカバリを行う場合は、ここで名前を割り当ててください。名前は、バックアップを含むドライブや復元先(新規)ドライブを見つける際に役立ちます。

パーティションのサイズ、ドライブの容量、製造者、およびモデル番号も、ドライブを正確に識別するのに役立ちます。

その他の推奨事項 - 新しいハードディスク ドライブはコンピュータ内の同じ場所に取り付け、元のドライブと同じケーブルおよびコネクタを使用することを強くお勧めします(元のドライブが IDE で新しいドライブが SATA である場合など、これが不可能な場合もあります)。どの場合でも、新しいドライブは使用するマシンに取り付けてください。

9.2.1 隠しパーティションを含まないディスクのリカバリ

まず、ディスク バックアップを使用して、隠しパーティションでない 2 つのパーティションを含むシステム ディスクをリカバリする場合について説明します。また、このシステム ディスクには、隠しパーティションでない可能性のあるリカバリ パーティションは含まれないものとします。ディスクにパーティションが 3 つある場合でも手順は同様です。ここでは、レスキュー メディアを使用するリカバリ方法を説明します(通常は、この方法によって最善のリカバリ結果が得られます)。

リカバリに使用するバックアップ アーカイブが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。この作業を済ませてから、Acronis レスキュー メディアから起動します。

1. BIOS でブート順序を設定して、ブータブル メディア デバイス(CD、DVD、または USB スティック)を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え 『 191 ページ参照』」をご参照ください。
2. レスキュー メディアから起動し、Acronis True Image Home (完全版)を選択します。
3. メイン メニューで **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** を選択してから、リカバリに使用するシステム ディスクのイメージ バックアップを選択します。

Windows 上とリカバリ環境でディスクのドライブ文字が異なる場合は、「Acronis True Image Home はアーカイブ「Name」のボリューム N を検出できません。」というエラー メッセージを表示します。ここで、Name は要求されるイメージ バックアップ アーカイブであり、ボリューム番号(N)はアーカイブ内のバックアップの数に応じて異なります。**[参照]** をクリックしてアーカイブへのパスを表示します。

4. **[リカバリの方法]** の手順で、**[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
5. **[リカバリ元]** の手順で、リカバリするパーティションのチェックボックスをオンにします。**[MBR と Track 0]** チェックボックスをオンにするとディスク全体がリカバリされるため、オンにしないでください。ディスク全体をリカバリする場合、パーティションのサイズは手動で変更できません。必要に応じて、後から MBR をリカバリできます。パーティションを選択し、**[次へ]** をクリックします。

パーティションを選択すると、適切な **[パーティションの設定...]** の手順が表示されます。これらの手順はパーティション ドライブ文字の昇順に基づいて決定され、順序を変更することはでき

ません。この順序は、ハードディスク上のパーティションの物理的順序とは異なる場合があります。ここでは(隠しパーティションやリカバリ パーティションがない場合は)、Acronis True Image Home によって自動的に適切な Windows ローダ ファイルが修正されるため、新しいディスク上のパーティションの物理的順序は特に意味を持ちません。

また、この手順により、リカバリしようとしているディスクに隠しパーティションが含まれているかどうかを確認できます。隠しパーティションにはドライブ文字は割り当てられておらず、[パーティションの設定...] で最初に処理されます。隠しパーティションが見つかった場合は、「隠しパーティションを含むディスクのリカバリ『85 ページ参照』」をご参照ください。

6. パーティションの設定として、場所、種類、サイズを指定できます。通常は、ドライブ文字が C であるシステム パーティションの設定を最初に指定します。新しいディスクにリカバリするので、**[新しい場所]** をクリックします。割り当てられた名前または容量に基づいて、リカバリ先のディスクを選択します。

ディスクに名前を割り当てておらず、リカバリ先ディスクを確実に選択できない場合は、**[キャンセル]** をクリックしてリカバリを中止し、モデル番号やインターフェイスなどによってリカバリ先ディスクを確認します。この情報を確認するには、メイン メニューで **[ツールとユーティリティ]** **[新しいディスクの追加]** を選択すると **[ディスクの選択]** 画面に情報が表示されます。この画面を使用してリカバリ先ディスクの番号を確認してから **[キャンセル]** をクリックし、再度リカバリ ウィザードを実行して上の手順を繰り返し、リカバリ先ディスクを選択します。

7. **[確定]** をクリックすると、[パーティションの設定...] 画面に戻ります。パーティションの種類を確認し、必要に応じて変更します。システム パーティションは、アクティブに設定されたプライマリ パーティションである必要があります。
8. [パーティション サイズ] 領域で、**[デフォルトを変更]** をクリックしてパーティションのサイズを指定します。デフォルトでは、パーティションは新しいディスク全体を占めています。マウスでパーティションをドラッグする、画面上の水平バー上でパーティションの境界をドラッグする、または適切なフィールド([パーティション サイズ]、[前方の空き領域]、[後方の空き領域])に対応する値を入力することにより、パーティションのサイズおよび場所を変更できます。パーティションのサイズを指定する場合は、サイズを変更した新しいパーティションの後ろに、2 番目のパーティションに必要な未割り当て(空き)領域を残しておく必要があります。通常、パーティションの前の空き領域は 0 です。計画したとおりにパーティション サイズを指定したら、**[確定]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。
9. 次に、2 番目のパーティションの設定を指定します。**[新しい場所]** をクリックしてから、2 番目のパーティションを配置するディスク上の未割り当て領域を選択します。**[確定]** をクリックしてパーティションの種類を確認(必要に応じて変更)してから、パーティションのサイズを指定します。パーティションのサイズは、デフォルトでは元のサイズと同じです。通常、最後のパーティションの後ろには空き領域はないため、未割り当て領域のすべてを 2 番目のパーティションに割り当て、**[確定]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。
10. 実行される処理の概要を注意深く読みます。バックアップをベリファイしない場合は **[実行]** をクリックします。ベリファイする場合は **[オプション]** をクリックし、[リカバリ前にバックアップアーカイブを検証する] チェックボックスをオンにしてから、**[実行]** をクリックします。
11. 処理が終わったら、スタンドアロン バージョンの Acronis True Image Home を終了します。

リカバリ後の初回起動時には、Windows で新しいドライブおよび古いドライブは認識されません。古いドライブを容量の大きい新しいドライブにアップグレードする場合は、ブート前に古いドライブを取り外してください。取り外さないと、Windows の起動で問題が発生する可能性があります。

古いドライブを取り外す必要があるときは、コンピュータの電源を切ってください。取り外す必要がないときは、レスキュー メディアを取り出してからコンピュータを再起動します。

Windows でコンピュータを起動します。新しいハードウェア(ハード ドライブ)が見つかったため Windows を再起動する必要があると表示される場合があります。システムが正常に動作することを確認してから、元の起動順序を復元します。

9.2.2 隠しパーティションを含むディスクのリカバリ

隠しパーティション(診断やシステム リカバリのために PC 製造元が作成したものなど)を含むシステムを容量の異なるハード ドライブにリカバリする場合、他にも考慮が必要な点があります。まず、正常にリカバリするには、古いドライブに存在するパーティションの物理的順序を新しいドライブでも維持し、また、隠しパーティションを同じ場所(通常はディスクの最初または末尾)に配置する必要があります。さらに、隠しパーティションのサイズを変更せずにリカバリすると、問題発生リスクを最小限に抑えることができます。

リカバリを実行する前に、システム ディスク上に存在するすべてのパーティションについてサイズと物理的順序を把握する必要があります。この情報を確認するには、Acronis True Image Home を起動し、メイン メニューで **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** を選択します。システム ディスクのバックアップを選択し、ツールバーの **[詳細]** をクリックします。Acronis True Image Home はバックアップされたディスクの情報を表示し、ディスクに含まれるすべてのパーティションおよびディスク上の物理的順序を図で示します。パーティションの表示が小さいために必要なすべての情報が表示されない場合は、パーティション上にマウス ポインタを置くと情報が表示されます。

情報を取得したら、ブータブル メディアを使用してシステム ディスクのリカバリを進めます。

リカバリに使用するバックアップ アーカイブが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続してドライブの電源が入っていることを確認します。この作業を済ませてから、Acronis レスキュー メディアから起動します。

1. BIOS でブート順序を設定して、ブータブル メディア デバイス(CD、DVD、または USB スティック)を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え『191 ページ参照』」をご参照ください。
2. レスキュー メディアから起動し、Acronis True Image Home (完全版)を選択します。
3. メイン メニューで **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** を選択してから、リカバリに使用するシステム ディスクのイメージ バックアップを選択します。

Windows 上とリカバリ環境でディスクのドライブ文字が異なる場合は、「Acronis True Image Home はアーカイブ「Name」のボリューム N を検出できません。」というエラー メッセージを表示します。ここで、Name は要求されるイメージ バックアップ アーカイブであり、ボリューム番号(N)はアーカイブ内のバックアップの数に応じて異なります。

4. **[リカバリの方法]** の手順で、**[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
5. **[リカバリ元]** の手順で、リカバリするパーティションのチェックボックスをオンにします。**[MBR と Track 0]** チェックボックスをオンにするとディスク全体がリカバリされるため、オンにしないでください。ディスク全体をリカバリする場合、パーティションのサイズは手動で変更できません。MBR は後でリカバリします。パーティションを選択し、**[次へ]** をクリックします。

パーティションを選択すると、適切な **[パーティションの設定...]** の手順が表示されます。これらの手順は、ドライブ文字のないパーティション(隠しパーティションには通常、ドライブ文字はありません)から開始し、ドライブ文字の昇順に進みます。この順序は変更できません。この順序は、ハードディスク上のパーティションの物理的順序とは異なる場合があります。

- パーティションの設定として、場所、種類、サイズを指定できます。隠しパーティションには通常はドライブ文字がないため、最初に隠しパーティションの設定を指定します。新しいディスクにリカバリするので、**[新しい場所]** をクリックします。割り当てられた名前または容量に基づいて、リカバリ先のディスクを選択します。

ディスクに名前を割り当てておらず、リカバリ先ディスクを確実に選択できない場合は、**[キャンセル]** をクリックしてリカバリを中止し、モデル番号やインターフェイスなどによってリカバリ先ディスクを確認します。この情報を確認するには、メイン メニューで **[ツールとユーティリティ]** **新しいディスクの追加** を選択すると **[ディスクの選択]** 画面に情報が表示されます。この画面を使用してリカバリ先ディスクの番号を確認してから **[キャンセル]** をクリックし、再度リカバリ ウィザードを実行して上の操作を繰り返し、リカバリ先ディスクを選択します。

- [確定]** をクリックすると、**[パーティションの設定...]** 画面に戻ります。パーティションの種類を確認し、必要に応じて変更します。
- [パーティション サイズ]** 領域で、**[デフォルトを変更]** をクリックしてパーティションのサイズを指定します。デフォルトでは、パーティションは新しいディスク全体を占めています。隠しパーティションは、サイズを変更せずそのままにし、ディスク上の同じ場所(ディスク領域の最初または末尾)に配置する必要があります。マウスでパーティションをドラッグする、画面上の水平バー上でパーティションの境界をドラッグする、または適切なフィールド(**[パーティション サイズ]**、**[前方の空き領域]**、**[後方の空き領域]**)に対応する値を入力することにより、パーティションのサイズおよび場所を変更できます。パーティションに必要なサイズおよび場所に指定したら、**[確定]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。

2 番目のパーティションの設定を指定します。このパーティションは、ここではシステム パーティションです。**[新しい場所]** をクリックしてから、このパーティションを配置するディスク上の未割り当て領域を選択します。**[確定]** をクリックしてパーティションの種類を確認(必要に応じて変更)します。システム パーティションは、アクティブに設定されたプライマリ パーティションである必要があります。パーティションのサイズを指定します。デフォルトでは元のサイズと同じです。通常、このパーティションの後ろには空き領域はないため、新しいディスク上の未割り当て領域のすべてを 2 番目のパーティションに割り当て、**[確定]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。

- 実行される処理の概要を注意深く読みます。バックアップをベリファイしない場合は **[実行]** をクリックします。ベリファイする場合は **[オプション]** をクリックし、**[復元前にバックアップ アーカイブをベリファイする]** チェックボックスをオンにしてから、**[実行]** をクリックします。
- 処理を終了したら MBR のリカバリに進みます。PC の製造元は、隠しパーティションへのアクセスを提供するために、一般的な Windows MBR やトラック 0 上のセクタを変更していることがあるため、MBR をリカバリする必要があります。
- 同じバックアップをもう一度選択して右クリックし、ショートカット メニューで **[リカバリする]** を選択し、**[リカバリの方法]** の手順で **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択してから、**[MBR とトラック 0]** チェックボックスをオンにします。
- 次の手順で MBR リカバリのリカバリ先ディスクを選択し、**[次へ]** をクリックしてから **[実行]** をクリックします。MBR のリカバリが完了したら、Acronis True Image Home のスタンドアロンバージョンを終了します。

リカバリ後の初回起動時には、Windows で新しいドライブおよび古いドライブは認識されません。古いドライブを容量の大きい新しいドライブにアップグレードする場合は、ブート前に古いドライブを取り外してください。取り外さないと、Windows の起動で問題が発生する可能性があります。

古いドライブを取り外す必要があるときは、コンピュータの電源を切ってください。取り外す必要がないときは、レスキュー メディアを取り出してからコンピュータを再起動します。

Windows でコンピュータを起動します。新しいハードウェア(ハード ドライブ)が見つかったため Windows を再起動する必要があると表示される場合があります。システムが正常に動作することを確認してから、元の起動順序を復元します。

9.3 データ パーティションまたはディスクのリカバリ

既に説明したとおり、ハード ドライブが検出されない、またはドライブ文字が変更されるなどの問題を避けるために、データ パーティションおよびディスクは通常、Windows 上でリカバリします。リカバリ中に問題が発生するリスクをさらに低くするには、リカバリするバックアップ アーカイブをベリファイし、chkdsk を使用してリカバリ先のディスクをチェックします。

リカバリに使用するバックアップ アーカイブが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続してドライブの電源が入っていることを確認します。この操作は、Acronis True Image Home を起動する前に完了しておきます。

1. Acronis True Image Home を起動します。
2. メイン メニューで **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** を選択してから、リカバリするデータ パーティションを含むイメージのバックアップを選択します。
3. **[リカバリの方法]** の手順で、**[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
4. リカバリ対象はデータ パーティションなので、**[リカバリ元]** の手順で **[MBR とトラック 0 のリカバリ]** チェックボックスをオンにする必要はありません。リカバリするデータ パーティションのみを選択します。
5. 次の手順では、リカバリするパーティションの設定を選択できます。パーティションを元の場所にリカバリする場合は、設定の確認だけが必要です。パーティションを他の場所にリカバリする場合は、新しい場所を選択し、必要なパーティションの種類を設定します(またはデフォルト設定のままにします)。新しい場所が既存のパーティションである場合は、通常、ドライブ文字およびディスク容量は変更しません。データ用に新しいハード ドライブを設置した後などで、新しい場所が未割り当て領域である場合は、新しいパーティションのサイズを指定し、論理ディスク文字を割り当てます。
6. 概要を注意深く読みます。正しく設定したかどうかを確認してから、デフォルトのリカバリ オプションを変更する必要がある場合は **[実行]** をクリックします。変更する必要がある場合は **[オプション]** をクリックします。
7. **[オプション]** の手順では、リカバリ後にファイル システムを確認するなどのリカバリ オプションを設定できます。リカバリ オプションの詳細については、「デフォルトのリカバリ オプションの設定『97 ページ参照』」をご参照ください。リカバリ オプションを設定してから、**[実行]** をクリックします。

データ ディスク全体のバックアップをリカバリする場合の手順は、**[リカバリ後にファイル システムをチェックする]** オプションがないなど、いくつかの小さな違いを除いてほぼ同じです。元のハードドライブにリカバリする場合、リカバリ ウィザードの手順は単純です。バックアップしたディスクと同じ数のディスクをリカバリ先として選ぶことだけに注意してください。

データ ディスク バックアップを容量の異なるハード ドライブにリカバリする場合は、容量とジオメトリ(ヘッドの数およびトラックあたりのセクタ数)によって微妙な違いがあります。今までよりも容量の小さいハード ドライブにリカバリする場合は、パーティションのサイズも同じ割合で縮小されます。今までよりも容量の大きいハード ドライブにリカバリする場合は、ハード ドライブのジオメトリが同じ

であれば、バックアップ ディスクはそのままリカバリされ、未割り当ての領域が残ります。ハード ドライブのジオメトリが異なると、パーティションのサイズは同じ割合で増加します。

9.4 ファイルとフォルダのリカバリ

使用したバックアップの種類に応じて、ファイルとフォルダをリカバリする方法はいくつかあります。ほとんどの場合は、Windows 上でファイルとフォルダをリカバリします。バックアップ アーカイブやディスク/パーティションのイメージからファイルやフォルダをリカバリすることもできます。イメージからファイル/フォルダをリカバリするには、イメージをマウント(「イメージのマウント」『 137 ページ参照』を参照)し、Windows エクスプローラを使用して目的の場所にファイル/フォルダをコピーします。

ファイル/フォルダを 1 つだけ、または数ファイルのみをリカバリする必要がある場合は、必要なイメージ バックアップ アーカイブをダブルクリックします。次に、リカバリする必要があるファイルを含むフォルダを開いてファイルを選択し、右クリックして、ショートカット メニューで **【コピー】** を選択します。リカバリするファイルを保存するフォルダを開き、フォルダ内で右クリックして、ショートカット メニューで **【貼り付け】** を選択します。バックアップ アーカイブから保存先フォルダにファイルをドラッグすることもできます。この方法は、データのバックアップ アーカイブの場合でも使用できます。

以下に、イメージからファイル/フォルダをリカバリするもう 1 つの方法を示します。「イメージ アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ」『 89 ページ参照』をご参照ください。

9.4.1 ファイル アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ

ここでは、ファイル バックアップ アーカイブからファイルとフォルダをリカバリする方法を説明します。

1. メインのプログラム メニューで、**【リカバリ】** → **【ファイルのリカバリ】** を選択してリカバリ ウィザードを開始します。
2. アーカイブを選択します。

直接 FTP サーバーからデータを復元するには、アーカイブのサイズを 2 GB 以下に分割してください。2 GB を超えるサイズのファイルが含まれている可能性がある場合は、最初にアーカイブ全体を(最初の完全バックアップとともに)ローカル ハードディスクまたはネットワーク共有ドライブにコピーします。FTP サーバーに対応するための注意および推奨事項については、「サポートされるストレージ メディア」をご参照ください。

新しいコンピュータに Microsoft Outlook を新たにインストールした場合は、Microsoft Outlook の電子メール メッセージ、アカウント、連絡先、設定などを **【電子メールのバックアップ】** からリカバリする前に、新しい Outlook を少なくとも 1 回は起動しておく必要があります。電子メール情報をリカバリした後、初めて Microsoft Outlook を起動すると、正しく動作しない場合があります。

Microsoft Outlook Express を使用しており、他の PC 上の **【電子メールのバックアップ】** から、または Microsoft Windows のクリーン インストール実行後に電子メール フォルダやアカウントをリカバリする場合は、必ず Outlook Express で **【ファイル】** → **【ユーザーの切り替え】** を選択してユーザーを切り替えてから、ダイアログ ボックスの一覧で使用するユーザー名をダブルクリックしてください。

3. 増分バックアップを含むアーカイブからファイルをリカバリする場合、Acronis True Image Home では、その作成日/時間に基づいて、連続する増分バックアップから 1 つを選択できます。このため、ファイル/フォルダを特定の日の状態に戻すことができます。

増分バックアップからデータをリカバリするには、以前に作成したすべてのバックアップ ファイルと最初の完全バックアップが必要です。連続するバックアップに抜けがあると、リカバリはできません。

差分バックアップからデータをリカバリするには、最初の完全バックアップも必要です。

4. 選択したファイル/フォルダをリカバリする先の、コンピュータ上のフォルダ(ターゲット フォルダ)を選択します。必要に応じて、元の場所にデータをリカバリすることも、新しい場所を選択することもできます。新しい場所を選択すると、追加に必要な手順である **【インストール先】** が表示されます。

新しい場所を選択すると、デフォルトでは、選択した項目は元の絶対パスを無視してリカバリされます。項目をそのフォルダの階層全体とともにリカバリしたい場合もあります。その場合は、**【絶対パスをリカバリする】** を選択します。

【インストール先】 の手順で、ディレクトリ ツリー上の新しい場所を選択します。**【新しいフォルダの作成】** をクリックして、ファイルのリカバリ先とする新しいフォルダを作成できます。

5. **【リカバリ元】** の手順で、リカバリするファイルとフォルダを選択します。データすべてをリカバリすることも、アーカイブの内容を参照して希望するフォルダやファイルを選択することもできます。**【次へ】** をクリックして **【完了】** の手順に進みます。デフォルトのリカバリ オプションを変更する必要がある場合は **【実行】** をクリックします。変更する場合は **【オプション】** をクリックします。

6. 最初のオプションの手順では、選択したバックアップが作成されてからデータに加えられた変更を保持できます。このオプションでは、バックアップ アーカイブにあるファイルと同じファイル名が復元先フォルダ内に見つかった場合の処理を選択します。デフォルトでは、既存のファイルとフォルダが上書きされますが、新しいファイルとフォルダは上書きされないように保護されています。必要に応じて適切なチェックボックスを選択することにより、システム ファイル/フォルダや隠しファイル/フォルダが上書きされないように保護できます。

また、このウィンドウで指定した条件に一致するファイルが上書きされないように保護することもできます。

【既存のファイルを上書きする】 チェックボックスをオフにすると、ハードディスク上のファイルは無条件にアーカイブ上のファイルよりも優先されます。

7. リカバリ処理のオプション (リカバリ処理の優先度、ファイルレベルのセキュリティ設定など)を選択します。このページで設定するオプションは、現在のリカバリ タスクにのみ適用されます。
8. ここまでは、手順を選択して設定を編集することにより、作成したタスクを変更できます。**【実行】** をクリックすると、タスクの実行が開始されます。
9. 別ウィンドウにタスクの進行状況が表示されます。**【キャンセル】** をクリックすると、処理は中止されます。中止した手順によってリカバリ先のフォルダが変更されている場合があります。

9.4.2 イメージ アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ

イメージ アーカイブからは、ディスク/パーティション全体だけでなくファイル/フォルダもリカバリできます。

1. メイン プログラム メニューから **【リカバリする】** → **【ディスクとパーティションのリカバリ】** を選択して、リカバリ ウィザードを開始します。
2. アーカイブを選択します。

直接 FTP サーバーからデータをリカバリするには、アーカイブにあるファイルのサイズが 2 GB 以下である必要があります。2 GB を超えるサイズのファイルが含まれている可能性がある場合は、最初にアーカイブ全体を(最初の完全バックアップと共に)ローカル ハードディスクまたはネットワーク共有ドライブにコピーします。FTP サーバーのサポートに関する注意事項と推奨事項については、「サポートされるストレージ メディア」を参照してください。

- 増分バックアップを含むアーカイブからファイルをリカバリする場合、Acronis True Image Home では、連続する増分バックアップのうちの 1 つを作成日時に基づいて選択できます。このため、ファイル/フォルダを特定の日の状態に戻すことができます。

増分バックアップからデータをリカバリするには、以前に作成したすべてのバックアップ ファイルと最初の完全バックアップが必要です。連続するバックアップのいずれかが欠けていると、リカバリはできません。

差分バックアップからデータをリカバリするには、最初の完全バックアップも必要です。

- 【リカバリの方法】** のステップで **【指定したファイルおよびフォルダをリカバリする】** を選択します。
- 選択したファイル/フォルダのリカバリ先を選択します。元の場所にデータをリカバリすることができます。また、必要に応じて新しい場所を選択することもできます。

ブータブル レスキュー メディアを使ってファイルやフォルダをリカバリする際は、**【元の場所】** オプションは無効になっています。これは、スタンドアロン版の Acronis True Image Home で使用されるドライブ文字が Windows でのドライブの識別方法と異なることがあるためです。

新しい場所を選択すると、追加で必要な **【インストール先】** のステップが表示されます。新しい場所を選択した場合、デフォルトでは、元の絶対パスはリカバリせずに、選択した項目がリカバリされます。項目をフォルダ構造全体と共にリカバリすることもできます。この場合、**【絶対パスをリカバリする】** を選択します。

【インストール先】 の手順で、ディレクトリ ツリー上の新しい場所を選択します。**【新しいフォルダの作成】** をクリックして、ファイルのリカバリ先とする新しいフォルダを作成できます。

- リカバリするファイルとフォルダを選択します。不要なフォルダはすべて選択解除してください。選択解除しない場合は余分なファイルを大量にリカバリすることになります。
- 最初のオプションのステップでは、選択したバックアップの作成以降のデータ変更を保持できません。バックアップ アーカイブにあるファイルと同じ名前のファイルがリカバリ先フォルダで見つかった場合の処理を選択します。デフォルトでは、既存のファイルとフォルダは上書きされませんが、最近のファイルとフォルダは上書きしないよう保護されます。必要に応じて該当するチェックボックスをオンにすることで、システムや隠しファイル/フォルダを上書きしないよう保護できます。

また、このウィンドウで指定した条件に一致するファイルを上書きしないよう保護することもできます。

【既存のファイルを上書きする】 チェックボックスをオフにすると、ハードディスク上のファイルはアーカイブのファイルよりも無条件に優先されます。

- リカバリ処理のオプション(リカバリ処理の優先度、ファイルレベルのセキュリティ設定など)を選択します。このページで設定するオプションは、現在のリカバリ タスクにのみ適用されます。
- この時点までは、任意のステップを選択して設定を変更し、作成したタスクに修正を加えることができます。**【実行】** をクリックすると、タスクの実行が開始されます。
- 別のウィンドウにタスクの進行状況が表示されます。**【キャンセル】** をクリックすると、処理は中止されます。中止した手順によってリカバリ先のフォルダが変更されている場合があります。

10 追加のリカバリ情報

10.1 リカバリ ウィザード - 詳細情報

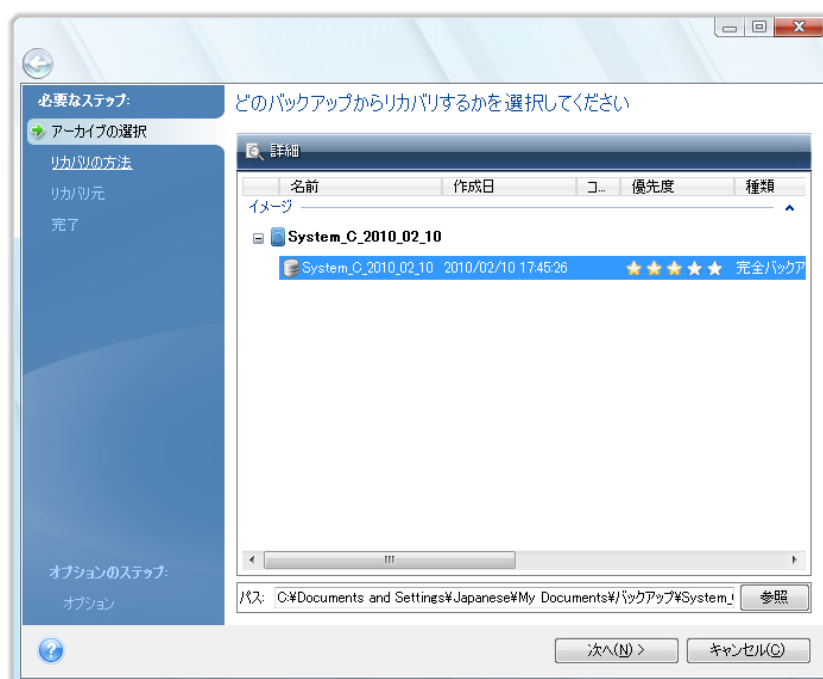
ここでは、リカバリ ウィザードに関して、イメージ バックアップからのパーティション/ディスクのリカバリについて説明します。ファイルやフォルダをリカバリする必要がある場合は、「ファイルとフォルダのリカバリ『88 ページ参照』」をご参照ください。

10.1.1 リカバリ ウィザードの開始

メインのプログラム メニューで[リカバリ] → [ディスクとパーティションのリカバリ] を選択してリカバリ ウィザードを開始します。

10.1.2 アーカイブの選択

1. アーカイブを選択します。Acronis True Image Home のデータベースにはバックアップ アーカイブの場所の情報が格納されており、その情報を基にアーカイブの一覧が表示されます。目的のバックアップが一覧に表示されていない場合(たとえば、そのバックアップがかなり前に、以前のバージョンの Acronis True Image Home によって作成されたものである場合)は、手動でバックアップを選択することができます。その場合は、[参照] をクリックし、ディレクトリ ツリーからバックアップの保存先を選択し、右ペインでバックアップを選択します。



アーカイブが CD などのリムーバブル メディアに格納されている場合は、まず最後に作成した CD を挿入し、その後、リカバリ ウィザードの指示に従って新しいディスクから順に挿入します。

FTP サーバーから直接データをリカバリするには、アーカイブを構成するファイルのサイズが 2 GB 以下でなければなりません。2 GB を超えるサイズのファイルが含まれている可能性がある場合は、最初に

アーカイブ全体を(最初の完全バックアップとともに)ローカル ハードディスクまたはネットワーク ドライブにコピーします。FTP サーバー サポートに関する注意と推奨事項については、「サポートされるストレージ メディア」を参照してください。

Windows Vista のシステム ディスクをバックアップからリカバリするときに、システム ディスクに復元ポイントが含まれている場合は、リカバリ後のシステム ディスクからコンピュータを起動してシステム復元ツールを開いたときに、復元ポイントの一部(またはすべて)が失われることがあります。

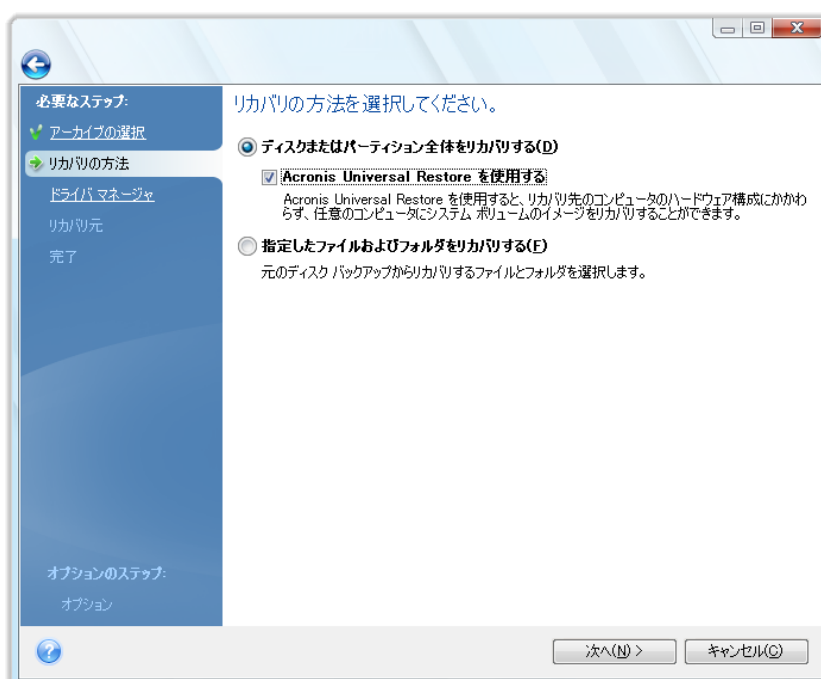
アーカイブがパスワードで保護されている場合は、パスワードを入力する必要があります。正しいパスワードを入力しなければ、パーティション レイアウトは表示されず、[次へ] ボタンもクリックできません。

- 増分バックアップを含むアーカイブからデータをリカバリする場合、Acronis True Image Home では、連続する増分バックアップの 1 つを作成日時によって選択できます。つまり、特定の日の状態にディスク/パーティションを戻すことができます。

増分バックアップからデータをリカバリするには、それ以前のすべてのバックアップ ファイルと最初の完全バックアップが必要です。連続するバックアップのいずれかが欠けていると、リカバリはできません。差分バックアップからデータをリカバリするには、最初の完全バックアップも必要です。

10.1.3 リカバリの方法の選択

リカバリの対象を選択します。



ディスクまたはパーティション全体をリカバリする

ディスクとパーティションのリカバリの種類を選択したら、必要に応じて以下のオプションを選択します。

セクタ単位

ディスクまたはパーティション上で使用されているセクタと未使用のセクタの両方がリカバリされます。このオプションは、セクタ単位のバックアップのリカバリを選択した場合にのみ表示されます。

ディスクまたはパーティションのサイズを変更する(上級ユーザー用)

このチェックボックスは、CD または DVD からのバックアップのリカバリを選択した場合にのみ表示されます。デフォルトでは、このチェックボックスはオフになっており、パーティションは「現状のまま」リカバリされます。これにより、バックアップ アーカイブが複数の CD または DVD に分割されている場合に、パーティションのリカバリ時のディスク交換を減らすことができます。パーティションまたはディスクのサイズを変更する必要があるときにこのチェックボックスをオンにすると、ディスク交換の回数が大幅に増えるため、すべての CD または DVD をハードディスク上のフォルダにコピーし、そのフォルダからリカバリすることをお勧めします。

Acronis Universal Restore の使用

Universal Restore(別製品の Acronis Plus Pack で提供)を使用すると、別種のハードウェアが搭載されたコンピュータにシステム パーティションのイメージをリカバリできます。

指定したファイルおよびフォルダをリカバリする

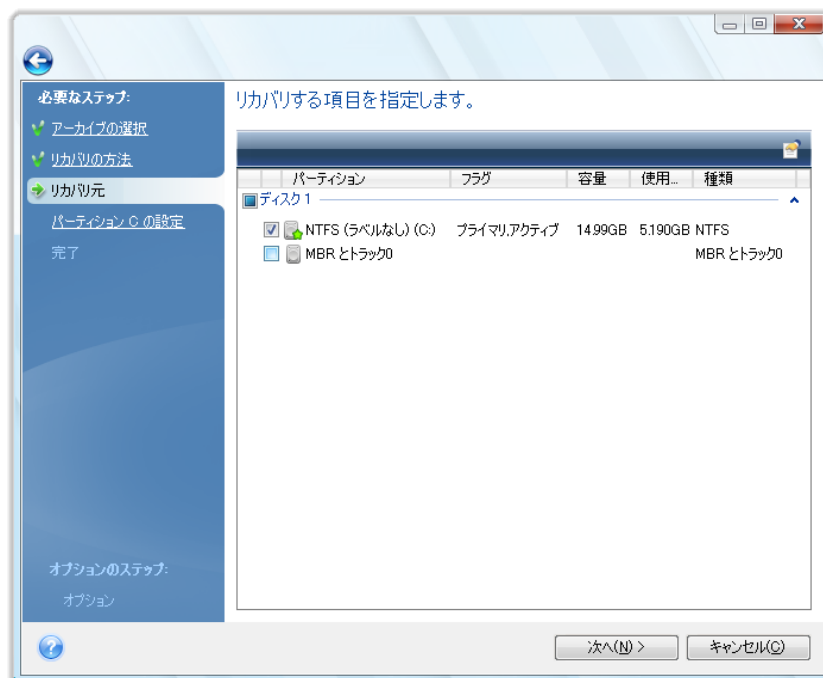
システムをリカバリせずに、破損したファイルの修復だけが目的の場合は、**[指定したファイルおよびフォルダをリカバリする]** を選択します。

ディスク/パーティション イメージからファイルをリカバリできるのは、ファイル システムが FAT または NTFS の場合だけです。

10.1.4 リカバリするディスク/パーティションの選択

選択したアーカイブ ファイルに、複数のパーティションや、場合によっては複数のディスクが含まれている可能性があります。どのディスク/パーティションをリカバリするかを選択してください。

1 回のセッションで複数のパーティションやディスクを 1 つずつリカバリすることができます。その場合は、最初のディスクを選択してそのパラメータを設定してから、リカバリ対象の他のパーティションやディスクのそれぞれについても、同様にパラメータを設定します。



ディスクおよびパーティション イメージには、マスタ ブート レコード (MBR) とトラック 0 のコピーが含まれています。これらは、このウィンドウ内の独立した 1 つの行に表示されます。MBR とトラック 0 をリカバリするかどうかを指定するには、該当するチェックボックスを選択します。MBR のリカバリは、システムを起動するために不可欠な場合に行います。

MBR のリカバリを選択すると、次のステップの画面の左下に [ディスク シグネチャをリカバリ] ボックスが表示されます。ディスク シグネチャのリカバリが必要になるのは、次のような理由からです。

1. Acronis True Image Home でスケジュールされたタスクが作成されるときに、ソース ハードディスクのシグネチャが使用されます。同じディスク シグネチャをリカバリする場合は、前に作成されたタスクを再作成または編集する必要はありません。
2. インストールされているアプリケーションによっては、使用許諾やその他の目的にディスク シグネチャを使用します。
3. Windows の復元ポイントを使用する場合は、ディスク シグネチャがリカバリされなければ復元ポイントは失われます。
4. また、ディスク シグネチャをリカバリすると、Windows Vista の「以前のバージョン」機能で使用する VSS スナップショットをリカバリすることができます。

このチェックボックスがオフの場合は、リカバリされたドライブの新しいディスク シグネチャが Acronis True Image Home によって生成されます。これが必要になる可能性があるのは、イメージ バックアップを使用する目的が災害復旧ではなく、Windows Vista のハードディスクドライブのクローンを別のドライブに作成する場合です。元のディスク シグネチャを復元してクローンを作成した後に、両方のドライブが接続された状態で Windows を起動すると、問題が発生します。Windows が起動されると、接続されているすべてのドライブのディスク シグネチャがローダによって検査され、2 つのディスク シグネチャが同一の場合は、2 番目のディスク (おそらくクローン ディ

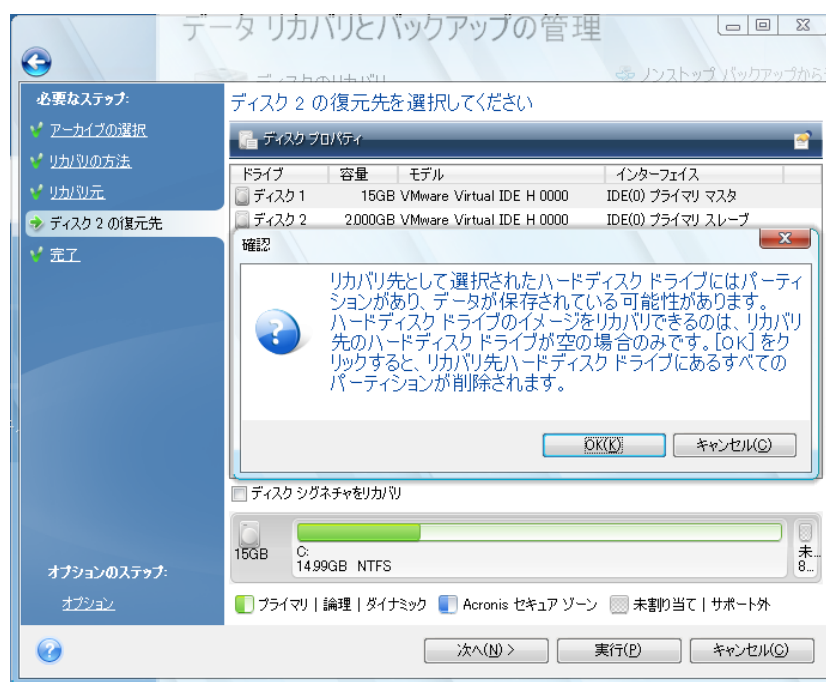
スク)のシグネチャが変更されます。クローン ディスクのシグネチャが変更された後は、元のディスクなしでクローン ディスク単独でシステムを起動することはできなくなります。クローン ディスクのレジストリの MountedDevices 項目は元のディスクのシグネチャを参照していますが、元のディスクが接続されていないと、そのシグネチャは取得できないからです。

10.1.5 リカバリ先ディスク/パーティションの選択

1. 選択したイメージのリカバリ先となるディスクまたはパーティションを選択します。データを元の場所にリカバリすることも、別のディスク/パーティションや未割り当ての領域にリカバリすることもできます。リカバリ先のパーティションの空き領域が、イメージ データの圧縮解除後のサイズ以上であることが必要です。

リカバリ先のパーティションに格納されているデータはすべてイメージ データで置き換えられるので、バックアップされていないデータの中に必要なデータが残っていないことを確認してください。

2. ディスク全体をリカバリするときは、リカバリ先ディスクが空かどうかを調べるためにディスク構造の分析が行われます。



リカバリ先ディスクにパーティションがある場合は、ディスクにパーティションが存在し必要なデータが含まれている可能性があることを知らせる確認ウィンドウが表示されます。

次のいずれかを選択する必要があります。

- **OK** - 既存のパーティションはすべて削除され、パーティションのデータはすべて失われます。
- **キャンセル** - 既存のパーティションは一切削除されず、リカバリ処理は続行されません。処理をキャンセルするか、別のディスクを選択する必要があります。

実際の変更やデータ消去はまだ行われずに注意してください。この時点では、手順の確認のみが行われます。すべての変更は、ウィザードの【概要】ウィンドウの【実行】がクリックされるまでは行われません。

10.1.6 リカバリするパーティションの種類の変更

パーティションをリカバリする際に、パーティションの種類を変更できます。ただし、ほとんどの場合、その必要はありません。

変更が必要な場合について説明するために、オペレーティング システムとデータのいずれも、損傷したディスクの同じプライマリ パーティションに保存されていたと仮定してみましょう。

システム パーティションを新しい(または同じ)ディスクにリカバリし、オペレーティング システムをそこから起動する場合は、**[アクティブ]** を選択します。

Acronis True Image Home では、システム パーティションのリカバリ中に起動情報が自動的に修正され、システム パーティションは元のパーティション(またはディスク)にリカバリされない場合でも起動可能になります。

既にパーティションとオペレーティング システムが存在する別のハードディスクにシステム パーティションをリカバリすることは、一般的に、データだけを必要としている場合に行われます。この場合は、パーティションを**論理**パーティションとしてリカバリすることで、データのみアクセスします。

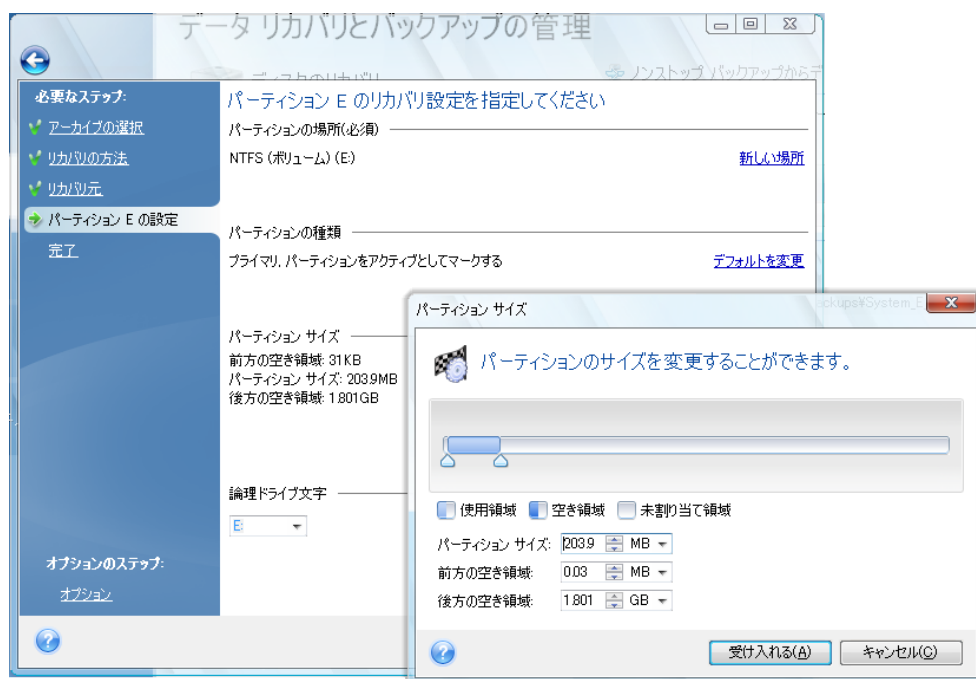
デフォルトでは、元のパーティションの種類が選択されます。

オペレーティング システムがインストールされていないパーティションを **[アクティブ]** に設定すると、コンピュータを起動できなくなります。

10.1.7 リカバリするパーティションのサイズおよび場所の変更

パーティションのサイズと場所を変更するには、画面の水平バー上でパーティションまたはその境界をドラッグするか、該当するフィールドに対応する値を入力します。

この機能を使用すると、リカバリするパーティション間でディスク領域を再配分することができます。この場合、縮小するパーティションを最初にリカバリする必要があります。



この変更方法は、ハードディスクのイメージを作成し、そのイメージをより大きなパーティションにリカバリすることによって、ハードディスクを新しい大容量のハードディスクにコピーする場合に役立ちます。

10.1.8 リカバリされたパーティションへのドライブ文字の割り当て

Acronis True Image Home によってリカバリされたパーティションには、未使用のドライブ文字が割り当てられます。任意のドライブ文字をドロップダウン リストから選択することも、**[自動]** 設定を選択してドライブ文字を自動的に割り当てることもできます。

FAT および NTFS 以外の、Windows がアクセスできないパーティションにはドライブ文字を割り当てないでください。

10.1.9 リカバリ オプションの設定

[完了] ステップで **[オプション]** をクリックすると、リカバリ処理のオプション(リカバリ処理の優先度など)を選択できます。この設定は、現在のリカバリ タスクのみに適用されます。また、デフォルトのオプションを変更することもできます。詳細については、「デフォルトのリカバリ オプションの設定」『 97 ページ参照』を参照してください。

10.1.10 リカバリの実行

この時点までは、任意のステップを選択して設定を変更し、作成したタスクに修正を加えることができます。**[キャンセル]** をクリックすると、ディスクに変更は加えられません。**[実行]** をクリックすると、タスクの実行が開始されます。

別のウィンドウにタスクの進行状況が表示されます。**[キャンセル]** をクリックすると、処理は中止されます。ただし、リカバリ先のパーティションが削除され、その領域が未割り当てになることに注意してください。リカバリが失敗した場合にも、同じ結果になります。削除されたパーティションをリカバリするには、再度パーティションをイメージからリカバリしてください。

10.2 デフォルトのリカバリ オプションの設定

データ リカバリ中にデフォルトで使用されるリカバリ オプションを設定するには、**[ツールとユーティリティ]** → **[オプション]** → **[リカバリ オプション]** を選択します。デフォルトのリカバリ オプションは、Acronis True Image Home のインストール中に事前設定した値にいつでも復元することができます。これを行うには、**[オプション]** ウィンドウのツールバーにある **[この値をデフォルトに戻す]** をクリックします。1 つのリカバリ オプションだけをリセットするには、左側のペインでオプションを選択し、**[この値をデフォルトに戻す]** をクリックします。

[すべてデフォルトに戻す] をクリックすると、バックアップ/リカバリ、通知などのすべてのデフォルト オプションは事前に設定された値にリセットされます。このため、このボタンを使用する場合は注意が必要です。

10.2.1 ファイル リカバリ オプション

- **元のセキュリティ設定でファイルをリカバリする**
デフォルトの設定は、**[有効]** です。

バックアップ時にファイルのセキュリティ設定が保持されている場合(「ファイル レベルのセキュリティ設定」『74 ページ参照』を参照してください)は、ファイルのセキュリティ設定をリカバリするか、またはリカバリ先のフォルダのセキュリティ設定をファイルに継承させるかを選択できます。

このオプションが有効になるのは、ファイル/フォルダ アーカイブからファイルをリカバリする場合のみです。

- **リカバリされたファイルに現在の日時を設定する**

デフォルトの設定は、[無効] です。

ファイルの日付/時刻をアーカイブからリカバリするか、現在の日付/時刻を割り当てるかを選択することができます。デフォルトでは、アーカイブのファイルの日付と時刻が割り当てられます。

- **リカバリ前にバックアップ アーカイブを検証する**

デフォルトの設定は、[無効] です。

アーカイブからデータをリカバリする前に、Acronis True Image Home で整合性をチェックすることができます。アーカイブが破損している疑いがある場合は、このオプションを有効にします。

- **リカバリ後にファイル システムをチェックする**

デフォルトの設定は、[無効] です。

イメージからパーティションをリカバリ済みの場合、Acronis True Image Home でファイル システムの整合性をチェックできます。これを行うには、このオプションを有効にします。

このオプションの使用に関する制限

- ファイル システムのチェックは、FAT16/32 および NTFS ファイル システムを使用してパーティションをリカバリするときのみ使用することができます。
- システム パーティションを元の場所にリカバリする場合のように、リカバリ中に再起動が必要な場合は、ファイル システムはチェックされません。

10.2.2 ファイル上書きオプション

このオプションは、イメージからのディスクとパーティションのリカバリには適用されません。

デフォルトでは、既存のファイルとフォルダは上書きされますが、最近のファイルとフォルダは上書きしないよう保護されます。

アーカイブのリカバリ時に特定のファイルの種類を保持するための、デフォルトのフィルタを設定できます。たとえば、隠しファイルとフォルダ、システム ファイルとフォルダ、新しいファイルとフォルダ、および選択した条件に一致するファイルを、アーカイブ ファイルで上書きしないようにする場合があります。

条件の指定には、一般的な Windows のワイルドカード文字を使用できます。たとえば、拡張子 .exe を持つすべてのファイルを保護するには、「*.exe」を追加します。My???.exe を指定すると、「my」で始まる 5 文字のファイル名が付いた .exe ファイルがすべて保護されます。

[既存のファイルを上書きする] チェックボックスをオフにすると、ハードディスク上のファイルはアーカイブのファイルよりも無条件に優先されます。

10.2.3 処理の前後に実行するコマンド

リカバリ処理の前後に自動的に実行するコマンドやバッチ ファイルを指定できます。【編集】をクリックして【コマンドの編集】ウィンドウを開くと、コマンド、コマンドの引数、および作業ディレクトリを簡単に入力したり、フォルダを参照してバッチ ファイルを探すことができます。

ユーザーの入力を必要とする対話型のコマンドはサポートされません。

デフォルトで選択されている【コマンドの実行が完了するまで処理を行わない】チェックボックスをオフにすると、リカバリ処理とコマンドの実行を同時に行うことができます。

コマンドが失敗してもリカバリを実行したい場合は、【ユーザー コマンドが失敗したら処理を中止する】チェックボックス(デフォルトではオン)をオフにします。

作成したコマンドの実行をテストするには、【コマンドのテスト】 ボタンをクリックします。

システム パーティションをリカバリするには再起動が必要になるため、システム パーティションを元の場所にリカバリする場合は、リカバリ処理の終了後に実行するコマンドは実行されないことに注意してください。リカバリ処理の終了後に実行するコマンドは、これ以外でもリカバリ処理中に再起動が必要とされる場合は、実行されません。

10.2.4 リカバリの優先度

デフォルトの設定は【低】です。

システム中で実行されているプロセスの優先度は、そのプロセスに割り当てられる CPU やシステム リソースの使用量を決定します。リカバリの優先度を下げることによって、他の CPU タスクが利用できるリソースが増えます。リカバリの優先度を上げると、同時に実行している他のプロセスからリソースを取得するため、リカバリ処理の速度は向上します。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

10.3 ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームに関連するリカバリ処理の詳細情報

以下では、ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームに関連するリカバリ処理について説明します。コンピュータでベーシック ディスクとダイナミック ディスクの両方を使用する場合など、さまざまな状況が考えられます。同様に、MBR パーティションと GPT パーティションの両方のスキームを同時に使用するディスクを使うこともあります。

1) Acronis True Image Home では、ローカル ハード ドライブの次の場所へダイナミック ボリュームをリカバリすることができます。

- 元の場所へ(同じダイナミック ボリュームへ)
- 別のダイナミック ディスクまたはボリュームへ
- ダイナミック グループの未割り当て領域へ
- ベーシック ディスクへ

ダイナミック ボリュームをダイナミック グループの未割り当て領域にリカバリすると、リカバリされたボリュームの種類はアーカイブ内でのボリュームの種類と同じになります。

ダイナミック ディスクにリカバリする際に、手動でダイナミック ボリュームのサイズを変更することはサポートされていません。リカバリ中にダイナミック ボリュームのサイズを変更する必要がある場合は、ベーシック ディスクにリカバリする必要があります。

ダイナミック ボリュームを新しい未フォーマット ディスクに「ベアメタル リカバリ」を行うと、リカバリされたボリュームはベーシックになります。リカバリされたボリュームをダイナミックのままにしておきたい場合は、リカバリの前に、Windows Disk Management スナップインなどのサードパーティ ツールを使用して、ターゲット ディスクを準備(パーティションの設定とフォーマット)する必要があります。

2) ターゲット ディスクのパーティション スキームはリカバリ後に変化しません。

- GPT ディスク イメージを GPT ディスクにリカバリした場合、ターゲット ディスクは GPT ディスクのままです。
- GPT ディスク イメージを MBR ディスクにリカバリした場合、ターゲット ディスクは MBR ディスクのままです。
- MBR ディスク イメージを MBR ディスクにリカバリした場合、ターゲット ディスクは MBR ディスクのままです。
- MBR ディスク イメージを GPT ディスクにリカバリした場合、ターゲット ディスクは GPT ディスクのままです。

GPT ディスクの未割り当て領域にリカバリすることはサポートされていません。

3) 既存のボリュームにリカバリすると、ターゲット ボリュームの種類は変化しません。例:

- ダイナミック ボリュームをベーシック ボリュームにリカバリすると、ターゲット ボリュームはベーシックのままです。
- ダイナミック スパン ボリュームをダイナミック ストライプ ボリュームにリカバリすると、ターゲット ボリュームはストライプのままです。

10.4 Acronis Universal Restore の使用

Acronis Universal Restore(別製品の Acronis Plus Pack によって提供)を使用すると、起動可能なシステム クローンを別のハードウェア上に作成できます(詳細については、「Acronis Universal Restore 『 26 ページ参照』」を参照してください)。元のバックアップを作成したシステムとは異なるプロセッサ、マザーボード、または大容量記憶装置にシステム ディスクを復元するときは、このオプションを選択します。たとえば、壊れたマザーボードを交換した後や、デスクトップからラップトップに移行するときなどに役に立ちます。tib ファイルおよび vhd ファイルのどちらからシステム ディスクを復元する場合でも、Acronis Universal Restore を使用できます。通常は、ブータブル レスキュー メディアを使用する必要があります。

Acronis ノンストップ バックアップ アーカイブからシステム パーティションをリカバリするときは、Acronis Universal Restore を使用できません。

Acronis Universal Restore を使用してシステムを復元する手順は、次のとおりです。

1. BIOS でレスキュー メディアを最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え 『 191 ページ参照』」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して Acronis True Image Home(完全版)を選択します。
3. [ようこそ] 画面の [リカバリする] の下にある [ディスク] リンクをクリックして、リカバリ ウィザードを起動し、リカバリするシステム ディスクのイメージを選択します。スタンドアロン版の

Acronis True Image Home でのドライブ文字は Windows でのドライブの認識方法と異なることがあるため、**[参照]** をクリックしてイメージが格納されているディスクとフォルダを選択し、イメージ ファイルのパスを指定することが必要になる場合があります。

4. **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択し、**[Acronis Universal Restore の使用]** チェックボックスをオンにします。
5. ターゲット ハードウェアに装着されているハードディスク用の大容量記憶装置コントローラ (SCSI、RAID、ファイバ チャネル アダプタなど) がわかっている場合は、**[ドライバ マネージャ]** 手順で、特定のハードウェア用のドライバを検索する場所を指定します。ドライバがフロッピーディスクまたは CD に格納されている場合は、**[リムーバブル メディアからデバイス ドライバを検索する]** チェックボックスをオンにします。ローカル ハードディスクまたはネットワーク共有に格納されているドライバがある場合は、**[次の場所からデバイス ドライバを検索する]** チェックボックスをオンにし (デフォルトでオンになっていない場合)、**[検索パスの追加]** をクリックしてからドライバへのパスを指定します。

このステップで両方のチェックボックスをオンにすると、Acronis Universal Restore ではドライバに関して次の 3 つのソースが使用されます。

- リムーバブル メディア
- この手順で指定されたドライバ ストレージ フォルダ
- Windows のデフォルトのドライバ ストレージ フォルダ (復元されるイメージ内)

使用可能なドライバの中から最適なものが検索され、復元されたシステムにインストールされます。

6. **[リカバリ元]** のステップで、システム パーティションを選択してから、ターゲット パーティション (新しいシステム パーティション) の設定を指定します。パーティションの種類がプライマリでアクティブであることを確認します。通常、パーティションのサイズは自動的に割り当てられ、これを変更する必要はありません。
7. **[完了]** のステップで処理の概要を確認します。バックアップを検証しない場合は **[実行]** をクリックします。検証する場合は、サイドバーで **[オプション]** をクリックし、**[リカバリ前にバックアップ アーカイブを検証する]** チェックボックスをオンにしてから、**[実行]** をクリックします。

復元の際、指定されたフォルダ内で見つからないドライバがあると、エラー メッセージが表示されます。そのような場合は、**[無視]** をクリックして復元を続行するか、または **[キャンセル]** をクリックして処理を取り消し、必要なドライバを見つけてから、再度復元します。

システム パーティションの復元が成功したら、Acronis True Image Home を終了してから BIOS に移動し、システム ハードディスクを最初のブート デバイスにしてから、復元した Windows を起動します。

初めて Windows を起動すると、「新しいハードウェアが見つかりました」というポップアップ メッセージが何回も表示され、コンピュータを再起動するように要求されます。

複数のエディションの Windows によるマルチブート設定のバックアップを復元するために Acronis Universal Restore を使用する場合、最も重要なドライバはすべての Windows インストールについて置き換えられます。

11 Try&Decide

Try&Decide 機能を使用すると、特別な仮想化ソフトウェアをインストールせずに、管理された安全な一時的作業スペースをコンピュータ上に作成できます。オペレーティング システム、プログラム、またはデータに損傷を与えることなく、さまざまなシステム操作を実行できます。

仮想的に変更を行ってから、その変更を元のシステムに適用することができます。行った変更が適切である場合は、これらの変更をシステムに適用することができます。この機能で試す操作としては、未知の差出人からのメール添付ファイルを開いたり、潜在的な危険性のあるコンテンツを含むウェブサイトにアクセスする操作などが考えられます。

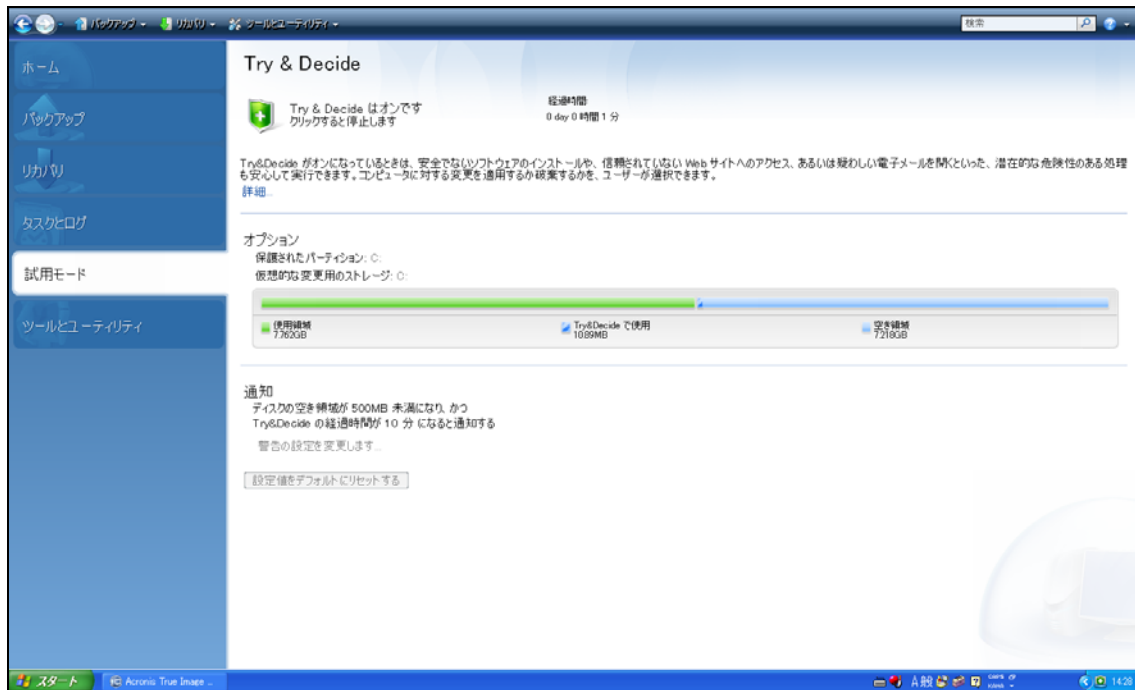
たとえば、ウェブ サイトにアクセスしたり電子メールの添付ファイルを開いて、オペレーティング システムの一時的な複製がウイルスに感染した場合でも、その複製は簡単に削除できるため、被害を受けることはなく、コンピュータにウイルスは感染しません。

Try&Decide モードで POP メール サーバーから電子メールをダウンロードしたり、新しいファイルの作成や既存の文書の編集を行ったりした後、変更を破棄する場合、それらのファイル、文書の変更、および電子メールは失われることにご注意ください。POP 電子メールを使用する場合は、Try&Decide モードを有効にする前に、電子メールをサーバーに残すように電子メール クライアントの設定を変更してください。このようにすると、いつでも電子メールを再度取得できます。同様に、新しいファイルや編集した文書は、Try&Decide で保護されていないドライブに保存してください。

Try&Decide モードを開始した後は、システムに対する影響を心配せずに、システムの更新、ドライバ、およびアプリケーションを安全にインストールすることができます。何らかの問題が生じた場合は、Try&Decide モードで行った変更を単に破棄するだけで済みます。

Try&Decide の最も優れた特長の 1 つは、更新によってオペレーティング システムの一時的な複製に加えられた変更から「本物」のオペレーティング システムが隔離されることです。何らかの不適合が見つかった場合は、更新が適用される前の、変更が加えられていない初期の状態にシステムを簡単に戻すことができます。

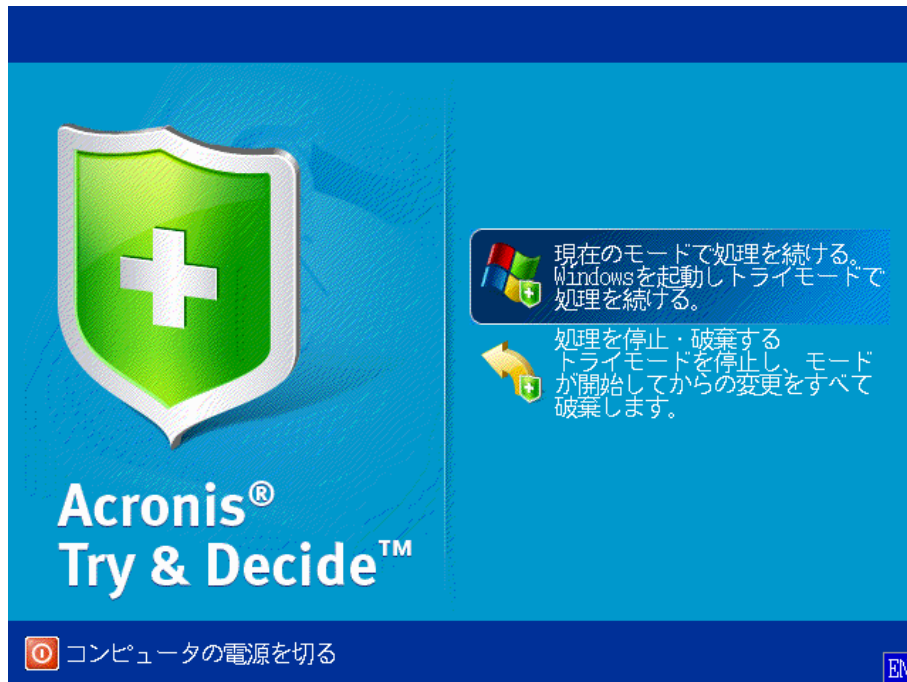
このため、システムの更新が提供されたときに、それを安全にインストールすることができます。Windows Update によって、システムおよび Microsoft 社のアプリケーション用の更新がインストール可能であることを通知された場合は、Try&Decide モードを有効にしてから、更新のインストールを実行します。何らかの問題が発生した場合は、本物のオペレーティング システムとアプリケーションに影響を与えることなく、変更を破棄することができます。



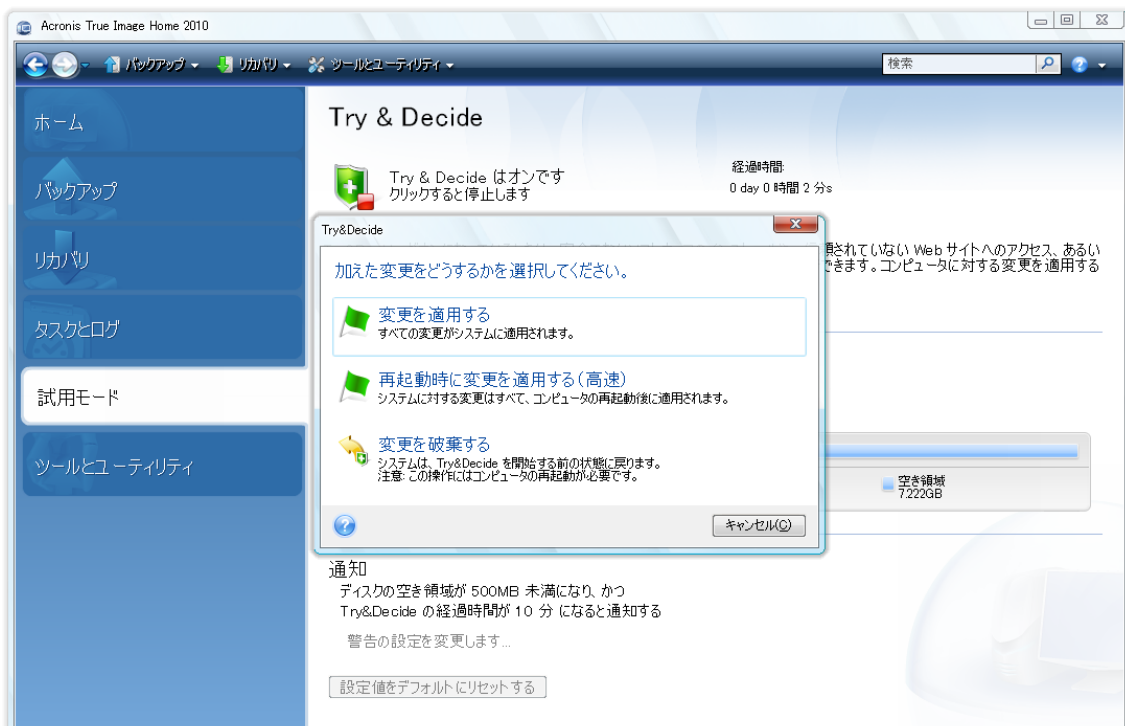
Try&Decide モードはオペレーティング システムを再起動しても継続されるため、必要な限り有効のままにしておくことができます (数日間など)。ただし、長期間有効のままにすると、変更の適用に要する時間も長くなります。

Windows Vista または Windows 7 を使用している場合、Try&Decide モードではコンピュータがアイドル状態のときでもプログラムがディスクの空き領域をかなり消費することがあるため、注意してください。これは、バックグラウンドで実行されるインデックス作成などのハウスキューピング処理のためです。

Try&Decide モードでの作業中に何らかの理由でコンピュータが再起動された場合は、Try&Decide モードを停止して変更を破棄するか、または Try&Decide モードでの作業を継続するかの 2 つの選択肢を示すダイアログが、オペレーティング システムの起動が開始される前に表示されます。これにより、システム クラッシュを発生させた変更を破棄することができます。逆に、たとえばアプリケーションをインストールした後で再起動した場合などは、Windows が起動した後も継続して Try&Decide モードで作業することができます。



最終的に Try&Decide モードをオフにする場合は、**[停止]** ボタンをクリックします。このボタンをクリックすると、Try&Decide モードで行ったシステムへの変更を適用するか破棄するかを選択するためのダイアログが表示されます。



- **[変更を適用する]** では、システムに対する変更を残すことができます。
- **[再起動して変更を適用]** では、変更の適用を高速化できます。これらは、コンピュータの再起動後に適用されます。
- **[変更を破棄する]** では、システムは Try&Decide モードを有効にする前の状態に戻ります。

Try&Decide モードでの作業中は、システムのパフォーマンスが低下することにご注意ください。また、変更を適用する処理にかなりの時間がかかることがあります。

Try&Decide はディスクのパーティションの変更を追跡できないため、パーティションのサイズ変更やレイアウトの変更など、パーティションの仮想処理には Try&Decide モードを使用できないことにご注意ください。また、Try&Decide モードを、ディスクの最適化やエラー チェックを行うユーティリティと同時に使用することはできません。同時に使用すると、ファイル システムに修復不可能な破損が生じたり、システム ディスクが起動不能になったりする場合があります。

Acronis True Image Home は、仮想モードでの変更を保存するために選択した場所のディスク領域がほぼいっぱいになるまで変更を追跡します。この状態になると、アラート メッセージが表示され、それまでに行った変更を適用するか破棄するかをユーザーが選択する必要があります。アラート メッセージを無視した場合、ディスクの空き領域がなくなったときにシステムは自動的に再起動され、変更は破棄されます。この時点ですべての変更は失われます。

Try&Decide モードを開始している場合は、その前にアクティブ化してある Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用することができません。Try&Decide モードを停止して変更を適用または破棄したときは、過去にアクティブ化されていた Acronis スタートアップ リカバリ マネージャはアクティブのままですが、F11 キーを押してもスタートアップ リカバリ マネージャを使用することはできません。F11 キーを使用するには、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをいったん非アクティブ化してから、再びアクティブ化してください。

複数のオペレーティング システムがインストールされているコンピュータで **[変更を破棄する]** を選択して再起動すると、Try&Decide モードでの作業に使用したオペレーティング システム以外のオペレーティング システムは起動できません。もう一度再起動すると、元の MBR が復元されて、他のオペレーティング システムも起動できるようになります。

11.1 Try&Decide の使用

この機能の使い方について説明します。まず、システムのどの部分を保護するのかを決めて、これに応じて Try&Decide のオプションを設定します。これらのオプションには、Try&Decide モードの他の設定も含まれます。

11.1.1 Try&Decide のオプションと通知

Try&Decide のオプションは、必要に応じて構成できます。

- **保護されたパーティション:** - Try&Decide でのセッション中に、不正な変更から保護するパーティションを指定します。Try&Decide のデフォルトではシステム パーティション(ディスク C)が保護されますが、システムの他の任意のパーティションやディスクを保護するように選択することもできます。
- **仮想的な変更用のストレージ:** - Try&Decide で、システムに対する仮想的な変更についての情報を保存する場所を指定します。Try&Decide のデフォルトでは、ディスク C の空き領域に情報が保存されます。このようなストレージとして、Acronis セキュア ゾーン または他の論理ディスクやハードディスク ドライブを選択することもできます。

複数のパーティションを保護するように選択した場合、保護するパーティションの中から仮想的な変更の保存先を選択することはできません。また、外部ハードディスク ドライブは選択できません。

- **通知** - 仮想的な変更の保存用に割り当てたすべての空き領域が Try&Decide によって使用された場合と、指定した時間が経過した場合に警告を表示するかどうかを指定します。デフォルトでは、すべての通知がオンになっています。デフォルトの設定を変更するには、**[警告の設定を変更します...]** をクリックします。

Try&Decide のオプションのデフォルト設定は、**[設定値をデフォルトに戻す]** をクリックすればいつでも復元できます。

11.2 Try&Decide の使用例

Try&Decide 機能はさまざまな面で役立ちます。以下はその例です。

ウイルス対策ソフトウェアをインストールすると、一部のアプリケーションの機能が損なわれる場合があります。ウイルス対策ソフトウェアのインストール後に起動しなくなるプログラムもあります。Try&Decide 機能は、このような問題を防ぐのに役立ちます。以下はその方法です。

1. ウィルス対策プログラムを選択し、試用版をダウンロードします。
2. Try&Decide モードを有効にします。
3. ウィルス対策ソフトウェアをインストールします。
4. ウィルス対策ソフトウェアがコンピュータにインストールされている状態で、通常の作業が実行できるかどうかを試みます。
5. すべての作業が問題なく実行できた場合は、互換性に関する問題は存在しないと判断でき、このウイルス対策ソフトウェアを購入することができます。
6. 何らかの問題が発生した場合は、システムの変更を破棄して、他のベンダのウイルス対策ソフトウェアを試みます。このようにして、別のソフトウェアが正常に動作するかどうかを確認することができます。

別の例を紹介します。間違っ​​てファイルを削除してしまった後に、ごみ箱を空にしたとします。その後、削除したファイルには重要なデータが含まれていたことに気づき、ファイル回復ソフトウェアを使用して、削除したファイルの回復を試みます。ただし、削除したファイルを回復する際に何らかの問題が発生し、回復を試みる前よりも状況が悪化する場合があります。以下は失われたファイルをリカバリする方法の 1 つです。

1. Try&Decide モードを有効にします。
2. 削除ファイルの回復ユーティリティを起動します。
3. ユーティリティによってディスクがスキャンされ、削除したファイルまたはフォルダのエントリが検索されます。削除したエントリが見つかった場合はそのエントリが表示され、リカバリ可能なものを元に戻す機会が得られます。その際に、必要なファイルとは異なるファイルを誤って選択して

しまうと、リカバリしたいファイルがユーティリティにより上書きされてしまう可能性があります。Try&Decide モードを使用していない場合、このようなエラーは致命的であり、ファイルは完全に失われてしまいます。

4. これに対し、Try&Decide が有効になっている場合は、間違っただけの変更を破棄するだけで良く、再び Try&Decide モードを有効にしてから、正しいファイルのリカバリを試みることができます。この操作は、ファイルがリカバリできるまで、またはリカバリで最良の結果が得られるまで、繰り返すことができます。

また、Try&Decide 機能には次の利点もあります。誤ってオペレーティング システムや仕事用のドキュメントを壊されるという心配をせずに、お子様にコンピュータを使用させることができます。

お子様には制限つきアカウントを使用させることを前提としています。

1. Try&Decide モードを有効にします。Try&Decide のオプションの変更や Try&Decide モードの無効化には管理者権限が必要です。
2. ログオフしてから、お子様用アカウントでログオンします。
3. お子様にコンピュータを使用させます。お子様がゲームやインターネットをし終わったら、またはお子様の就寝時間になったら、コンピュータをお子様を使い始める前の状態に戻します。これを行うには、ログオンして Try&Decide セッション中に行われた変更を破棄します。

Windows のコントロール パネルの [プログラムの追加と削除] コンポーネントでは、アプリケーションを完全に削除できるとは限りません。これは、このコンポーネントがアプリケーションの痕跡を残さずにアンインストールするために十分な情報を、ほとんどのアプリケーションが提供していないためです。このため、試用版プログラムを追加して削除すると、ほぼ毎回、コンピュータにゴミ(不要となったデータ)が残り、放置すると Windows の動作が遅くなります。特別なアンインストーラユーティリティを使用したとしても、完全にアンインストールできるとは限りません。しかし、Try&Decide 機能を使うと、すべてのソフトウェアの完全なアンインストールを短時間で簡単に行うことができます。以下はその方法です。

1. Try&Decide モードを有効にします。
2. 評価するソフトウェア アプリケーションをインストールします。
3. アプリケーションを試用します。
4. アンインストールする場合は、Try&Decide モードで行ったコンピュータへの変更をすべて破棄します。

これは、たとえば、さまざまなゲームをプレイしたいユーザーに役立つだけでなく、プロのソフトウェア テスト担当者がテスト用マシンで使用することもできます。

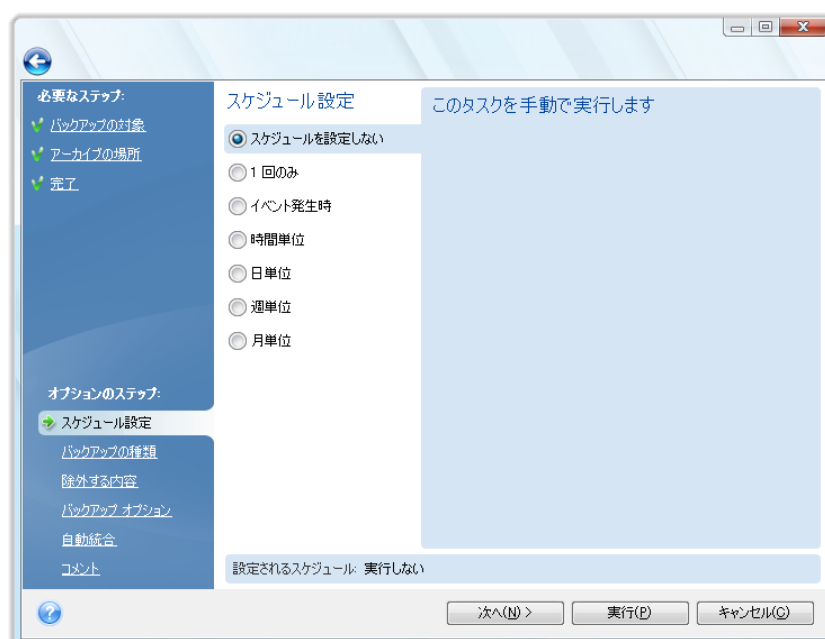
12 タスク スケジュールの作成

12.1 スケジュールされたタスクの作成

バックアップ ウィザード、または検証ウィザード の [スケジュール設定] のステップで新しいタスクのスケジュールを作成できます。また、[タスクとログの管理] 画面のツールバーで、[バックアップタスクの作成] または [検証タスクの作成] をクリックするとスケジュールされたタスクを作成できます。

検証するバックアップ アーカイブがパスワードで保護されている場合は、Acronis True Image Home によりパスワードの入力を求められます。

1. タスク実行のスケジュール設定を行います。以下のスケジュール設定オプションのうち 1 つを選択します。



- **1 回のみ** – タスクは指定された日時に 1 回だけ実行されます。
- **イベント発生時** – タスクは右ペインで選択したイベントの発生時に実行されます。
- **時間単位** – [このタスクを時間単位で実行します] ペインで指定した間隔で定期的にタスクが実行されます。このペインでは、スケジュールを設定しているタスクを実行する間隔を指定します。
- **日単位** – タスクは 1 日に 1 回、または数日に 1 回実行されます。
- **週単位** – タスクは 1 週間に 1 回、または数週間に 1 回、指定した曜日に実行されます。
- **月単位** – タスクは月に 1 回指定した日に実行されます。

スケジュールされたタスクの実行を、コンピュータが次にアイドル状態になるまで延期する場合、[コンピュータのアイドル時にのみタスクを実行する] チェックボックスをオンにします。スクリーンセーバーの [待ち時間] 設定で指定された時間(分)コンピュータのアイドル状態(マウスやキーボードを使用していない状態)が続くと、タスクは自動的に開始されます。タスクの実行は

ユーザーによって中断できないため、いったん開始されたタスクは最後まで完了されます。ただし、タスクの実行中にユーザーはコンピュータで作業を行うことができます。

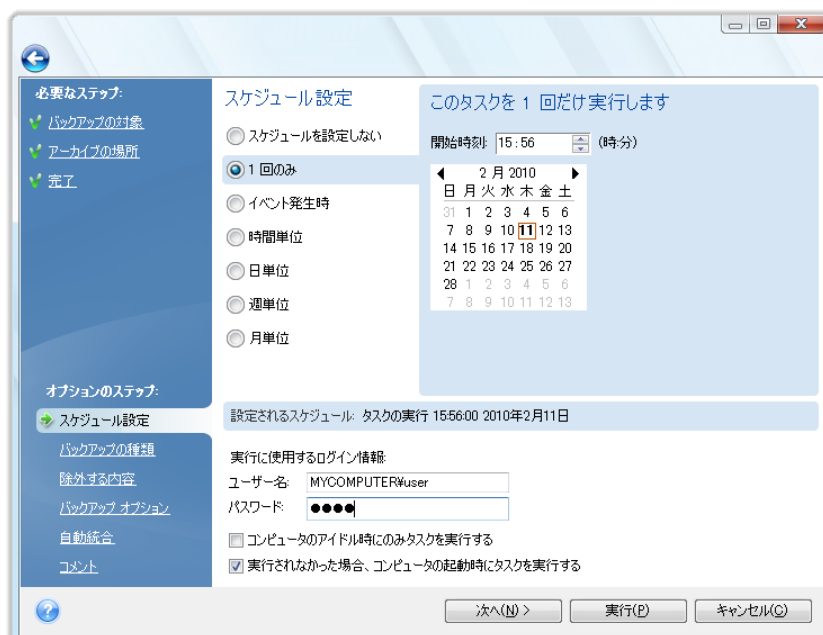
スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合はタスクが実行されませんが、**[実行されなかった場合、コンピュータの起動時にタスクを実行する]** チェックボックスをオンにすると、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に強制的に実行することができます。

USB フラッシュ ドライブへのバックアップを実行するタスクをスケジュールすると、さらに 2 つのチェックボックスがスケジュール画面に表示されます。**[実行されなかった場合、デバイスの接続時にタスクを実行する]** チェックボックスと **[現在のデバイスが接続されている場合にのみタスクを実行する]** チェックボックスです。最初のチェックボックスをオンにすると、スケジュールした時刻に USB フラッシュ ドライブが接続されていなかったために実行されなかったバックアップを、USB フラッシュ ドライブが接続されたときに実行することができます。同じデバイスが接続された場合にのみ、実行されなかったタスクを実行するには、**[現在のデバイスが接続されている場合にのみタスクを実行する]** チェックボックスもオンにします。このチェックボックスをオフにした場合、実行されなかったタスクは、任意の USB フラッシュ ドライブが接続されたときに実行されます。

1. タスクの開始時間とその他のスケジュール パラメータを、選択した間隔に従って指定します。ほとんどのスケジュールされたタスク(1 回だけ実行するようにスケジュールされたタスクを除く)については、**[開始日]** チェックボックスをオンにし、タスクを初めて実行する日付を設定することができます。これは、特定のバックアップ シナリオを実装するときに役立つことがあります。例については、「自動ローテーションによる完全バックアップと増分/差分バックアップ」『116 ページ参照』を参照してください。
2. 次に、実行するタスクの所有者となるユーザー名を指定します。指定しないと、スケジュール設定による実行は利用できません。
3. ユーザー名を入力します(またはログオンしているユーザー名をそのまま使用します)。パスワードを入力してください。

12.1.1 1 回のみ実行の設定

1 回のみの実行を選択した場合は、開始時刻を設定します。次に、表示されたカレンダーを使用して、タスクを実行する日付を選択します。



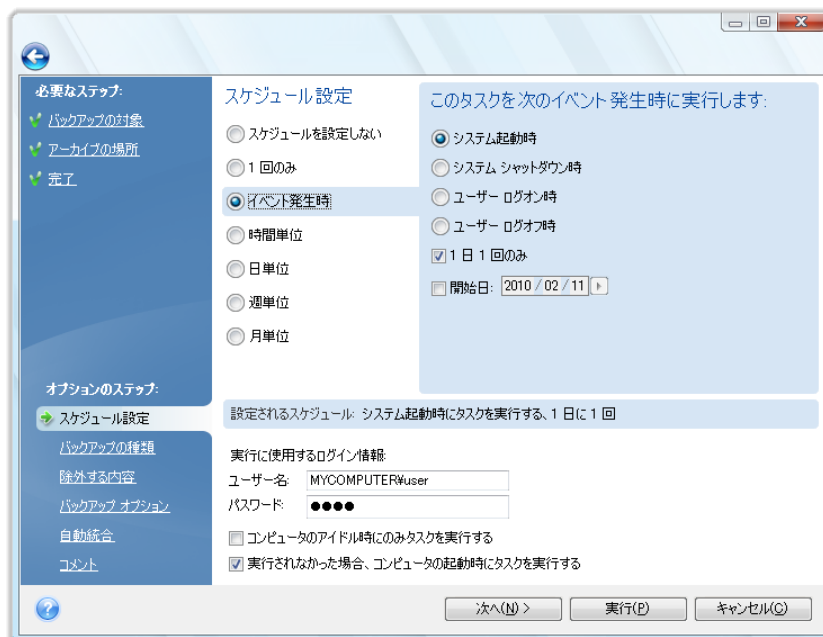
12.1.2 イベント発生時の実行の設定

イベント発生時の実行を選択した場合は、タスクを実行するイベントを設定します。

- **[システム起動時]** – オペレーティング システムの起動時に毎回タスクが実行されます。
- **[システム シャットダウン時]** – システムのシャットダウンまたは再起動の前に毎回タスクが実行されます。
- **[ユーザー ログオン時]** – 現在のユーザーがオペレーティング システムにログオンするたびにタスクが実行されます。
- **[ユーザー ログオフ時]** – 現在のユーザーがオペレーティング システムからログオフするたびにタスクが実行されます。

また、タスクの開始日を指定することもできます。

当日そのイベントが最初に発生したときのみタスクを実行する場合は、**[1 日 1 回のみ]** チェックボックスをオンにします。



12.1.3 定期的な実行の設定

[時間単位] オプションを選択した場合は、開始時刻を設定し、バックアップの実行間隔を時間と分単位で指定します。また、タスクの開始日を指定することもできます。



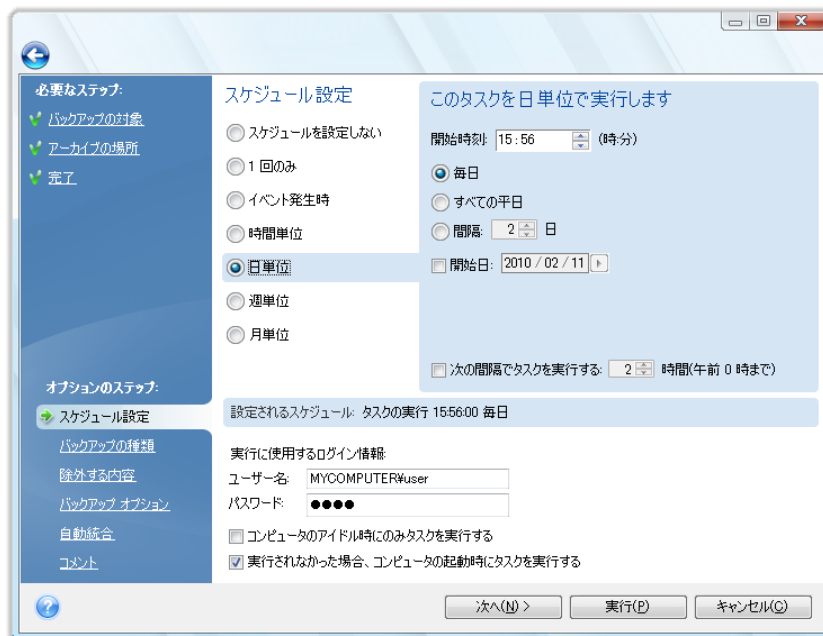
12.1.4 日単位の実行の設定

日単位の実行を選択した場合は、タスクの実行を開始する時刻と日を設定します。

- **[毎日]**
- **すべての平日**
- **[x 日に 1 回]** - 数日に 1 回タスクを実行します (間隔を指定します。)

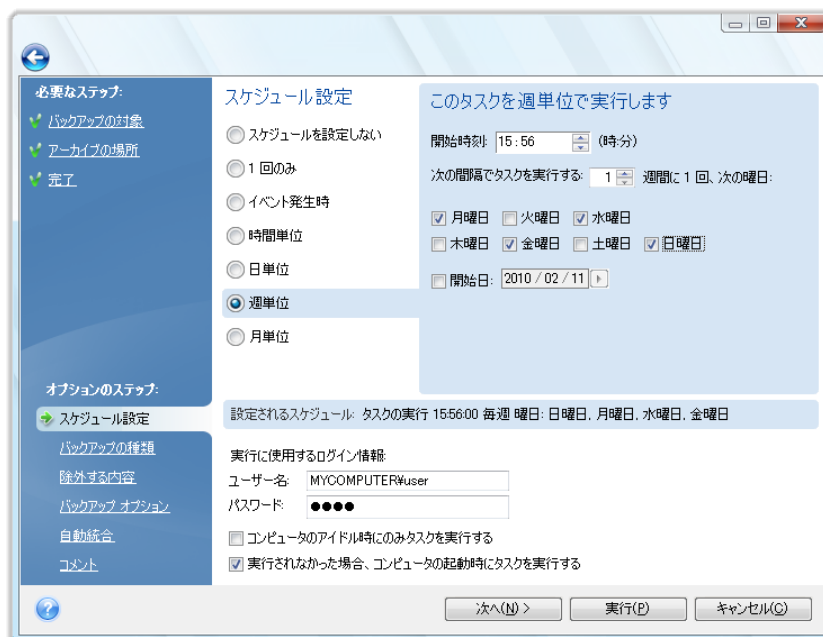
1 日に数回タスクを繰り返す場合は、**[次の間隔でタスクを実行する: x 時間(午前 0 時まで)]** チェックボックスをオンにし、時間単位で間隔を指定します。

また、タスクの開始日を指定することもできます。



12.1.5 週単位の実行の設定

週単位の実行を選択した場合、開始時刻を設定し、[x 週間ごとにタスクを実行する:] ボックスにタスクの実行間隔(毎週、2 週間に 1 回など)を指定し、タスクを実行する曜日を選択します。また、タスクの開始日を指定することもできます。



12.1.6 月単位の実行の設定

月単位の実行を選択した場合は、タスクの実行を開始する時刻および曜日を設定します。

- **[指定曜日]** - 指定した曜日(例、第 2 火曜日や第 4 金曜日)にタスクを実行します。ドロップダウン リストから選択します。
- **[指定日]** - 指定した日付にタスクを実行します。たとえば、タスクをその月の 10 日、20 日、最終日に実行するように設定できます。

また、タスクの開始日を指定することもできます。



12.2 アップグレード時のスケジュールされたタスクのインポート

以前のバージョンの Acronis True Image Home からアップグレードするときに既にスケジュールされたタスクがある場合は、アップグレード後の Acronis True Image Home の初回起動時にこれらのタスクが自動的に検索され、**[スケジュールされたタスク]** タブの **[タスクとログ]** 画面に表示されるタスクの一覧に追加されます。

これらのタスクはスクリプトに従って実行されます。専用のフォルダ(通常のパスは、C:\Documents and Settings\All Users\Application Data\Acronis\TrueImageHome\Scripts です)に格納されているタスク スクリプトが検索されます。アップグレード後に作成された新しいタスクのスクリプトは、同じフォルダ内に格納されます。

Acronis True Image Home 2009 からアップグレードした場合、インポートされたタスクを使用してプログラムで提供されるすべての処理を実行することができます。これらの処理は、「スケジュールされたタスクの管理」『114 ページ参照』セクションで説明されています。

Acronis True Image Home 2009 でスケジュール設定しないで手動でバックアップや検証を実行したときに作成された、スケジュールされていないタスクがある場合、これらも検索され、**[スケジュールされていないタスク]** タブに表示されます。

Acronis True Image Home のバージョン 11 からアップグレードする場合、既存のタスクも検索されます。ただし、これらのタスクは手動でのみ実行できます。これは、Acronis True Image Home 2009 でタスク スクリプトの形式が大きく変更されたからです。このため、古いタスクを維持する意味はあまりありません。スケジュールされたタスクを最初から新規に作成する必要があります。Acronis True Image Home 10 以前からタスクをインポートすることはできません。

12.3 スケジュールされたタスクの管理

スケジュールされたタスクを管理するには、サイドバーの **【タスクとログ】** をクリックします。表示される **【タスクの管理】** 画面では、右ペインの **【スケジュールされたタスク】** タブがデフォルトで選択されています。このタブには、すべてのスケジュールされたタスクの名前、ステータス、スケジュール、前回の実行時間、前回の結果、および所有者が一覧表示されます。

デフォルトでは自分のタスクだけが表示されますが、他のユーザーのタスクを表示または管理することもできます。その場合は、メイン プログラム メニューの **【ツールとユーティリティ】** → **【オプション】** → **【外観】** を選択します。次に、**【フィルタ】** を選択し、**【現在のユーザーが作成したタスクのみを表示する】** チェックボックスをオフにします。

タスクのパラメータを変更するには、パラメータを編集します。方法は作成時と同様ですが、以前選択したオプションがそのまま設定されるので、入力が必要なのは変更される部分のみです。タスクを編集するには、タスクを選択してツールバーの **【編集】** をクリックします。

変更するのがタスク スケジュールのみの場合は、タスクを選択してツールバーの **【スケジュールの変更】** をクリックします。

確認しながらタスクを削除するには、タスクを選択してツールバーで **【削除】** をクリックします。

タスクの名前を変更するには、タスクを選択してツールバーの **【名前の変更】** をクリックし、新しいタスク名を入力します。

選択されているタスクの実行をすぐに開始するには、ツールバーの **【開始】** をクリックします。

タスクがスケジュールされているけれども、しばらくの間は実行する必要がなく、その後で実行する可能性がある場合は、ツールバーの **【無効化】** をクリックしてタスクを無効化しておき、後でそのタスクが必要になったときに再度有効化することができます。そのため、タスクを最初から作成しなおす必要はありません。

複数の類似したタスクを作成する必要がある場合は、タスクを選択してツールバーの **【クローン作成】** をクリックするとタスクのクローンが作成されます。作成されたタスクの名前を変更し、必要な変更を行います。

これまでに説明した操作はいずれも、スケジュールされたタスクを右クリックしたときに開くショートカット メニューから選択することもできます。

同じ操作を、スケジュールされていないタスク (**【スケジュールされていないタスク】** タブに表示されます) に対して実行することもできます。スケジュールされていないタスクを編集するときに、何らかのスケジュール オプションを設定すると、そのタスクは **【スケジュールされていないタスク】** タブから **【スケジュールされたタスク】** タブに移動します。

12.4 バックアップ スケジュール設定のシナリオ例

12.4.1 制限違反による自動削除が設定されている完全バックアップ

ユーザーの中には完全バックアップのみを作成するユーザーもいます。完全バックアップでは、増分バックアップや差分バックアップよりも短時間でリカバリを行うことができます。また、バックアップをリカバリするときに 1 つのファイルのみが必要なため、信頼性が高いと考えられています。

バックアップを格納するための専用のハードディスクに多くの空き領域があり、週単位で作成され、約 1 か月分のシステム ディスクの 5 つの完全バックアップを保持したい場合を考えてみましょう。また、バックアップ アーカイブに 5 つのバックアップを保持するために、最も古いバックアップの自動削除を設定するとします。この操作は、次の手順で実行できます。

a) バックアップ タスクの設定時に [スケジュール設定] のステップに達したら、[週単位] オプションをオンにし、デフォルトの値 [1 週間ごとにタスクを実行する] のままにして、バックアップを作成する曜日(例、土曜日)を選択します。

b) [バックアップの方法] のステップで [完全] を選択し、[新しい完全バックアップで以前のバックアップを上書きする] チェックボックスをオフにします(デフォルトではオンに設定されています)。

c) [自動統合] のステップで、[バックアップ数が次を超えたとき] チェックボックスをオンにし、バックアップの制限を 5 つに設定し、バックアップ タスクの設定を終了します。

直近の土曜日から完全バックアップの作成が開始され、最初の 5 つのバックアップがアーカイブに蓄積されます。6 回目の完全バックアップが実行されると、バックアップの数の制限を超える 6 つ目のバックアップが作成されます。完全バックアップを統合することができないため、最も古いバックアップが削除されます。次のタスクの実行時もこの手順が繰り返されます。

もちろん、このバックアップ シナリオは、日単位や月単位など、より多くの頻度および少ない頻度で完全バックアップを作成するために使用できます。ユーザーは適切なスケジュールを設定する必要があります。

前述のバックアップ シナリオで、[バックアップの保存期間が次の日数を超えたとき:] チェックボックスをオンにし、日数をたとえば 30 日に設定しても同じ結果になります。保存期間が 30 日を超えた最も古いバックアップが削除され、30 日「未満」の 5 つのバックアップが残されます。

12.4.2 バックアップ ストレージがいっぱいになった場合の自動削除が設定されている完全バックアップ

完全バックアップのみを使用し、最も古いアーカイブを自動的に削除するシナリオをもう 1 つ示します。バックアップ用の空き領域がある限り専用のハードディスク ドライブに毎週完全バックアップを保存し、最も古いバックアップを削除して次のバックアップ用に領域を空ける場合を考えてみましょう。

この場合、前述のバックアップ シナリオの a) と b) のようにタスク オプションを設定する必要があります。[自動統合] のステップで [アーカイブのサイズが次を超えたとき] チェックボックスをオンにし、アーカイブ サイズの制限を、ハードディスクの容量から完全バックアップの推定サイズを引いた値に設定します(この制限値は初回完全バックアップを実行し、バックアップ ファイルの実際のサイズを確認した後にタスクを編集して調整できます)。自動統合手順(この場合は最も古いバックアップが削除されます)が開始されるには、アーカイブ サイズの制限違反が発生する必要があります。この状況は、完全バックアップが次回作成されたときに、ディスクの容量がほとんど使用された場合に発生します。アーカイブ サイズの制限を設定するときは、統合の前に作成される最新の完全バックアップ用に領域を余分に確保することをお勧めします。これは、最初の完全バックアップよりも以降の完全バックアップが大きくなる可能性があるからです。領域を確保するもう 1 つの理由は、バックアップ ファイル用の十分な領域がない場合、タスクの実行が中断され、新しいバックアップを作成できないばかりでなく、最も古いバックアップを削除できなくなるからです。対応しない場合、この状況が以降のタスクの実行中に繰り返されます。

12.4.3 自動削除が設定された Acronis セキュア ゾーンへの完全バックアップ

完全バックアップのみを作成し、最も古いバックアップを自動的に削除するシナリオを実装するもう 1 つの方法があります。これには、Acronis セキュア ゾーンを使用します。前述のシナリオと同様に、バックアップ用の空き領域がある限り専用のハードディスク ドライブに毎週完全バックアップを保存し、最も古いバックアップを削除して次のバックアップ用に領域を空ける場合を考えてみましょう。

a) バックアップの保存に使用するハードディスク ドライブに Acronis セキュア ゾーンを作成します。このゾーンのサイズはユーザーの要件によって異なり、1 つの完全バックアップの保存に必要な領域(予約領域を含みます)から実質的にハードディスク ドライブの全容量分にまでなる可能性があります。

b) メイン メニューの [ツール] → [オプション] → [バックアップ オプション] を選択し、デフォルトのバックアップ オプションを表示します。[エラー処理] をクリックし、[Acronis セキュア ゾーンに十分な空き領域がない場合、最も古いアーカイブを削除する] チェックボックスをオンにします。

c) バックアップ タスクの設定時に [スケジュール設定] のステップに達したら、[週単位] オプションをオンにし、デフォルトの値 [(1 週間) ごとにタスクを実行する] のままにして、バックアップを作成する曜日(例、土曜日)を選択します。

d) [バックアップの方法] のステップで [完全] オプションを選択します。これにより、完全バックアップのみが作成されます。タスクの設定を終了します。

タスクが実行され、使用可能な領域がある限り完全バックアップが Acronis セキュア ゾーンに保存されます。現在の完全バックアップ用の十分な領域がゾーンにない場合、最も古いバックアップが自動的に削除され、新しいバックアップ用の空き領域が作成されます。

12.4.4 自動ローテーションによる完全バックアップと増分/差分バックアップ

バックグラウンドで通常実行されるデフラグやインデックス作成など、Vista および Windows 7 のハウスキーピング処理のため、ユーザーによる変更がほとんどない場合でも、増分バックアップと差分バックアップのサイズが完全バックアップと同程度になることがあります。この点を考慮した場合、Vista や Windows 7、および Diskeeper などのデフラグ プログラムを使用するユーザーに最適なバックアップ ポリシーは完全バックアップの作成のみであることがあります。

この点を念頭に置いて、実際の Acronis True Image Home ユーザーのより複雑なバックアップ戦略シナリオを検討してみましょう。最初の日に完全バックアップ、続いて 6 つの増分(または差分)バックアップ、次に新しい完全バックアップという、バックアップをスケジュールするとします。また、3 週間分のバックアップが維持されるようにします。4 週間目に完全バックアップが作成されると、最初の週の完全バックアップおよびそれにリンクされている 6 つの増分バックアップが自動的に削除されます。これは 1 つのバックアップ タスクを実装するだけでは不可能ですが、3 つのバックアップ タスクにより必要な結果を得ることができます。

毎晩 10 時にバックアップを作成する計画であるとします。

a) 最初のバックアップ タスクの設定時に [スケジュール設定] のステップに達したら、[週単位] オプションをオンにし、[(3 週間) ごとにタスクを実行する] に設定し、すべての曜日を選択して開始時刻を午後 10 時に設定します。現在の日付を [開始日] に設定します。

b) **【バックアップの方法】** のステップで **【増分】** を選択し、**【増分/差分バックアップが下の指定回数を超えると、新しい完全バックアップを作成する】** チェックボックスをオンにしてバックアップの数のフィールドを「6」に設定します。また、**【以前のバックアップ アーカイブの削除】** チェックボックスをオンにし、バックアップ タスクの設定を終了します。

c) 最初のバックアップ タスクと同じ設定で 2 番目のバックアップ タスクを作成します。これを実行するには、**【タスクとログ】** 画面で作成したタスクを右クリックし、ポップアップ メニューで **【クローン作成】** を選択します。クローン作成されたタスクの名前を必要に応じて変更し、ツールバーまたはポップアップ メニューの **【編集】** を選択します。

2 番目のタスクを作成するときは、ターゲット アーカイブ名が最初のタスクで割り当てられた名前と異なることを確認します。名前が同じ場合、最初のタスクで作成されたバックアップは 2 番目のタスクで作成されたバックアップにより上書きされます。

また、**【開始日】** には、現在の日付よりも 1 週間後の日付を設定します。

d) 同様に、バックアップ アーカイブ名以外は同じ設定の 3 番目のバックアップ タスクを作成します。開始日は 2 週間後に設定します。

これら 3 つのタスクがすべて実行されると、必要なバックアップ シナリオが実装されます。

この方法は、同様のバックアップ戦略を実装するために使用できます。たとえば、2 週間分の一連のバックアップを保持したい場合は、2 週間ごとにそれぞれ実行される 2 つのスケジュールされたタスクを作成します。4 週間分のこのような一連のバックアップを保持したい場合は、4 週間ごとにそれぞれ実行される 4 つのタスクを作成する必要があります。

週末に、または休暇で家を離れるなど、コンピュータの電源を数日間オフにすると、一部の増分バックアップが実行されず、このシーケンスが崩れることがあります。このような場合は、古いバックアップ アーカイブを削除して、もう 1 回シナリオを開始する必要があります。

13 Acronis セキュア ゾーンの管理

Acronis セキュア ゾーンは、アーカイブを作成したのと同じコンピュータ上にアーカイブを保存するための特別なパーティションです。詳細については、「Acronis セキュア ゾーン™ 『22 ページ参照』を参照してください。

メイン メニューの [ツールとユーティリティ] → [Acronis セキュア ゾーンの管理] を選択すると、すべてのローカル ドライブ上でゾーンが検索されます。ゾーンが見つかった場合は、その管理(サイズやパスワードの変更)や削除を行うことができます。ゾーンが存在しない場合は、作成するための画面が表示されます。

Acronis セキュア ゾーンがパスワードで保護されている場合は、何らかの操作を行う前に正しいパスワードを入力する必要があります。

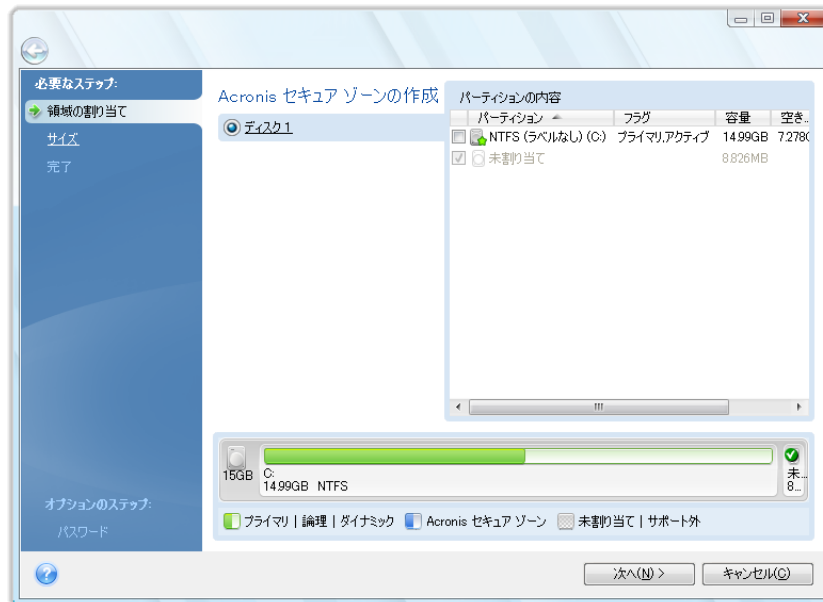
13.1 Acronis セキュア ゾーンを作成

Acronis セキュア ゾーンは、ダイナミック ボリュームおよび GPT ディスク以外のあらゆる内蔵ディスクに配置することができます。(使用できる未割り当て領域があれば)未割り当て領域を使用して作成されるか、パーティション上の空き領域を使用して作成されます。パーティションのサイズを変更すると、再起動が必要になることがあります。

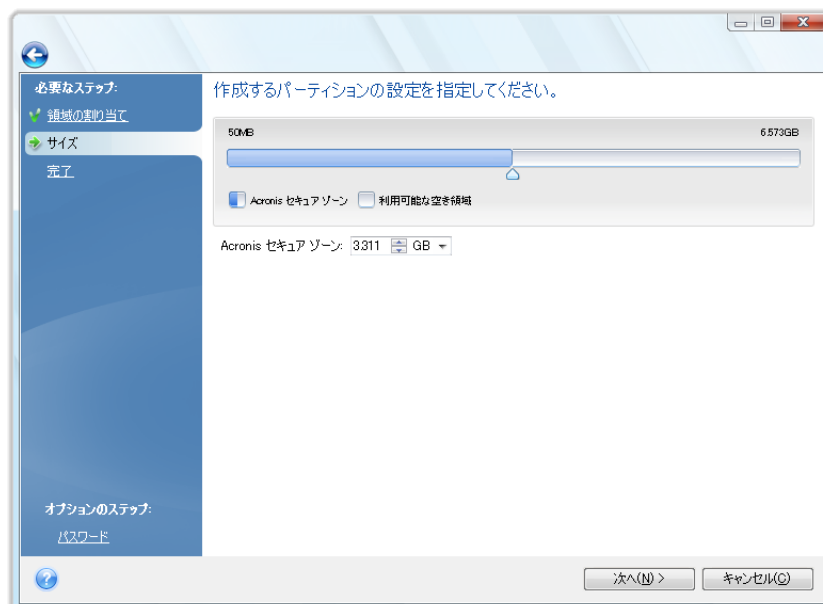
1 台のコンピュータにセキュア ゾーンは 1 つしか作成できません。別のディスクにゾーンを作成するには、まず既存のゾーンを削除する必要があります。

1. ゾーンを作成する前に、そのサイズを見積もる必要があります。そのためには、バックアップを開始し、ゾーンにコピーするデータをすべて選択します。[バックアップ オプション] のステップでは、圧縮レベルを設定します。完全バックアップの推定サイズ(ディスク/パーティションのバックアップの場合)、または完全バックアップのサイズの計算に使用できる、およその圧縮率(ファイル レベルのバックアップの場合)が表示されます。増分または差分バックアップの作成に対応するために、これを 1.5 倍にします。平均圧縮率は 2:1 であるため、ゾーン作成の目安としてこの率も利用できることを覚えておいてください。仮に、ユーザーが 10 GB のプログラムやデータを含むハードディスクを所有しているとします。通常の条件では、およそ 5 GB まで圧縮できます。このため、合計サイズを 7.5 GB とするのがよいかもしれません。
2. 複数のディスクが取り付けられている場合は、Acronis セキュア ゾーンを作成するディスクを 1 つ選択します。

3. ゾーンを作成する空き領域があるパーティションを選択します。



4. 次のウィンドウでは、Acronis セキュア ゾーンのサイズを入力するか、またはスライダをドラッグして、最小と最大の間の任意のサイズを選択します。

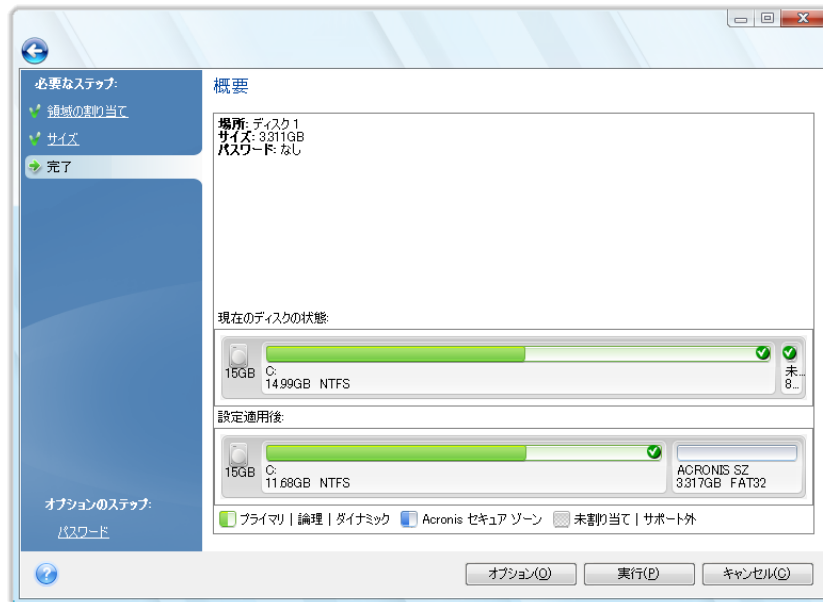


最小サイズは、ハードディスクの構成により異なりますが、およそ 50MB です。最大サイズは、ディスクの未割り当て領域に、前のステップで選択したすべてのパーティションの空き領域の合計を加えたものです。

ゾーンを作成するときは、プログラムはまず未割り当て領域が使用されます。十分な未割り当て領域がない場合、選択したパーティションは縮小されます。パーティションのサイズを変更すると、再起動が必要になることがあります。

システム パーティションを最小サイズに縮小すると、コンピュータのオペレーティング システムが起動しなくなる場合があります。

5. 次に、パーティション(ディスク)で実行する処理の一覧が表示されます。



6. パスワードを設定し、ゾーンへのアクセスを制限することができます。パスワードを設定すると、プログラムはゾーンにあるデータのバックアップとリカバリ、イメージのマウント、アーカイブの検証、またはゾーンのサイズ変更や削除など、ゾーンに関するどのような処理にもパスワードの入力が要求されます。パスワードを設定するには、[概要] ウィンドウの【オプション】をクリックします。

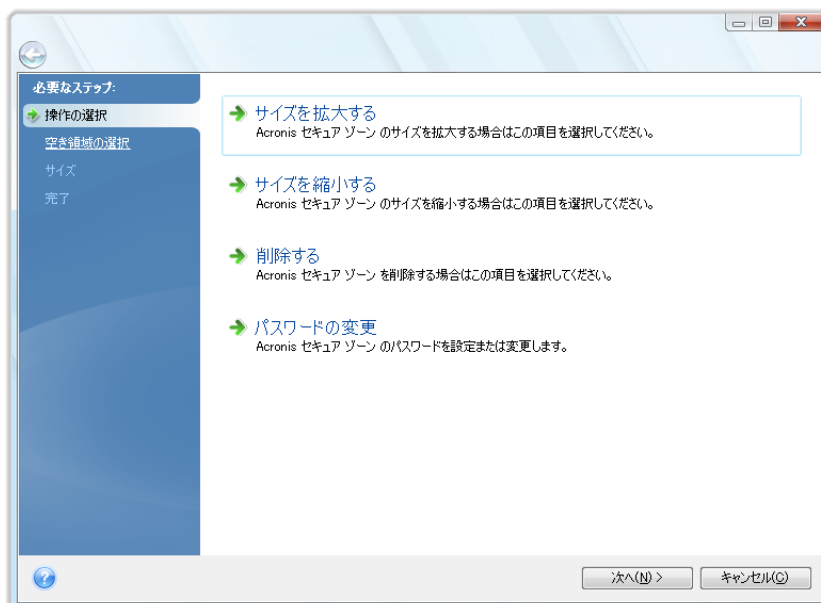
Acronis True Image Home の修復または更新により、パスワードが影響を受けることはありません。ただし、ハードディスクに Acronis セキュア ゾーンを保持したまま、プログラムを削除して再インストールした場合、ゾーンのパスワードはリセットされます。

【実行】 をクリックすると、Acronis True Image Home によってゾーンの作成が開始されます。別のウィンドウに進行状況が表示されます。必要に応じて、**【キャンセル】** をクリックしてゾーンの作成を中止することができます。ただし、操作は現在の処理が終了するまでキャンセルされません。

Acronis セキュア ゾーンの作成には数分間以上かかることがあります。処理がすべて完了するまでお待ちください。

13.2 Acronis セキュア ゾーン のサイズ変更

1. Acronis セキュア ゾーン のサイズを変更する場合は、メイン メニューで [ツールとユーティリティ] → [Acronis セキュア ゾーン の管理] を選択します。



2. ゾーン のサイズを増加または減少させるよう選択します。アーカイブ用の領域を拡張するには、ゾーンを増加させる必要があります。反対に、パーティションに空き領域がない場合は減少させます。
3. Acronis セキュア ゾーン のサイズを増加させるのに使用する空き領域が割り当てられたパーティションか、またはゾーンを縮小した後に空き領域が割り当てられるパーティションを選択します。
4. 新しいゾーン のサイズを入力するか、またはスライダをドラッグしてサイズを選択します。
Acronis セキュア ゾーン のサイズを増加させる場合は、まず未割り当ての領域が使用されます。十分な未割り当て領域がない場合、選択したパーティションのサイズが縮小されます。パーティションのサイズを変更すると、再起動が必要になることがあります。
ゾーン のサイズを縮小する場合、ハードディスクに未割り当て領域があれば、ゾーン の縮小によって生じた領域と共に、その未割り当て領域が、選択したパーティションに割り当てられます。したがって、ディスク上には未割り当ての領域はなくなります。
5. 次に、パーティション(ディスク)で実行される処理の一覧が簡単な説明付きで表示されます。

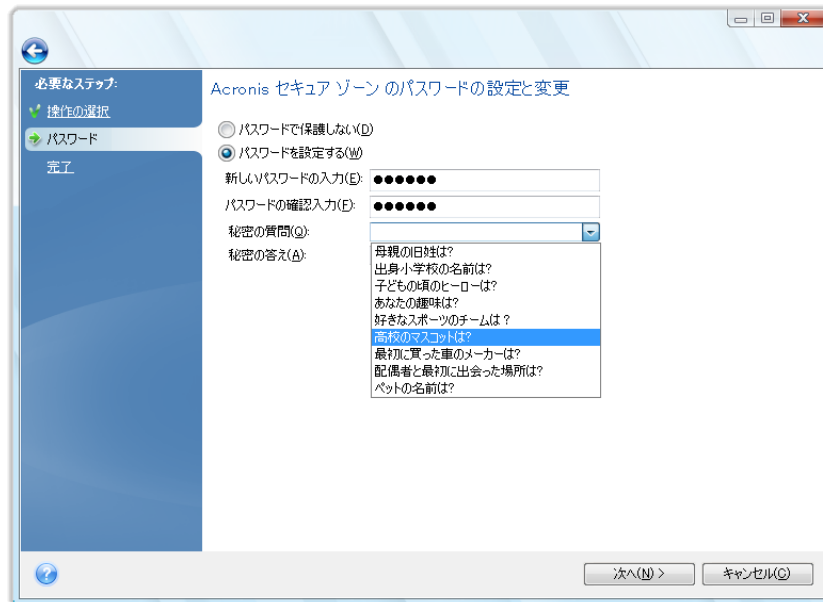
[実行] をクリックすると、Acronis True Image Home によってゾーン のサイズ変更が開始されます。別のウィンドウに進行状況が表示されます。必要に応じて、[キャンセル] をクリックして操作を中止することができます。ただし、操作は現在の処理が終了するまでキャンセルされません。

ゾーン のサイズ変更には数分以上かかることがあります。処理がすべて完了するまでお待ちください。

13.3 Acronis セキュア ゾーン のパスワードの変更

1. Acronis セキュア ゾーン のパスワードを変更するには、メイン メニューで [ツールとユーティリティ] → [Acronis セキュア ゾーン の管理] の順に選択します。

2. [パスワードの変更] を選択します。



3. 新しいパスワードと確認用のパスワードを入力するか、または **[パスワード保護を使用しない]** を選択します。また、パスワードを忘れた場合に使用できる、本人確認用の秘密の質問を選択することもできます。
4. パスワード変更処理を実行するには、ウィザードの最後のウィンドウで **[実行]** をクリックします。

13.4 Acronis セキュア ゾーンの削除

1. Acronis セキュア ゾーンを削除する場合は、メイン メニューで **[ツールとユーティリティ]** → **[Acronis セキュア ゾーン管理]** を選択し、続いて **[Acronis セキュア ゾーン削除]** を選択します。
2. ゾーンから解放される領域を追加するパーティションを選択します。複数のパーティションを選択した場合、領域は各パーティションのサイズに比例して分配されます。
3. 次に、パーティション(ディスク)で実行される処理の一覧が簡単な説明付きで表示されます。

[実行] をクリックすると、Acronis True Image Home によってゾーンの削除が開始されます。別のウィンドウに進行状況が表示されます。必要に応じて、**[キャンセル]** をクリックして操作を中止することができます。ただし、操作は現在の処理が終了するまでキャンセルされません。

ゾーンの削除には数分間以上かかることがあります。処理がすべて完了するまでお待ちください。

Acronis セキュア ゾーンを削除すると、その中に保存されているバックアップはすべて自動的に消去されます。

14 ブータブル メディアの作成

14.1 Linux ベースのレスキュー メディアの作成

緊急用起動ディスクを使用して、ベアメタル システムまたはクラッシュしたコンピュータで Acronis True Image Home を起動できます。すべてのデータをセクタ単位でバックアップ アーカイブにコピーして、Windows 以外のコンピュータのハードディスクをバックアップすることもできます。これには、スタンドアロン版の Acronis True Image Home がインストールされたブータブル メディアが必要になります。

パッケージ版を購入された場合は、インストール用の製品 CD 自体が、プログラムのインストールだけでなく起動も行えるものであるため、これをブータブル メディアとして使用できます。

Acronis True Image Home をアクロニス オンラインストアから購入した場合や小売業者からダウンロード版を購入した場合は、ブータブル メディア ビルダを使用して、ブータブル メディアを作成することができます。このメディアを作成するには、空の CD-R/RW、DVD+R/RW、またはコンピュータの起動に使用可能なその他のメディア (Zip ドライブなど) が必要になります。

Acronis True Image Home には、ブータブル ディスクの ISO イメージをハードディスク上に作成する機能もあります。

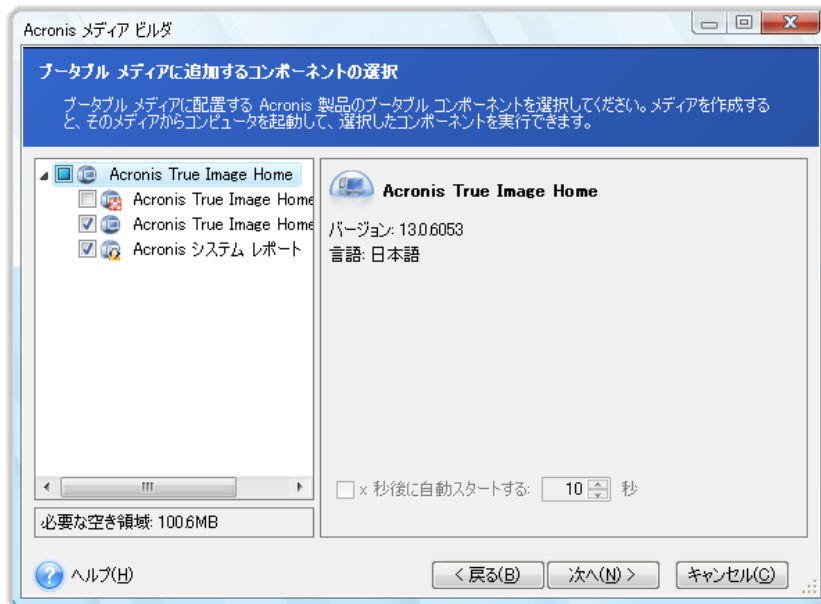
コンピュータに Acronis Disk Director Suite などの他の アクロニス製品がインストールされている場合は、それらのプログラムのスタンドアロン版も同じブータブル ディスクに追加することができます。

インストール時にブータブル メディア ビルダをインストールしなかった場合は、Acronis True Image Home でこの機能を使用することはできません。

ブータブル メディアから起動する場合は、Ext2/Ext3、ReiserFS、Linux SWAP ファイルシステムが採用されているディスクやパーティションへのバックアップを行うことはできません。

-
1. **[ツールとユーティリティ] メニューの [ブータブル レスキュー メディアの作成]** を選択します。**[スタート] メニューから、[すべてのプログラム] → [Acronis] → [Acronis True Image Home] → [ブータブル レスキュー メディア ビルダ]** を選択して、Acronis True Image Home をロードせずにブータブル レスキュー メディア ビルダを起動することもできます。

2. ブータブル メディアに追加する Acronis プログラムのコンポーネントを選択します。



Acronis True Image Home には、次のコンポーネントがあります。

Acronis True Image Home 完全版

USB、PC カード(以前の PCMCIA)、SCSI インターフェイス、およびそれらを介して接続されるストレージ デバイスがサポートされます。そのため、このコンポーネントを使用することを強くお勧めします。

Acronis システム レポート

このコンポーネントを使用すると、Windows および Acronis True Image Home 完全版で起動できないときにレスキュー メディアから起動した後、システム レポートが生成されます。

Acronis True Image Home セーフ版

パッケージ版の製品を購入した場合、インストール用 CD には、**Acronis True Image Home セーフ版**およびよく知られた Bart PE ユーティリティ用の Acronis True Image Home プラグインをインストールするためのインストール ファイルが含まれています。セーフ版には、USB、PC カード、SCSI ドライバは含まれていません。完全版の実行に問題がある場合のみセーフ版を使用してください。インストール後、**Acronis True Image Home セーフ版**は、ブータブル メディアに追加可能な **Acronis メディア ビルダ**のコンポーネントの 1 つとして表示されるので、ブータブル レスキュー メディアの作成時に **Acronis True Image Home セーフ版**を追加することができます。

また、このインストール ファイルは アクロニスのウェブサイトからダウンロードすることもできます。

次のウィンドウでは、ブータブル メディアの起動パラメータを設定して、レスキュー メディアの起動オプションを構成すると、さまざまなハードウェアとの互換性を向上させることができます。nousb、nomouse、noapic などのオプションが利用できます。使用可能なすべての起動パラメータについては、「起動パラメータ『198 ページ参照』」を参照してください。上級ユーザー向けに用意されているパラメータです。レスキュー メディアからの起動をテスト中にハードウェアの互換性の問題が発生した場合は、アクロニス テクニカル サポートにお問い合わせください。

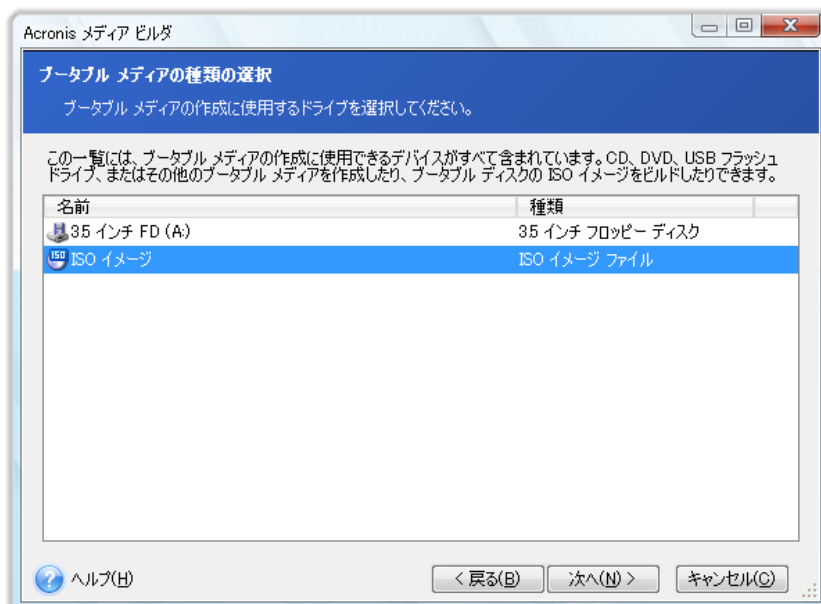
[自動バックアップ開始まで] パラメータでは、ブート メニューのタイムアウト間隔を指定します。このパラメータが指定されていない場合、ブート メニューが表示され、OS または Acronis コンポーネントのどちらを起動するかが選択されるまで待機します。たとえば、Acronis レスキュー

メディアに対してこのパラメータを **10 秒** に設定すると、ブートメニューが表示されてから 10 秒後にスタンドアロン版の Acronis True Image Home が起動します。

アクロニス製品の他のコンポーネントについては、それぞれのユーザーズ ガイドを参照してください。

- 作成するブータブル メディアの種類 (CD-R/RW、DVD+R/RW、または 3.5 インチ フロッピー ディスク) を選択します。BIOS にこの機能がある場合は、リムーバブル USB フラッシュ ドライブなどの他のブータブル メディアを作成できます。ブータブル ディスクの ISO イメージを作成することもできます。

フロッピー ディスクを使用する場合は、一連のフロッピー ディスクに対して一度に 1 つのコンポーネント (たとえば Acronis True Image Home 完全版) しか書き込むことができません。別のコンポーネントを書き込むには、ブータブル メディア ビルダをもう一度実行してください。



- CD、DVD、その他のリムーバブル メディアに作成する場合は、空のメディアを挿入します。プログラムによってメディアの容量が判別されます。ブータブル ディスクの ISO イメージの作成を選択した場合は、作成する ISO イメージのファイル名と保存先のフォルダを指定します。
- 次に、(ISO または CD/DVD を選択しなかった場合は) 必要となる空フロッピー ディスクの枚数が計算され、それらを準備する時間をとることができます。準備が整ったら、**[実行]** をクリックします。

ブータブル メディアを作成したら、メディアに必要な事項を記入して安全な場所に保管してください。

新しいバージョンのプログラムで作成されたバックアップは、前のバージョンのプログラムで作成されたものと互換性がない可能性がありますので、注意が必要です。このため、Acronis True Image Home をアップグレードした場合は、必ず新しいブータブル メディアを作成することを強くお勧めします。また、スタンドアロン版の Acronis True Image Home をご使用の場合は、レスキュー メディアから起動したときに Windows XP や Windows Vista のオペレーティング システムで利用可能な暗号化機能を使用して暗号化されたファイルやフォルダをリカバリすることはできませんので、注意してください。詳細については、「ファイル レベルのセキュリティ設定」『74 ページ参照』を参照してください。これに対し、Acronis True Image Home の暗号化機能を使用して暗号化されたアーカイブのバックアップはリカバリすることができます。

14.2 Acronis True Image Home での BartPE ディスクの作成

Bart PE (Bart Preinstalled Environment) とは、Windows XP または Windows Server 2003 のオリジナル インストール/セットアップ CD から作成された、ブータブルな Windows CD/DVD です。Acronis True Image Home の現在のバージョンには、Windows Vista および Windows 7 のプレインストール環境のためのプラグインはありません。

Bart PE の一番の利点は、Windows のドライバが使用されることと、グラフィカル ユーザー インターフェイスが Windows に似ていることです。任意のストレージ ドライバを起動時に追加することもできます。方法は、Windows をハード ドライブにインストールするときと同じです (F6 キーを押し、ドライバのフロッピー ディスクを挿入します)。

Bart PE にインストールされるアプリケーションはプラグインの形でインストールされます。Acronis True Image Home プラグインを Bart PE プラグイン タブで追加することができます。

Acronis True Image Home のパッケージ製品を購入された場合以外は、次の手順に従って、別のインストール ファイルを アクロニス アカウントからダウンロードする必要があります。

- [マイ アカウント] セクションを開きます。
- ログインします。
- 購入した Acronis True Image Home のプロダクト キーを登録します (未登録の場合)。
- **[登録済み製品]** をクリックします。

登録済の製品の下にある **[Bart PE & Safe Media]** をクリックしてプラグインをダウンロードします。次の手順に従って、プラグインをインストールします。

1. ダウンロードされたファイルをダブルクリックすると、インストールが開始します。
2. Bart PE プラグインだけをインストールする場合は、[カスタム] インストールを選択して、セーフメディア アドオンの選択を解除します。それ以外の場合は、[標準] を選択します。
3. インストールが完了すると、Bart PE CD/DVD を作成して Acronis True Image Home プラグインを追加することができるようになります。

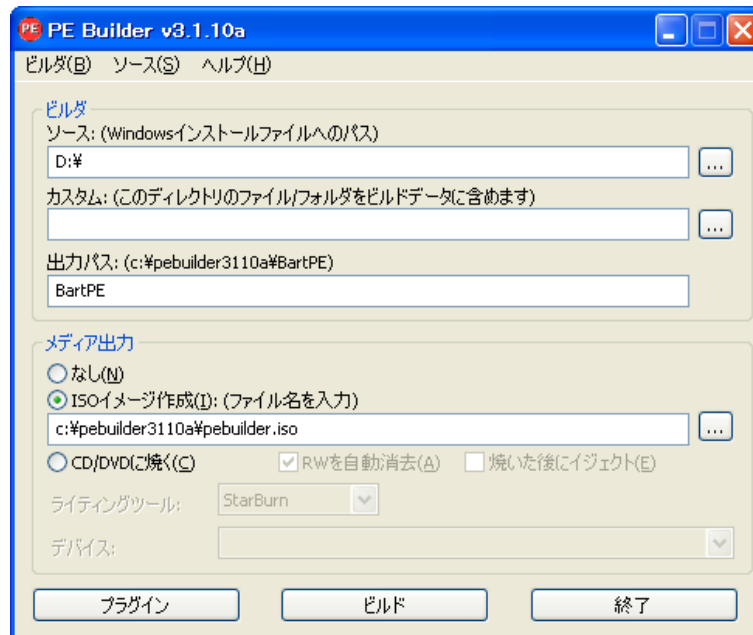
以下の説明は、PE Builder バージョン 3.1.10a の場合の手順です。

Acronis True Image Home プラグイン付きの BartPE CD を作成するには、次の手順に従います。

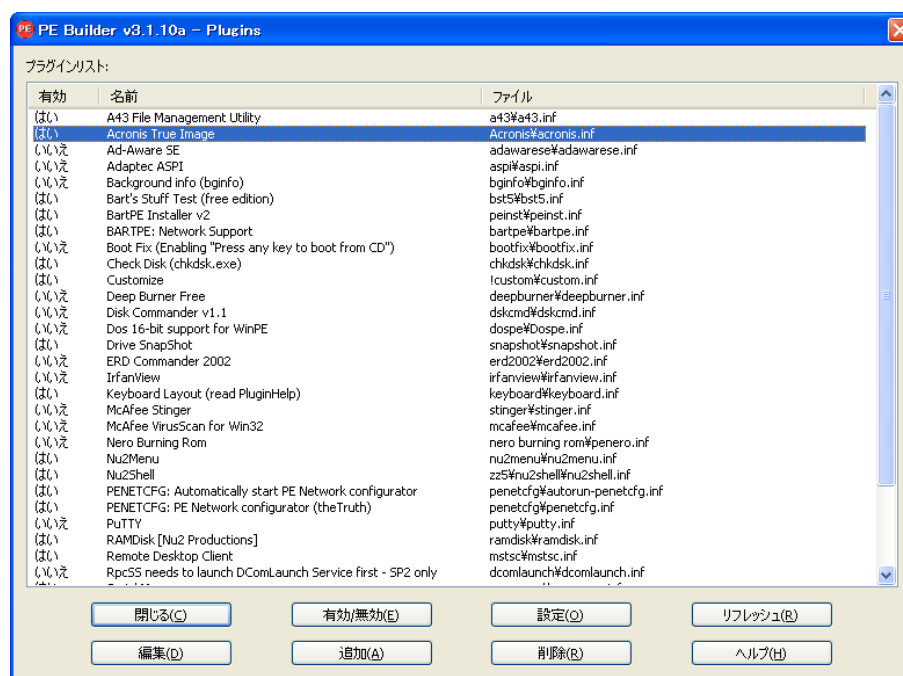
- PE Builder をダウンロードしてインストールします。

Acronis True Image Home のインストール フォルダを開きます (デフォルトのフォルダは C:\Program Files\Acronis または C:\Program Files\Acronis\Media Add-ons です)。BartPE フォルダの名前を Acronis に変更します。このフォルダを、PE Builder のインストール ディレクトリ内にある Plugin フォルダにコピーします (デフォルト ディレクトリは C:\%pebuilder3110a または同様のディレクトリです)。

PE Builder を起動して、必要なパスを入力し(オンライン ヘルプがここにあります)、[プラグイン] ボタンをクリックします。



[プラグイン] 画面で Acronis True Image Home のプラグインが有効になっていることを確認します。



[プラグイン] ウィンドウを閉じて [ビルド] ボタンをクリックすると、ビルド プロセスが開始します。イメージを CD に書き込む場合は、[CD/DVD に焼く] オプションを選択して、書き込みツールとデバイスをメニューから選択します。

イメージが作成されたら、CD または DVD に書き込みます (前のステップで [CD/DVD に焼く] オプションを選択しなかった場合)。

この CD/DVD からコンピュータを起動した後で、[Go] → [System] → [Storage] を選択すると、Acronis True Image Home プラグインを起動できます。

ドライバの追加

BartPE で追加できるドライバには、ストレージ ドライバとネットワーク ドライバの 2 種類があります。ドライバを追加する方法については、PE Builder のドライバのヘルプを参照してください。

ストレージ ドライバ(RAID または SCSI デバイス用)を、BartPE の起動時に追加することもできます (F6 キーを押して、ドライバのフロッピー ディスクを読み込ませる必要があります)。共通のストレージ ドライバは、ここにあります。

作成した BartPE メディアからコンピュータを起動したときに、Acronis True Image Home は次の場所にあります。

[Go] → [System] → [Storage] → [Acronis True Image Home]

14.3 WinPE ベースのレスキュー メディアの作成

WinPE ベースのレスキュー メディアを作成するには、Acronis Plus Pack を購入し、インストールする必要があります。

WinPE 用 Acronis プラグインは、次のいずれかのカーネルに基づく WinPE ディストリビューションに追加できます。

- Windows XP Professional Service Pack 2(PE 1.5)
- Windows Vista(PE 2.0)
- Windows Vista SP1(PE 2.1)
- Windows 7(PE 3.0)

既に PE1.x ディストリビューションのメディアをお持ちの場合は、メディア ISO をローカル フォルダにアンパックし、[スタート] → [Acronis] → [Plus Pack for Acronis PRODUCT_NAME> 2010] を選択して起動します。ウィザードによって必要な操作が示されます。詳細については、「WinPE 1.x への Acronis プラグインの追加『129 ページ参照』」を参照してください。

PE 2.x および 3.0 イメージを作成または変更できるようにするには、Windows 自動インストールキット(AIK)がインストールされている必要があります。操作の詳細な説明については、「WinPE 2.x または 3.0 への Acronis プラグインの追加『129 ページ参照』」を参照してください。

PC に Windows AIK がインストールされていない場合は、次の手順に従って準備します。

1. Windows 自動インストール キットをダウンロードしてインストールします。

Windows Vista 用 AIK(PE 2.0):

<http://www.microsoft.com/Downloads/details.aspx?familyid=C7D4BC6D-15F3-4284-9123-679830D629F2&displaylang=ja>

Windows Vista SP1 および Windows Server 2008 用 AIK(PE 2.1):

<http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?FamilyID=94bb6e34-d890-4932-81a5-5b50c657de08&DisplayLang=ja>

Windows 7 用 AIK(PE 3.0):

<http://www.microsoft.com/DOWNLOADS/details.aspx?familyid=696DD665-9F76-4177-A811-39C26D3B3B34&displaylang=ja>

2. (オプション)Windows AIK を DVD に書き込むかフラッシュ ドライブにコピーします。
3. このキットから Microsoft .NET Framework v.2.0(ハードウェアに応じて、NETFXx86 または NETFXx64)をインストールします。
4. このキットから Microsoft Core XML(MSXML)5.0 パーサーまたは 6.0 パーサーをインストールします。
5. このキットから Windows AIK をインストールします。

Windows AIK で提供されているヘルプ ドキュメントの内容を把握しておくことをお勧めします。ドキュメントにアクセスするには、[スタート] メニューから **[Microsoft Windows AIK]** → **[ドキュメント]** を選択します。

14.3.1 WinPE 1.x への Acronis プラグインの追加

WinPE 用 Acronis プラグインは次の環境に追加できます。

- Windows PE 2004(1.5)(Windows XP Professional Service Pack 2)

Acronis プラグインを WinPE 1.x に追加する手順は、次のとおりです。

1. WinPE 1.5 ISO のすべてのファイルをハードディスク上の別のフォルダにアンパックします。
2. [スタート] メニューから、[Acronis] → [Plus Pack for Acronis True Image Home 2010] → [Acronis WinPE ISO ビルダ] を選択します。
3. WinPE ファイルが格納されたフォルダへのパスを指定します。
4. Acronis プラグイン ファイルが格納されたフォルダのパスを指定します (レジストリ キー HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Acronis¥MediaAddons¥Settings¥BartPE でプラグインの場所を確認してください)。
5. 作成する ISO ファイルのフル パスを、ファイル名を含めて指定します。
6. 概要の画面で設定を確認し、**[実行]** をクリックします。
7. サードパーティのツールを使用して .ISO を CD または DVD に書き込むか、フラッシュ ドライブにコピーします。

コンピュータが WinPE で起動すると、Acronis True Image Home が自動的に起動します。

14.3.2 WinPE 2.x または 3.0 への Acronis プラグインの追加

Acronis WinPE ISO ビルダには、Acronis True Image Home を WinPE 2.x および WinPE 3.0 に統合する、次の 3 つの方法が用意されています。

- Acronis プラグインを既存の PE 2 または PE 3 ISO に追加する。この方法は、以前に設定済みで既に使用中の PE 2 または PE 3 ISO にプラグインを追加するときに便利です。
- プラグインが組み込まれた PE 2 または PE 3 ISO を最初から作成する。
- 将来使用する目的で(手動での ISO 作成、イメージへの他のツールの追加など)、Acronis プラグインを WIM ファイルに追加する。

上記の操作のいずれかを実行できるようにするには、Acronis Plus Pack および Windows 自動インストール キット(WAIK)が PC にインストールされている必要があります。WAIK をインストールしていない場合は、「WinPE ベースのレスキュー メディアの作成 『128 ページ参照』」の説明に従ってインストールしてください。

Acronis WinPE ISO ビルダでは、x86 WinPE 2.x および WinPE 3.0 のみがサポートされます。この WinPE ディストリビューションは、x64 ハードウェア上でも動作できます。

Win PE 2.x または 3.0 に基づく PE イメージが動作するには、少なくとも 256 MB の RAM が必要です。PE 2.x または 3.0 の推奨メモリ サイズは 512 MB です。

WinPE 2.x または 3.0 ISO への Acronis プラグインの追加

WinPE 2.x または 3.0 ISO に Acronis プラグインを追加する手順は、次のとおりです。

1. 次のいずれかを実行します。

既存の Win PE 2 または PE 3 ISO にプラグインを追加する場合は、Win PE 2 または 3 ISO のすべてのファイルをハードディスク上の別のフォルダにアンパックします。

新しい PE 2 または 3 ISO を作成する場合は、次の操作を実行します。

[スタート] メニューから、[Microsoft Windows AIK] → [Windows PE ツールのコマンドプロンプト] を選択します。

copype.cmd スクリプトを実行し、Windows PE ファイルが格納されたフォルダを作成します。たとえば、コマンド プロンプトから次のように入力します。

```
cd Program Files\Windows AIK\Tools\PETools\  
copype <arch> <destination>
```

ここで、<arch> はハードウェア アーキテクチャ(x86、amd64、または ia64 を指定できますが、Acronis は x86 のみをサポートします)、<destination> はローカル フォルダのパスを表します。たとえば、次のようになります。

```
copype x86 c:\winpe_x86
```

2. [スタート] メニューから、[Acronis] → [Plus Pack for Acronis True Image Home 2010] → [Acronis WinPE ISO ビルダ] を選択します。
3. WinPE¥ISO フォルダのパスを指定します(例: c:\winpe_x86¥ISO)。
4. Acronis プラグイン ファイルが格納されたフォルダのパスを指定します (レジストリ キー HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Acronis¥MediaAddons¥Settings¥BartPE でプラグインの場所を確認してください)。
5. ISO または WIM のイメージを作成するかどうかを選択します。
6. 作成するイメージ ファイルのフル パスを、ファイル名を含めて指定します。
7. 概要の画面で設定を確認し、[実行] をクリックします。
8. サードパーティのツールを使用して .ISO を CD または DVD に書き込むか、フラッシュドライブにコピーします。

コンピュータが WinPE で起動すると、Acronis True Image Home が自動的に起動します。

結果の WIM ファイルから PE イメージ(ISO ファイル)を作成する手順は、次のとおりです。

- Windows PE フォルダ内のデフォルトの boot.wim ファイルを、新しく作成した WIM ファイルに置き換えます。上の例では、次のように入力します。

```
copy c:\AcronisMedia.wim c:\winpe_x86\ISO\sources\boot.wim
```

- **Oscdimg** ツールを使用します。上の例では、次のように入力します。

```
oscdimg -n -bc:\winpe_x86\etfsboot.com c:\winpe_x86\ISO c:\winpe_x86\winpe_x86.iso
```

WinPE 2.x または 3.0 WIM への Acronis プラグインの追加

1. [スタート] メニューから、[Acronis] → [Plus Pack for Acronis True Image Home 2010] □ → [Acronis WinPE ISO ビルダ] を選択します。
2. 追加元の WINPE.WIM ファイルのパスを指定します。x86 ハードウェア用のこのファイルの標準のパスは、\Program Files\Windows AIK\Tools\PETools\x86\winpe.wim です。
3. Acronis プラグイン ファイルが格納されたフォルダのパスを指定します（レジストリ キー HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Acronis¥MediaAddons¥Settings¥BartPE でプラグインの場所を確認してください）。
4. 作成する WIM ファイルのフル パスを、ファイル名を含めて指定します。
5. 概要の画面で設定を確認し、**[実行]** をクリックします。

結果の WIM ファイルから PE イメージ(ISO ファイル)を作成する方法については、前のセクションをご参照ください。

Windows PE のカスタマイズの詳細については、『Windows プレインストール環境 (Windows PE) ユーザーズ ガイド』(Winpe.chm)をご参照ください。

15 vhd ファイルの使用方法


15.1 tib イメージと vhd 仮想ディスクの相互変換

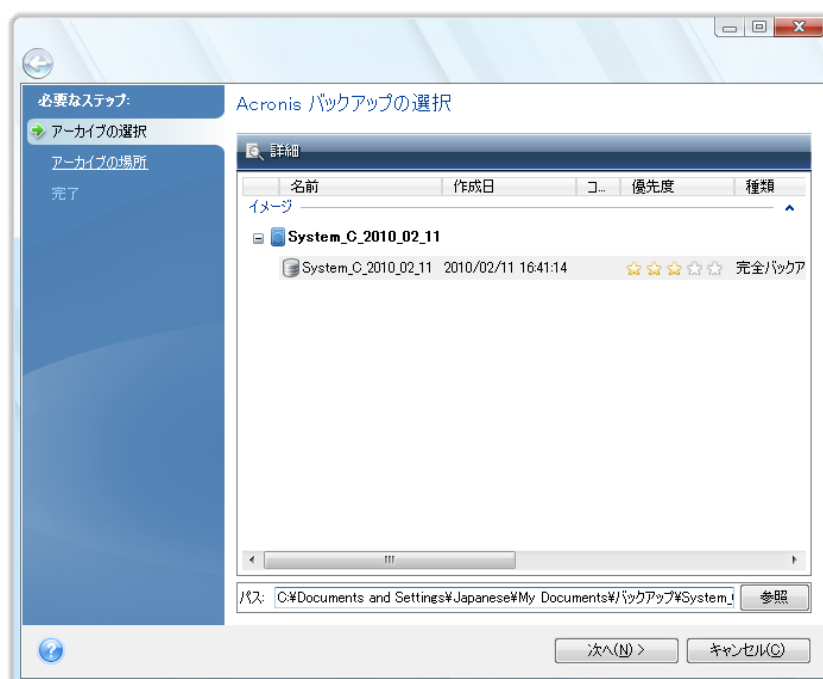
変換処理は、レスキュー メディアから起動したときに起動する Acronis True Image Home のスタンドアロン版ではサポートされていません。

15.1.1 Windows バックアップへの変換

Windows 7 の Enterprise エディションまたは Ultimate エディションを使用している場合は、システム パーティションの TIB イメージを VHD 形式に変換しておくこと、変換後の VHD ファイルを使用してオペレーティング システムを起動できるようになります。また、Acronis True Image Home を使用しなくてもイメージをマウントできるようになります。

Acronis ディスク イメージ(TIB ファイル)を VHD 仮想ディスクに変換する手順は、次のとおりです。

1. メイン プログラム メニューの **[ツールとユーティリティ]**  **[Acronis バックアップの変換]** を選択します。



2. 変換するディスク イメージを選択します。

アーカイブがパスワードで保護されている場合は、パスワードを入力する必要があります。作成された VHD ファイルはパスワードで保護されないことに注意してください。

増分バックアップを変換するには、それ以前のすべての増分バックアップと、元の完全バックアップが必要です。差分バックアップを変換するには、元の完全バックアップが必要です。変換の結果は必ず、完全バックアップになります。

3. 作成するファイルのパスを指定します。

変換後のファイルはデフォルトの場所に保存されますが、別の場所を選択するには **【参照】** をクリックしてください。ファイルを作成する場所は、Acronis True Image Home によってサポートされるローカル ストレージであればどれもかまいません (Acronis セキュア ゾーンと CD/DVD を除く)。さらに、SMB 共有に格納することもできます。

4. 概要ウィンドウの **【実行】** をクリックします。

変換対象として選択した TIB イメージに含まれるパーティションが、たとえば 2 つの物理ハードディスク ドライブからのものである場合は、物理ドライブに合わせて 2 つの VHD ファイルが作成されます。

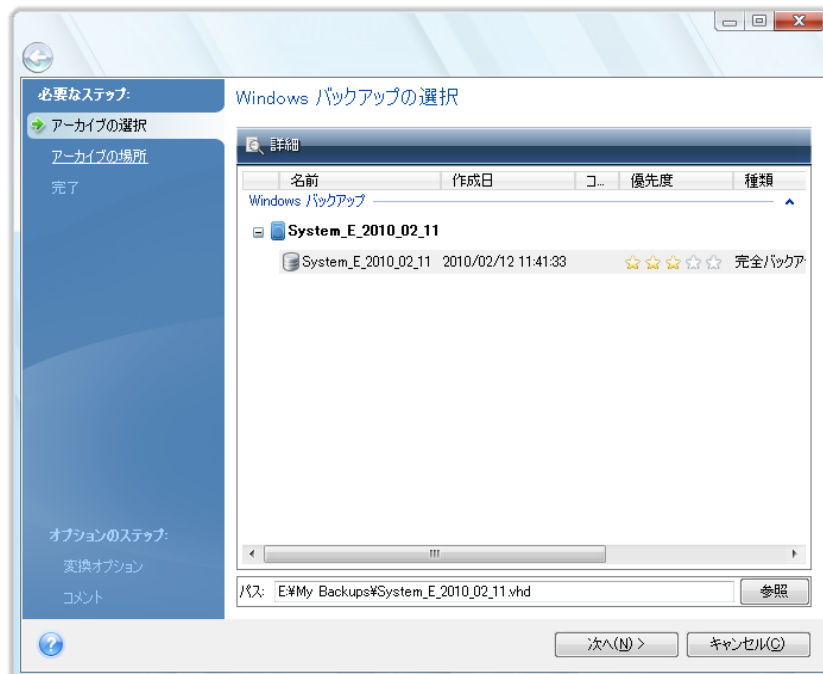
TIB ファイルに含まれるイメージが、スパンまたはストライプのダイナミック ボリュームの場合は、TIB ファイルを変換することはできません。

15.1.2 Acronis バックアップへの変換

Windows Vista または Windows 7 の Windows バックアップで作成された VHD ファイルを、TIB アーカイブに変換することができます。この処理が必要になるのは、たとえば、以前作成した Windows バックアップのファイルを残しておきたいけれども、保存のための領域を節約したい場合です。変換後の TIB ファイルは圧縮されるため、対応する VHD ファイルよりもサイズが小さくなります。

仮想から物理に変換する手順は、次のとおりです。

1. メイン プログラム メニューの **【ツールとユーティリティ】** $\square \rightarrow$ **【Windows バックアップの変換】** を選択します。



2. 変換する VHD ディスク ファイルを選択します。

3. 作成する TIB ファイルのパスを指定します。

デフォルトでは、変換後のファイルは変換前のファイルと同じ場所に作成されますが、別の場所を選択するには **【参照】** をクリックしてください。ファイルを作成する場所は、Acronis True

Image Home によってサポートされるストレージであればどれでもかまいません (Acronis セキュア ゾーンを除く)。

4. 次のステップでは、作成する TIB バックアップのオプションを設定します。パスワードと暗号化でアーカイブを保護するかどうかの指定、圧縮レベルの選択、およびバックアップの分割 (たとえば、後で DVD に書き込む場合) が可能です。
5. 必要に応じて、アーカイブにコメントを追加します。
6. 概要ウィンドウの **[実行]** をクリックします。

VHD ファイルに複数のダイナミック ボリュームが含まれており、それぞれが別のディスク ドライブに存在していた場合は (複数のディスク ドライブへのストライプまたはスパン)、VHD ファイルを変換することはできません。

15.2 Windows バックアップにより作成された vhd ファイルを使用したリカバリ

Windows Vista (Home Edition 以外) および Windows 7 オペレーティング システムに含まれる Windows バックアップ ユーティリティを使用してシステム ハード ドライブをバックアップした後で Acronis True Image Home を購入した場合、Acronis True Image Home を使用して Windows バックアップ ユーティリティのバックアップ (vhd ファイル) からシステム ハード ドライブをリカバリできます。vhd バックアップ ファイルを使用してシステムをリカバリする必要がある場合は、次の手順を実行します。

1. BIOS でブート順序を設定して、ブータブル メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え『191 ページ参照』」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して Acronis True Image Home (完全版) を選択します。
3. Acronis True Image Home の起動後、[ようこそ] 画面で **[リカバリする]** の下にある **[ディスク]** リンクをクリックすると、リカバリ ウィザードが起動します。
4. リカバリに使用する vhd バックアップ ファイルを作成日によって選択します (Acronis True Image Home の **[コメントの編集]** 機能を使用して vhd アーカイブに説明を追加していない場合)。必要な vhd ファイルが表示されていない場合は、**[参照]** をクリックして **[ファイルの種類]** フィールドで Windows バックアップ アーカイブ (*.vhd) を選択してリカバリするバックアップを検索します。

必要な vhd バックアップが画面に表示されている場合でも、バックアップの選択後に Acronis True Image Home が「Acronis True Image Home は "Backup_Name" アーカイブのボリューム 1 を検出できません」というメッセージを表示する場合があります。Backup_Name は、選択したバックアップの名前です。これは、スタンドアロン版の Acronis True Image Home におけるドライブ文字が Windows におけるドライブ文字と異なるためであり、メタデータ情報データベースに保存されているこのバックアップへのパスは間違った場所を示します。この場合も **[参照]** をクリックして **[ファイルの種類]** フィールドで Windows バックアップ アーカイブ (*.vhd) を選択してリカバリするバックアップを検索します。

5. 次のステップで **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択し (選択されていない場合)、**[次へ]** をクリックします。
6. **[リカバリ元]** のステップでシステム パーティションを選択します。通常、MBR をリカバリする必要はありません。
7. その後、選択したシステム パーティションの場所、種類 (プライマリ、アクティブ)、およびサイズの設定を指定します。パーティションを元の場所にリカバリする場合は、設定を変更する必要はありません。


8. リカバリ処理の概要を確認して **[実行]** をクリックします。

Windows での作業を継続しながら vhd ファイルからパーティションとディスクをリカバリすることもできます。これは、データ パーティションとディスクのリカバリ時に適しています。

15.3 Windows 7 システム パーティションの TIB イメージからコンピュータを起動する

すでに説明したとおり、Windows 7 の Enterprise エディションおよび Ultimate エディションでは、Windows 7 システム パーティションの TIB イメージからシステムを起動することができるので、バックアップされたシステムが起動可能かどうかを、実際にリカバリを行わなくても確認できます。このことができるのは、Windows の動作中に Acronis True Image Home を実行している場合のみです。

Windows 7 Enterprise または Ultimate がインストールされているコンピュータで、作成済みの Windows 7 システム パーティション バックアップからリカバリされたオペレーティング システムが起動可能かどうかをテストするには、次の手順に従います。

1. メイン メニューの **[ツールとユーティリティ]**  **[Acronis ブート シーケンス マネージャ]** を選択して Acronis ブート シーケンス マネージャを開きます。
2. Acronis ブート シーケンス マネージャのツールバーの **[追加]** をクリックし、テストする TIB ファイルを選択して **[OK]** をクリックします。
3. 実際のシステム起動は VHD から行われるので、選択された TIB ファイルの変換が必要です。そのためのダイアログが表示されます。
4. **[OK]** をクリックすると、変換後ファイルはデフォルトの場所に同じ名前で作成されますが、別の場所を指定することもできます。別の場所に保存する場合は、VHD ファイルの名前を変更することができます。

選択した場所に、変換後ファイルを保存するのに十分な空き領域がない場合は、そのことを通知するメッセージが表示されます。不要なファイルを削除して **[再試行]** をクリックするか、変換をキャンセルして変換後ファイルの場所を選択しなおしてください。

5. 変換処理が終了すると、この VHD ファイル名の行が Acronis ブート シーケンス マネージャに追加されます。

VHD を使用してシステムを起動するには、変換後の VHD ファイルが存在するパーティションに十分な空き領域がある必要があります。TIB ファイルは動的 VHD に変換されますが、その最大サイズは、TIB ファイルにバックアップされたパーティションのサイズに等しくなります。動的 vhd ファイルから起動すると、VHD は自動的に最大サイズにまで展開されます。vhd ファイルの物理ホスト パーティションに、ダイナミック VHD の最大サイズに対応した十分なディスク空き領域がない場合、起動処理は失敗します。さらに、ページング ファイル (Pagefile.sys) 用の追加領域も必要です。ページング ファイルは仮想パーティション以外のホスト パーティション上に作成されるからです。Microsoft では、vhd ファイルの最大サイズに加えて約 5 GB の空き領域が必要になると見積もるように推奨しています。つまり、必要な空き領域はシステム パーティションのサイズに 5 GB を足した大きさになります。また、以上のことから、vhd ファイルがシステム パーティション上にある場合には、vhd ファイルから起動することはできません。

6. コンピュータを再起動し、作成された VHD ファイルを Acronis ブート シーケンス マネージャの一覧から選択して **[OK]** をクリックします。Windows が通常どおり起動した場合は、将来そのバックアップからリカバリしたときに Windows 7 オペレーティング システムが起動可能になる確率はかなり高いといえます。

7. TIB イメージが起動可能であることを確認した後は、Acronis ブート シーケンス マネージャの一覧から削除してもかまいません。削除するには、その項目を選択してツールバーの **【削除】** をクリックします。削除してもよいかどうかをたずねる画面が表示されます。また、起動に使用した VHD ファイルも削除してかまいません。削除する場合は、Windows エクスプローラで削除してください。

15.4 Acronis ブート シーケンス マネージャ

Acronis ブート シーケンス マネージャでは、Windows 7 システム パーティションのイメージをブート リストに追加して、このリストを管理することができます。

このリストには、VHD と TIB のどちらの形式のバックアップ イメージも追加できます。TIB イメージを追加するには、VHD 形式に変換する必要があります。TIB イメージからの起動の詳細については、前の項を参照してください。

実際の起動は、Windows ブート ローダを使用して実行されます。Acronis ブート シーケンス マネージャの機能は、Windows ブート ローダが保持している、Windows 7 の起動時に選択可能なディスクのリストに仮想ディスク(VHD ファイル)を追加することだけです。

どの VHD から起動するかをユーザーが選択しなかった場合は、[ブート タイムアウト] フィールドで指定した時間の経過後に、デフォルトではブート リストの最初のエン트리からコンピュータが起動されます。デフォルトの起動ディスク(物理か仮想かを問わず)を変更するには、ツールバーのボタンを使用して、リストのエントリを上または下に移動します。

【名前の変更】 ボタンをクリックすると、リストのエントリに任意の名前を指定することができます。

リスト内のエントリが不要になった場合に削除するには、ツールバーの **【削除】** をクリックします。

【すべて削除】 ボタンを使用すると、仮想ディスクに関連するすべての項目を削除して元のブート構成を復元することができます。

16 アーカイブの参照およびイメージのマウント

Acronis True Image Home では、イメージのマウント、およびイメージとファイル レベル アーカイブの参照という 2 種類の方法でアーカイブの内容を管理することができます。

イメージとファイル レベル アーカイブの参照では、内容の表示、選択したファイルのハードディスクへのコピーを行うことができます。バックアップ アーカイブを参照するには、対応する tib ファイルをダブルクリックします。また、ファイルを右クリックし、ショートカット メニューの **【参照】** を選択することもできます。

参照しているバックアップからファイルをコピーすると、コピーされたファイルから「圧縮」および「暗号化」属性が失われます。これらの属性を維持したい場合は、バックアップをリカバリすることをお勧めします。

イメージを仮想ドライブとしてマウントすると、物理ドライブであるかのようにアクセスすることができます。これにより、次のことが可能になります。


- 固有のドライブ文字を持つ新しいディスクがドライブ一覧に表示される
- Windows エクスプローラやその他のファイル マネージャを使用して、物理ディスクまたはパーティションに保存されているかのように、イメージの内容を参照できる
- 実在するディスクと同じように仮想ディスクを使用（ファイルやフォルダを開く、保存、コピー、移動、作成、削除）することができる 必要に応じて、読み取り専用モードでイメージをマウントすることもできます。

この章で説明した処理は、FAT および NTFS でファイル システムでのみサポートされます。

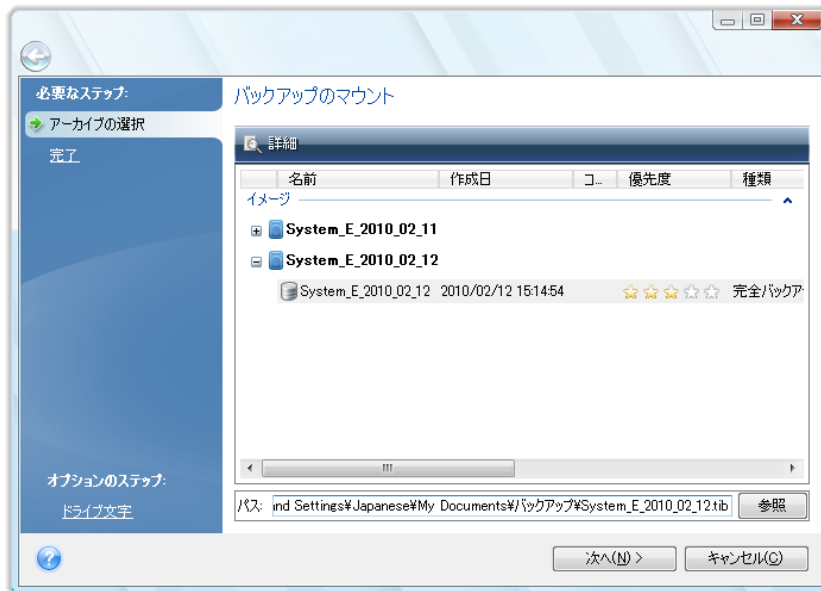
ファイル アーカイブとディスク/パーティション イメージには、どちらもデフォルトで「.tib」拡張子が付いていますが、マウントできるのは**イメージのみ**であることにご注意ください。ファイル アーカイブの内容を表示するには、参照処理を使用してください。参照とマウントの処理の概要は次のとおりです。

	参照	マウント
アーカイブの種類	ファイル レベル、ディスク、またはパーティション イメージ	パーティション イメージ
ドライブ文字の割り当て	いいえ	はい
アーカイブの変更	いいえ	はい（読み取り/書き込みモード）
ファイルの抽出	はい	はい

16.1 イメージのマウント

1. メイン メニューで **【ツールとユーティリティ】**  **【イメージのマウント】** を選択するか、または **【データ リカバリとバックアップの管理】** 画面でイメージ アーカイブを右クリックしてショートカット メニューで **【イメージのマウント】** を選択して、**マウント ウィザード** を起動します。

2. マウントするアーカイブを選択します。

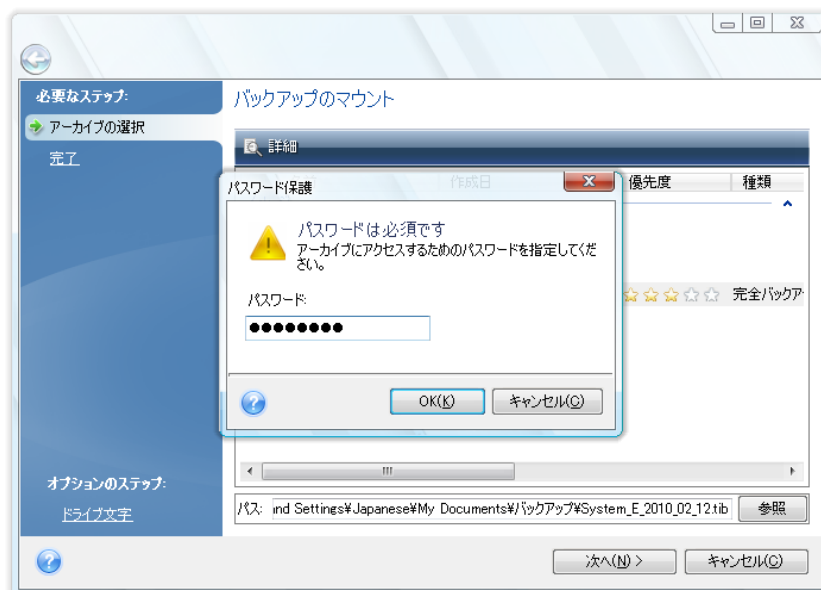


増分イメージを含むアーカイブを選択した場合は、作成日時に基づいて、連続する増分イメージ（「スライス」とも呼ばれる）の 1 つを選択できます。これにより、特定時点のデータの状態を参照できます。

増分イメージをマウントするには、それ以前のすべての増分イメージと最初の完全イメージが必要となります。連続する増分イメージのいずれかが欠けていると、マウントできません。デフォルトでは、最新の増分イメージがマウントされます。

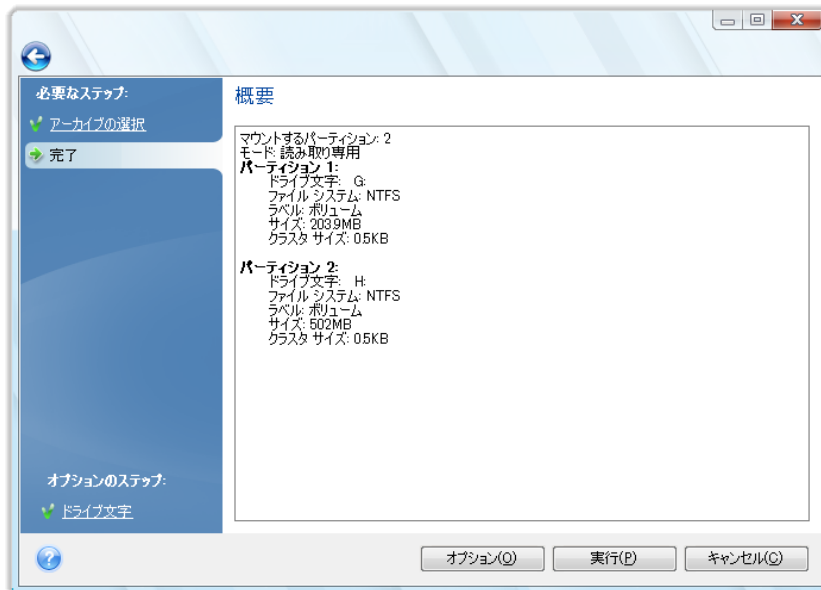
差分イメージをマウントするには、最初の完全イメージも必要となります。

アーカイブがパスワードで保護されている場合は、Acronis True Image Home によりパスワードの入力を求めるダイアログ ボックスが表示されます。正しいパスワードが入力されるまで、パーティション レイアウトは表示されず、**[次へ]** ボタンも有効になりません。

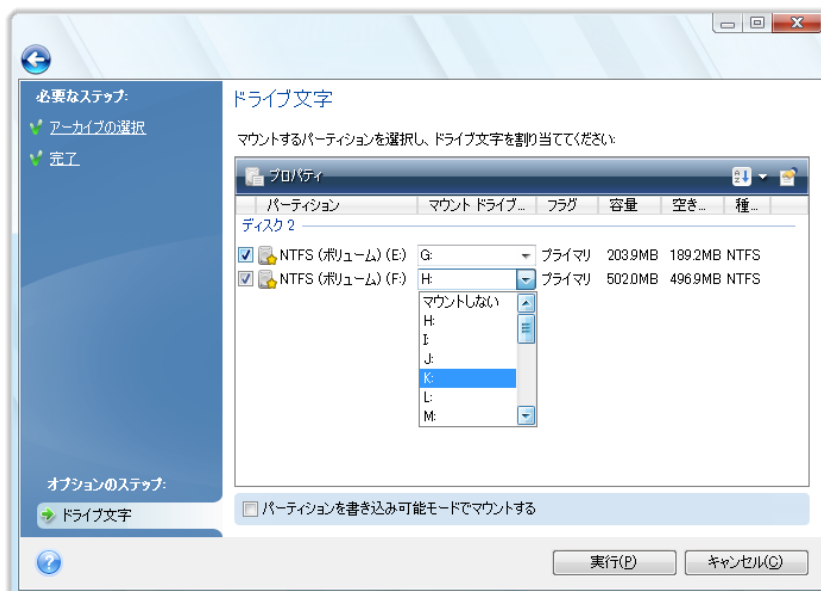


3. 仮想ディスクとしてマウントするパーティションを選択します。（ディスクが 1 つのパーティションで構成されている場合を除き、ディスク全体のイメージをマウントすることはできません）。イ

イメージに複数のパーティションが含まれている場合、デフォルトでは、すべてのパーティションがマウント対象として選択され、ドライブ文字が自動で割り当てられています。マウントするパーティションに異なるドライブ文字を割り当てる場合は、[オプション] をクリックします。



仮想ディスクに割り当てるドライブ文字を、[マウント ドライブ文字] ドロップダウン リストから選択することもできます。パーティションをマウントしない場合は、ドロップダウン リストから [マウントしない] を選択するか、該当するパーティションのチェックボックスをオフにします。



4. [パーティションを書き込み可能モードでマウントする] チェックボックスをオンにした場合は、プログラムはマウントされたイメージが変更されるものとみなし、変更内容を取り込む増分アーカイブ ファイルを作成します。予定される変更内容をファイルの [コメント] フィールドに記述しておくことをお勧めします。コメントを作成できるよう、ウィザードで [コメント] のステップ(オプション)が表示されます。
5. 設定が完了したら [実行] をクリックし、選択したパーティション イメージを仮想ディスクとして接続します。

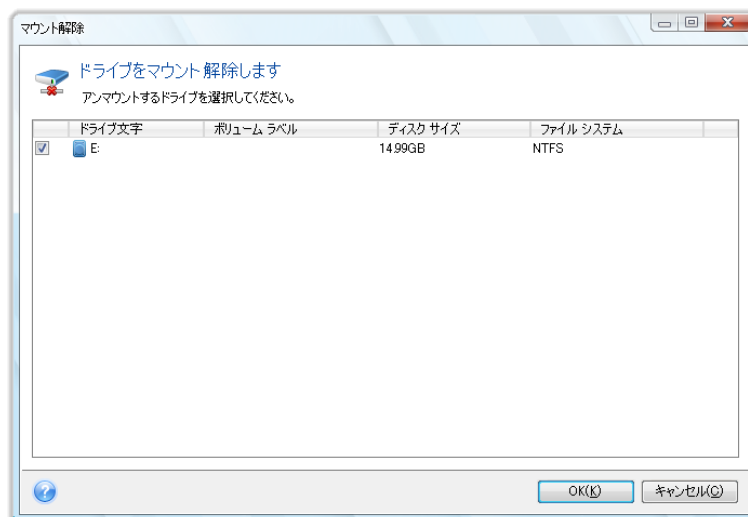
6. イメージが接続されると、Windows エクスプローラが起動し、仮想ディスクの内容が表示されます。これで、ファイルまたはフォルダが実際のディスク上にあるかのように作業することができます。

16.2 イメージのアンマウント

仮想ディスクの維持にはかなりのシステム リソースが消費されるため、必要な操作がすべて終了したら、仮想ディスクをマウント解除することをお勧めします。ディスクのアンマウントを行わない場合、このディスクはコンピュータの電源をオフにすると消滅します。

仮想ディスクの接続を切断するには、[ツールとユーティリティ]☰→☐[イメージのアンマウント] を選択し、アンマウントするディスクを指定してから [OK] をクリックします。

複数のパーティションがマウントされている場合は、デフォルトですべてのパーティションがアンマウントの対象に選択されます。マウントされているドライブの接続をすべて切断することも、マウントしておく必要がなくなったドライブだけ切断することもできます。



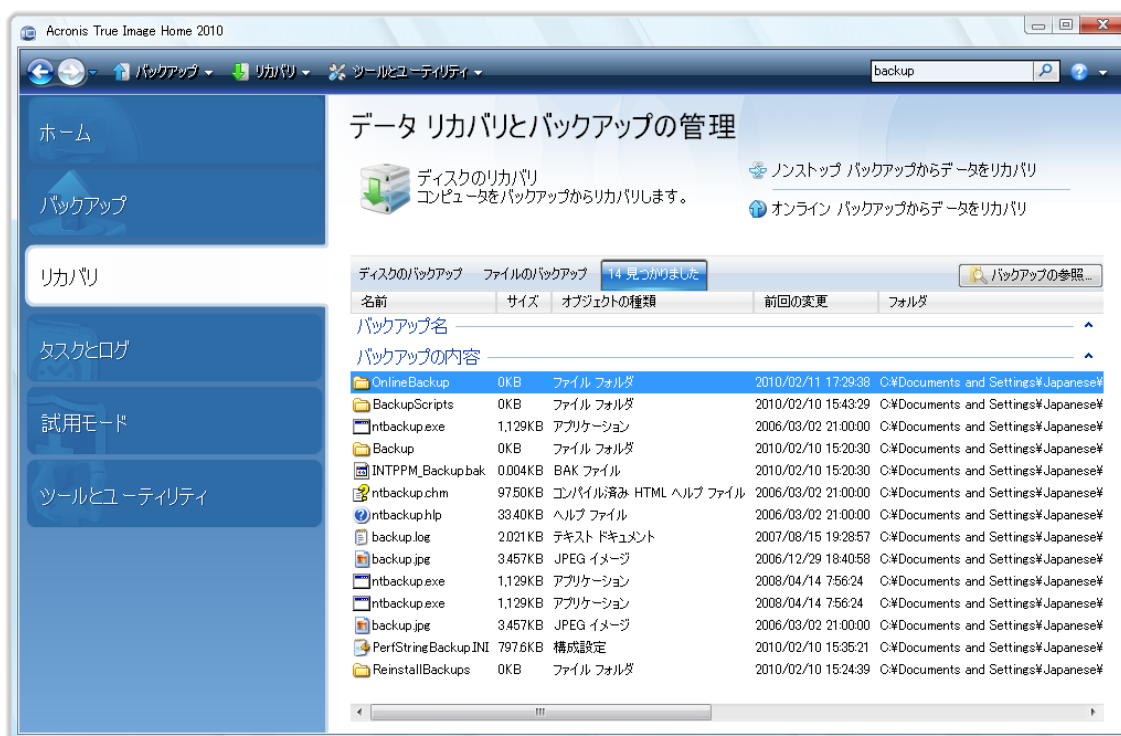
Windows エクスプローラでディスク アイコンを右クリックし、[アンマウント] を選択して、この操作を行うこともできます。

17 バックアップ アーカイブとその内容の検索

17.1 検索

Acronis True Image Home では、バックアップ アーカイブを参照できるだけでなく、tib および zip アーカイブ自体と tib アーカイブ内のファイルの検索、アーカイブについてのコメント内のフルテキスト検索が可能です。これにより、Acronis True Image Home の使用や、バックアップ アーカイブからのファイルのリカバリに必要な情報が見つけやすくなります。データを検索する方法は、次のとおりです。

1. 検索文字列を Acronis True Image Home ウィンドウ右上の [検索] フィールドに入力して虫眼鏡のアイコンをクリックすると、[データ リカバリとバックアップの管理] 画面が表示されます。ウィンドウの該当タブに検索結果が出力されます。



2. デフォルトでは、Acronis True Image Home が情報を検索できるすべてのソースで検索が実行されます。[バックアップ名] および [バックアップの内容] で該当する領域を指定して、目的の情報ソースを選択できます。

Acronis True Image Home は、ネットワーク共有、Acronis オンライン ストレージ、ノンストップ バックアップ ストレージ、および Windows で [リムーバブル ストレージがあるデバイス] として認識されるデバイスでの検索は実行できません。

- [バックアップ名] 領域には、tib および zip アーカイブの検索結果がアーカイブ ファイル名で表示されます。ファイル名をダブルクリックすると、対応するアーカイブが Windows エクスプローラで開かれ、そのアーカイブの内容を調べることができます。アーカイブのファイル名を右クリックしてショートカット メニューの適切な項目を選択すると、アーカイブを検証したりリカバリしたりできます。ショートカット メニューには、tib アーカイブの場合は [リカバリする]、[更新]、

[マウント](イメージ バックアップ用)、[検証]、[移動]、[削除]、[統合]、[参照]、[Acronis バックアップの変換](vhd アーカイブの場合は [Windows バックアップの変換])、[コメントの編集]、および [詳細] ボタンが含まれます。zip アーカイブの場合は [リカバリする]、[検証]、[移動]、[削除]、[バックアップの更新]、[コメントの編集]、および [詳細] ボタンが含まれません。

- [バックアップの内容] 領域には、tib アーカイブ内でのファイルとフォルダの検索結果が表示されます。ファイル名をダブルクリックすると、そのファイルが開きます。ファイル名を右クリックしてショートカット メニューで [リカバリする] を選択すると、ファイルをリカバリすることができます。また、このショートカット メニューからファイルやそのファイルを含む親フォルダを開くこともできます。

検索結果の理解に役立つよう、検索機能で使用されるアルゴリズムについて以下に説明します。

1. tib アーカイブにあるファイルを検索する際には、ファイル名の全部または一部を入力します。一般的な Windows のワイルドカード文字を使用することもできます。たとえば、アーカイブにあるすべてのバッチ ファイルを検索するには、「*.bat」と入力します。「my???.exe」と入力すると、ファイル名が 5 文字の「my」で始まるすべての .exe ファイルを検索できます。検索では大文字と小文字が区別されないため、「Backup」と「backup」は同じ検索文字列とみなされます。また、入力した検索条件に該当するファイルが 100 個に達すると、検索が停止されます。検索結果に必要なファイルが含まれていない場合は、検索条件を調整する必要があります。

Acronis True Image Home では、暗号化およびパスワード保護された tib アーカイブにあるファイルや、パスワード保護された Acronis セキュア ゾーンにあるファイルは検索されません。また、Acronis True Image Home で作成された zip バックアップ アーカイブ内のファイルも検索されません。

1 つのファイルが複数のバックアップに含まれており、変更されていない場合は、最も古いバックアップ ファイルでのみ、そのファイルが検索結果に表示されます。変更されたことのあるファイルの場合は、そのファイルの変更されたバージョンが含まれるバックアップ ファイルがすべて検索結果に表示されます。

2. バックアップ アーカイブに追加されたコメントの検索方法は異なります。最も大きな違いは、Windows のワイルドカード文字として「*」と「?」を使用できないことです。この場合、フルテキスト検索が行われるため、これらの文字を利用すると、コメント内でこれらの文字が含まれているものがすべて検索されるだけです(存在する場合)。フルテキスト検索は、以下の規則に従って実行されます。
 - 検索条件は、スペースまたは論理演算子(「AND」、「OR」、「NOT」)(大文字であることに注意)で区切られたキーワードで構成されます。
 - 使用できる論理演算子は 1 つだけです(検索文字列の最初の演算子)。それ以外は、キーワードとしてみなされるか、無視されます。
 - スペースで区切られたキーワードで検索する場合、すべてのキーワードが含まれた結果のみが表示されます。

[バックアップ名] 領域には、検索条件に一致するコメントを含むアーカイブ ファイルが表示されます。アーカイブを参照するには、対象のアーカイブをダブルクリックします。

17.2 Windows Search と Google デスクトップの統合

Acronis True Image Home には、Google デスクトップと Windows Search (WDS) 用のプラグインが用意されています。コンピュータ上でこれらの検索エンジンを使用する場合、使用する検索エンジンが Acronis True Image Home によって検出され、tib バックアップ アーカイブのインデックスを作成するのに適したプラグインがインストールされます。バックアップのインデックスを作成すると、

バックアップ アーカイブの検索が高速化されます。インデックスが作成されると、Google デスクトップまたは Windows Search のデスクバーのクエリ フィールドにファイル名を入力するだけで、Acronis True Image Home を起動せずにアーカイブの内容を検索できます。検索の結果はブラウザ ウィンドウに表示されます。検索結果を使用して、以下のことを行えます。

- 任意のファイルを選択し、開いて参照したり、ファイル システムの(アーカイブ以外の)任意の場所に保存したり、元の場所に戻す。
- どのアーカイブに指定したファイルが保存されているか確認し、そのアーカイブをリカバリする。

Google デスクトップでは、[クイック検索] ウィンドウを利用できます。このウィンドウには、コンピュータからの検索に対する関連性が最も高い結果が表示されます。データを入力するにつれて結果が変化するため、コンピュータ上の必要なものがある場所にすばやくアクセスできます。Windows Search も、類似する機能を提供します。

Google デスクトップと Windows Search には、バックアップ アーカイブ内のファイル名のインデックス作成機能だけでなく、Acronis True Image Home の tib アーカイブに含まれる多数のファイルのフルテキスト インデックスの作成機能も用意されており、この機能を使用してファイルの内容を検索できます。

バックアップ アーカイブに含まれるファイルのフルテキスト インデックスが作成されるのは、Google デスクトップと Windows Search により認識されるファイルの種類だけです。認識されるデータとしては、テキスト ファイル、Microsoft Office ファイル、Microsoft Office Outlook や Microsoft Outlook Express のすべてのアイテムなど、さまざまなものがあります。

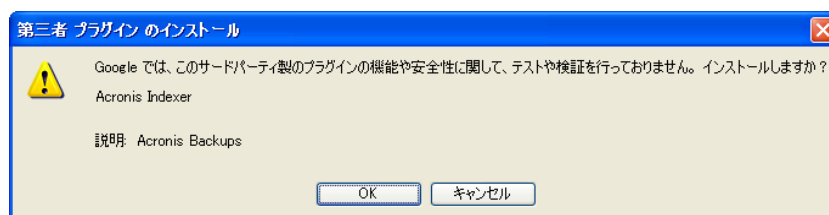
パスワードで保護されている tib バックアップ アーカイブの内容、またはパスワードと暗号化で保護されたアーカイブ、システムの状態、および電子メールのバックアップ アーカイブに対してはインデックスは作成されませんが、Google デスクトップや Windows Search では、tib ファイル自体、またはそれらのアーカイブに含まれるコメントを検索することは可能です。また、Google デスクトップおよび Windows Search は Acronis セキュア ゾーンにアクセスできないため、これらの検索エンジンを使用してゾーン内のアーカイブを検索したり、インデックスを作成することはできません。

17.2.1 Google デスクトップと Acronis True Image Home の組み合わせ

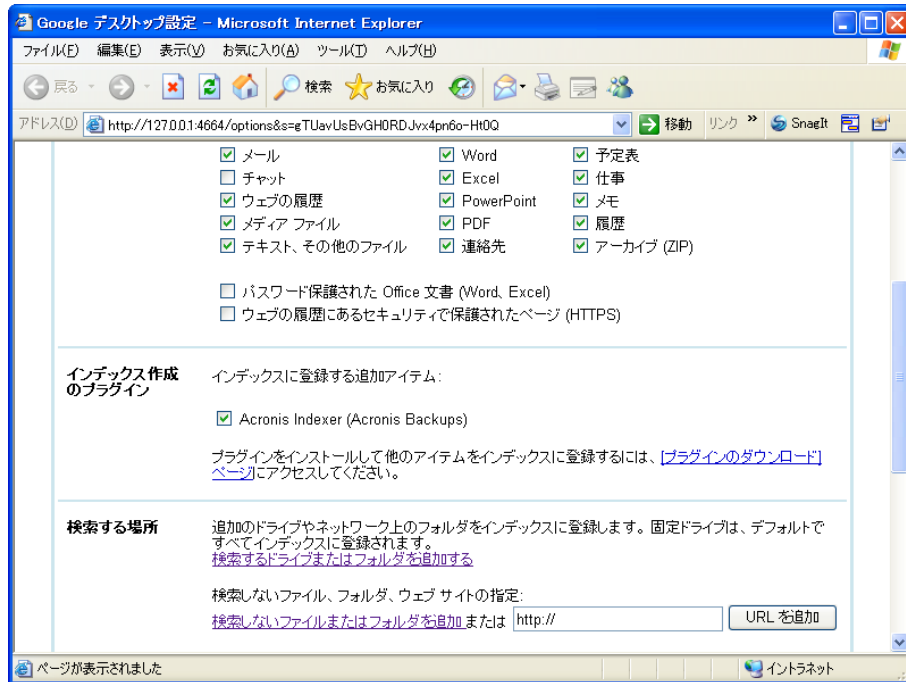
Google デスクトップを所有していない場合は、Google のウェブサイトから無料でダウンロードできます。[Google デスクトップ] をクリックし、ダウンロードとインストールの手順に従います。

tib アーカイブ内のファイル検索に Google デスクトップを利用するための手順は、次のとおりです。

1. プラグインをインストールするには、サイドバーで **[ツールとユーティリティ]** を選択します。右側ペインで **[検索設定]** をクリックし、[デスクトップ検索オプション] ウィンドウで該当するチェックボックスをオンにします。次のウィンドウが表示されます。



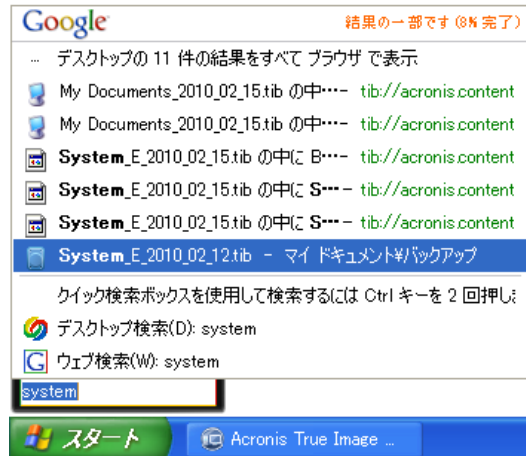
2. プラグインがインストールされていることを確認します。システムトレイにある Google デスクトップのアイコンを右クリックし、コンテキストメニューから **[オプション]** を選択します。Google デスクトップにより、ブラウザに **[設定]** ウィンドウが表示されます。**[インデックス作成のプラグイン]** 領域で **[Acronis Indexer (Acronis バックアップ)]** が選択されていることを確認します。



3. システムトレイの Google デスクトップのアイコンを再度右クリックし、**[インデックスの作成]** ⇨ **[インデックスの再作成]** の順に選択します。表示される確認ウィンドウで **[はい]** をクリックします。Google デスクトップにより、新しいコンテンツがすべて既存のインデックスに追加されます。

Google デスクトップによりコンピュータのハードディスク上にあるすべての tib ファイルのインデックスが作成され、そのインデックス情報がインデックス データベースに追加されるまでには、多少の時間がかかります。所要時間は tib アーカイブとそれに含まれるファイル数によって異なります。

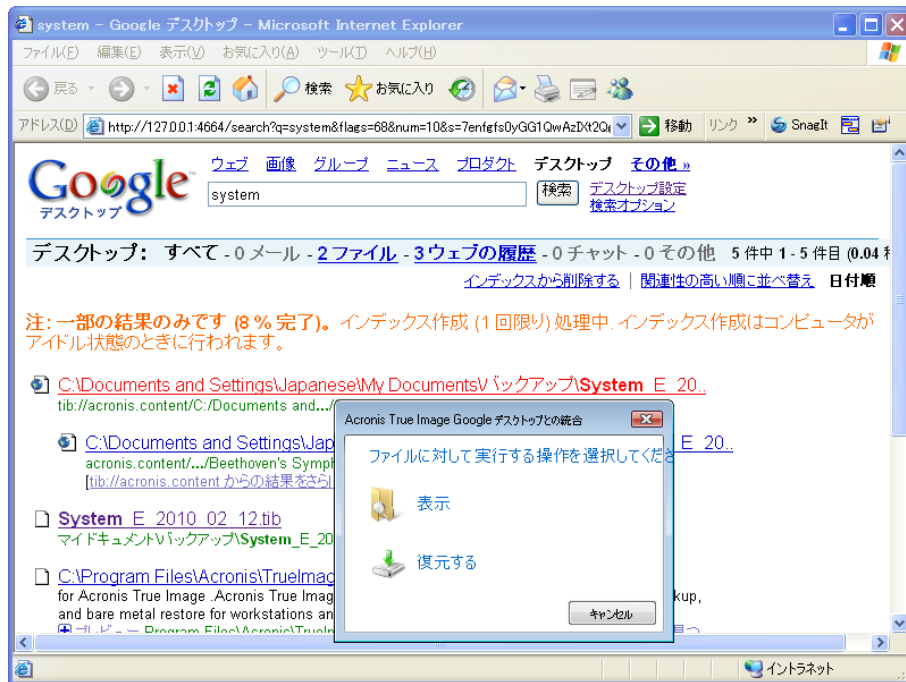
たとえば 1 時間後などに、バックアップしたことを把握しているファイルの名前をクエリ フィールドに入力して、Google デスクトップによって tib アーカイブのインデックスが作成されたかどうか確認します。Google デスクトップでインデックスの作成を完了している場合は、ファイルが見つかった tib アーカイブが表示されます。



検索結果をすべて表示するには、[すべての結果] をクリックします。次のスクリーン ショットのような検索結果が表示されます。



ブラウザ ウィンドウで任意のファイル バージョンに対応する行をクリックすると、[開く] と [リカバリする] の 2 つのオプションのみが表示された小さいダイアログが開きます。



[開く] を選択すると、このファイルの種類に対応するアプリケーションが起動され、そのファイルが開かれます。[リカバリする] を選択すると、Acronis True Image Home が起動し、ファイルを任意の場所にリカバリすることができます。

Google デスクトップでは、Acronis True Image Home によって作成された zip バックアップ アーカイブに含まれるファイルも検索できます。ただし、ブラウザ ウィンドウでファイル名の行をクリックして zip アーカイブからファイルを開いたりリカバリすることはできません。Google デスクトップによって検索された zip バックアップ アーカイブからファイルをリカバリするには、Acronis True Image Home のリカバリ機能を使用します。

17.2.2 Windows Search と Acronis True Image Home の組み合わせ

デスクトップ検索機能が組み込まれているいずれかのエディションの Windows Vista、あるいは Windows デスクトップ サーチ 3.0 以降を使用している場合、Windows Search で tib ファイルをサポートすることができます。

Windows Search をインストールしていないが使用したい場合は、Microsoft のウェブサイトから Windows Search 4.0 を無料でダウンロードできます。ダウンロードするには、[Windows Search 4.0] をクリックします。ダウンロードしたファイルをダブルクリックしてインストール手順に従います。

Windows Search は、zip ファイル コンテンツのインデックス作成には対応していません。

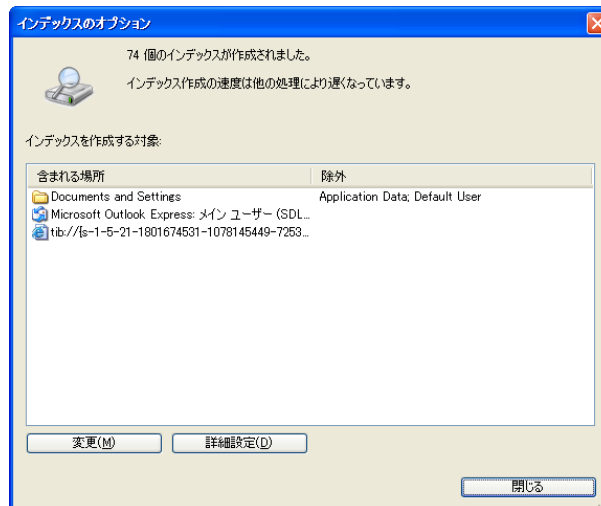
Windows Search を使用するための手順は、次のとおりです。

1. プラグインを登録するには、サイドバーで [ツールとユーティリティ] を選択します。右側ペインで [検索設定] をクリックし、[デスクトップ検索オプション] ウィンドウで該当するチェックボックス

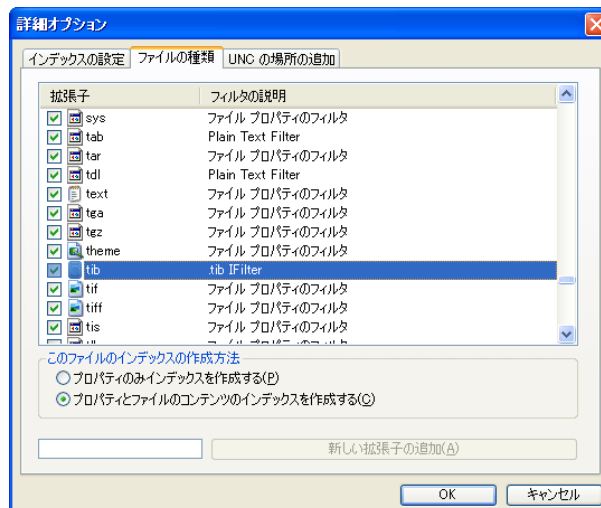
スをオンにします。プラグインが正常に登録されると、Acronis True Image Home によって「プラグインの登録に成功しました」という情報が記載されたウィンドウが表示されます。

2. tib のサポートが有効になっていることを確認します。システムトレイにある Windows Search アイコンを右クリックし、コンテキストメニューで **[Windows デスクトップ サーチのオプション...]** を選択します。次のウィンドウが表示されます。[含まれる場所] の一覧に「tib://...」という項目が表示されていることを確認します。

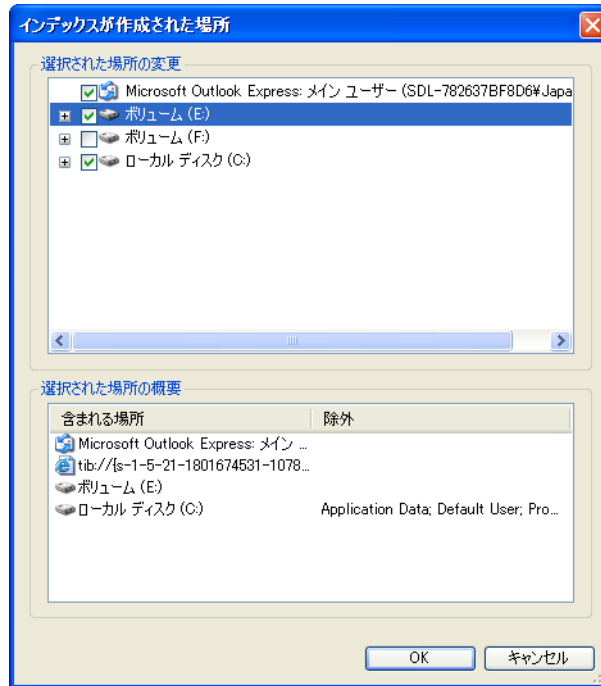
Windows Vista で [インデックスのオプション] ウィンドウを開くには、コントロールパネルを開いてから [インデックスのオプション] アイコンをダブルクリックします。*Windows Vista* のインデックスのオプションでは内容や外観が多少異なりますが、以下の説明の大部分は *Windows Vista* にも当てはまります。



3. [詳細設定] をクリックして [ファイルの種類] タブを選択し、tib 拡張子が選択されており、[フィルタの説明] フィールドに「.tib IFilter」が表示されていることを確認します。[プロパティとファイルのコンテンツのインデックスを作成する] を選択します。

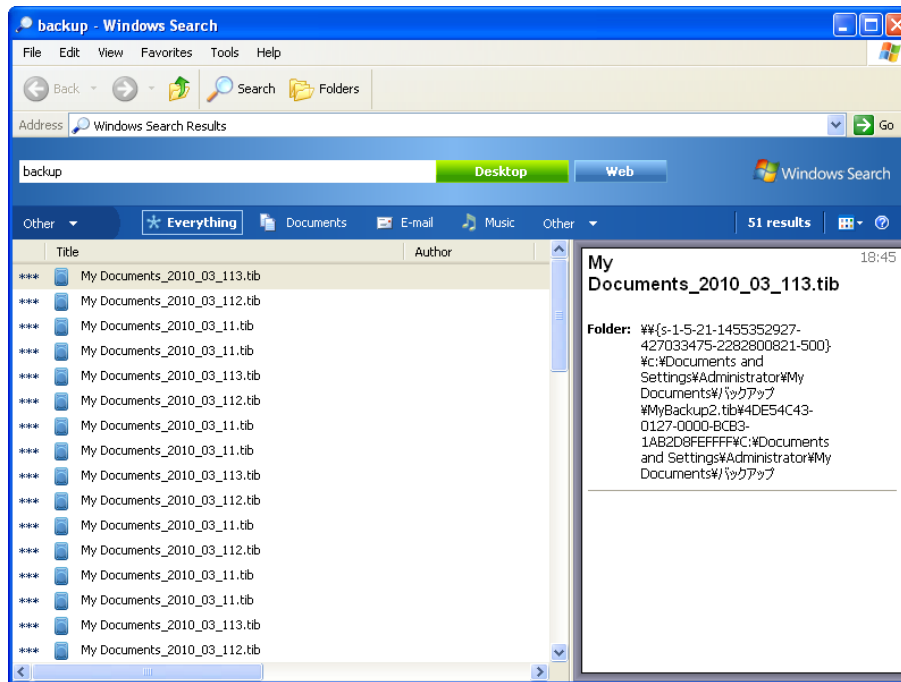


4. [OK] をクリックし、[インデックスのオプション] ウィンドウで、tib バックアップ アーカイブが保存されているディスクが [含まれる場所] の一覧に表示されていることを確認します。そのディスクが含まれていない場合、TIB ファイルのインデックスは作成されません。ディスクを追加するには、[変更] をクリックし、表示されたウィンドウでそのディスクを選択します。

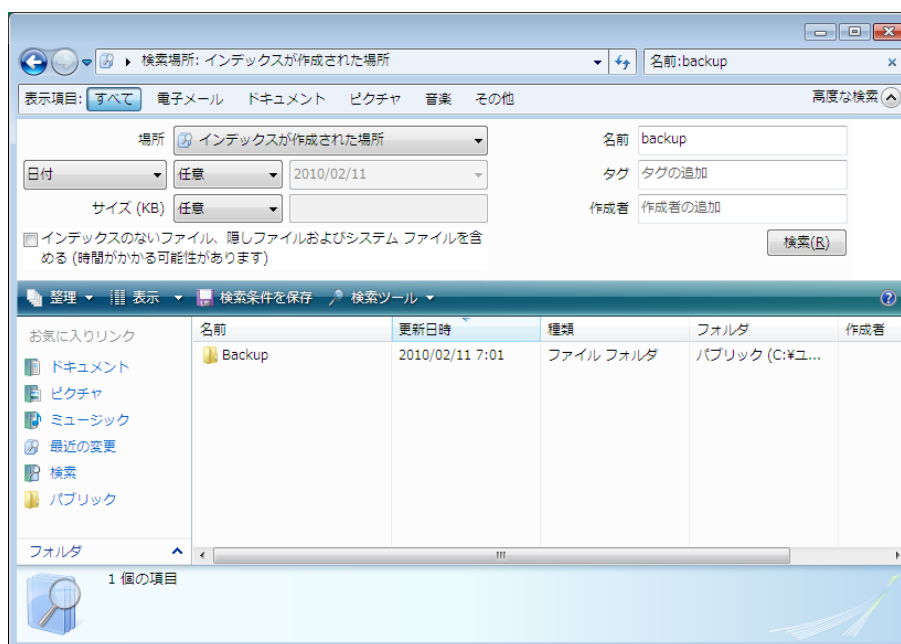


バックアップをネットワーク共有に保存している場合も、Windows Search でインデックスを作成できます。必要な作業は、その共有を [含まれる場所] の一覧に追加することだけです。入力するには、[詳細オプション] の [UNC の場所の追加] タブを選択して、適切な UNC パスを [UNC パスの追加] に入力します。

Windows Search によりコンピュータのハードディスク上にあるすべての tib ファイルのインデックスが作成され、そのインデックス情報がインデックス データベースに追加されるまでには、多少の時間がかかります。所要時間は tib アーカイブとそれに含まれるファイル数によって異なります。インデックスの作成が完了すると、デスクトップ サーチにより tib バックアップ アーカイブ内のファイルを検索できるようになります。WDS および Windows Vista の検索エンジンは同様に機能しますが、検索結果の表示方法は異なります。



Windows Search の検索結果



Windows Vista の検索結果

18 その他の操作

18.1 バックアップ アーカイブのベリファイ

検証の手順では特定のバックアップからデータをリカバリできるか確認します。次のように、選択したバックアップによって検証対象が異なります。

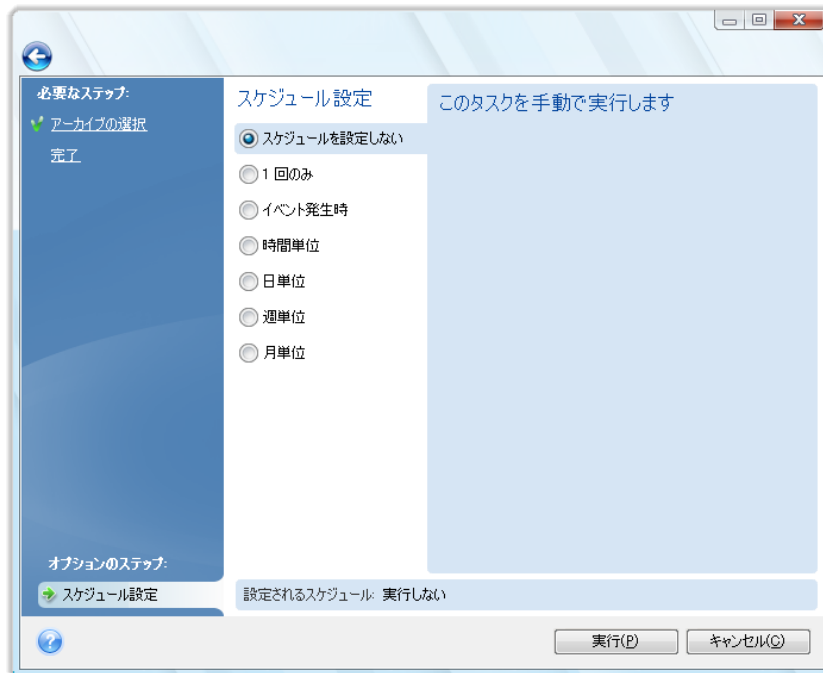
- 完全バックアップを選択すると、プログラムはその完全バックアップのみを検証します。
- 差分バックアップを選択すると、プログラムは最初の完全バックアップおよび選択した差分バックアップを検証します。
- 増分バックアップを選択すると、プログラムは最初の完全バックアップ、選択した増分バックアップ、および選択した増分バックアップ以前に作成された一連のバックアップがあれば、これをすべて検証します。この一連のバックアップに差分バックアップが 1 つでも含まれている場合、プログラムは(最初の完全バックアップおよび選択した増分バックアップに加えて)最新の差分バックアップのみを検証し、その差分バックアップと選択した増分バックアップの間に作成された増分バックアップがあればそれらもすべて検証します。

この情報は、たとえば、完全バックアップおよび一連の増分バックアップで構成されるバックアップアーカイブが破損していることが分かった場合に役立ちます。アーカイブのトラブルシューティングを行う手順は、次のとおりです。まず最初に完全バックアップを検証します。これが破損している場合は、アーカイブ全体が使用できません。破損していない場合は、増分バックアップを古いものから順に検証します。問題となっている増分バックアップが見つかるまで続けます。破損している増分バックアップ以降の増分バックアップはすべて使用できませんが、少なくともそれ以前のバックアップからのデータのリカバリは可能です。

このような検証作業は、**検証ウィザード** を使用して行います。

1. アーカイブを検証するには、サイドバーで **[リカバリする]** をクリックします。
2. 検証するアーカイブを選択し、ツールバーで **[検証]** をクリックします。選択したアーカイブがパスワードで保護されている場合は、Acronis True Image Home によりパスワードの入力を求めるダイアログ ボックスが表示されます。

- 正しいパスワードを入力すると [スケジュール設定] のステップが表示され、バックアップの検証のスケジュールを設定するか、またはデフォルトの設定である [スケジュールを設定しない] のままにすることができます。



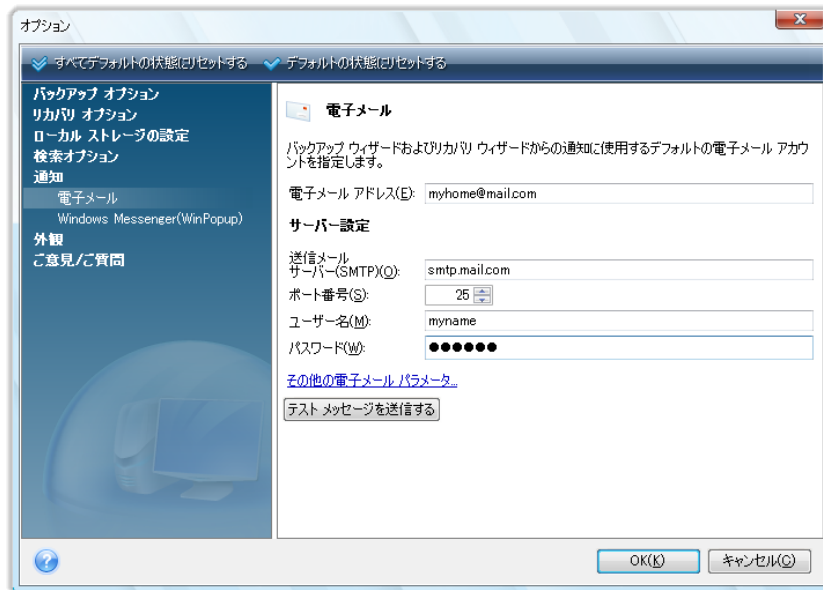
- 【実行】** をクリックすると、検証の手順が開始されます。スケジュールによってバックアップアーカイブを検証する場合、設定されたスケジュールに基づいて検証が実行されます。ベリファイが完了すると、結果ウィンドウが表示されます。**【キャンセル】** をクリックすると、検証をキャンセルできます。

18.2 処理結果の通知

バックアップまたはリカバリの処理には 1 時間以上かかる場合があります。Acronis True Image Home には、処理の終了時にポップアップ サービスまたは電子メールで通知する機能があります。また、処理中に発行されたメッセージを送信したり、処理完了後に詳細な処理ログを送信することもできます。

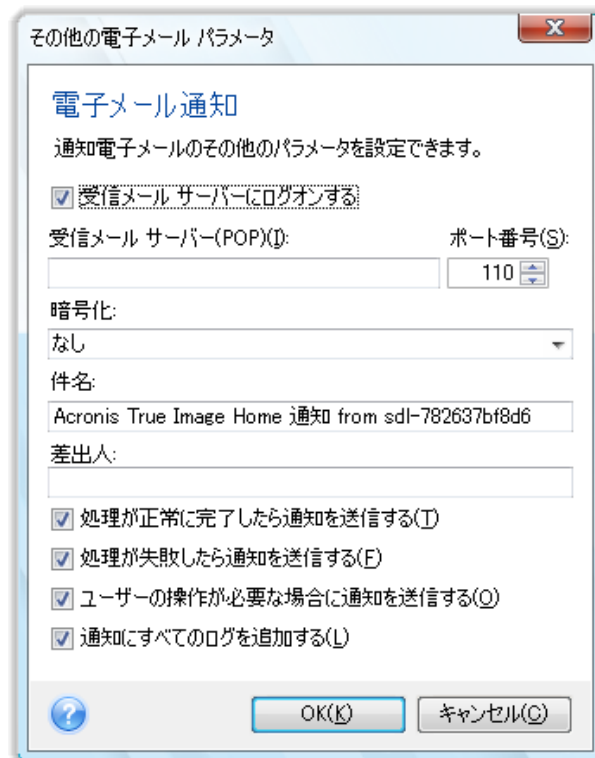
18.2.1 電子メール通知

電子メール通知を設定するには、[ツールとユーティリティ] → [オプション] → [通知] → [電子メール] を選択します。



通知の送信先の電子メール アドレスと、送信 SMTP サーバー名およびポートを指定します。SMTP サーバーでユーザー認証が必要な場合は、ユーザー名とパスワードも必要になります。

その他の電子メール パラメータを設定するには、[その他の電子メール パラメータ...] をクリックします。



送信 SMTP サーバーによる送信メッセージの送信の際に、受信メール サーバーへのログオンが必要な場合は、受信メール サーバーについて必要な情報を入力します。

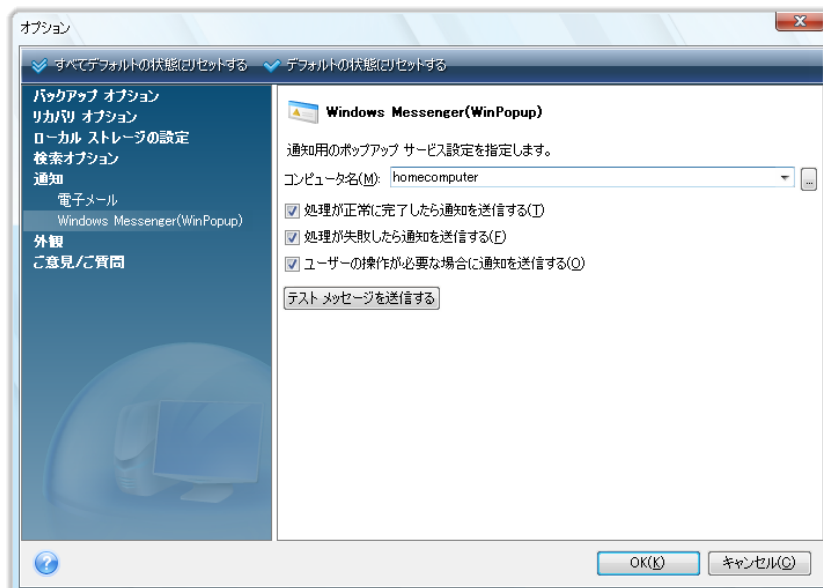
このウィンドウの下部で、次の通知を受け取るかどうかを選択できます。

- 処理が正常に完了した場合(メッセージにすべての処理ログを追加するには、[通知にすべてのログを追加する] チェックボックスをオンにします)
- 処理に失敗した場合(メッセージにすべての処理ログを追加するには、[通知にすべてのログを追加する] チェックボックスをオンにします)
- 処理中にユーザーによる操作が必要な場合

電子メール通知の設定を終えたら、該当するボタンをクリックしてテスト メール メッセージを送信することができます。

18.2.2 WinPopup による通知

WinPopup による通知を設定するには、[ツールとユーティリティ] □ → [オプション] □ → [通知] □ → [Messenger(ポップアップ サービス)] を選択します。



通知の送信先とするコンピュータの名前を指定します。

このウィンドウの下部で、次の通知を受け取るかどうかを選択できます。

- 処理を正常に完了した場合
- 処理が失敗した場合
- 処理中にユーザーによる操作が必要な場合

18.3 タスクとログの表示

Acronis True Image Home には [タスクとログ] 画面があり、ここで実際のログおよびスケジュールされたタスクを参照できます。ログには、たとえばスケジュールされたバックアップや検証タスクの結果(失敗の場合の理由を含む)についての情報が表示されます。

Acronis True Image Home のほとんどの処理では独自のエンタリがログに記述されますが、Try&Decide の処理、イメージのマウント/アンマウント、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャのアクティブ化/無効化、およびブータブル メディアの作成ではログは提供されません。

また、Acronis オンライン バックアップおよび Acronis ノンストップ バックアップの処理については一部の情報のみがログに含まれます。これらの機能の処理についてのその他の情報は、独自のログに記述されます。このログは アクロニスのサポート スタッフが、これらの機能の問題をトラブルシューティングするのに役立てることを目的としているため、ユーザーは使用できません。ログは、Acronis システム レポートに含まれています。

[タスクとログ] 画面を開くには、サイドバーの **[タスクとログ]** をクリックします。デフォルトでは、**[スケジュールされたタスク]** タブが選択された状態で画面が開きます。このタブには、スケジュールされたタスクがすべて表示されます(ある場合)。**[スケジュールされていないタスク]** タブを選択すると、バックアップ ウィザードまたは検証ウィザードの **[スケジュール設定]** のステップで **[スケジュールを設定しない]** を選択した後に構成されたタスクすべて(完了または未完了に関わらず)が表示されます。



カレンダーの色のマークは、スケジュールされたタスク、エラーが発生した完了タスク、および正常に完了したタスクがある日付についての情報を示します。現在の日付は、太字で強調表示されています。スケジュールされたタスクでマークされている日付をクリックすると、その日付にスケジュールされているタスクが表示されます。

カレンダーの両側にある左右の矢印のボタンを使用すると、カレンダーに表示される月を変更できます。数か月前または数か月後に移動した場合、**[今日]** ボタンをクリックすると、現在の月および日付にすばやく戻れます。

過去の日付をクリックすると **[ログ]** タブに移動し、選択した日付のログが表示されます。その日付のログがない場合は、該当するメッセージが表示されます。

ログを表示するには、**[ログ]** タブをクリックします。

[ログ] タブを選択すると、上側ペインにはカレンダー、下側ペインにはログの内容が表示されます。



特定の期間のログを確認するには、[表示期間] の領域で [開始日:] および [終了日:] フィールドの右向き矢印をクリックして期間を選択します。[開始日:] フィールドの矢印をクリックすると、ポップアップ カレンダーが開くので、任意の日付をダブルクリックして期間の開始日を設定できます。次に、同じように [終了日:] フィールドに終了日を入力します。ポップアップ カレンダーの月の名前の部分にある左右の矢印を使用して、月や年を変更することができます。また、目的の期間の開始日と終了日を直接そのフィールドに入力することもできます。ログをすべて表示する場合は、[すべて表示] ボタンをクリックします。

ログのエントリを削除するには、エントリを選択してツールバーの [削除] ボタンをクリックします。ログのエントリをすべて削除するには、[すべて削除] ボタンをクリックします。また、[保存] ボタンをクリックしてログ エントリをファイルに保存することもできます。すべてのログをファイルに保存するには、[すべて保存] をクリックします。

ログに表示されたいずれかのステップがエラーで終了した場合、対応するログには赤い円内に白い「X」のマークが付けられます。

右側の 3 つのボタンはメッセージのフィルタ処理を制御します。赤い円内に白い「X」のマークはエラー メッセージをフィルタし、黄色の三角に感嘆符のマークは警告をフィルタし、青い丸に「i」のマークは情報メッセージをフィルタします。

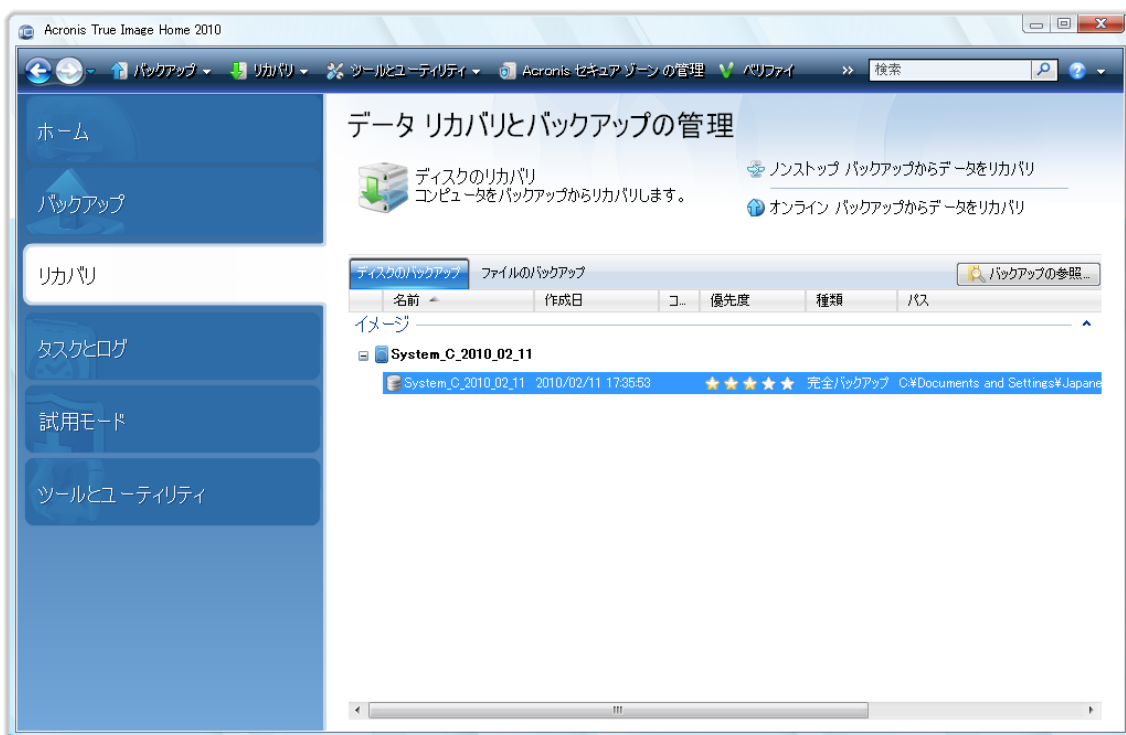
現在のステップの詳細を見やすく表示するため、カレンダー ペインの右上部にある上向き矢印をクリックしてカレンダーを非表示にすることができます。これにより、ログの領域が広くなります。カレンダーを再度表示するには、カレンダー ペインの右上にある下向きの矢印をクリックします。

スケジュールされたタスクのマークが付いた日付をクリックすると、[スケジュールされたタスク] タブに移動し、タスクの詳細が表示されます。将来の日付をクリックした場合も [スケジュールされたタスク] タブが表示されます。今までにスケジュールされたタスクをすべて確認するには、[スケジュールされたタスクをすべて表示する] ボタンをクリックします。

18.4 バックアップ アーカイブの管理

古いバックアップや不要になったバックアップを削除して新しいバックアップのために領域を空けるなど、バックアップ アーカイブの管理をする必要が生まれることがあります。Acronis True Image Home ではバックアップ アーカイブについての情報がメタデータ情報データベースに保存されているため、バックアップ アーカイブの管理(削除や移動など)は、Windows エクスプローラではなくプログラムのツールを使用して行う必要があります。バックアップ アーカイブを管理するには、スライダーで [リカバリ] を選択して [データ リカバリとバックアップの管理] 画面に移動します。

すべてのバックアップ アーカイブは、[ディスクのバックアップ] と [ファイルのバックアップ] の 2 つのタブに分けられています。[ディスクのバックアップ] タブには、イメージ バックアップとファイル バックアップが含まれます。具体的には、データ、システムの状態、電子メール、およびアプリケーションの設定です。



希望するバックアップ アーカイブを右クリックして開くショートカット メニューで、バックアップに対して次の処理を実行できます。

- **参照** - 「アーカイブの参照およびイメージのマウント『137 ページ参照』」を参照
- **リカバリ** - 「リカバリ ウィザード - 詳細情報『91 ページ参照』」を参照
- **更新** - 新しいバックアップ タスクを作成せずに、既存のバックアップ アーカイブに増分または差分バックアップを追加
- **ベリファイ** - 「バックアップ アーカイブの検証『151 ページ参照』」を参照
- **イメージのマウント(イメージのみ)** - 「イメージのマウント『140 ページ参照』」を参照
- **統合** - 「バックアップの統合『158 ページ参照』」を参照
- **コメントを編集する** - バックアップの作成中に行われたコメントの編集や、無人実行がスケジュールされたバックアップへのコメントの追加

- **名前の変更** - バックアップ アーカイブや個々のバックアップの名前の変更(バックアップの名前はプログラムのメタデータ データベースでのみ変更され、バックアップ ファイル名は変更されません)
- **移動** - 「バックアップ アーカイブの移動『161 ページ参照』」を参照
- **削除** - 「バックアップ アーカイブの削除『161 ページ参照』」を参照
- **Windows バックアップに変換** - 「Windows バックアップへの変換『132 ページ参照』」を参照(この項目は、イメージ バックアップで tib 形式を選択した場合にのみ表示)
- **Acronis バックアップに変換** - 「Acronis バックアップへの変換『133 ページ参照』」参照(この項目は、イメージ バックアップで vhd 形式を選択した場合のみ表示)
- **詳細** - 選択したバックアップについての詳細情報の表示

18.5 バックアップの統合

Acronis True Image Home には 2 種類の統合手順(自動統合とファイル名に基づく統合)があります。自動統合の場合、プログラムではバックアップ アーカイブ用に設定された規則が利用されます。バックアップ作成後に、あらかじめ設定されているバックアップの最大サイズ(GB)を超えていないかなど、制限違反の有無が確認され、制限値を超えている場合は最も古いバックアップ群が統合されます。最初の完全バックアップとその次の増分バックアップが 1 つの完全バックアップとして統合され、バックアップの日付が統合前の増分バックアップの日付に変更されます。次に、必要に応じて、使用領域(またはバックアップ数)があらかじめ設定された制限値以下になるまで、このバックアップが次のバックアップと統合されます。このため、最も古いバックアップは削除されますが、アーカイブの整合性に影響はありません。

作成されるバックアップの実際数は、**[バックアップの最大数]** を 1 つ超過することができます。これにより、プログラムは制限値の超過を検出して統合を開始することができます。統合が終了するまで、バックアップは禁止されます。

ファイル名に基づく統合では、アーカイブの整合性を維持したまま、任意のアーカイブから不要になったバックアップを削除することができます。必要に応じて、アーカイブからベースの完全バックアップを削除することができます。プログラムによって、最も古い残りのバックアップの代わりに別の完全バックアップが作成されます。2 種類のバックアップ手順には以下のような違いがあります。

自動統合では、2 つのバックアップを 1 つに統合することしかできません。ファイル名に基づく統合では、選択されたバックアップが保持され、選択されなかったバックアップは削除されます。

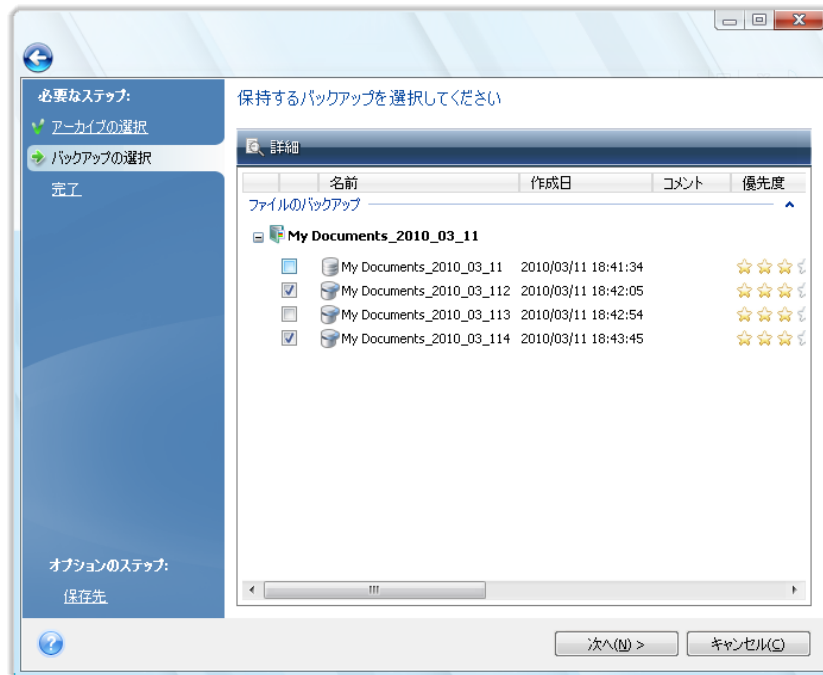
現在の Acronis True Image Home バージョンでは、zip 形式で作成されたバックアップ アーカイブの統合はサポートされません。

Acronis True Image Home では、読み取り/書き込みモードでマウントしたパーティション イメージを編集する際に作成された増分バックアップは統合できません。

アーカイブ内のバックアップを統合する手順は、次のとおりです。

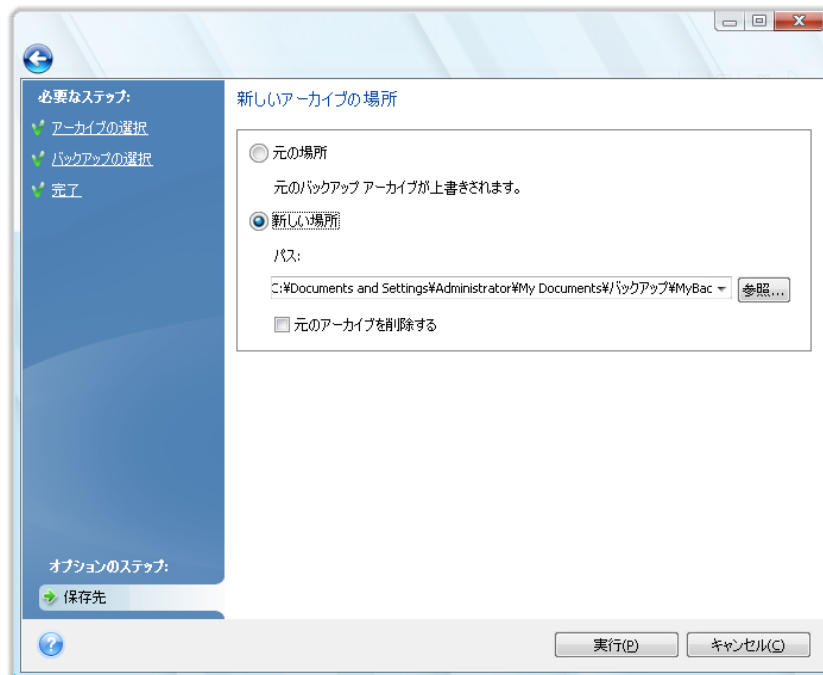
1. サイドバーで **[リカバリする]** を選択し、統合するアーカイブを選択します。
2. 選択したバックアップ アーカイブを右クリックし、ショートカット メニューの **[統合]** を選択して、**統合ウィザード**を起動します。

3. 選択されたアーカイブに含まれるバックアップと作成日時の一覧が表示されます。一番上に表示されているバックアップは完全バックアップ、その他は増分バックアップです。保持するバックアップを選択し、[次へ] をクリックします。



4. デフォルトでは、統合されたアーカイブ用に同じ場所が選択され、元のバックアップ アーカイブは上書きされます。また、新しい場所を選択することもできます。その場合、**[元のアーカイブを削除する]** チェックボックスをオンにして削除を行わない限り、ソース アーカイブはそのまま保持されます。これには、多くのディスク領域が必要になりますが、停電やディスク領域不足により統合に失敗した場合でもアーカイブの安全性を確保できます。新しい場所を選択するには、[概要] 画面の **[オプション]** をクリックします。

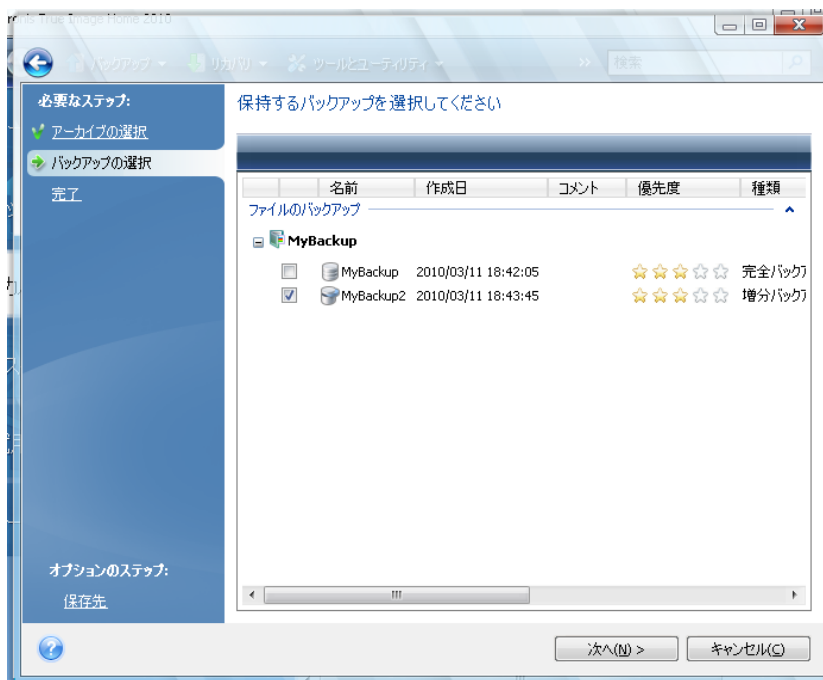
Acronis セキュア ゾーン に保存されているアーカイブの中のバックアップを統合する場合は、別の場所を選択することはできません。



5. 新しい場所を選択したら、**[実行]** をクリックして統合を開始します。

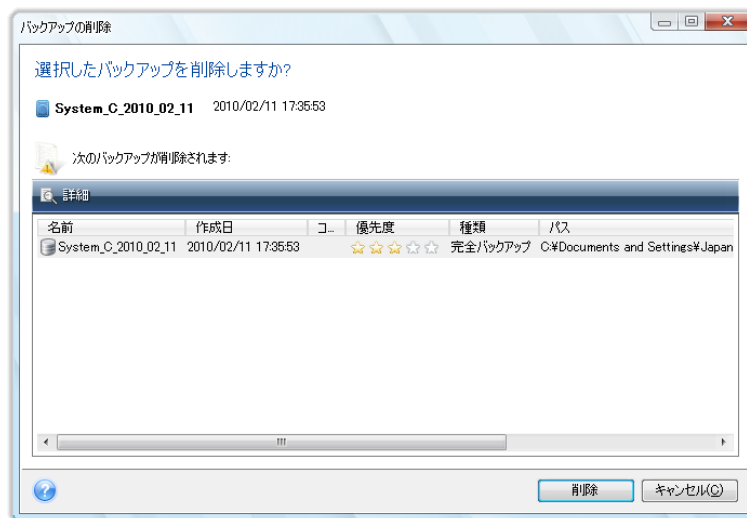
この例では、統合が完了すると、ディスク G には 2 つの新しいアーカイブ (Disk1_backup2 と Disk1_backup4) が含まれます。

Disk1_backup2 は完全バックアップであり、Disk1_backup4 は増分バックアップです。統合ウィザードをもう一度開始し、アーカイブ Disk1_backup を選択し次のウィンドウへ進むと、このことを確認することができます。



18.6 バックアップ アーカイブの削除

不要になったバックアップやバックアップ アーカイブは削除することができます。Acronis True Image Home では、バックアップ アーカイブに関する情報がメタデータ情報データベースに保存されるため、Windows エクスプローラを使用して不要なアーカイブ ファイルを削除しても、それらのアーカイブに関する情報はデータベースから削除されず、Acronis True Image Home ではそれらがまだ存在しているとみなされます。したがって、既に存在しないバックアップの処理がプログラムによって実行されると、エラーが発生します。このため、必要のなくなったバックアップやバックアップ アーカイブを削除するときは、必ず Acronis True Image Home のツールを使用してください。バックアップ アーカイブ全体を削除するには、そのアーカイブを選択してツールバーで **【削除】** をクリックするか、バックアップ アーカイブの完全バックアップを右クリックしてショートカット メニューで **【削除】** を選択します。増分バックアップまたは差分バックアップを削除するには、そのバックアップを選択してツールバーで **【削除】** をクリックするか、選択したバックアップを右クリックしてショートカット メニューで **【削除】** を選択します。この場合、連続するその他のすべての増分バックアップおよび差分バックアップのうち、選択した増分バックアップまたは差分バックアップ以降に作成されたものも削除されます。次の画面が表示されます。



【削除】 をクリックすると、バックアップ アーカイブがハードディスクからだけでなく、メタデータ情報データベースからも削除されます。

18.7 バックアップ アーカイブの移動

Acronis True Image Home でバックアップ アーカイブを別の場所に移動できるようになりました。これは、新しいバックアップのための領域を空けたいが、以前のバックアップ アーカイブを、たとえばネットワーク共有など、別の場所で保持したい場合に役立ちます。他にも、バックアップ アーカイブを保持するのに使用しているディスクをリカバリする場合があります。バックアップ アーカイブがリカバリ対象のハードディスクと同じハードディスクにある場合、プログラムではリカバリできません。バックアップ アーカイブを他のハードディスクに移動させる必要があります。

1. サイドバーで **【リカバリする】** をクリックしてから、移動させるアーカイブを選択します。
2. アーカイブを移動させるには、**【データ リカバリとバックアップの管理】** 画面でアーカイブを選択します。Acronis True Image Home では常にアーカイブ全体が移動するので、アーカイブが複数のバックアップで構成されている場合はどのバックアップでも選択できます。

3. 選択を完了したら右クリックし、ショートカットメニューで **【移動】** を選択します。
4. 移動が完了すると、[データ リカバリとバックアップの管理] 画面の **【パス】** の列でアーカイブのパスが変更されます。

19 新しいディスクへのシステムの転送

19.1 一般情報

コンピュータのユーザーの多くが、ハードディスクの容量不足を経験します。データ用の領域がなくなった場合は、次の章で説明しているようにデータ ストレージ専用 to 別のディスクを追加することができます。

しかし、ハードディスクにオペレーティング システムやインストール済みアプリケーション用の十分な領域がないと、ソフトウェアの更新や新しいアプリケーションのインストールを行うことができなくなります。この場合は、システムを大容量のハードディスクに移行する必要があります。

システムを移行するには、まずコンピュータにディスクを取り付けなければなりません(詳細については「ハードディスクと起動順」『191 ページ参照』を参照してください)。コンピュータに別のハードディスク用のベイがなければ、ハードディスクを一時的に CD ドライブの場所に取り付けるか、または USB 2.0 を使用して外付け型のターゲット ディスクに接続します。それができない場合は、ディスク イメージを作成してより大きなパーティションを持つ新しいハードディスクにリカバリすることで、ハードディスクのクローンを作成します。

自動と手動の 2 つの移行モードを使用できます。

自動モードでは、いくつかの簡単な操作を行うだけで、パーティション、フォルダ、およびファイルを含むすべてのデータを新しいディスクに移行することができます。元のディスクがブータブル(起動用)ディスクだった場合は、新しいディスクがブータブルになります。

元のディスクと新しいディスクの違いは、新しいディスクのパーティションの方が大きいという点だけです。その他は、インストールされたオペレーティング システム、データ、ディスク ラベル、設定、ソフトウェアを含みすべて同じになります。

自動モードでは、データの移行のみが実行されます。つまり、元のディスクのレイアウトを新しいディスクへ複製する処理が行われるだけです。その他の処理を行う場合は、クローン作成パラメータに関する追加の設定を行う必要があります。

手動モードでは、さまざまなデータ転送に対応できます。パーティションとデータの移行方法を次から選択することができます。

- 現状のまま
- 新しいディスク領域を元のディスクのパーティションに比例して配分
- 新しいディスク領域を手動で配分

プログラムの画面では、破損したパーティションの左上の隅に、赤い丸に白い「x」のマークが付きます。クローン作成を開始する前に、適切なオペレーティング システム ツールを使用して、ディスクにエラーがないかどうかを調べる必要があります。

現在のバージョンの Acronis True Image Home では、ダイナミック ディスクと GPT ディスクのクローン作成はサポートされていません。

19.2 セキュリティ

転送の実行中にコンピュータの電源が切れた場合や、誤って **【リセット】** が押された場合は、転送処理は未完了となるため、ハードディスクのパーティション作成とフォーマットまたはクローン作成をもう一度行う必要があります。

元のディスクは読み取られるだけであり、パーティションやサイズが変更されるわけではないので、データが失われることはありません。

ただし、元のディスクのデータはすぐには削除しないことをお勧めします。データが新しいディスクに正しく転送されて、そのディスクからコンピュータが正常に起動し、すべてのアプリケーションが動作していることを確認するまでは、削除しないでください。

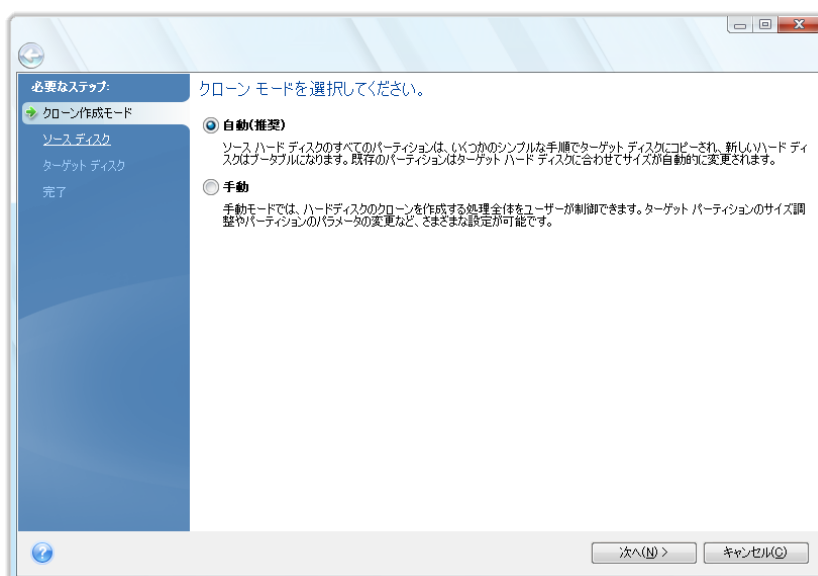
19.3 転送の実行

転送を効率的に行うには、転送先(新しい)ドライブをコンピュータに取り付けてから、転送元ドライブを別の場所(たとえば外付けの USB エンクロージャ)に取り付けます。特にラップトップ コンピュータの場合は、このとおりにすることをお勧めします。

クローンの作成を開始するには、メイン プログラム メニューの **【ツールとユーティリティ】** → **【ディスクのクローン作成】** の順に選択します。

19.3.1 クローン作成モードの選択

【クローン作成モード】 ウィンドウが表示されます。

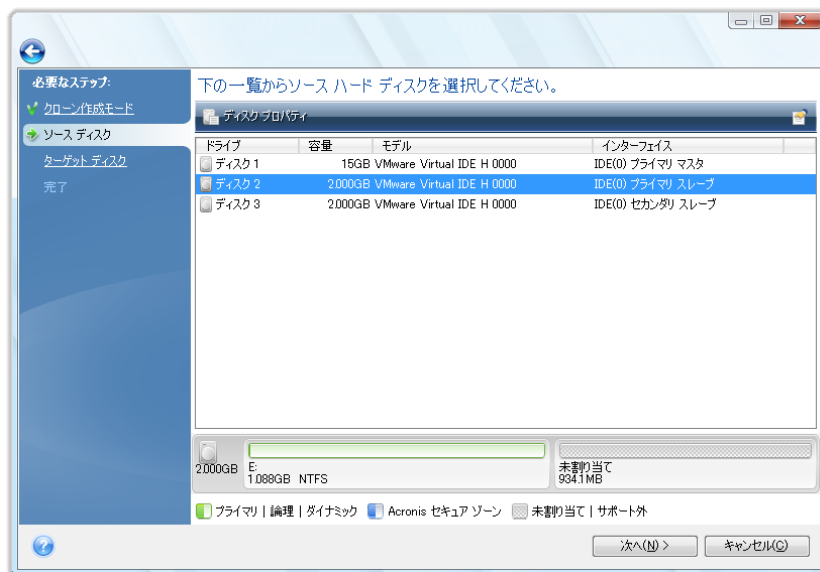


ほとんどの場合は、自動モードをお勧めします。手動モードは、ディスク パーティション レイアウトの変更が必要な場合に使用するとよいでしょう。

ディスクが 2 つ検出されて、一方にパーティションがあり、他方にはない場合は、パーティションのあるディスクが自動的にソース ディスクとして認識され、パーティションのないディスクがターゲットディスクとして認識されます。これに該当する場合は、以降のステップが省略され、クローン作成の概要画面が表示されます。

19.3.2 ソース ディスクの選択

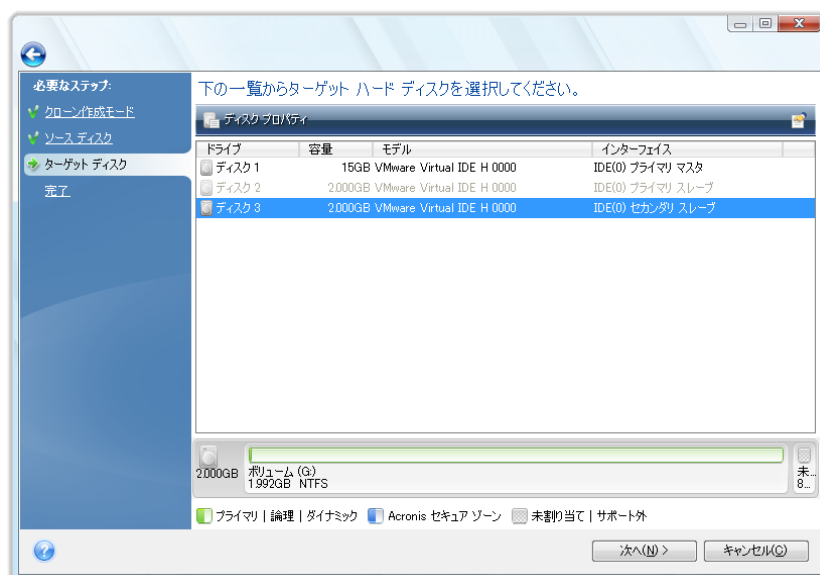
パーティションを持つディスクが複数検出されたときは、ソース ディスク(つまり、古い方のデータディスク)を指定するためのウィンドウが表示されます。



このウィンドウに表示される情報(ディスク番号、容量、ラベル、パーティション、およびファイル システムの情報)を参照して、ソース(移行元)とターゲット(移行先)を指定します。

19.3.3 ターゲット ディスクの選択

移行元(ソース)のハードディスクを選択した後で、ディスク情報のコピー先となる移行先(ターゲット)のハードディスクを選択します。

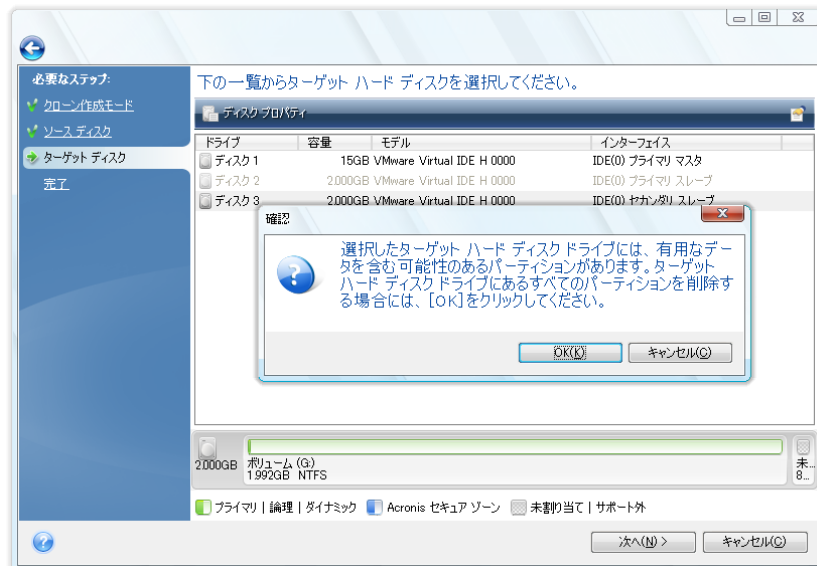


前のウィンドウでソースとして選択したディスクはグレー表示になり、選択できなくなっています。

パーティションが作成されていないディスクがある場合は、そのディスクが自動的に移行先と見なされるため、このステップは省略されます。

19.3.4 パーティションのあるターゲット ディスク

この時点で、ターゲット ディスクが空かどうかの検査が行われます。空ではない場合は、ターゲット ディスクにパーティションが存在し必要なデータが含まれている可能性があることを知らせる確認ウィンドウが表示されます。



パーティションの削除を確定するには、**[OK]** をクリックします。

実際の変更やデータ消去はまだ行われないことに注意してください。この時点では、クローン作成に必要な指定を行います。すべての変更は、**[実行]** をクリックするまで実際には行われません。

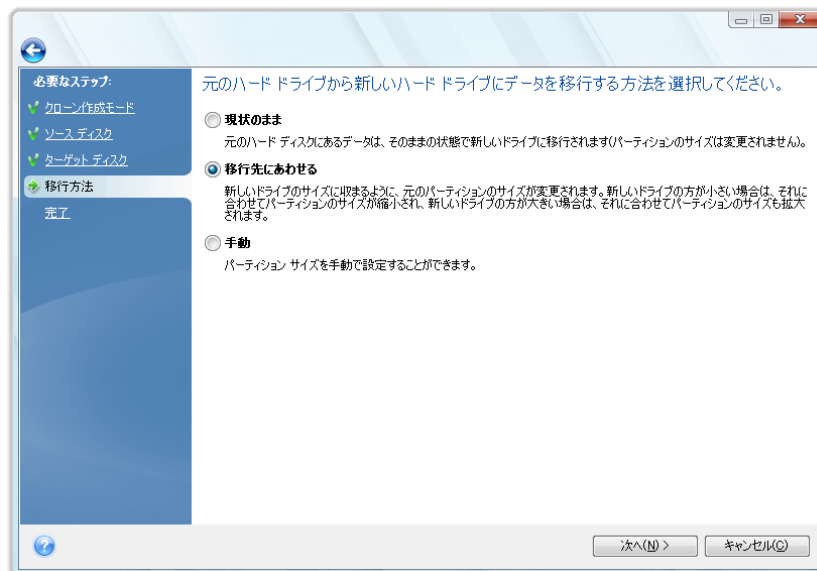
自動モードを選択した場合は、他に指定が必要な項目はないので、クローン作成の概要ウィンドウが表示されます。

19.3.5 パーティションの転送方法の選択

手動クローン作成モードを選択した場合は、データ移動方法として次のいずれかを選択できます。

- **現状のまま**
- **移行先にあわせる** – 新しいディスクの領域は、各パーティションの元の大きさに比例して配分されます。

- **手動** - 新しいサイズとその他のパラメータを指定できます。



[現状のまま] を選択した場合は、古いパーティションのそれぞれについて、同じサイズ、種類、ファイル システム、ラベルの新しいパーティションが作成されます。使用されない領域は未割り当てになります。後で、この未割り当ての領域を、新しいパーティションの作成や既存パーティションの拡大に使用することができます。その場合は、Acronis Disk Director Suite などの専用ツールを使用します。

基本的に、転送方法として [現状のまま] を選択することはお勧めできません。新しいディスクのかなりの部分が未割り当てのままになるからです。[現状のまま] を選択すると、サポートされていないファイル システムや破損したファイル システムも転送されます。

[移行先にあわせる] を選択した場合は、各パーティションの大きさが、古いディスクと新しいディスクの容量の比率に従って拡大されます。

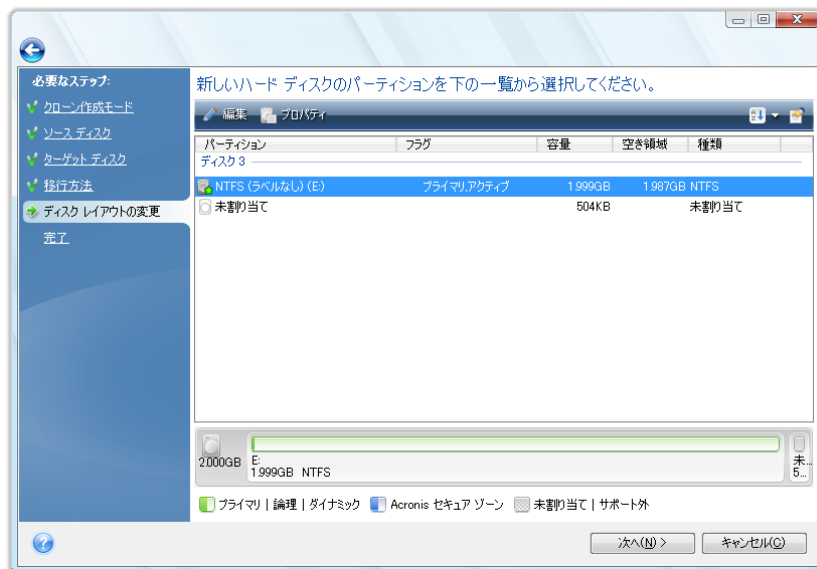
FAT16 パーティションには、4 GB というサイズの上限があるため、他のパーティションほど拡大率は大きくなりません。

選択された組み合わせに応じて、クローン作成の概要ウィンドウまたは次に説明する [ディスク レイアウトの変更] ステップの画面が表示されます。

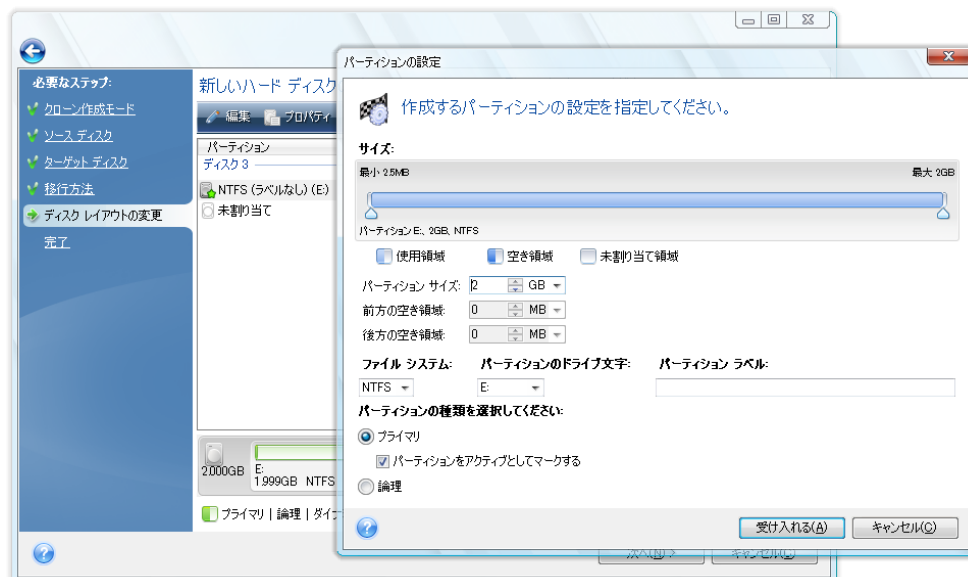
19.3.6 クローン作成時の手動パーティション操作

移行方法として [手動] を選択した場合は、新しいディスクのパーティションのサイズを変更できます。デフォルトでは、ソース ディスクとターゲット ディスクの容量の比率に応じて、サイズが変更されます。次に表示されるウィンドウで、新しいディスクのレイアウトを確認できます。

ハードディスク番号とともに、ディスク容量、ラベル、パーティションおよびファイル システム情報が表示されます。パーティションの種類(プライマリ、論理、および未割り当て領域)に応じて、異なる色で表示されます。



最初に、サイズを変更するパーティションを選択してツールバーの【編集】をクリックします。表示される【パーティションの設定】ウィンドウで、パーティションのサイズや位置を変更できます。



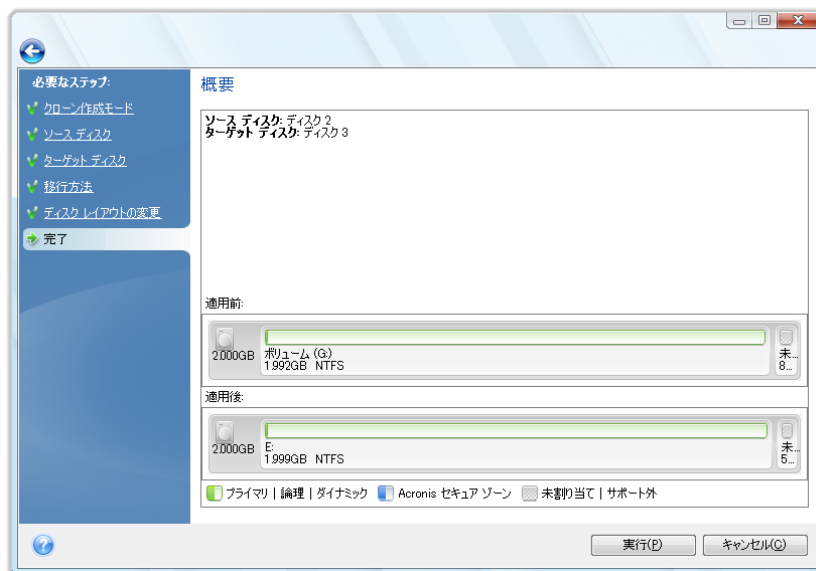
変更するには、【前方の空き領域】、【パーティション サイズ】、【後方の空き領域】の各フィールドに値を入力するか、パーティションの境界またはパーティション自体をドラッグします。

パーティションの境界にマウス カーソルを置くと、左右に矢印が付いた縦の二重線に変化します。この二重線をドラッグすると、パーティションのサイズを拡大または縮小できます。パーティション上にマウス カーソルを置くと、4 方向の矢印に変わり、パーティションを左右に移動できるようになります(未割り当て領域が近くにある場合)。

新しい位置とサイズを指定したら、**[確定]** をクリックします。[ディスク レイアウトの変更] ウィンドウが再び表示されます。意図した通りのレイアウトになるまで、必要であればさらにサイズや位置を変更します。

19.3.7 クローン作成の概要

クローン作成の [概要] ウィンドウには、ソース ディスク(パーティションと未割り当て領域)およびターゲット ディスクのレイアウトに関する情報が図表形式(四角形)で表示されます。ディスク番号とともに、ディスク容量、ラベル、パーティションおよびファイル システム情報などいくつかの追加情報が表示されます。パーティションの種類(プライマリ、論理)と未割り当て領域は、それぞれ異なる色で表示されます。



現在アクティブになっているオペレーティング システムが含まれているディスクのクローン作成の場合は、再起動が必要になります。その場合は、**[実行]** をクリックするとメッセージが表示され、再起動するかどうかの確認を求められます。再起動をキャンセルすると、処理全体がキャンセルされます。クローン作成処理の終了後、いずれかのキーを押してコンピュータをシャットダウンするオプションが表示されます。これにより、マスタ/スレーブのジャンパ位置を変更し、1 台のハードディスクを取り外すことができます。

システム用に使用されていないディスク、または現在アクティブになっていないオペレーティング システムを含むディスクのクローン作成では、再起動の必要はありません。**[実行]** をクリックすると、元のディスクから新しいディスクへのクローン作成処理が開始し、別のウィンドウに進行状況が表示されます。**[キャンセル]** をクリックすると、処理は中止されます。キャンセルした場合は、新しいディスクにパーティションを再作成してフォーマットするか、クローン作成の手順を繰り返す必要があります。クローン作成処理が完了すると、結果メッセージが表示されます。

20 新しいハードディスクの追加

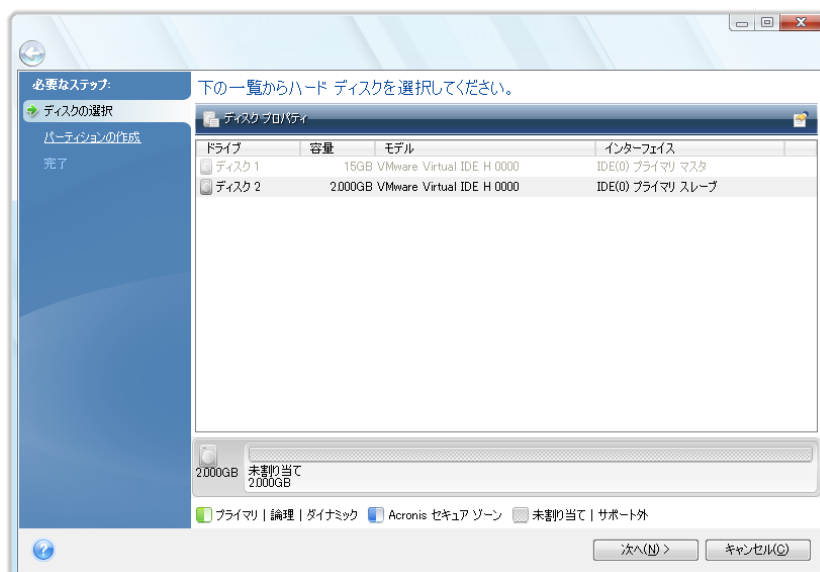
ディスクの空き領域が不足してデータを保存できなくなったときは、古いハードディスクを新しい大容量のハードディスクに交換するか(新しいディスクへのデータ転送については前章で説明しています)、データ保存専用の新しいハードディスクを追加して古いハードディスクのシステムはそのまま残しておきます。コンピュータのベイに空きがあり、別のディスクの追加が可能な場合は、データ用のディスク ドライブを追加する方が、システム ドライブのクローンを作成するよりも簡単です。

新しいハードディスクを追加するには、まずコンピュータにディスクを取り付ける必要があります。

20.1 ハードディスクの選択

新しいディスクの追加ウィザードを起動するには、メイン プログラム メニューの [ツールとユーティリティ] → [新しいディスクの追加] を選択します。

コンピュータに追加したハードディスクを選択します。



新しいディスク上にパーティションが存在する場合は、警告ウィンドウが表示されます。パーティションを削除してからでなければ、ディスクを追加することはできません。そのため、[OK] をクリックして続行してください。

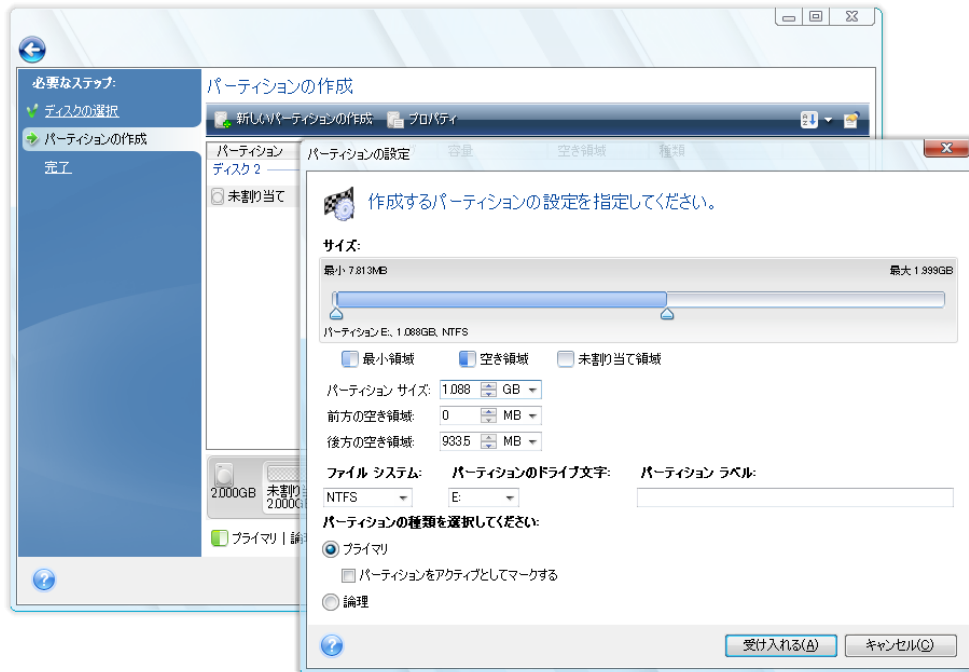
20.2 新しいパーティションの作成

次に、現在のパーティション レイアウトが表示されます。最初は、ディスク領域全体が未割り当てになっています。未割り当て領域の大きさは、新しいパーティションを追加すると変化します。

パーティションを作成するには、ツールバーの [新しいパーティションの作成] をクリックし、新しいパーティションの場所とサイズを設定します。[前方の空き領域]、[パーティション サイズ]、[後方の空き領域] の各フィールドに値を入力するか、パーティションの境界またはパーティション自体をドラッグすると、位置とサイズの両方を設定できます。

パーティションの境界にマウスカーソルを置くと、左右に矢印が付いた縦の二重線に変化します。この二重線をドラッグすると、パーティションのサイズを拡大または縮小できます。パーティション上にマウスカーソルを置くと、4方向の矢印に変わり、パーティションを左右に移動できるようになります(未割り当て領域が近くにある場合)。

新しいパーティションのファイルシステムを選択します。パーティションのドライブ文字を選択し(またはデフォルトのままにします)、新しいパーティションのラベルをフィールドに入力します。最後に、パーティションの種類を選択します。

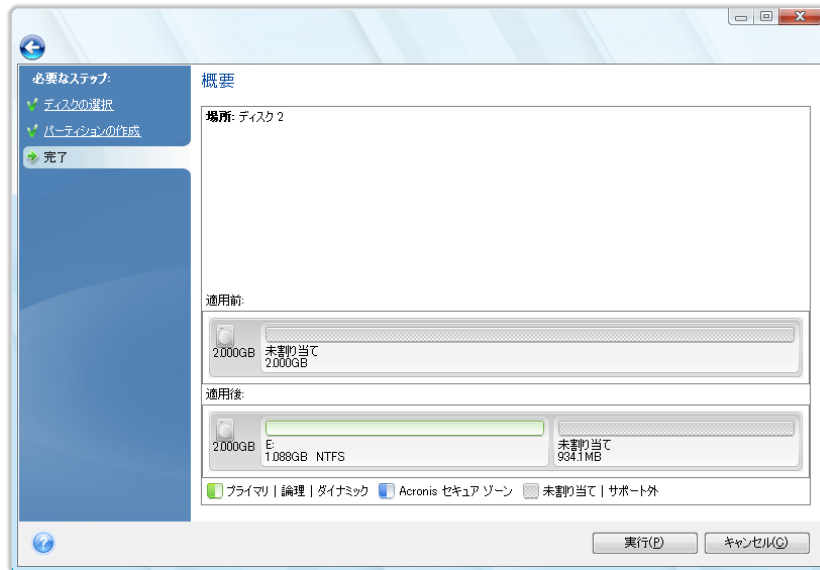


【確定】 をクリックすると、[パーティションの作成] 画面が再び表示されます。パーティションの設定の結果を確認します。別のパーティションを作成するには、**【新しいパーティションの作成】** をもう一度クリックします。新しいパーティションの設定を編集するにはツールバーの **【編集】** をクリックし、パーティションを削除するには **【削除】** をクリックします。

ディスクの未割り当て領域をすべて新しいパーティションに割り当てた場合は、**【新しいパーティションの作成】** ボタンは表示されません。

20.3 ディスクの追加の概要

パーティション レイアウトを作成してから **【次へ】** をクリックすると、ディスクの追加の概要が表示されます。ディスクの追加の概要画面には、ディスクに対して実行される処理の一覧が表示されます。



【実行】 をクリックすると、新しいパーティションの作成が開始し、別のウィンドウに進行状況が表示されます。**【キャンセル】** をクリックすると、処理は中止されます。キャンセルした場合は、新しいディスクのパーティション設定とフォーマットをやり直すか、ディスク追加手順をもう一度実行する必要があります。

21 セキュリティとプライバシーのツール

Acronis True Image Home には、ハードディスク ドライブ全体または個々のパーティションのデータの確実な消去に加えて、個別ファイルの消去や、システムでのユーザーの操作履歴の消去のためのツールが含まれています。

これらのツールを使用すると、機密情報のセキュリティだけでなく、コンピュータを使用するときのプライバシーも守ることができます。ユーザー自身が知らずに残している操作の履歴(さまざまなシステム ファイルに残されている記録)も消去できるからです。このような操作履歴には、ユーザー名やパスワードが含まれている可能性があります。

ツールとその用途は次のとおりです。

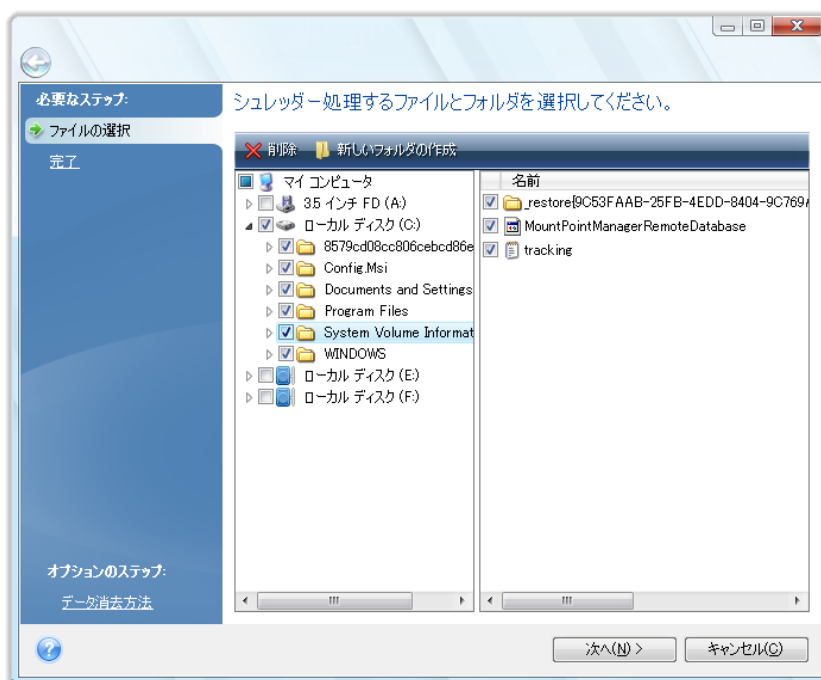
- 特定のファイルまたはフォルダを確実に消去するには、**ファイル シュレッダー**を実行します。
- 特定のパーティションやディスク上のデータを確実に消去してリカバリ不可能にするには、**Acronis DriveCleanser** を実行します。
- 一般的なシステム タスクに関連し、ユーザーの PC 操作履歴が残っている可能性のある Windows コンポーネント(フォルダ、ファイル、レジストリ セクションなど)をクリーンアップするには、**システム クリーンアップ**を実行します。

21.1 ファイル シュレッダーの使用

ファイル シュレッダーにより、選択したファイルとフォルダをすばやく完全に消去できます。

特定のファイル/フォルダを完全に消去するには、メイン プログラム メニューで [ツールとユーティリティ]□→[ファイル シュレッダー] を選択します。これによりファイル シュレッダー ウィザードが開始され、選択したファイルやフォルダを完全に削除するのに必要なステップが示されます。

1. まず、消去するファイルやフォルダを選択します。




2. デフォルトのデータ消去方法(高速)を使用して選択したファイルを完全に消去するには、次のウィンドウで **[選択されているファイルとフォルダを完全に消去する]** チェックボックスをオンにして **[実行]** をクリックします。それ以外の方法を使用する場合は、**[オプション]** をクリックして目的のデータ消去方法を選択します。
3. デフォルトではプログラムは高速な方法を使用します(「ハードディスクの消去方法『195 ページ参照』」を参照してください)。ドロップダウン リストから、あらかじめ設定されている他のデータ消去方法を選択することもできます。目的の方法を選択してから **[実行]** をクリックすると、タスクの実行が開始されます(**[実行]** ボタンが選択できない場合は、サイドバーで **[完了]** をクリックして **[選択されているファイルとフォルダを完全に消去する]** チェックボックスをオンにし、**[実行]** ボタンを有効にします)。

21.2 Acronis DriveCleanser

オペレーティング システムの多くは、安全にデータを消去するツールがないため、削除されたファイルのリカバリも、単純なアプリケーションで簡単に実行できます。ディスク全体を再フォーマットしても、機密データが完全に消去されたことは保証されません。

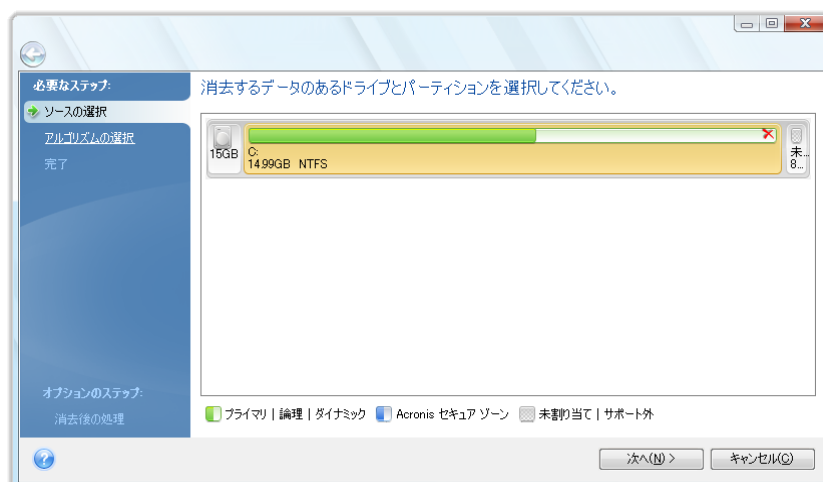
Acronis DriveCleanser を使用すれば、選択されたハードディスクまたはパーティション上のデータを確実に永久的に消去することができます。データ消去の方法にはさまざまなものがあり、消去するデータの重要性に応じて適切な方法を選択できます。

Acronis DriveCleanser を起動するには、メイン プログラム メニューの **[ツールとユーティリティ]**  **[Acronis DriveCleanser]** を選択します。Acronis DriveCleanser では、次の処理を実行できます。

- 選択されているハードディスクまたはパーティションのデータを、あらかじめ設定された方法を使用して消去する
- ユーザー定義(カスタム)の消去方法を作成して、ハードディスクのデータを消去する

Acronis DriveCleanser は、**ウィザード**形式でハードディスクに対するすべての処理を順に指定できるようになっています。データの消去は、ユーザーがウィザードの概要ウィンドウで **[実行]** をクリックするまでは行われません。どの時点でも、前のステップに戻って他のディスクやパーティションまたはデータ消去方法を選択することができます。

データを消去するハードディスク パーティションを選択します。



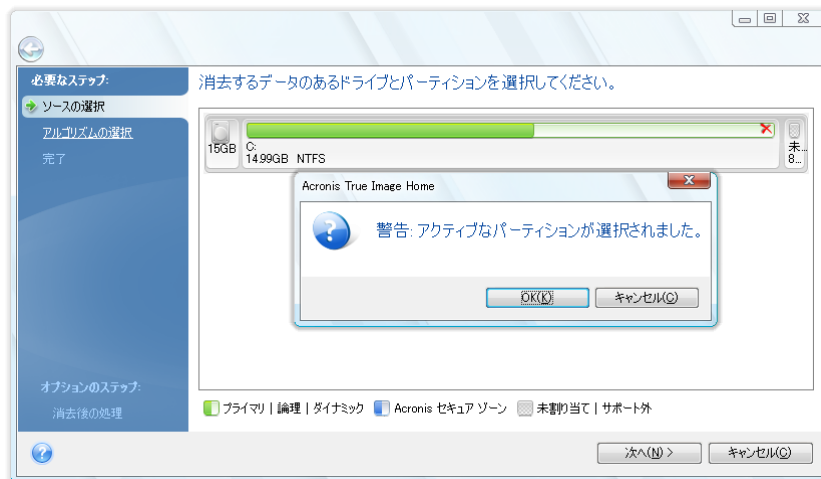
消去するパーティションを決定するには、該当する四角形を選択します。パーティションが選択されたことを示す赤いマークが右上に表示されます。

データを消去する対象として、ハードディスク全体や複数のハードディスクを選択することができます。選択するには、ハードウェアに対応する四角形(デバイス アイコン、ディスク番号、および容量が表示されています)をクリックします。

複数のパーティションを同時に選択でき、パーティションが存在するハードディスク ドライブまたはディスクがそれぞれ異なっていてもかまいません。また、ディスクの未割り当て領域を選択することもできます。

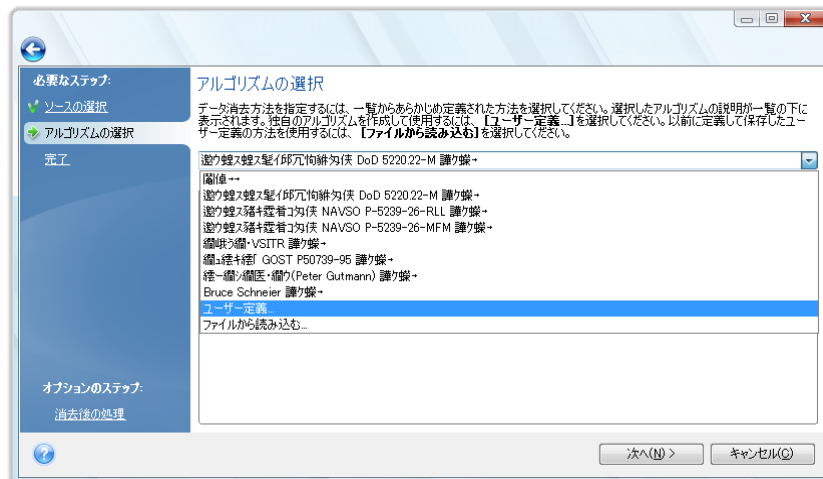
続行するには、**[次へ]** をクリックしてください。

選択されたディスクやパーティションにシステムのディスクまたはパーティションが含まれている場合は、警告ウィンドウが表示されます。



この場合は注意が必要です。警告ウィンドウの **[OK]** をクリックしてから、概要ウィンドウの **[実行]** をクリックすると、Windows オペレーティング システムが格納されているシステム パーティションの内容が消去されます。

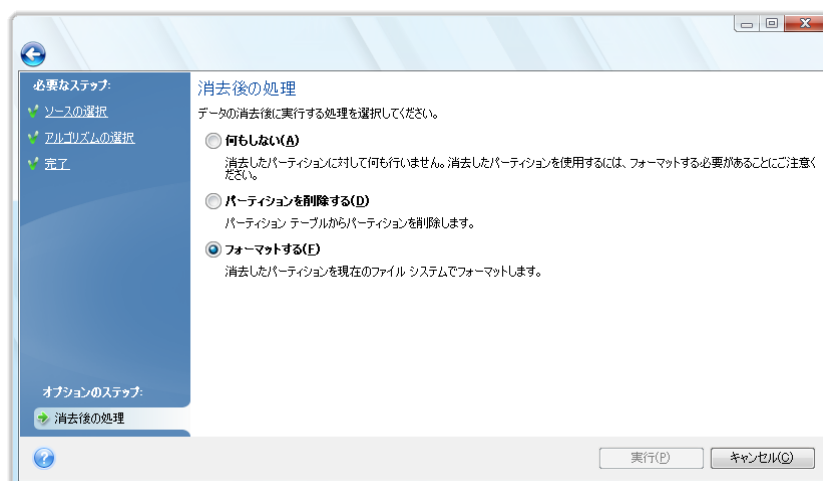
Acronis DriveCleanser では、一般的に使用されているさまざまなデータ消去方法が活用されています。消去方法の説明については、このマニュアルの「ハードディスクの消去方法『195 ページ参照』」を参照してください。独自のデータ消去方法を作成する場合は、[カスタム...] を選択して「データを消去するユーザー定義消去方法の作成『177 ページ参照』」に進みます。



ディスク消去方法を選択または作成したら、[次へ] をクリックして次に進みます。Acronis DriveCleanser の画面に、データ消去タスクの概要が表示されます。[実行] をクリックする前に、[選択されているパーティションを完全に消去する] ボックスを選択する必要があります。[オプション] をクリックすると、データ消去対象として選択されているパーティションでの消去後の処理を選択できます。これは、デフォルトの処理である [フォーマットする] が適切でない場合に行います。

[消去後の処理] ウィンドウでは、次の 3 つのいずれかを選択できます。

- 何もしない - 下で選択されている方法を使用してデータの消去のみを行います。
- パーティションを削除する - データを消去して、パーティションを削除します。
- フォーマットする - データを消去して、パーティションをフォーマットします(デフォルト)。



この例では、[フォーマットする] が選択されています。このオプションを選択すると、パーティションのデータが消去されて、パーティションが再フォーマットされます。

ダイナミック ディスクおよび GPT ディスクのパーティションは削除できません。

この先に進む前に、作成済みのタスクに変更を加えることができます。消去後の処理を選択した後で **【実行】** をクリックすると、タスクの実行が開始します（**【実行】** ボタンをクリックできない場合は、サイドバーの **【完了】** をクリックしてから **【選択されているパーティションを完全に消去する】** ボックスを選択すると、**【実行】** ボタンがクリック可能になります）。選択されたパーティションまたはディスクの内容を消去するのに必要なすべての処理が自動的に実行されます。消去が終了すると、そのことを示すメッセージが表示されます。

Acronis DriveCleanser のもう 1 つの便利な機能として、ハードディスクまたはパーティションにデータ消去方法を適用した結果の表示があります。データが消去されたディスクまたはパーティションの状態を見るには、サイドバーの **【ツールとユーティリティ】** を選択します。右ペインの Acronis DriveCleanser 領域に、**【ハードドライブの現在の状態を表示する】** リンクがあります。このリンクをクリックしてから、どのパーティションのデータ消去の結果を表示するかを選択します。DriveCleanser に統合されている Acronis ディスク エディタが、読み取り専用モードで開きます。

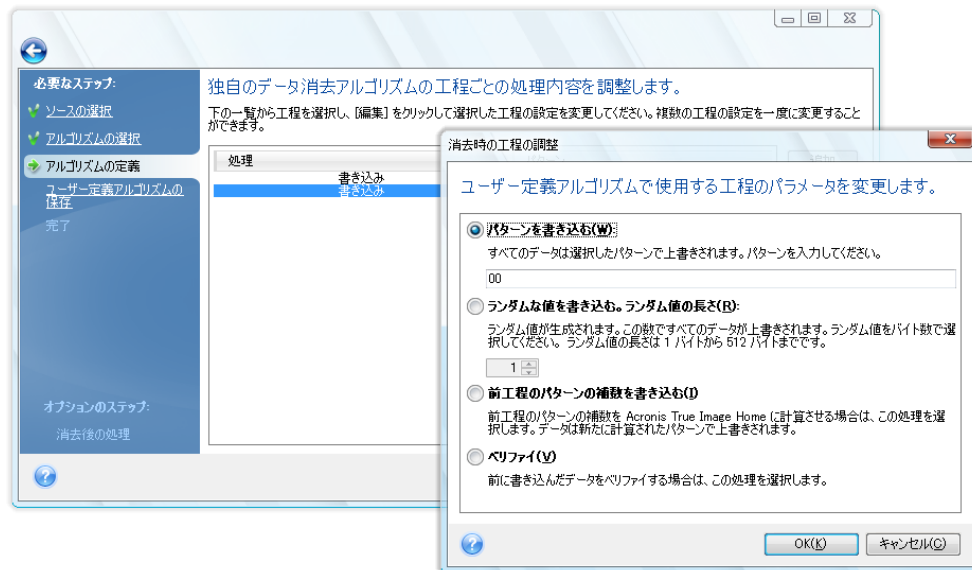
前述の消去方法は、機密データを消去するレベルがそれぞれ異なっています。このため、表示される消去結果も、データ消去方法によって異なります。実際に表示されるのは、0 またはランダムな記号で埋められたディスクのセクタになります。



21.3 データを消去するユーザー定義消去方法の作成

Acronis DriveCleanser には、ハードディスク データのユーザー独自の消去方法を作成する機能が用意されています。さまざまなレベルのデータ消去方式があらかじめ定義されていますが、ユーザー独自の消去方法を作成することも選択できます。この機能は、確実なディスク消去の方法で使用されている原則を十分に理解したうえで使用してください。

ハードディスクのデータ消去方法を独自に作成するには、**[アルゴリズムの選択]** ウィンドウのドロップダウン リストで **[ユーザー定義]** を選択します。このオプションを選択すると、新しい必須ステップが DriveCleanser ウィザードに追加され、実際のセキュリティ要件に合わせてデータ消去アルゴリズムを作成することができます。



作成した独自のアルゴリズムを保存しておくことができます。この機能は、作成したアルゴリズムを再び使用する予定がある場合に便利です。

アルゴリズムを保存するには、ファイル名を指定し、保存するフォルダを左ペインのツリーで選択します。

ユーザー定義の各消去方法は、ファイル名をつけて別々のファイルに保存されます。新しい消去方法を既存のファイルに書き込むと、既存のファイルの内容は消去されます。

Acronis DriveCleanser の実行時に作成して保存したデータ消去アルゴリズムを後で使用するには、次の手順を実行します。

- **[アルゴリズムの選択]** ウィンドウのドロップダウン リストから **[ファイルから読み込む...]** を選択し、データ消去アルゴリズム パラメータのファイルを選択します。デフォルトでは、作成したファイルの拡張子は *.alg になっています。

21.4 システムのクリーンアップ

システム クリーンアップ ウィザードでは、Windows に保存された PC の操作に関するすべての履歴を安全に削除することができます。

以下の処理を実行することができます。

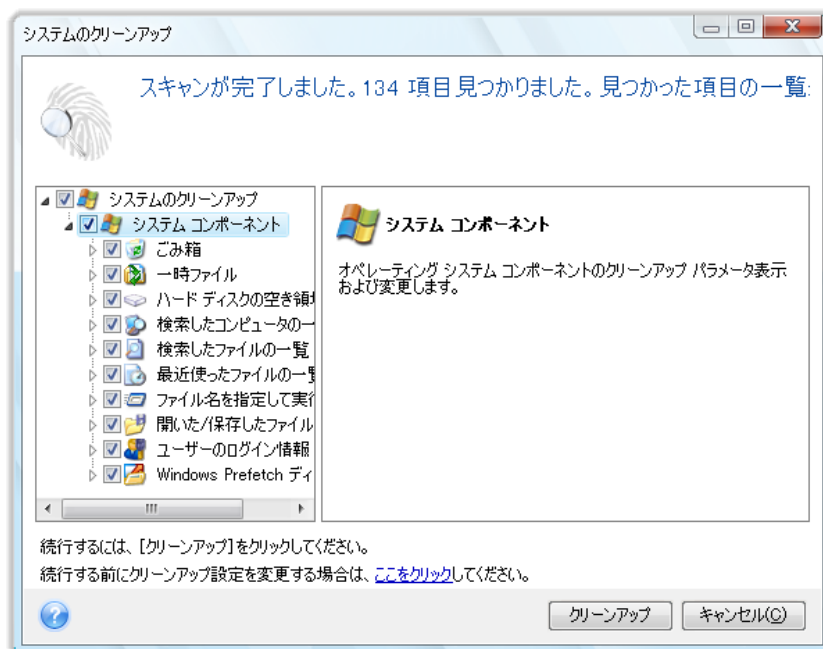
- **Windows のごみ箱**のデータを安全に消去します。
- **一時ファイル**を、該当する Windows フォルダから削除します。
- **ハードディスクの空き領域**に以前保存されていた情報の痕跡をクリーンアップします。
- 接続されているディスクやローカル エリア ネットワーク内のコンピュータに対する**ファイルとコンピュータ検索**の履歴を削除します。

- 最近使ったドキュメントの一覧を消去します。
- 「ファイル名を指定して実行」の一覧を消去します。
- 開いた/保存したファイルの履歴を消去します。
- ネットワーク認証情報を使用してユーザーが接続したネットワーク プレースの一覧を消去します。
- Windows によって保存されている、最近実行したプログラムに関する情報を **Windows Prefetch ディレクトリ** から消去します。

Windows Vista では、ファイルやコンピュータの検索に関する情報は保存されません。また、開いたファイルや保存したファイルの情報は別の方法でレジストリに保存されますので、ウィザードでは異なる方法でその情報が表示されます。

Windows はセッション終了までパスワードを保存するため、ネットワーク ユーザーの認証情報の一覧を消去しても、ログアウトまたはコンピュータの再起動によって現在の Windows セッションを終了するまでは処理は有効になりません。

メイン プログラム メニューで **[ツールとユーティリティ] ⇨ [システム クリーンアップ]** を選択して **ウィザード** を実行すると、Windows に保存されているユーザーの操作履歴が検索されます。検索が終了すると、**ウィザード ウィンドウ** の上部に結果が表示されます。



検索結果を表示して、削除する項目を手動で選択することができます。

21.5 システム クリーンアップ ウィザードの設定

デフォルトのシステム クリーンアップ設定を変更する場合は、**システム クリーンアップ ウィザード** の最初のウィンドウで対応するリンクをクリックします。

システム クリーンアップ コンポーネントを有効または無効にするには、[有効にする] フラグをオンまたはオフにします。

システム クリーンアップ ウィザードの [プロパティ] ウィンドウでは、各システム コンポーネントに対してクリーンアップ パラメータを設定することもできます。これらのパラメータの一部は、すべてのコンポーネントに適用されます。

[プロパティ] ウィンドウで、[デフォルトに戻す] ボタンをクリックしてデフォルトのシステム クリーンアップ設定を復元できます。

21.5.1 データ消去方法の設定

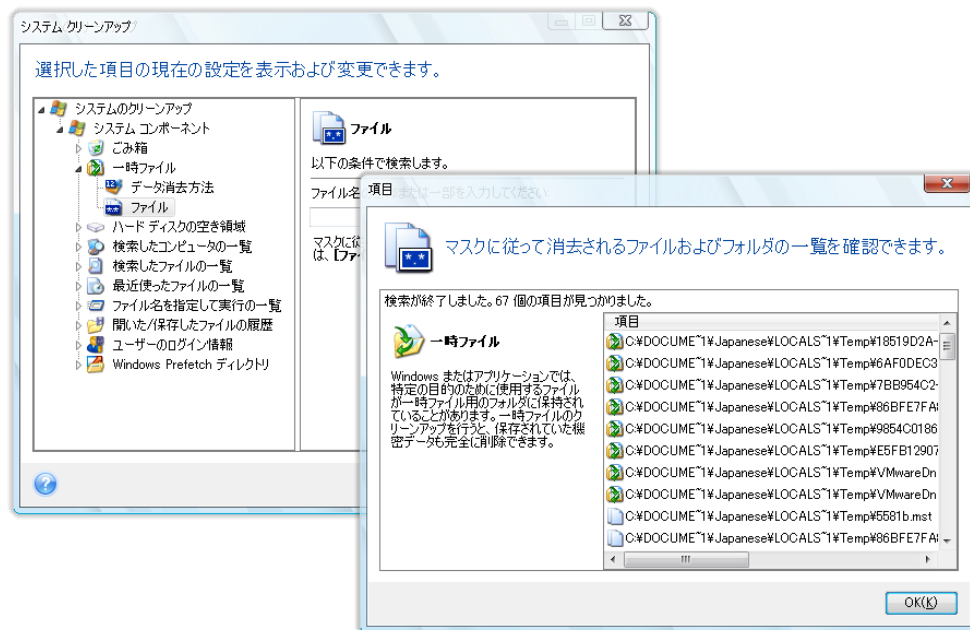
この設定では、そのコンポーネントをクリーンアップするための確実なデータ消去方法を指定します。

デフォルトでは、この設定を持つコンポーネントはすべて、この設定が [共通の方法を使用する] となっています。共通の方法を変更するには、[クリックするとこの設定を変更できます] リンクをクリックし、ドロップダウン リストから方法を選択します(「ハードディスクの消去方法『195 ページ参照』」を参照してください)。

特定のコンポーネントのデータ消去にユーザー定義の方法を使用する場合は、[このコンポーネントにユーザー定義の方法を使用する] を選択し、ドロップダウン リストから方法を選択します。

21.5.2 [ファイル] の設定

[ファイル] の設定では、システム クリーンアップ ウィザードによってクリーンアップするファイルを指定します。検索文字列を指定することもできます。



Windows オペレーティング システムでは、ファイル名の全体または一部を検索文字列で表現することができます。検索文字列には、任意の英数字と、カンマなどの記号およびワイルドカードを使用できます。値の例を次に示します。

- *.* - ファイル名や拡張子にかかわらず、すべてのファイルが削除されます。
- *.doc - 指定された拡張子ファイル(この例では Microsoft Word の文書ファイル)が削除されます。
- read*.* - ファイル名が「read」で始まる任意の拡張子のファイルがすべて削除されます。

検索文字列を複数入力するには、次の例のようにセミコロンで区切ります。

.bak;.tmp;*.~~~ (検索文字列の間にスペースは不要)

検索文字列の 1 つ以上に名前が一致するファイルが、すべて削除されます。

[ファイル] の設定に値を入力した後で、検索文字列と一致するものの一覧を表示することができます。表示するには、[ファイルの表示] をクリックします。見つかったファイルの名前がウィンドウに表示されます。これらのファイルがクリーンアップの対象となります。

21.5.3 [コンピュータ] の設定

[コンピュータ] 設定は、ローカル ネットワーク内のコンピュータを検索するときに使用されたレジストリ検索文字列のクリーンアップに使用されます。この検索文字列に保持される情報は、ネットワーク内でユーザーが何を探していたかを表します。機密性を維持するには、このような項目も削除する必要があります。

[コンピュータ] 設定は、[ファイル] 設定に似ています。この文字列には、コンピュータ名の全体または一部をセミコロンで区切って入力します。指定できる数の制限はありません。コンピュータの検索文字列を削除するとき、この [コンピュータ] 設定の値との比較は、Windows の規則に従って行われます。

ローカル ネットワーク コンピュータ検索文字列をすべて削除したい場合は、この設定をデフォルト値のままにしてください。

こうすると、すべてのコンピュータ検索文字列がレジストリから削除されます。

[コンピュータ] 設定の値を入力した後で、システム クリーンアップ ウィザードによってレジストリ内で検出された検索文字列を一覧表示することができます。表示するには、[コンピュータの表示] をクリックします。ネットワーク上で検索されたコンピュータ名(完全なコンピュータ名またはその一部)がウィンドウに表示されます。これらの項目が削除されます。

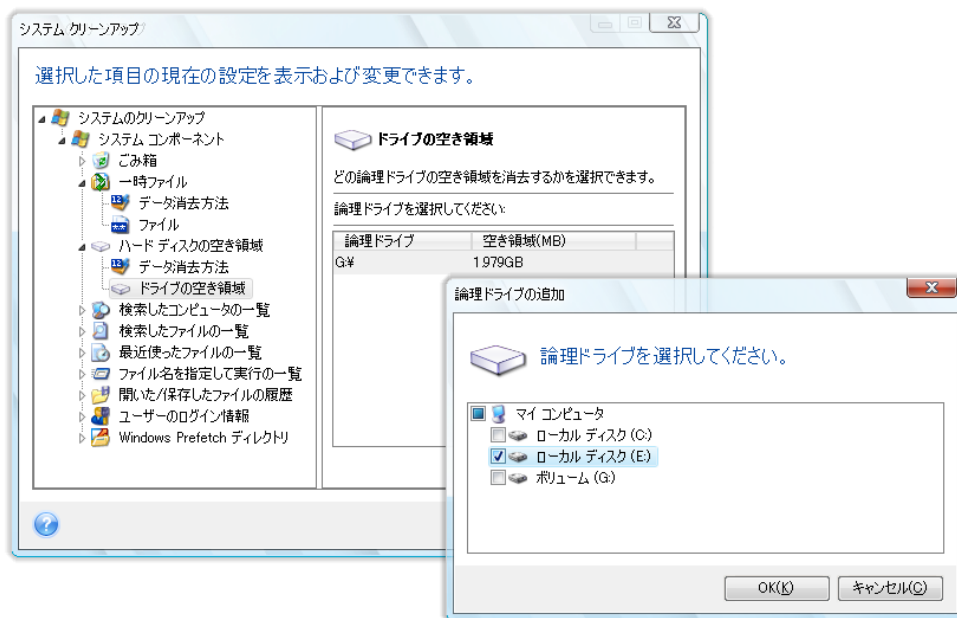
21.5.4 [ドライブの空き領域] の設定

ここでは、空き領域をクリーンアップするドライブを手動で指定できます。

デフォルトでは、使用可能なすべてのドライブの空き領域がクリーンアップされます。

このパラメータの設定を変更する場合は、[削除] ボタンを使用すると、空き領域をクリーンアップしないドライブを一覧から削除することができます。

そのドライブを再び一覧に追加するには、[追加] ボタンをクリックします。



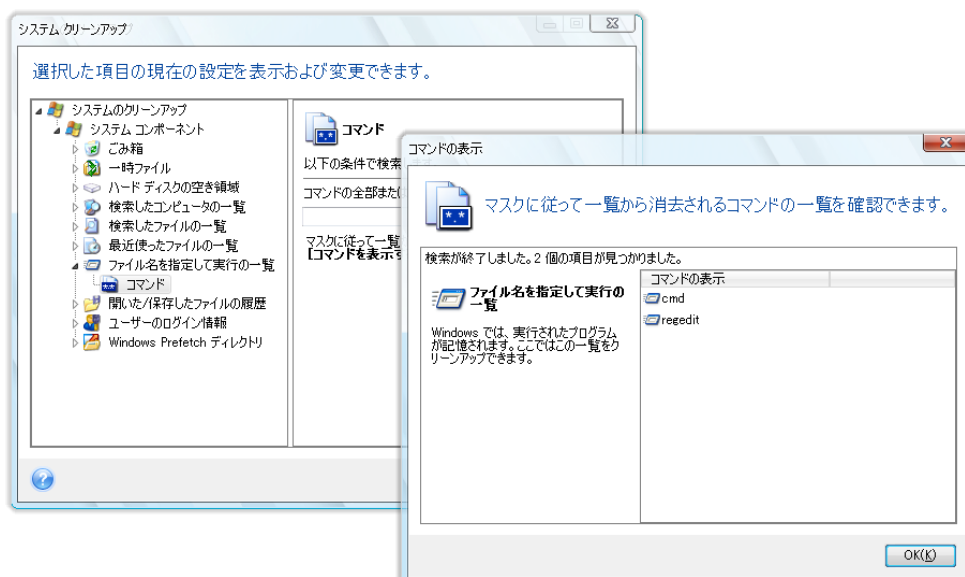
21.5.5 [コマンド] の設定

ここでは、[ファイル名を指定して実行の一覧] のクリーンアップ時に削除されるコマンドを選択できます。

このテンプレートには、任意のコマンド名またはその一部を、セミコロンで区切って指定します。

例: *help; cmd*; reg*

こうすると、入力した文字列またはその一部に対応するコマンド、または入力した文字列またはその一部を含むコマンドがクリーンアップされます。



21.5.6 ネットワーク プレースのフィルタの設定

ここでは、過去に認証情報(ユーザー名およびパスワード)を入力して接続したネットワーク プレース、サーバー、FTP サーバー、ネットワーク共有デバイスなどのホスト名または IP アドレスを入力できます(セミコロンで区切って入力)。ホスト名や IP アドレスを入力するときは、* および ? のワイルドカードを使用できます。

フィルタに一致するネットワーク プレースの一覧を表示するには、[ネットワーク プレースを表示する] をクリックします。ここに表示されたネットワーク プレースに対する保存済みのネットワーク ユーザー認証情報が消去されます。

21.6 個別のシステム コンポーネントのクリーンアップ

すべてのシステム コンポーネントをクリーンアップするのではなく、選択したコンポーネントだけをクリーンアップすることもできます。

個別にクリーンアップする場合も、システム クリーンアップ ウィザードのすべてのグローバル設定が各コンポーネントに適用されます。

コンポーネントを個別にクリーンアップするには、[システム クリーンアップ] ウィンドウの [システム コンポーネント] セクションでコンポーネントを選択してからシステム クリーンアップ ウィザードを実行します。

22 トラブルシューティング

22.1 全般

以降のセクションは、Acronis True Image Home のインストールおよび使用中に発生した問題のトラブルシューティングに役立ちます。トラブルシューティングの章には、他の情報とともに、アクロニス製品の問題の解決に役立つ Acronis サポート ナレッジ ベース(KB)の資料へのリンクが含まれています。該当するトラブルシューティングのセクションにお客様の問題の解決策が示されていない場合は、リンクをクリックして KB にアクセスし、検索機能を使用して、問題に関連するキーワードを入力してください。トラブルシューティングの章では最も一般的な問題が扱われているため、お客様の特有の問題を解決するには、KB が役立つ場合があります。また、アクロニス サポート センターは随時新しい資料を KB に追加しています。問題の解決策が KB で見つからなかったり、推奨された解決策が役に立たない場合は、Acronis Customer Central までお気軽にお問い合わせください。

アクロニスのサポート担当者は、お客様にシステム レポートの提供を求めることがあります。レポートを作成するには、[ヘルプ] メニューで [システム レポートの生成] を選択し(Windows でプログラムを起動できる場合)、レポートを保存し、Acronis Customer Central に送信します。Windows を起動できない問題が発生している場合は、Acronis レスキュー メディアから起動し、Acronis True Image Home のスタンドアロン版で、[ヘルプ] メニューの同じ項目を選択してレポートを作成します。

また、ウィザードが開かれていたり、タスクが実行されていたり、エラー メッセージが表示されている場合でも、Windows および Acronis True Image Home のスタンドアロン版で Ctrl キーを押しながら F7 キーを押して、システム レポートの作成を開始することもできます。

さらに、レスキュー メディアに Acronis システム レポート ツールを追加できるようになりました。このツールを使用すると、Windows と Acronis True Image Home(完全版)の両方で起動できない場合にレスキュー メディアから起動した後、システム レポートを作成することができます。この場合、レポートの保存に使用する USB フラッシュ ドライブを用意する必要があります。

問題の原因は外付けハードディスクの接続の緩みなど、単純なことである場合がよくあります。この章で説明している他の解決策を試す前に、問題が次のいずれかの原因により発生していないかどうかを確認してください。

- 外付けドライブへの接続の緩み
- 低品質な接続ケーブル

外付け USB ハード ドライブを使用している場合は、次の点についても確認してください。

- ハブを経由してドライブに接続している場合は、PC の背面のコネクタに直接接続する
- PC に接続されている他の USB デバイスとの競合を避けるために、すべての USB デバイスの接続を外す(マウスとキーボードを除く)

22.2 インストールの問題点

Acronis True Image Home をインストールできないときは、次の解決方法を試してください。

1. インストール時に [現在のユーザーにのみインストール] を選択した場合は [このコンピュータを共有するすべてのユーザーにインストール] を選択してみてください。[このコンピュータを共有するすべてのユーザーにインストール] を選択した場合は [現在のユーザーのみにインストール] を選択してみてください。
2. インストール ファイルを起動するときに、ファイルを右クリックして [管理者として実行] を選択するという方法を使用します。
3. Vista のビルトイン Administrator アカウントにログインして、次の手順でプログラムをインストールします。
 - a. [スタート] → [すべてのプログラム] の順にクリックし、[アクセサリ] フォルダを開きます。
 - b. [コマンド プロンプト] 項目を右クリックして [管理者として実行] を選択します。
 - c. 開いたウィンドウで、次のコマンドを入力します。

```
net user administrator /active:yes
```

「administrator」と「/active:yes」の間にはスペースがあることに注意してください。
 - d. 現在のアカウントをログオフして、Administrator アカウントにログインします。
 - e. アプリケーションのインストールをもう一度実行します。

以上のことを試しても解決できない場合は、Acronis サポート ナレッジ ベースの記事を参照して問題のトラブルシューティングを行ってみてください。この記事には、具体的な手順が記載されています。「Acronis ソフトウェアのインストールに関するトラブルシューティング」を参照してください。

22.3 バックアップとベリファイの問題

1) バックアップまたはベリファイで問題が発生した場合は、初めに、Acronis True Image Home のビルドが最新であることを確認してください。これは、アクロニスのアカウントからダウンロードできます。アクロニスは常に製品の向上を目指しており、最新のビルドでは、バグの修正やハードウェア互換性の強化が行われている可能性があります。

2) データのバックアップ時またはバックアップ アーカイブの検証時にエラーが発生した場合は、原因としてハードディスクのエラーや不良セクタが考えられます。したがって、ソース ディスクとターゲット ディスク(バックアップ時に問題が発生した場合)またはバックアップ アーカイブのストレージ ディスク(バックアップ アーカイブのベリファイ時にエラーが発生した場合)のチェックを実行してください。ディスクをチェックするには、Windows の chkdsk ユーティリティを次の手順で実行します。

- コマンド プロンプトを開きます([スタート]→[ファイル名を指定して実行]→cmd)

- chkdsk DISK: /r と入力します。DISK: は、チェックするパーティションのドライブ文字です(たとえば「D:」)。C: ドライブをチェックする場合は、PC の再起動が必要になることがあります。

3) エラーの原因として、RAM モジュールの欠陥が考えられます。PC のメモリ モジュールをテストするには、テストに使用するメディアの種類に応じて、次のいずれかをダウンロードします。

- memtest アーカイブ(フロッピー ディスクの場合)

- memtest アーカイブ(USB フラッシュ ドライブの場合)

- memtest アーカイブ(CD の場合)

アーカイブの圧縮を解除して、メモリ テスト プログラムの入ったブータブル メディアを作成します。手順については、アーカイブ内の README.txt を参照してください。

4) 次に挙げる症状に該当する場合は、その解決方法を試してみてください。

スケジュールされたタスクが実行されない

スケジュールされたバックアップまたはベリファイのタスクが実行されない場合は、初めに、タスク作成時に指定したすべての設定を見直してください。設定が正しい場合は、次の手順に進みます。

- **[コントロール パネル]** → **[管理ツール]** → **[サービス]** を開き、Acronis Scheduler2 Service の状態が「開始」であることと、スタートアップの種類が「自動」に設定されていることを確認します。このようになっていない場合は、このサービスを右クリックして **[プロパティ]** を選択し、**[全般]** タブの **[スタートアップの種類]** を設定してから、サービスを開始します。タスクを開始できるようになったことを確認します。この設定は、スケジュールされていないタスクにも影響を及ぼします。

- 問題が解決されない場合は、アクロニス サポート KB の記事「Acronis True Image Scheduled Tasks Do Not Run」に記載されている解決方法を試してみてください。

RPC サーバーが利用できない

バックアップ タスクがスケジュールに従って実行されるときに、または手動で開始されたときに、「エラー #1722 - RPC サーバーを利用できません」というエラーが返されます。この場合は、アクロニス サポート KB の記事「RPC Server is Unavailable (Error Code: 1722)」に記載されている解決方法を試してみてください。

ネットワーク バックアップの問題

Windows のネットワーク共有へのバックアップに関する問題のトラブルシューティング手順については、アクロニス サポート KB の記事「Troubleshooting Network Backup Issues in Windows」を参照してください。

マップされたドライブへのバックアップに失敗することがある

マップされたドライブへのイメージの保存に成功したりしなかったりする理由と、この問題を回避する方法については、アクロニス サポート KB の記事「Saving an Image to a Mapped Drive from an Acronis True Image Task Fails Sporadically」を参照してください。

USB フラッシュ ドライブにバックアップするときの「次のボリュームを挿入してください」というメッセージ

Acronis True Image Home では、USB フラッシュ ドライブはリムーバブル メディアとして扱われます。FAT32 でフォーマットされている場合は、1 ファイルあたり 4 GB というサイズの制限があります。したがって、バックアップのサイズがこれよりも大きいときは、バックアップが自動的に 4 GB のボリュームに分割され、次のボリュームのための次のメディアが挿入されるまでバックアップ処理が停止します。[OK] をクリックすると、バックアップ処理が続行されます。メッセージが再度表示された場合は、同じ操作を、バックアップが完了するまで繰り返してください。詳細については、「Acronis True Image Asks to Insert Next Volume When Backing Up to USB Flash Drive」を参照してください。

NTFS 圧縮パーティションのバックアップに関する問題

Acronis True Image では、NTFS 圧縮パーティションのバックアップに失敗することがあります。このようなパーティションの扱いについては、いくつかの制限があるからです。可能であれば、パーティションの圧縮を解除してからバックアップしてください。詳細については、「Acronis True Image Fails to Back Up a Compressed Partition」を参照してください。

Acronis True Image Home の画面にバックアップが破損していると表示される

破損したバックアップのトラブルシューティングおよび問題解決の方法については、アクロニス サポート KB の記事「Troubleshooting Issues with Corrupt Backups」を参照してください。

増分/差分バックアップ ファイルのサイズが大きくなる

増分(または差分)バックアップ ファイルのサイズが、完全バックアップ ファイルと同じぐらいの大きさになることがあります。この原因としては、さまざまなものが考えられます。詳細および考えられる解決方法については、アクロニス サポート KB の記事「Acronis True Image Creates Large Incremental Backup Archives」を参照してください。

22.4 リカバリの問題

障害後のシステムまたはデータのリカバリは、Acronis True Image Home で実行される最も重要な処理です。バックアップ データをリカバリできないバックアップ プログラムには価値はありません。リカバリで問題がある場合は、次の操作を試してください。

- 1) 最初に、Acronis True Image Home が最新のビルドであることを確認します。これは、アクロニスのアカウントからダウンロードできます。
- 2) 外付けドライブからイメージをリカバリする場合は、そのイメージを他のストレージにコピーしてリカバリを再度試行します。問題がハードウェアに関するものである可能性があります。
- 3) Windows でリカバリを試した場合は、レスキュー メディアで起動してリカバリ手順を再度試みます。
- 4) データ パーティションのバックアップの場合は、パーティションをマウントすることで、少なくとも一部のファイルおよびフォルダをリカバリできる可能性があります。
- 5) 以上の方法で問題が解決しない場合は、このセクションで問題の解決方法が提示されているか確認します。

スタンドアロン版の Acronis True Image Home でバックアップを含むネットワーク共有が見つからない場合

Acronis True Image のスタンドアロン版を使用していて目的のネットワーク共有を見つけられない場合は、いくつかの原因が考えられます。Acronis サポート ナレッジ ベース(KB)の記事: Standalone Version of Acronis True Image Cannot Find Network Share with an Image Archive(スタンドアロン版の Acronis True Image でイメージ アーカイブを含むネットワーク共有が見つからない場合)を参照してください。

レスキュー メディアで起動した後にネットワーク共有にログオンできない場合

イメージ アーカイブのあるネットワークにスタンドアロン版の Acronis True Image Home でログオンできず、ユーザー名とパスワードを何度も要求される場合の解決方法です。アクロニス サポート KB: Standalone Version of Acronis True Image Recovery Wizard Keeps Asking for User Name and Password When Trying to Restore an Image from a Network Share(ネットワーク共有からイメージをリカバリする際に、スタンドアロン版の Acronis True Image のリカバリ ウィザードでユーザー名とパスワードが何度も要求される場合)を参照してください。

Microsoft Outlook の電子メールのバックアップをリカバリした後に新しいユーザー プロファイルが作成される場合

この問題に対する解決策については、アクロニス サポート KB の記事: Restoring E-Mail Backup of Microsoft Outlook Creates a New Profile (Microsoft Outlook 電子メールのバックアップをリカバリすると新しいプロファイルが作成される場合)を参照してください。

リカバリしたファイルやフォルダにアクセスできない場合

Acronis True Image でファイルやフォルダをリカバリした後、これらにアクセスしようとするとき「アクセスは拒否されました」というメッセージが表示される場合があります。この問題を解決するには、アクロニス サポート KB の記事: Access Denied to Files or Folders Restored with Acronis True Image (Acronis True Image で復元したファイルやフォルダへのアクセスが拒否される場合)を参照してください。

22.5 リカバリ後のシステム起動の問題

システムがバックアップ時に起動可能であれば、リカバリ後も起動可能と考えるのは当然です。しかし、オペレーティング システムの起動に使用するために保存されている情報が、リカバリの時点で最新ではなくなっている可能性があります。特に、パーティションのサイズ、場所、またはリカバリ先のドライブが変更された場合です。Acronis True Image Home でリカバリを実行すると、Windows ローダが自動的に更新されます。他のローダも修復される場合がありますが、ローダを再度アクティブ化する必要がある場合もあります。特に、デュアル ブート構成の Linux のボリュームをリカバリするときは、Linux が正しく起動されるようにするために、修正プログラムの適用や設定の変更が必要になることがあります。次に示すのは、オペレーティング システムのリカバリ後に起動できなくなったときにユーザーによる追加の操作が必要となる一般的な状況をまとめたものです。

別のハードディスク ドライブ (HDD) から起動するようにコンピュータの BIOS が構成されている

解決策: オペレーティング システムが存在する HDD から起動するように BIOS を構成します。

BIOS のブート シーケンス設定メニューが 2 つ存在することもあります。1 つはブート デバイス優先順位を設定するもので、もう 1 つは HDD ブート順序を設定するものです。

Windows がダイナミック ボリュームにリカバリされたが、このボリュームは「起動可能」に設定できない

解決策: ベーシック ボリュームまたはシンプル ダイナミック ボリュームに Windows をリカバリします。

システム パーティションのリカバリ先ディスクに MBR が存在しない

システム パーティションのリカバリ先として、MBR が存在しないディスクを指定した場合は、システム パーティションと共に MBR をリカバリするかどうかをたずねるメッセージが表示されます。システムを起動可能にする必要がない場合にのみ、MBR をリカバリしないことを選択してください。

解決策: 対応するディスクの MBR と共にパーティションを再度リカバリします。

「NTLDR is missing」というエラー メッセージが表示され、Windows が起動しない

解決策: Windows XP を Acronis True Image Home でリカバリした後に「NTLDR is missing」というエラーが発生した場合にシステムを起動可能にする方法については、アクロニス サポート KB の記事「Windows Fails to Boot With "NTLDR is missing"」を参照してください。

22.6 その他の問題

Acronis True Image Home をインストールすると共有フォルダにアクセスできなくなる場合

Acronis True Image Home をコンピュータにインストールした後にマシン上のローカル共有フォルダにアクセスできなくなる理由を確認するには、アクロニス サポート KB の記事: Shared Folders Cannot be Accessed after Installation of Acronis True Image(Acronis True Image のインストール後に共有フォルダにアクセスできない場合)を参照してください

Acronis True Image Home が Windows でハードディスクを認識しない場合

アクロニス製品が Windows でハードディスクが見つからないと報告する場合、原因はおそらくサードパーティのソフトウェアがハードディスクへのアクセスをブロックしているためです。詳細については、次の アクロニス サポート KB: Acronis Product Does Not Detect Hard Disks in Windows(アクロニス製品が Windows でハードディスクを検出しない場合)を参照してください

Acronis True Image Home と Windows BitLocker

BitLocker で暗号化されたシステムをバックアップおよびリカバリするには、Acronis レスキュー メディアから起動してからセクタ単位のイメージを作成する必要があります。詳細については、サポート KB の記事: Compatibility of Acronis True Image with Windows Vista BitLocker(Acronis True Image と Windows Vista BitLocker の互換性)を参照してください。

Acronis True Image Home がアーカイブの正しいパスワードを受け入れない場合

正しいパスワードを入力しても Acronis True Image Home で「パスワードが一致しません」というエラー メッセージが表示される場合、プログラムを再インストールして問題を解決してください。詳細については、アクロニス サポート KB の記事: Acronis True Image Cannot Access a Backup Archive with the "Password does not match" Error(「パスワードが一致しません」というエラーのために Acronis True Image でバックアップ アーカイブにアクセスできない場合)を参照してください

Windows でのディスクのクローン作成処理が再起動後に中断する場合

アクロニス製品が Windows のネイティブ モードで再起動するが、クローン作成処理が数秒で終了し、クローンが作成されません。この問題に対応するには、アクロニス サポート KB の記事: Acronis Product Fails to Clone After Reboot(再起動後にアクロニス製品でクローンを作成できない場合)を参照してください。

電子メールによる通知が送られてこない場合

設定した電子メール通知が送られてこない場合の対応方法については、アクロニス サポート KB の記事: E-mail Notifications Fail in Acronis True Image(Acronis True Image で電子メール通知が送られてこない場合)を参照してください。

スタンドアロン版の Acronis True Image Home は、ハード ドライブや NIC カードを検知しません。

これは、リカバリ環境には適切なドライバがないためです。この問題は次の方法で解決できます。

- Acronis システム レポートを作成し、必要なドライバを含むレスキュー メディアの iso ファイルを提供するよう Acronis Customer Central に依頼します。

- 必要なドライバを含む、Windows ベースのリカバリ環境を作成します。「Working with Acronis True Image Plug-In for BartPE (BartPE 用 Acronis True Image プラグインの使用)」を参照してください。

パーティションの解析時に複数の「セクタ ... から読み取ることができませんでした」というエラーメッセージが表示される場合

問題を解決するには、chkdsk の実行および Acronis ドライバの更新を行います。詳細については、アクロニス サポート KB の記事: Multiple "Failed to read from sector..." Error Messages During Partition Analysis (パーティション解析中に複数の「セクタ ... から読み取ることができませんでした」というエラーメッセージが表示される場合)を参照してください。

ハードドライブのクローンの容量が間違っている場合

ドライブのクローンの容量が元のドライブとは異なるはずだが同じになっている場合、問題の原因はホスト保護領域です。詳細については、アクロニス サポート KB の記事: HPA Makes the Cloned Drive Display Wrong Capacity (HPA が原因でドライブのクローンの容量が正しく表示されない場合)を参照してください。

マウントされたイメージ アーカイブを参照していると「アクセスは拒否されました」というメッセージが表示される場合

マウントされたイメージ内のフォルダを参照しようとするこのメッセージが表示される理由、およびその解決方法については、アクロニス サポート KB の記事: When Trying to Explore Certain Folders of a Mounted Image Archive, Access Denied Message Appears (マウントされたイメージアーカイブの特定フォルダを参照しようとする、「アクセスは拒否されました」というメッセージが表示される場合)を参照してください。

複数の CD/DVD に分割されたイメージのマウントに失敗する場合

分割されたイメージのマウントに関する問題の説明は、アクロニス サポート KB の記事: Mounting an Image Spanned over Several CD or DVD Discs Fails (複数の CD または DVD ディスクに分割されたイメージのマウントに失敗する場合)を参照してください

Acronis True Image Home の起動に時間がかかる場合

この問題を解決する方法は、次のとおりです。

- Acronis True Image Home が最新のビルドであることを確認します。
- 最新の Acronis ドライバをインストールします。最新のドライバがない場合は、Acronis Customer Central に依頼します。
- Distributed Link Tracking Client サービスを無効にします。
- Acronis の実行ファイルを、ウイルス対策ソフトウェアが信頼できるアプリケーションのリストに追加します。
- 必要がなければ Vista リカバリ ポイントを削除します。

23 ハードディスクと起動順

23.1 BIOS での起動順の並び替え

BIOS には、コンピュータの初期構成を行うためのセットアップ ユーティリティが組み込まれています。セットアップ ユーティリティを開始するには、コンピュータの電源をオンにした直後に開始される POST (power-on self test) シーケンス中に、特定のキーの組み合わせ (Del、F1、Ctrl+Alt+Esc、Ctrl+Esc キーなど、BIOS によって異なります) を押す必要があります。通常は起動テスト中に、必要なキーの組み合わせを示すメッセージが表示されます。このキーの組み合わせを押すと、BIOS に組み込まれているセットアップ ユーティリティのメニューが表示されます。

メニューの外観、メニューに表示される項目と項目名は、BIOS の製造元によって異なります。コンピュータのマザーボード用の BIOS の製造元として最もよく知られているのは、Award/Phoenix と AMI です。また、標準的なセットアップ メニューの項目に関しては BIOS ごとの違いはほとんどありませんが、拡張(または高度な)セットアップの項目は、コンピュータおよび BIOS バージョンによって大幅に異なります。

BIOS メニューでは、特に**起動順**を調整することができます。**起動順**の管理は、AMI BIOS、AWARD BIOS、およびハードウェアの大手メーカーなど、BIOS バージョンごとに異なります。

コンピュータ BIOS では、オペレーティング システムをハードディスクばかりでなく、CD-ROM、DVD-ROM、およびその他のデバイスからも起動できます。レスキュー メディア(CD、DVD、または USB スティック) デバイスを最初の起動デバイスにするなど、起動順の変更が必要になることがあります。

コンピュータに C:、D:、E:、および F: というドライブ文字が割り当てられた複数のハードディスクがある場合は、オペレーティング システムをディスク E: から起動するように起動順を変更することができます。この場合、起動順を E:、CD-ROM:、A:、C:、D: のように設定する必要があります。

これは、起動順の一覧にある最初のデバイスから起動が実行されることを意味するものではありません。単に、オペレーティング システムの起動がこのデバイスで**最初の試行される**ことを意味します。ディスク E: にオペレーティング システムがない場合や、E: がアクティブでない場合もあります。この場合、BIOS は一覧に記載された次のデバイスを照会します。

BIOS は、IDE コントローラに接続されている順序(プライマリ マスタ、プライマリ スレーブ、セカンダリ マスタ、セカンダリ スレーブの順)に従ってディスクに番号を付け、次に SCSI ハードディスクに番号を付けます。

BIOS セットアップで起動順を変更した場合、この順序どおりではなくなります。たとえば、起動をハードディスク E: から実行するよう指定した場合、通常的环境下では 3 番目になるハードディスク(一般的には IDE ハードディスクのセカンダリ マスタ)から番号付けが開始されます。

コンピュータにハードディスクを設置し、BIOS で構成すると、コンピュータ(またはマザーボード)はそのディスクの存在と主なパラメータを「認識」するようになります。ただし、オペレーティング システムがハードディスクを処理するためにはまだ十分ではありません。さらに、新しいディスク上にパーティションを作成し、Acronis True Image Home を使用してそのパーティションをフォーマットする必要があります。「新しいハードディスクの追加」を参照してください。

23.2 コンピュータへのハードディスク ドライブの設置

23.2.1 一般的な IDE ハードディスク ドライブの設置方法

新しい IDE ハードディスクを設置するには、以下の手順に従います(開始前にはコンピュータの電源を切ってください)。

1. 新しいハードディスクのコントローラ ボードにジャンパを適切に取り付け、ハードディスクをスレーブに設定します。通常、ハードディスク ドライブには、ジャンパを正しく取り付ける方法が示された図が貼られています。
2. コンピュータを開き、新しいハードディスクを特殊なホルダの付いた 3.5 インチまたは 5.25 インチ スロットに挿入します。ディスクをネジでしっかり固定します。
3. 電源ケーブルを新しいハードディスクに差し込みます(黒 2 本、黄 1 本、赤 1 本から成る 4 芯ケーブル。このケーブルは決まった向きでしか取り付けられません)。
4. 40 芯または 80 芯のフラット データ ケーブルをハードディスクとマザーボードのソケットに差し込みます(差し込みに関する規則については後述します)。ハードディスク ドライブのコネクタ部分またはコネクタの付近には 1 番ピンを表す印が付いています。ケーブルの一端は、1 番ピン用に芯が 1 本だけ赤くなっています。ケーブルがコネクタに正しく差し込まれていることを確認してください。また、ケーブルの多くは、1 方向にしか差し込めないようになっています。
5. コンピュータの電源を入れ、コンピュータの起動時に画面に表示されるキーを押して BIOS のセットアップを開始します。
6. 設置したハードディスクを **type**、**cylinder**、**heads**、**sectors**、**mode**(または **translation mode**)などのパラメータを設定して構成するか(パラメータの情報はハードディスクのケースに記載されています)、あるいは BIOS の IDE 自動検出ユーティリティを使用して自動的に構成します。
7. Acronis True Image Home のコピーが格納されている場所に応じて、起動順を A:、C:、CD-ROM などに設定します。起動ディスクがある場合は、このディスクが順番の最初になるように設定します。CD から起動する場合は、起動順が CD-ROM から始まるようにします。
8. BIOS の設定を終了し、変更を保存します。Acronis True Image Home は、マシンの再起動後に自動的に起動します。
9. Acronis True Image Home を使用し、ウィザードの質問に答えてハードディスクを構成します。
10. 作業が完了したらコンピュータの電源を切り、ディスクを起動用にする場合は、ディスクのジャンパをマスタの位置に設定します(ディスクを追加のデータ ストレージとして設置する場合は、スレーブの位置のままにします)。

23.2.2 マザーボードのソケット、IDE ケーブル、電源ケーブル

マザーボードには、ハードディスクを接続できるスロットが 2 つ(プライマリ IDE およびセカンダリ IDE)あります。

IDE(Integrated Drive Electronics)インターフェイスを持つハードディスクは、マークの付いた 40 芯または 80 芯のフラット ケーブル(ケーブルの芯のうち 1 本は赤です)でマザーボードに接続します。

各ソケットにハードディスクを 2 台接続できます。つまり、この種類のハードディスクを合計 4 台まで接続できます(各 IDE ケーブルにはプラグが 3 つあり、2 つはハードディスク、1 つはマザーボードのソケットに接続します)。

IDE ケーブル プラグは通常、一定の方向でしかソケットに接続できないよう設計されています。一般的に、ケーブル プラグにあるピン穴のうちの 1 つは閉じられており、この閉じられた穴に対応するピンがマザーボードのソケットから取り外されています。このため、ケーブルを間違った方向に差し込むことはできません。

また、ケーブルのプラグに突起があり、ハードディスクおよびマザーボードのソケットにくぼみがある場合もあります。これも、ハードディスクとマザーボードを接続する方向を間違えないための工夫です。

以前はこのような設計のプラグがなかったため、IDE ケーブルはマークの付いた芯が電源ケーブルに最も近くなるようにハードディスクのソケットに接続する、つまりマークの付いた芯をソケットの 1 番ピンに接続するという経験則がありました。マザーボードにケーブルを接続する場合も同様のルールを使用していました。

間違った方向でケーブルをハードディスクまたはマザーボードに接続しても、必ずしもディスクやマザーボードの電子部分が損傷するわけではありません。BIOS によるハードディスクの検出や初期化が行われただけです。

一部の、特に古い型のハードディスクには、接続方法を誤るとドライブの電子部分が損傷するものもあります。

ここでは、すべての種類のハードディスクについては説明しません。現在、最も一般的に使用されているのは IDE または SCSI インターフェイスを持つハードディスクです。IDE ハードディスクとは異なり、SCSI ハードディスクは PC に 6 台から 14 台まで接続できます。ただし、これらを接続するには特別な SCSI コントローラ(ホスト アダプタ)が必要です。SCSI ハードディスクは通常はパーソナル コンピュータ(ワークステーション)では使用されませんが、サーバーでよく見られます。

IDE ケーブルの他に、4 芯の電源ケーブルをハードディスクに接続する必要があります。このケーブルも、一定の方向でしか差し込むことができません。

23.2.3 ハードディスク ドライブとジャンパの構成

コンピュータではハードディスク ドライブをマスタまたはスレーブとして構成できます。構成は、ジャンパと呼ばれるハードディスク ドライブの特別なコネクタを使用して行います。

ジャンパは、ハードディスクの電子回路基板上、またはハードディスクとマザーボードを接続する特別なソケットのいずれかにあります。

通常は取り付け位置の説明がドライブに貼られています。典型的なマークは、DS、SP、CS、PK です。

それぞれのジャンパ位置は、次に示すハードディスクの特定の設置モードに対応します。

- **DS** – マスタ/工場出荷値
- **SP** – スレーブ(またはジャンパは不要)
- **CS** – マスタ/スレーブのケーブル セレクト: ハードディスクの用途は、マザーボードとの物理的な位置関係によって決定されます。
- **PK** – ジャンパのパーキング位置: 既存の構成でジャンパが不要な場合に、ジャンパを配置できる位置です。

ジャンパを**マスタ**の位置に設定したディスクは、BIOS(Basic Input/Output System)によって起動用として扱われます。

同じケーブルに接続した複数のハードディスクのジャンパは**マスタ/スレーブのケーブル セレクト**の位置に配置できます。この場合、BIOS は、IDE ケーブルに接続されているディスクの中で、マザーボードに近いほうのディスクを「マスタ」と見なします。

残念ながら、ハードディスクのマークは標準化されていません。ご使用のハードディスクのマークが上述のものとは異なる場合もあります。さらに、旧式のハードディスクの場合は、1 つではなく 2 つのジャンパによって用途が定義されることがあります。ハードディスクをコンピュータに設置する前に、マークについてよく確認してください。

ハードディスクをマザーボードに物理的に接続し、ハードディスクが機能するようジャンパを正しく設定しただけではまだ不十分です。マザーボードの BIOS で、ハードディスクを適切に構成する必要があります。

23.2.4 SATA ハードドライブの取り付け

最近製造されたコンピュータのほとんどは、ハードドライブのインターフェイスとして SATA を使用しています。一般的に、SATA ハードドライブの方が IDE ドライブよりも取り付けは簡単です。SATA の場合は、マスタ スレーブ ジャンパを設定する必要がないからです。SATA ドライブに使用されるインターフェイス ケーブルは細く、コネクタは 7 ピン キー付きです。そのため、コンピュータ内部の空気が流れやすくなります。SATA ドライブへの電力供給には、15 ピン コネクタが使用されます。SATA ドライブの中には、従来の 4 ピン電源コネクタ(Molex)をサポートするものもあります。Molex と SATA のどちらのコネクタを使用してもかまいませんが、両方を同時に使用すると、ハードドライブが壊れるおそれがあります。また、SATA 電源コネクタ付き電源リード線の空きがあることも必要です。SATA ポートを持つシステムのほとんどは、SATA 電源コネクタを少なくとも 1 個は備えています。SATA 電源コネクタがない場合は、Molex/SATA 変換アダプタが必要です。SATA 電源コネクタがあっても既に使用されている場合は、リード線を分岐させる Y アダプタを使用します。

23.2.5 新しい内部 SATA ドライブを設置するための手順

1. コンピュータに付属している資料を参照し、使用されていない SATA ポートを見つけます。新しい SATA ドライブを SATA コントローラ カードに接続する場合は、カードを取り付けます。SATA ドライブをマザーボードに接続する場合は、利用可能なマザーボード ジャンパ(該当する場合)を有効にします。大部分のハードディスク キットには SATA インターフェイス ケーブルと固定用ネジが付いています。SATA インターフェイス ケーブルの片側をマザーボードの SATA ポートかインターフェイス カードに接続し、もう一方をドライブに接続します。
2. 次に、電源リードを差し込むか、または Molex-to-SATA アダプタを使用します。
3. ドライブを準備します。SATA 300 ハードディスク ドライブを設置する場合、コンピュータ(または SATA ホスト アダプタ)の資料を参照し、SATA 300 ドライブがサポートされていることを確認します。SATA 300 ドライブがサポートされていない場合は、ドライブのジャンパ設定を変更する必要があることがあります(ドライブのマニュアルを参照してください)。SATA 150 ハードディスク ドライブの場合は設定を変更する必要はありません。
4. コンピュータの電源を入れ、新しいドライブについての起動メッセージを確認します。見つからない場合は、コンピュータの CMOS 設定プログラムを起動し、使用中のポートで SATA を有効

化する(あるいは、単に SATA を有効化する)ための BIOS 構成メニューのオプションを探します。マザーボードに付属する資料で、該当する BIOS 固有の説明を確認します。

5. オペレーティング システムによって SATA ドライブが認識されなければ、使用している SATA コントローラに適したドライバが必要です。ドライバが認識された場合はステップ 8 に進みます。
 - 通常は、マザーボードか SATA コントローラの製造元のウェブサイトから最新のドライバ パッケージを入手するのが最善の方法です。
 - SATA コントローラ ドライバのコピーをダウンロードしたら、そのドライバ ファイルをハードディスク ドライブの既知の場所に格納します。
1. 元のハードディスクから起動します。
 - オペレーティング システムによって SATA コントローラが検出され、適切なソフトウェアがインストールされるはずですが、ドライバ ファイルへのパスの入力が必要になることがあります。
1. SATA コントローラおよび接続している SATA ハードディスクが、オペレーティング システムに正しく検出されることを確認します。それには、デバイス マネージャにアクセスします。
 - 通常、SATA コントローラはデバイス マネージャの SCSI および RAID コントローラ セクションに表示され、ハードディスクはディスク ドライブ セクションに表示されます。
 - デバイス マネージャで SATA コントローラと SATA ハードディスクが黄色の感嘆符付きで表示される場合、およびその他の方法でエラー表示される場合は問題があります。
1. コンピュータにハードディスクを設置し、BIOS で構成すると、コンピュータがハードディスクの存在と主なパラメータを「認識」するようになります。ただし、オペレーティング システムがハードディスクを処理するためにはまだ十分ではありません。さらに、新しいディスク上にパーティションを作成し、Acronis True Image Home を使用してそのパーティションをフォーマットする必要があります。「新しいハードディスクの追加『170 ページ参照』」を参照してください。その後 SATA コントローラから起動するように BIOS を構成し、SATA ハードディスク ドライブから起動してみて成功することを確認します。

23.3 ハードディスクの消去方法

情報をハードディスクから削除するときに、安全ではない手段(たとえば Windows での単純な削除)を使用すると、その情報は簡単にリカバリできてしまいます。特殊な機器を使用すれば、繰り返し上書きされた情報でもリカバリできます。したがって、確実なデータ消去の重要性は、これまでになく強まっています。

磁気メディア(ハードディスク ドライブなど)の**情報の確実な消去**とは、専門家が既知のあらゆるツールとリカバリ方法を使用してもデータをリカバリできないようにすることです。

このことをもう少し具体的に説明しましょう。ハードディスクに格納されるデータは、1 と 0 の 2 進数のシーケンスとなっており、このことはディスクの部分ごとに磁化を変化させるという方法で表現されます。

一般的に言って、ハードディスクに書き込まれた 1 はハードディスク コントローラによって 1 として読み取られ、0 は 0 として読み取られます。ただし、0 に 1 を上書きすると、ある条件の下ではその結果は 0.95 となり、1 を 1 に上書きすると結果は 1.05 となります。このような違いは、コントローラにとっては無関係です。しかし、特殊な機器を使用すれば、「下に隠れている」0 と 1 のシーケンスを簡単に読み取ることができます。

このような方法で「削除された」データを読み取るのに必要なものは、専用のソフトウェアと、それほど高価ではないハードウェアだけであり、その方法としては、ハードディスクのセクタの磁化やトラッ

クの縁に残留している磁化を分析する、あるいは最新の磁気顕微鏡を使用するなどが使用されます。

磁気メディアに書き込んだときの目に見えない効果を要約すると、「ディスクの各トラックに格納されているものは、それまでに書き込まれたすべてのレコードのイメージであるが、そのレコード(磁気層)の効果は、時間がたつにつれて次第に認識しにくくなる」となります。

23.3.1 情報の抹消方法の動作原理

ハードディスクから情報を物理的に完全に抹消するには、記録媒体のすべての磁気領域 1 つ 1 つに対して、特別に選ばれた論理的な 1 と 0 の並び(サンプル データ)を書き込み、磁気の状態をできるだけ多くの回数切り替えます。

一般的なハードディスクの論理データ エンコーディング方法を利用すれば、セクタに書き込まれる記号(または最小単位のデータ ビット)の並びのサンプルを選択して、継続的かつ効果的に機密データを抹消することができます。

国家規格で提唱された方法では、ランダムな記号をディスク セクタに対して(1 回または 3 回)記録します。これは単純で確実性に欠ける方法ですが、それほど重大ではない状況では効果的です。最も有効な情報抹消方法は、あらゆる種類のハードディスクに記録されたデータの、微細な特徴の詳細な分析に基づくものです。このような理由により、情報の抹消を保証するには、複数の工程で処理する複雑な方法が必要となります。

情報の抹消を保証する技術に関する具体的な理論は、Peter Gutmann 氏による論文で紹介されています。次の論文を参照してください。

『Secure Deletion of Data from Magnetic and Solid-State Memory』

23.3.2 アクロニス製品で使用できる情報消去方法

次の表では、アクロニス製品で使用できる情報抹消方法について簡単に説明しています。それぞれ、ハードディスク セクタの工程数と、各セクタにバイト単位で書き込まれる数値を表します。

情報抹消方法に関する説明

No.	アルゴリズム(書き込み方法)	工程数	記録
1.	米国国防省準拠 DoD 5220.22-M 方式	4	第 1 工程 - 各セクタの各バイトにランダムに選択した記号。第 2 工程 - 第 1 工程で書き込まれた値の補数。第 3 工程 - 再度、ランダムな記号。第 4 工程 - 書き込み結果の検証。
2.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-RLL 方式	4	第 1 工程 - 全セクタに 0x01。第 2 工程 - 0x27FFFFFF。第 3 工程 - ランダムな記号のシーケンス。第 4 工程 - 検証。
3.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-MFM 方式	4	第 1 工程 - 全セクタに 0x01。第 2 工程 - 0x7FFFFFFF。第 3 工程 - ランダムな記号のシーケンス。第 4 工程 - 検証。
4.	ドイツ VSITR 方式	7	第 1~第 6 工程 - 0x00 と 0xFF を交互に。第 7 工程 - 0xAA。つまり、順番に 0x00、0xFF、0x00、0xFF、0x00、0xFF、0xAA となる。
5.	ロシア GOST P50739-95 方式	1	セキュリティ レベルが 6~4 のシステムの場合、各セクタの各バイトに論理値ゼロ(数値 0x00)。

No.	アルゴリズム(書き込み方法)	工程数	記録
			セキュリティ レベルが 3~1 のシステムの場合、各セクタの各バイトにランダムに選択された記号(数値)。
6.	グートマン(Peter Gutmann)方式	35	非常に高度な方式。この方式は、ハードディスクの情報抹消についての Peter Gutmann 氏の理論に基づいている(『Secure Deletion of Data from Magnetic and Solid-State Memory』を参照)。
7.	Bruce Schneier 方式	7	Bruce Schneier が著書『応用暗号論』で提唱している 7 回の工程で上書きする方法。1 工程目で 0xFF を、2 工程目で 0x00 を書き込み、その後、暗号的にセキュリティの高い擬似ランダム シーケンスで 5 工程の書き込みを行う。
8.	高速	1	全セクタに対して論理値ゼロ(数値 0x00)で抹消。

24 起動パラメータ

Linux カーネルを起動する前に適用できる追加パラメータ。

24.1 説明

Linux カーネルを起動する前に適用できる追加パラメータ

説明

次のパラメータを使用すると、Linux カーネルを特殊モードで読み込むことができます。

- **acpi=off**

ACPI を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **noapic**

APIC(Advanced Programmable Interrupt Controller)を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **nousb**

USB モジュールの読み込みを無効にします。

- **nousb2**

USB 2.0 のサポートを無効にします。このオプションを指定しても、USB 1.1 デバイスは動作します。このオプションを指定すると、USB 2.0 モードでは動作しない一部の USB ドライブを USB 1.1 モードで使用できます。

- **quiet**

このパラメータはデフォルトで有効になっており、起動メッセージは表示されません。このパラメータを削除すると、Linux カーネルが読み込まれるときに起動メッセージが表示されるようになり、Acronis プログラムが実行される前にコマンド シェルが提供されます。

- **nodma**

すべての IDE ディスク ドライブの DMA を無効にします。カーネルが一部のハードウェアでフリーズするのを防ぎます。

- **nofw**

FireWire(IEEE1394)のサポートを無効にします。

- **nopcmcia**

PCMCIA ハードウェアの検出を無効にします。

- **nomouse**

マウスのサポートを無効にします。

- **[モジュール名]=off**

モジュールを無効にします(例: **sata_sis=off**)。

- **pci=bios**

PCI BIOS の使用を強制し、ハードウェア デバイスには直接アクセスしません。たとえば、コンピュータが標準以外の PCI ホスト ブリッジを備えているような場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=nobios**

PCI BIOS の使用を無効にします。ハードウェアへの直接アクセスのみを許可します。たとえば、BIOS が原因で起動時にクラッシュが発生すると考えられる場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=biosirq**

PCI BIOS の呼び出しを使用して、割り込みルーティング テーブルを取得します。これらの呼び出しは、一部のコンピュータではバグがあり、使用するとコンピュータがフリーズしますが、他のコンピュータでは、割り込みルーティング テーブルを取得する唯一の方法です。カーネルが IRQ を割り当てることができない場合、またはマザーボード上のセカンダリ PCI バスを検出できない場合は、このオプションを試してください。

- **vga=ask**

現在のビデオ カードで使用できるビデオ モードの一覧を取得し、ビデオ カードとモニタに最適なビデオ モードを選択できるようにします。自動的に選択されたビデオ モードがお使いのハードウェアに適合しない場合は、このオプションを試してください。

25 索引

[

[アーカイブのベリファイ] - 79

[コマンド] の設定 - 182

[コンピュータ] の設定 - 181

[ドライブの空き領域] の設定 - 181

[ファイル] の設定 - 180

1

1 回のみ実行の設定 - 109

A

Acronis DriveCleanser - 174

Acronis DriveCleanser、ファイル シュレッダー、システム クリーンアップ - 25

Acronis True Image Home 2010 の新機能 - 12

Acronis True Image Home での BartPE ディスクの作成 - 126

Acronis True Image Home とは - 9

Acronis True Image Home について - 34

Acronis True Image Home によるデータ リカバリ - 81

Acronis True Image Home のアップグレード - 18

Acronis True Image Home のインストール - 16

Acronis True Image Home のインストールと起動 - 16

Acronis True Image Home の基本概念 - 10, 20, 44

Acronis True Image Home の削除 - 18

Acronis True Image Home の実行 - 17

Acronis True Image Home の取り出し - 17

Acronis Universal Restore - 26, 100

Acronis Universal Restore の一般的な原理 - 27

Acronis Universal Restore の使用 - 100

Acronis Universal Restore の使用上の制限 - 27

Acronis Universal Restore の用途 - 26

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ - 17, 23

Acronis セキュア ゾーン - 22, 65, 118

Acronis セキュア ゾーン のサイズ変更 - 121

Acronis セキュア ゾーンのパスワードの変更 - 121

Acronis セキュア ゾーンの管理 - 23, 118

Acronis セキュア ゾーンの作成 - 118

Acronis セキュア ゾーンの削除 - 122

Acronis ノンストップ バックアップ - 26, 50

Acronis ノンストップ バックアップ ストレージの管理 - 56

Acronis ノンストップ バックアップで保護されているパーティションのリカバリ - 53

Acronis ノンストップ バックアップで保護されているファイルのリカバリ - 53, 54

Acronis ノンストップ バックアップとは - 50

Acronis ノンストップ バックアップの使用 - 52

Acronis ノンストップ バックアップの有効化と設定 - 51

Acronis バックアップへの変換 - 133, 158

Acronis ブート シーケンス マネージャ - 136

Acronis ワンクリック バックアップ - 35

B

BIOS での起動順の並び替え - 12, 31, 45, 82, 83, 85, 100, 134, 191

G

Google デスクトップと Acronis True Image Home の組み合わせ - 143

H

HDD 書き込み速度 - 76

L

Linux ベースのレスキュー メディアの作成 - 123

S

SATA ハード ドライブの取り付け - 194

T

tib イメージと vhd 仮想ディスクの相互変換 - 132

Try&Decide - 25, 102

Try&Decide とは - 24

Try&Decide のオプションと通知 - 105

Try&Decide の使用 - 105

Try&Decide の使用例 - 106

V

vhd ファイルの使用方法 - 132

W

Windows 7 システム パーティションの TIB イメージからコンピュータを起動する - 135

Windows Search と Acronis True Image Home の組み合わせ - 146

Windows Search と Google デスクトップの統合 - 142

Windows バックアップにより作成された vhd ファイルを使用したリカバリ - 134

Windows バックアップへの変換 - 132, 158

WinPE 1.x への Acronis プラグインの追加 - 128, 129

WinPE 2.x または 3.0 への Acronis プラグインの追加 - 128, 129

WinPE ベースのレスキュー メディアの作成 - 128, 129

WinPopup による通知 - 154

Z

zip 形式のサポート - 25, 64

あ

アーカイブの参照およびイメージのマウント - 17, 19, 137, 157

アーカイブの場所の選択 - 64

アーカイブの場所の分散 - 59

アーカイブの選択 - 91

アーカイブの分割 - 77

アーカイブの保護 - 73

アクロニス製品で使用できる情報消去方法 - 196

アップグレード時のスケジュールされたタスクのインポート - 113

イベント発生時の実行の設定 - 110

イメージ アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ - 54, 88, 89

イメージのアンマウント - 140, 157

イメージのマウント - 88, 137

インストールの問題点 - 184

エラーの処理 - 75

オプション画面 - 39

か

カスタマー テクニカル サポート - 15

カスタム レスキュー CD の作成 - 33

クローン作成の概要 - 169

クローン作成モードの選択 - 164

クローン作成時の手動パーティション操作 - 167

コメントの指定 - 71

コンピュータへのハードディスク ドライブの設置 - 192

さ

サポートされるオペレーティング システム - 14

サポートされるストレージ メディア - 14
サポートされるファイル システム - 14
システム イメージ TIB ファイルからの起動
- 26
システム クリーンアップ ウィザードの設定 -
179
システム ディスク全体のバックアップ - 44
システム パーティションのバックアップ - 43
システム パーティションのリカバリ - 53, 81,
83
システムのクリーンアップ - 178
システム要件とサポートされるメディア - 13
スケジュールされたタスクの管理 - 113, 114
スケジュールされたタスクの作成 - 108
スケジュール設定 - 66
セキュリティ - 164
セキュリティとプライバシーのツール - 173
ソース ディスクの選択 - 165
その他のバックアップ機能 - 57
その他の操作 - 151
その他の問題 - 189

た

ターゲット ディスクの選択 - 165
ダイナミック/GPT ディスクおよびボリューム
に関連するリカバリ処理の詳細情報 - 99
タスク スケジュールの作成 - 23, 66, 108
タスクとログの表示 - 38, 154
ディスクとパーティション情報の表示 - 24
ディスクの追加の概要 - 172
データ パーティションまたはディスクのバック
アップ - 46
データ パーティションまたはディスクのリカバ
リ - 53, 87
データを消去するユーザー定義消去方法の
作成 - 176, 177
データ消去方法の設定 - 180

デフォルトのリカバリ オプションの設定 - 39,
87, 97
トラブルシューティング - 184

な

ネットワーク プレースのフィルタの設定 -
183
ネットワークの接続速度 - 77
ネットワーク共有へのバックアップ - 48

は

パーティションのあるターゲット ディスク -
166
パーティションの転送方法の選択 - 166
ハードディスク ドライブとジャンパの構成 -
193
ハードディスクと起動順 - 163, 191
ハードディスクの消去方法 - 174, 176, 180,
195
ハードディスクの選択 - 170
はじめに - 9
バックアップ アーカイブとその内容の検索 -
141
バックアップ アーカイブのベリファイ - 151,
157
バックアップ アーカイブの移動 - 158, 161
バックアップ アーカイブの管理 - 157
バックアップ アーカイブの作成 - 41
バックアップ アーカイブの削除 - 158, 161
バックアップ ウィザード - 詳細情報 - 62
バックアップ オプション - 72
バックアップ オプションの選択 - 70
バックアップ スケジュール設定のシナリオ例
- 47, 49, 114
バックアップ ストレージがいっぱいになった
場合の自動削除が設定されている完全バ
ックアップ - 115
バックアップ ファイルの名前付け規則 - 20
バックアップするデータの決定 - 41

バックアップするデータの選択 - 62
バックアップとベリファイの問題 - 185
バックアップの種類 - 66
バックアップの統合 - 38, 157, 158
バックアップの微調整 - 39, 70, 72
バックアップの優先度 - 74
バックアップの予備コピー - 78
バックアップの予備コピーの作成 - 57
バックアップ処理 - 72
バックアップ用カスタム データ カテゴリの作成 - 63, 79
ファイル アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ - 88
ファイル アーカイブとディスク/パーティションイメージの違い - 19, 42
ファイル シュレッダーの使用 - 173
ファイル リカバリ オプション - 74, 97
ファイル レベルのセキュリティ設定 - 74, 98, 125
ファイル/フォルダのバックアップ - 47
ファイルとフォルダのリカバリ - 88, 91
ファイル上書きオプション - 98
ブータブル メディアの作成 - 16, 123
ブータブル レスキュー メディアのテスト - 29, 31, 45, 81
プログラムのワークスペース - 34

ま

マザーボードのソケット、IDE ケーブル、電源ケーブル - 192
メイン画面 - 37

ら

リカバリ ウィザード - 詳細情報 - 91, 157
リカバリ ウィザードの開始 - 91
リカバリ オプションの設定 - 97

リカバリされたパーティションへのドライブ文字の割り当て - 97
リカバリするディスク/パーティションの選択 - 93
リカバリするパーティションのサイズおよび場所の変更 - 96
リカバリするパーティションの種類の変更 - 96
リカバリの実行 - 97
リカバリの方法の選択 - 92
リカバリの問題 - 187
リカバリの優先度 - 99
リカバリ後のシステム起動の問題 - 188
リカバリ先ディスク/パーティションの選択 - 95
リムーバブル メディアの設定 - 76
ローカル ストレージの設定 - 76

漢字

圧縮レベル - 73
一般情報 - 163
一般情報および アクロニス独自のテクノロジー - 19
一般的な IDE ハードディスク ドライブの設置方法 - 192
隠しパーティションを含まないディスクのリカバリ - 83
隠しパーティションを含むディスクのリカバリ - 84, 85
完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ - 19, 45, 47, 49, 66
起動パラメータ - 124, 198
空き領域のしきい値 - 77
月単位の実行の設定 - 112
検索 - 38, 141
個別のシステム コンポーネントのクリーンアップ - 183
最初のバックアップの準備 - 41

最小システム要件 - 13

使用方法 - 23

自動ローテーションによる完全バックアップと増分/差分バックアップ - 109, 116

自動削除が設定された Acronis セキュアゾーンへの完全バックアップ - 116

自動統合の設定 - 47, 49, 70

週単位の実行の設定 - 112

処理の前後に実行するコマンド - 73, 99

処理結果の通知 - 39, 152

除外する内容 - 69, 72

除外する内容の選択 - 69

障害や災害に対する最善の準備方法 - 29

障害復旧のための準備 - 29

情報の抹消方法の動作原理 - 196

新しいディスクへのシステムの転送 - 163

新しいパーティションの作成 - 170

新しいハードディスクの追加 - 170, 195

新しい内部 SATA ドライブを設置するための手順 - 194

制限違反による自動削除が設定されている完全バックアップ - 114

説明 - 198

全般 - 184

代表的なバックアップ シナリオ - 42

追加のリカバリ情報 - 91

定期的な実行の設定 - 111

転送の実行 - 164

電子メール通知 - 153

動作 - 23

日単位の実行の設定 - 111

容量の異なるハードディスクへのディスクバックアップのリカバリ - 82